

2006（平成18）年度～2009（平成21）年度科学研究費補助金  
(基盤研究B) 研究成果報告書(課題番号18320128)

## 弥生・古墳時代における太平洋ルートの 文物交流と地域間関係の研究

2010年3月

研究代表者 清家 章  
(高知大学人文社会科学系教授(人文学部専任担当))  
高知大学人文社会科学系

2006（平成18）年度～2009（平成21）年度科学研究費補助金  
（基盤研究B）研究成果報告書（課題番号18320128）

## 弥生・古墳時代における太平洋ルートの 文物交流と地域間関係の研究

2010年3月

研究代表者 清家 章  
(高知大学人文社会科学系教授(人文学部専任担当))  
高知大学人文社会科学系

## 例 言

1. 本書は、日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究B）を受けて実施した研究の報告書である。研究の課題・組織・経費・成果は以下の通りである。

課 題 名：弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究

(課題番号18320128)

研究代表者：清家 章（高知大学人文社会科学系教授（人文学部専任担当））

研究分担者：福永伸哉（大阪大学大学院文学研究科教授）

杉井 健（熊本大学文学部准教授）

菊地芳朗（福島大学行政政策学類准教授）

橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館准教授）

寺前直人（大阪大学大学院文学研究科助教）

研究協力者：出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター）

鈴木一有（浜松市教育委員会）

研究経費：平成18年度 直接経費5,400千円 間接経費1,620千円

平成19年度 直接経費3,700千円 間接経費1,110千円

平成20年度 直接経費3,500千円 間接経費1,050千円

平成21年度 直接経費1,500千円 間接経費 450千円

研究成 果：本書

研究発表：

清家 章「古墳時代における父系化の過程」『考古学研究』56巻3号 考古学研究会、  
2009年

清家 章「古墳から見た四国的一体性」『地方史研究』328号 地方史研究協議会、  
2007年

清家 章「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究-小笠原好彦先生退任  
記念論集-』真陽社 2007年

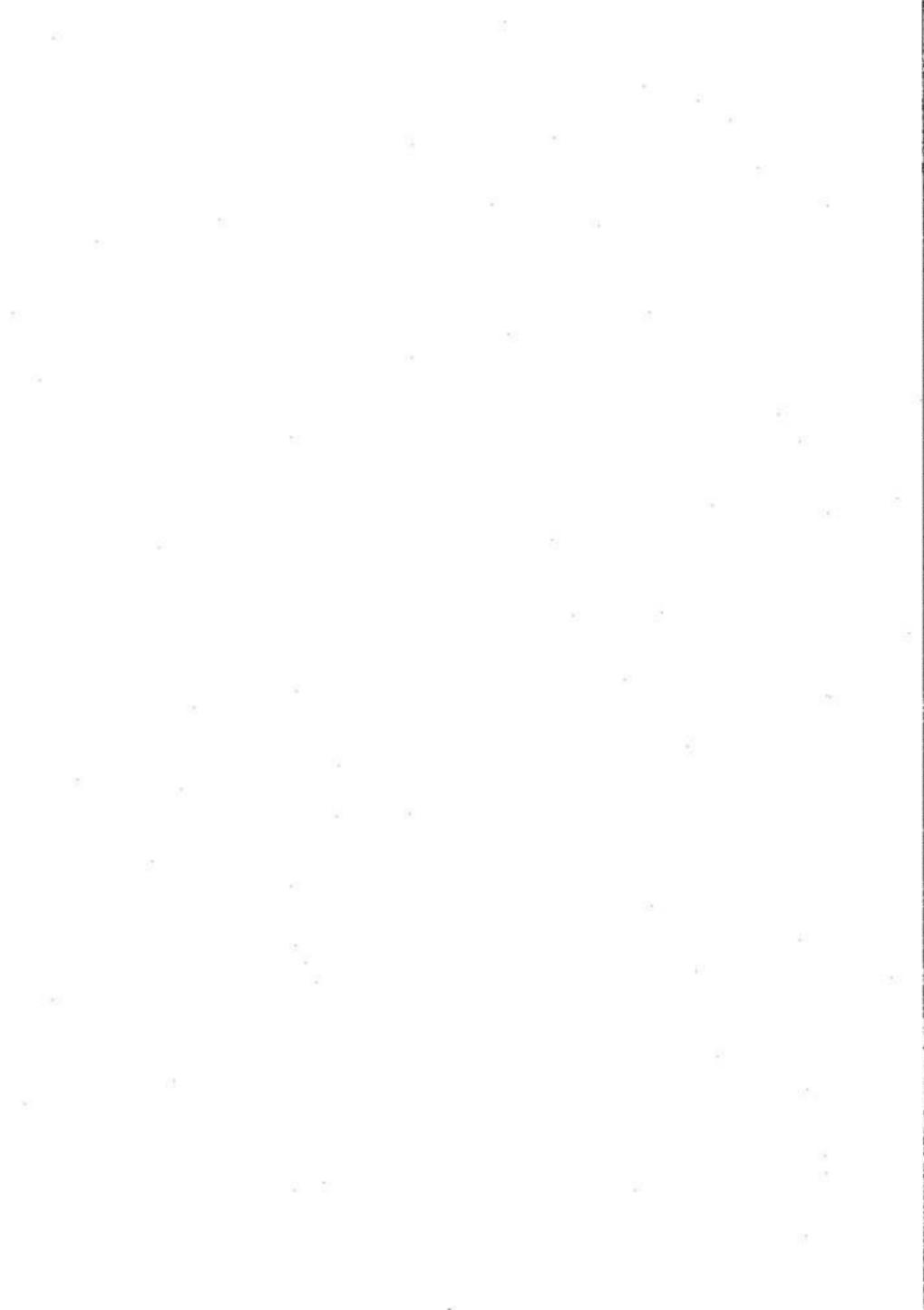
清家 章『高知県後期古墳資料集』I 高知大学考古学調査研究報告第7冊 高知大  
学人文学部考古学研究室 2009年

- 清家章ほか『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学調査研究報告第6冊 高知大学人文学部考古学研究室 2009年
- 清家章編『大元神社古墳発掘調査報告書—總括編—』高知大学考古学調査研究報告第5冊 高知大学人文学部考古学研究室 2008年
- 清家章編『大元神社古墳発掘調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第4冊 高知大学人文学部考古学研究室 2007年
- 福永伸哉「青銅鏡の政治性萌芽」「弥生時代の考古学2 儀礼と権力」同成社 2008年
- 福永伸哉「副葬鏡群からみた前方後円墳成立期の近江」「考古学論究-小笠原好彦先生退任記念論集-」真陽社 2007年
- 杉井健ほか編『上天草いにしえの暮らしと古墳』上天草市 2007年
- 菊地芳朗「古墳時代の会津」「会津若松市史』1巻 会津若松市 2007年
- 橋本達也「岡崎18号墳出土鉄製品と肝属平野周辺域をめぐる広域交流」「大隅串良岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館 2008年
- 橋本達也編『薩摩加世田奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館 2009年
- 寺前直人「畿内型横穴式石室の基礎構造」「考古学論究-小笠原好彦先生退任記念論集-」真陽社 2007年
- 寺前直人「ヤジリと高地性集落」『古代文化』第58卷Ⅱ号 2006年

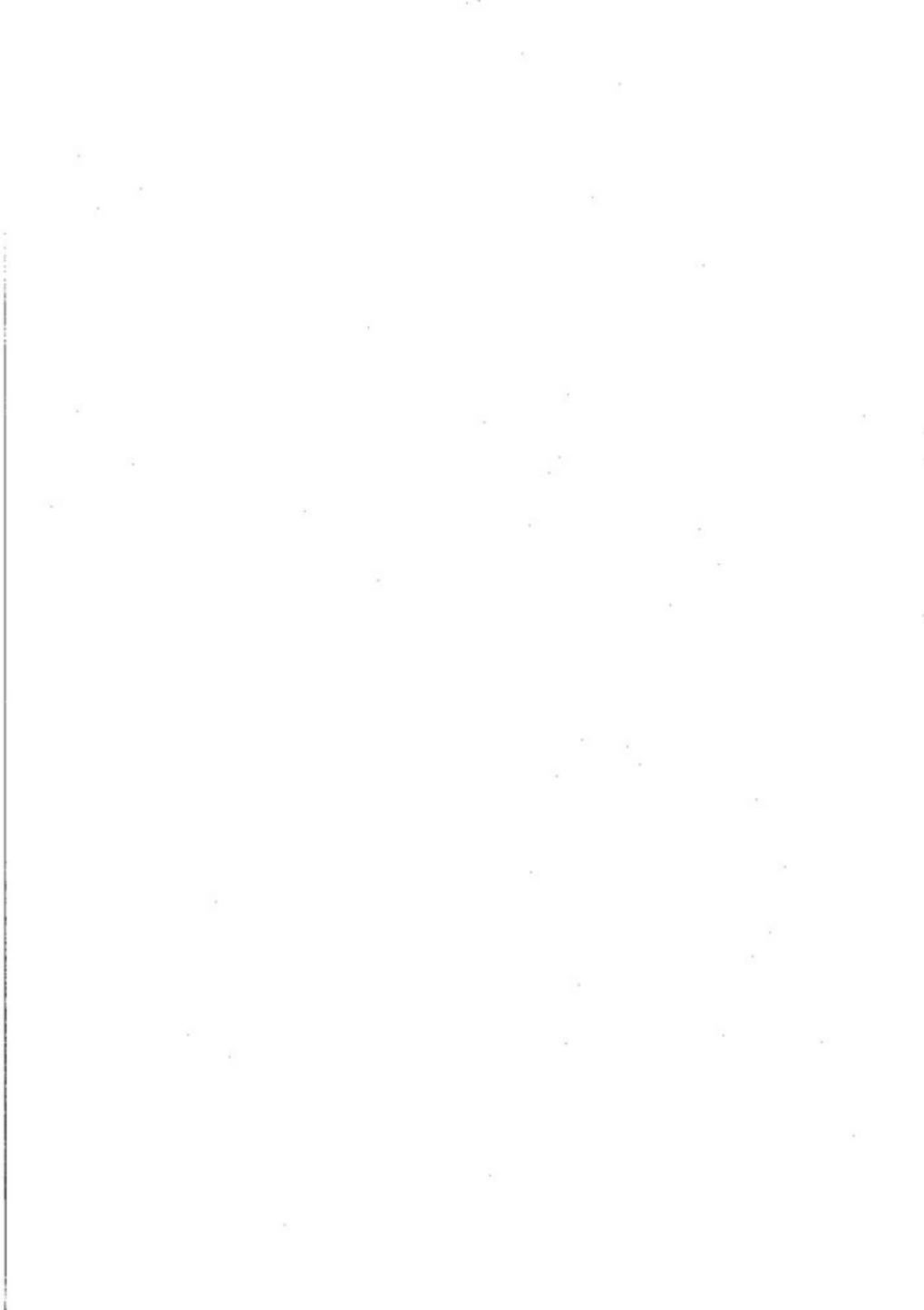
## 目 次

---

第Ⅰ部 研究の目的・経過と成果 .....	1
第Ⅱ部 論考 .....	5
1 弥生文化成立期の二相 .....	川原恵三..... 7
-田村タイプと居徳タイプ-	
2 石器からみた弥生時代開始期の交流 .....	寺前直人..... 39
-西日本太平洋沿岸地域を中心として-	
3 青銅器から見た古墳成立期の太平洋ルート .....	福永伸哉..... 55
4 高知県地域における甑形土器と竈の動向 .....	杉井 健..... 71
5 古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート .....	橋本達也..... 91
6 古墳時代終末期における日本列島周縁部の太平洋沿岸交流 .....	菊地芳朗..... 109
-副葬刀剣をもとに-	
7 横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の関係 .....	清家 章..... 131
8 古墳時代の東海における太平洋沿岸交流の陸盛 .....	鈴木一有..... 145
第Ⅲ部 資料紹介—明見彦山3号墳測量調査報告— .....	163



## I 研究の目的・経過と成果



# 研究の目的・経過と成果

## 1 研究の目的と経過

本研究は、弥生・古墳時代の人・もの・情報の動きを考古学的に分析し、從来になかった地域視角から弥生時代から古墳時代の地域関係を解明し、さらに日本古代史上における太平洋ルートの歴史的役割を、とくに四面に軸足を置いて実証的に提示することを目的とした。

従来の弥生・古墳時代研究においては、西日本の地域交流路として瀬戸内ならびに日本海のルートが重視されてきた。とくに瀬戸内のルートは東西を結ぶ大動脈であったことは間違いないし、日本海のルートも瀬戸内とは異なる役割を担っていたことが明らかになってきている。その一方で、太平洋を利用した交流の研究は著しく立ち後れてきた。もちろん、局地的あるいはある一時期における文物交流の研究は存在したもの、通時的な太平洋沿岸交流の研究はほとんど行われてこなかったといって良い。

しかし、例えば弥生時代後期の南四国は畿内の突線鉢式銅鐸、九州の広形銅矛が混在しており、古墳時代成立に関して重要な情報を持ついっぽうで、古墳時代に入ると前方後円墳が築かれず、前時代と比べて大きな落差を示す特異な地域でもある。このように、本ルートを通じた交流には、当時の政治状況を強く反映したダイナミックな変動が存在する可能性が考えられるとともに、瀬戸内・日本海の両ルートとは異なる特質を持つことが想定されたのである。

そこで、南四国地域に研究の主要な軸足を置きつつ、弥生・古墳時代における太平洋ルートの歴史的・文化的役割を明らかにし、さらに進んで中心と地域、地域と地域の関係という視点から日本列島の主要交流ルートが果たした役割について広く比較研究をも試みたのであった。

具体的な方法としては、日常の物資交換に代表されるような基盤的交流と地域間の勢力関係を含んだ政治的交流の二つのレベルにわけて研究を進めた。すなわち前者は石器・土器などの資料であり、後者は大型青銅器・渡米系文物・古墳などの資料である。これらの資料を用いて、太平洋沿岸交流の推移に関する情報を整理し、瀬戸内ルートなど他の交通路との比較あるいは比較のための基礎整理を行って太平洋沿岸交流の特質をあらわにするように努めた。

研究を実施していく中で南四国の古墳時代情報は不可欠であったが、とくに古墳の動向がほとんど明らかでなかったため、南四国で地域間交流研究の要と目される高知市朝倉古墳・香美市大元神社古墳の発掘調査を実施している。両古墳の成果は2冊の調査報告書と1冊の調査概要によってすでに明らかにしているとおりであるが、6世紀後半から7世紀前半にかけての横穴式石室の実態を明らかにするとともに、石室形態の類似から太平洋沿岸と瀬戸内の地域間関係に迫る知見を得ている。

## 2 研究の成果

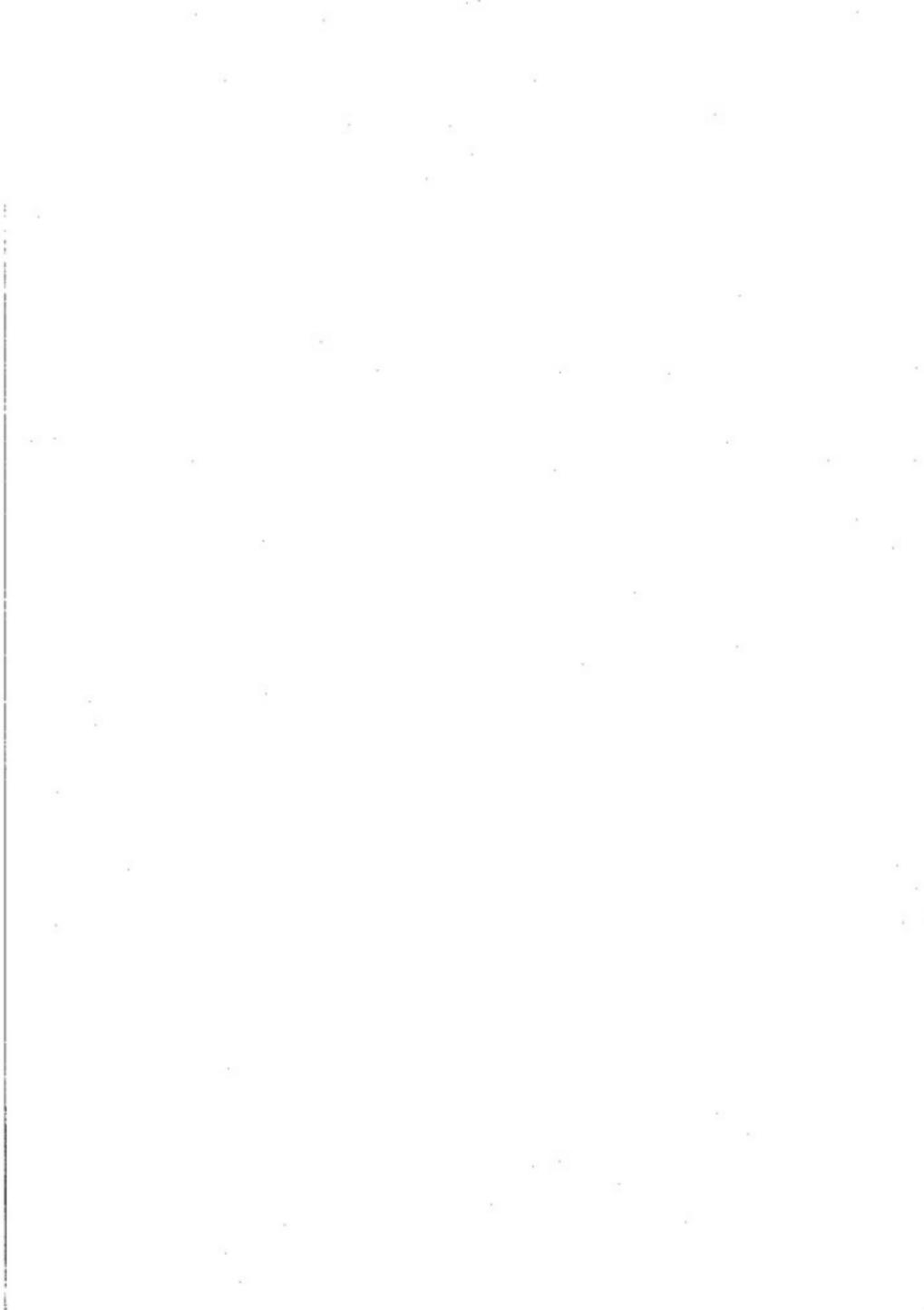
研究を進めるうちに、南四国を中心とした太平洋沿岸交流は、連続的というよりも時代の要所において断続的に展開されている様相が明らかになってきた。本書に掲載した以下の報告論考を通してみれば、むしろ弥生・古墳時代における瀬戸内ルートの重要性が再確認されているともいえるが、その大動脈といえる瀬戸内ルートの背後である時は独立した動きで、ある時には瀬戸内の補助的役割を担い、東海以東では時に積極的役割を果たしている実態を浮き彫りにしたといえよう。

出原恵三は、高知県居留地遺跡と田村遺跡を比較する中で、弥生文化は縄文晩期社会とは異なるネットワークで成立したとするきわめてダイナミックな論を展開した。寺前直人はその田村遺跡から出土した石器を南九州、紀伊南部のそれと比較し、田村遺跡が大陸系磨製石器の導入において際だった特異な遺跡であることを改めて示した。このことは出原の研究と関わって興味深い。さらに在来系石器では3地域で共通点があることも指摘している。福永伸哉は、四国における大型青銅器と前期古墳の分布から弥生時代後期から古墳時代前期におこった政治変動について改めて示すとともに、その政治的変動で果たした瀬戸内ルートと太平洋沿岸ルートの役割について考察し、畿内の政治変動と太平洋ルートの浮沈について関わりがあることを示している。杉井健は、高知県下の瓶と甕のあり方を整理しつつその成果を九州と比較し、九州と関わりを持ちながらも九州とは異なる周辺域としての性格を高知の瓶や甕のあり方にみる。さらに瓶や甕の導入と横穴式石室の導入の関連を示唆しているが、これは清家の研究とふれあうところであり、墓制研究と生活様式研究の総合的研究に対する必要性を改めて示していよう。橋本達也は古墳時代前半期において九州東岸の首長層が広域ネットワークを形成して瀬戸内ルートと繋がることを示す。またそのルートを九州西岸ルート・太平洋ルートと比較検討し、古墳時代前半期の広域交流を概説している。菊地芳朗は、東北～北海道と九州南部の刀剣について比較研究を行い、前者は太平洋ルートを通じた交流が、後者では複数のルートが錯綜する形で物資流通が行われたとする。また、両者の比較から日本列島に国家秩序が整えられる際の共通の現象を垣間見る。清家は、南四国の横穴式石室を分析する中で、6世紀末から7世紀初頭の一時点において太平洋に面した地域で交流が行われたことを指摘し、その背景には瀬戸内ルートを掌握していた勢力とは異なる勢力が関わっていた可能性を示している。鈴木一有は、紀伊から東海における横穴式石室・鏡・岩陰遺跡など多様な資料を分析し、5世紀後葉に遠隔地交流が活発化した様相を指摘した。その中で海上交通の重要性を指摘している。

太平洋沿岸地域をめぐる文物交流研究それ自体が少なかったこともあるが、それぞれの研究は斬新な切り口のものが多い。こうした切り口をここにして文物交流の比較研究あるいは太平洋沿岸地域の研究をさらに進めていく所存である。

(清家章)

## II 論考



# 1. 弥生文化成立期の二相 —田村タイプと居徳タイプ—

出原 恵三

## はじめに

弥生時代は、日本列島の歴史の中で最大の変革期として位置付けられている。弥生土器、大陸系磨製石器、水田、金属器、開発、富、収奪、戦争、そして東アジア世界との関係などなど、それ以前の縄文時代にはまだ顕在化していなかった諸現象が陸続と生起し、以後の列島史の展開を規定し現代社会のあり方にも深く関わっているからに他ならない。弥生時代の研究は、戦前・戦後を通して長い歴史と多岐にわたる分野での蓄積がなされているが、縄文文化とは質的に異なる弥生文化がどのようにして成立し広がっていったのかと言う成立期の問題は、その中でも多くの関心とエネルギーが注がれてきた分野である。そしてその結論として弥生文化は、大陸に近い福岡平野など玄界灘沿岸地域で成立し、それが時間差を持って変質しつつ各地に伝播したという構図を大方の前提として、西日本各地の弥生文化成立期の歴史像が描かれてきた。しかしながら昨今、AMS年代の発表や弥生文化成立期前後の西日本各地の遺跡における東日本系土器の出土例の増加、讃良郡条里遺跡（中尾2007）での近畿最古の弥生前期土器群の検出などの新たな知見によって、成立期すなわち縄文から弥生への移行のあり方を廻って新たな論議が起こっている。

土器を見る限りでは、縄文晩期末の突帯文土器と遠賀川式土器が一定期間重なって推移していることが次第に明らかとなってきた。福岡平野などで典型的に現れている一遺跡における突帯文土器と遠賀川式土器の二重構造とともに、大阪平野などでは比較的近接している遺跡間で両者が共存するという現象が説かれるようになり、かつての棲み分け論的な解釈（中西1984）から共生論（秋山2007・田中2000）が導かれるようになった。また弥生文化成立期に東日本晩期文化が関与しているという考えは古くから見られたが、東日本系土器の増加の中で近年大きな関心事となっている。弥生文化の成立とその伝播をめぐる研究は、今や大きな転換期に差し掛かっているように思われる。弥生文化の成立については新たな意味付けと歴史像の再構築が求められているのではないだろうか。

弥生文化の成立について從来の考え方に対する再考を促したのは、高橋謙氏（高橋1986・1987他）や家根祥多氏（家根1987他）の一連の研究である。筆者も旧稿において、四国内の刻目突帯文土器と遠賀川式土器の検討を通して、形成期の遠賀川式土器が田村遺跡に見られることを示し、弥生文化は福岡平野などの土器の二重構造が展開する地域ではなく遠賀川式土器が純粹に見ら

れる中部瀬戸内を中心とする瀬戸内地域で成立することを述べた（出原2000）。平井勝氏も遠賀川式土器の成立については、瀬戸内説を主張された（平井2000）が、筆者らの見解は、現状では未だ少數派に過ぎない。

高知平野では、田村遺跡に加えて近年、居徳遺跡の内容が明らかとなった。両者は同じ平野の中にある弥生文化成立期の遺跡でありながら、その内容を大きく異にしており好対照をなしている。本小論では居徳遺跡出土の晩期土器と遠賀川式土器を編年的に整理し、東日本系土器についても検討を加えた後、田村遺跡との比較を通して高知平野における縄文から弥生への移行について新たな知見を提供したい。そして旧稿で述べた二重構造に加えて東日本系土器の分布の意味付けから弥生文化の成立について従来の定説に再び挑戦し新たな歴史像の構築を試みるものである。尚、筆者は弥生早期を採用しない。晩期とする<sup>⑩</sup>。

## 1 居徳遺跡

### (1) 居徳遺跡の概要

居徳遺跡は高知平野西部の土佐市高岡に所在する。仁淀川の右岸に広がる後背湿地に立地し現在の標高は8m前後、河口から8km程の地点にある。仁淀川右岸は後述する物部川と違って高知平野のなかでは縄文晩期遺跡が集中している地域でもある。1997年、98年に25,600m<sup>2</sup>が調査され、縄文時代後期から古墳時代にかけての大量の遺物が出土し、特に縄文時代晩期の人骨や木胎漆器、大洞式土器などの出土で注目を集めている。ここで問題とする縄文晩期の刻目突帯文土器や弥生前期土器は調査区のほぼ全域で出土しているが、これらの遺物は、遺構に伴つたものではなく、埋没残丘斜面や流路出土であり一括性には欠けるといわざるを得ない。しかし調査区西部の1C区IVD層（下層）とIVB層（上層）からは層位的な出土状況が認められる。調査を担当した曾我貴行氏は、両者に時間的な先後関係のあることを認め、IVD層→IVB層へ連続して変遷する2時期として理解し、両者に含まれる晩期土器と遠賀川式土器の組成変化や刻目突帯文土器を中心とした層位的位置付けを行っている（曾我2001）。曾我氏は土器の分析を通して「弥生土器出現後に生じた縄文晩期系突帯文土器のある可能性」を指摘し「晩期突帯文土器の伝統的保持と弥生土器化への変容」とが同時に進行したとして二重構造の具体像に言及し、田村遺跡と「好対照を示す両者の相向・相違を各方面から検討することが高知平野の縄文・弥生移行期」の問題解決に欠かせないと結んでいる（曾我2004）。

ここでは、1C区IVD層とIVB層出土の土器を中心に、曾我氏の成果にも依拠しつつ晩期土器と遠賀川式土器について検討し、次いで東日本系土器についても触れて居徳遺跡の土器構造を明らかにしたい。なお、報告書では1C区の土器についてIVD層、IVB層、IV層と大きく3つの層準に分けて遺物を扱っているが、曾我氏も述べているようにIVB層とIV層は同じ内容を有していることから、ここでは両者をIVB層として扱うこととする。

## (2) 1C区IVD層・IVB層の晚期土器

## ① 深鉢 (図1・2)

深鉢は刻目突帯文と非突帯文土器の両者が見られ、IVD層では、57点 (75%) : 19点 (25%)、IVB層では327点 (71.4%) : 131点 (28.6%) 両者ともにおよそ3:1の割合で存在している。これらの土器は粘土紐による内傾接合で製作されている。両者は、口・頸部の形態的特徴から以下のようないI～VI類に分けることができる。突帯文土器は、突帯位置、口唇刻日の有無などの属性から分類し、作成したのが表1である。

I類：上胸部で屈曲し、外反する口頸部を有する。

II類：口縁部が内湾気味に立ち上がる。

III類：口縁部が直線的に立ち上がるバケツ型。

IV類：内湾または直線的に立ち上がり口縁部が外反する。

V類：波状口縁を有する。

VI類：王冠状の波状口縁を有する。大洞式土器の影響を受けた土器である。

両層ともにI類が圧倒的に多く、他の類は合わせても数パーセントに過ぎない。IVD層にはIV類以下は認められない。

口唇部形態は、A類：端部が面をなし断面長方形を呈する。B類：丸く納めるもの。C類：尖り気味のもの。両層ともB類が半ば以上を占めており、A・C類が2割前後である。口唇部は、刻日を有する1類と刻日のない2類があり、IVD層は1類：2類=35点 (61%) : 22点 (38.6%)、IVB層は1類：2類=118点 (36.9%) : 202点 (63.1%) とIVD層では刻日のある1類が6割を占めているのに対してIVB層は3割程度と比率が逆転している。

突帯の位置は、a類：口縁端部から1cm前後下位に付く。b類：口縁直下に付く。c類：口縁端部に接す

表1 1C区IVB層・IVD層出土の深鉢 (刻目突帯文)

項目	分類	IVD層	IVB層
器形	I	55点 (96.5%)	234点 (86.0%)
	II	1点 (1.8%)	9点 (3.3%)
	III	1点 (1.8%)	5点 (1.8%)
	IV	0	11点 (4.0%)
	V	0	8点 (2.9%)
	VI	0	5点 (1.8%)
口唇形態	A	12点 (21.1%)	101点 (30.9%)
	B	30点 (52.6%)	188点 (57.5%)
	C	15点 (26.3%)	38点 (11.2%)
口唇部の刻目	1	35点 (61.4%)	118点 (36.9%)
	2	22点 (38.6%)	202点 (63.1%)
突帯の位置	a	38点 (66.7%)	250点 (77.2%)
	b	13点 (22.8%)	43点 (14.2%)
	c	5点 (8.8%)	8点 (2.5%)
	d	1点 (1.8%)	23点 (7.1%)
突帯の形状	①	37点 (64.9%)	184点 (56.4%)
	②	19点 (33.3%)	113点 (34.7%)
	③	1点 (1.8%)	8点 (2.5%)
	④	0	21点 (6.4%)

る。d類：口縁部端部から2cmほど下に付く。両層ともa類が7割前後を占め最も多く、次いでb類が2割前後、d類はIVD層では1.8%と極少量であるが、IVB層では7.8%に増加している。突帯の形状は、①類：三角形、②類：カマボコ形、③微隆起状、④扁平の4タイプからなる。両者ともに①類が最も多く6割近くを占め、②類が3割程度とよく似た推移を示している。

二条突帯を確認できる個体はIVB層の1点(21)のみであるが、上唇部に刻日突帯の確認できるものを二条突帯と仮定すればIVD層で1点(13)、IVB層では20など30点程が見られる。深鉢全体の中では少量に過ぎないがIVB層で増加していることは認められよう。この他、頸胴部界に沈線の施される例(8・24)が僅少ながら見られることやIVB層では孔列を有する例(14・15)が見られる。孔列上器は1C区で7点見られるが遺跡全体では22点が確認されている。例外なく外側から内側に向かって穿たれている。器面調整は、内外面ナデ調整が大半を占め、ナデの下地に条痕の見られる例が少数存在する。I類については頸部と胴部とで調整が異なっている例が多い。8や24・26に典型的に認められるように頸部はJ字に仕上げられているのに対して胴外面は粗雑であり条痕が残っている場合もある。

非突帯文深鉢の属性については表2に示した。全般的な器形は、I類が6～7割と両層共に多くを占めている。IV・V類がIVD層で認められないことも同様である。口唇部形態もB類が6割前後と最も多い。口唇刻は、IVD層とIVB層で逆転し、IVB層で口唇部刻が少數派になってい

るのも刻日突帯文深鉢と同様に推移している。頸胴部界に沈線を持つものはないが頸部に木葉文を有する例(106)が僅少ながら見られることは注目されよう。器面調整は突帯文深鉢と同様に粗いナデ調整が主流である。底部は、後述する遠賀川式土器の甕に比べて非突帯文・突帯文土器深鉢とともに確認例が少ないが丸底、平底、上げ底が見られる。ただ7は、遠賀川式の影響を受けているかもしれない。しかし製作・調整手法は晚期土器そのものである。

表2 1C|IVB層・IVD層出土の深鉢（非刻日突帯文）

項目	分類	IVD層	IVB層
器形	I	14点 (73.7%)	79点 (60.3%)
	II	4点 (21%)	29点 (22.1%)
	III	0 (%)	10点 (7.6%)
	IV	1点 (5.3%)	5点 (3.8%)
	V	0 (%)	2点 (1.5%)
	VI	0 (%)	6点 (4.6%)
口唇形態	A	5点 (26.3%)	32点 (24.8%)
	B	11点 (57.9%)	78点 (60.5%)
	C	3点 (15.8%)	19点 (14.7%)
口唇 刻日	1	10点 (52.6%)	44点 (34.6%)
	2	9点 (47.4%)	83点 (65.4%)

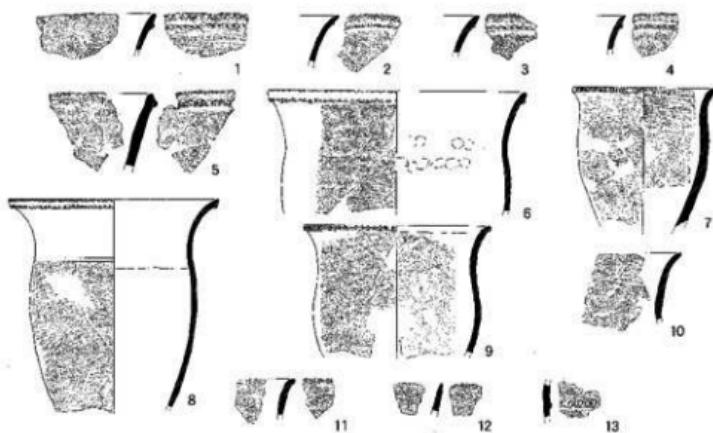


図1 1C区 IVD層川土の深鉢

刻目突帯文

IC1a類: 1~4, IB1a類: 6, IC1b類: 8, III B2b類: 5

非刻目突帯文深鉢

IB1類: 7・9, IB2類: 10・11, IC2類: 12

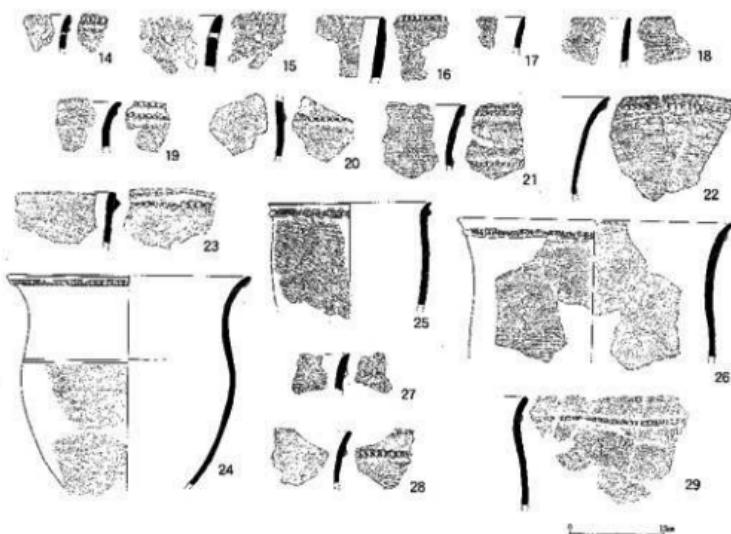


図2 1C区 IVB層川土の深鉢

刻目突帯文深鉢

IA2a類: 24・26, IB1a類: 14・15・19, IB1b類: 21, IC1a類: 22

非突帯文深鉢

IA2d類: 28, IB2d類: 29, IC2類: 27, III A2a類: 23, IV A2類: 25

II A1類: 16, III C2類: 17, III B2類: 18

## ② 浅鉢（高杯）（図3・4）

いわゆる黒色磨研土器が多い。細片が多く型態分類をするのは難しいが、主として口縁形態から以下のように分類できる（表3）。

I類：口縁部が逆「く」字状に屈曲し内傾しながら立ち上がり外反する。（40・47）

II類：肩部で屈曲するが内傾せずにそのまま外反する。屈曲部に強い稜を有するIIA類（30・

33・38・41～43・52）、丸みを帯びて外反するIIB類（39）がある。

III類：肩部から直線的に立ち上がる。（37・51）

IV類：半球形状のもの。ボール状に深いIVA類（32・36・45・46・49）と浅いIVB類（35・48）がある。

V類：器高の高い鉢状を呈するタイプ。波状口縁を有するものもある。（44）

VI類：波状口縁を有し、いわゆる方形浅鉢と呼ばれるタイプ。（50）

IVD層では15点、IVB層では108点を数えそのうち96点を分類した。IVD層はII類とIV類から構成され、IV類が11点と8割近くを占め、IV類の中でもIVA類が大半を占めている。IVA類には内面に沈線を施す例（32）が見られる。IVB層はI～VI類まで見られるがIVD層と同じくIV類が6割と最も多く、やはりIVA類が多い。IVA類の中には内面に沈線を持つもの（45・46）や多頭波状口縁を有するもの（49）も見られる。次いでII類が多く、他の類は数パーセントに過ぎない。III類の51とIIA類の52は高杯の可能性もある。

表3 1C区 IVB層・IVD層出土の浅鉢

分類		IVD層	IVB層
I類		0	3点（3.1%）
II類	A	1点	13点（13.5%）
	B	2点	3点（3.1%）
III類		0	6点（6.3%）
IV類	A	9点	36点（37.5%）
	B	2点	26点（27.1%）
V類		0	6点（6.3%）
VI類		0	3点（3.1%）
計		14点	96点（100%）

表4 1C区 IVB層・IVD層出土の壺（縄文晩期）

分類	IVD層	IVB層
I類	7点	30点（75%）
II類	3点	5点（12.5%）
III類	0	1点（2.5%）
IV類	0	1点（2.5%）
V類	0	1点（2.5%）
VI類	0	1点（2.5%）
VII類	0	1点（2.5%）
計	10点	40点（100%）

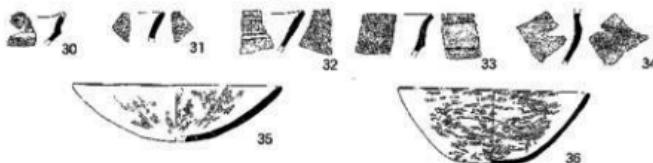


図3 1C区 IVD層出土の浅鉢  
IIA類: 30・33、IVA類: 32・36、IVB類: 35

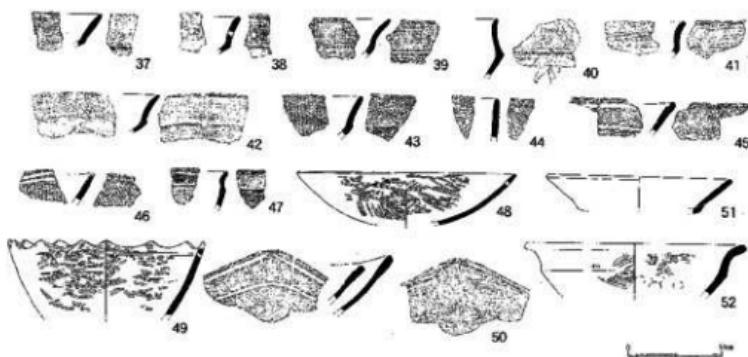


図4 1C区 IVB層出土の浅鉢  
I類: 40・47、IIA類: 38・41~43・52、IIIB類: 39、III類: 37・51、  
IVA類: 45・46・49、IVB類: 48、V類: 44、VI類: 50

### ③ 壺 (図5・6)

壺も黒色磨研のものが多い。型態から6タイプに分類することができる。

I類: 長い頸部がハ字状に立ち上がり、口縁部が短く外反、やや扁平な胸部を持つ。

(53~56・58・59・66~69・72~74)

II類: 半球形の体部上半部に短い口縁が立ち上がる。(57・60・64・65)

III類: 胸部が「く」字状に屈曲する。(61・62・71・76)

IV類: 内傾して直線的に立ち上がる。(63)

V類: 口縁部がラッパ状に開く「広口壺」。(75)

VI類: 大洞式土器 (77・78)

IVD層はI・II類が見られる。口頸部のカウントではI類: 2類が7点: 3点の比率を示しているが、胸部片にはIII類(61・62)も数点見られることからI・II・III類で構成されていたことになり、口頸部からI類としたものの何点かはIII類の胸部を有するものと考えられる。これ

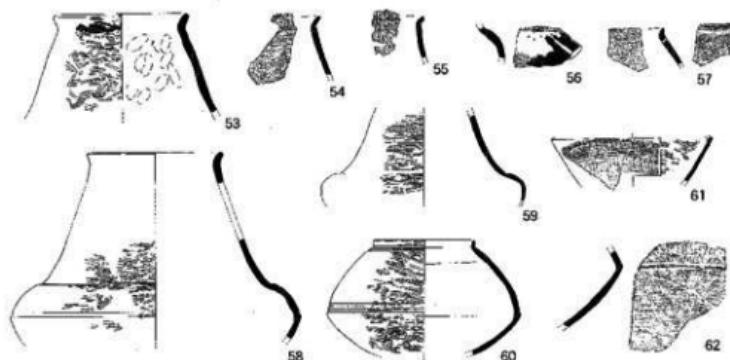


図5 1C区 IV D層出土の晩期壺  
I類: 53~56、58~59、II類: 57~60、III類: 61~62

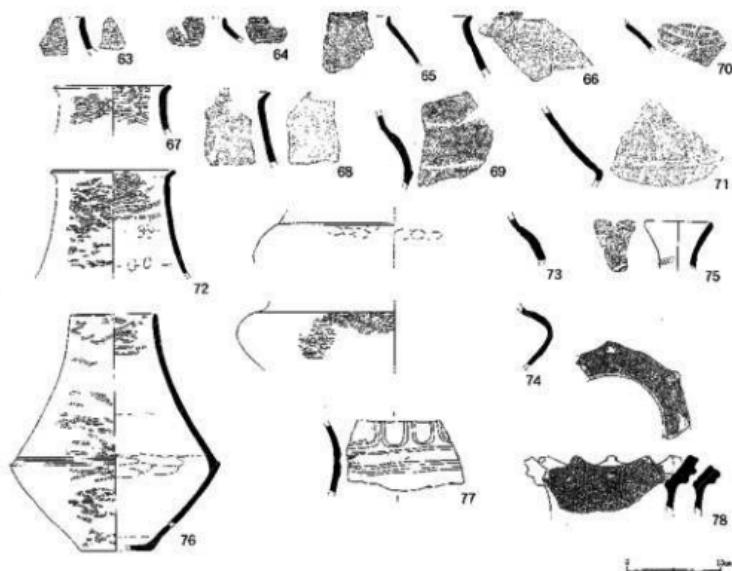


図6 1C区 IV B層出土の晩期壺  
I類: 66~69・72~74、II類: 64・65、III類: 71~76、IV類: 63、V類: 75、VI類: 77~78

らのほとんどは黒色磨研で赤漆が塗布されているもの（56）も散見される。I類は長く伸びた頸部と扁平な胴部が特徴で、58は胴部最大径付近に太い沈線を有する。II類の60は口縁直下に2条、胴部に3条の沈線が見られる。III類の61は下胴部に紡錘形や横走沈線による文様が描かれており、屈曲部に接して沈線の施されている例が見られる。

IVB層ではバリエーションが増えるが、主体はIVD層で見たI～III類である。表4の数字ではI類が30点、III類が1例となっているがIII類の胴部片は10点以上出土していることから実際の構成比はもっと接近しているものと考えられる。胴部には沈線文や浮き彫り風の文様、三田谷文様（岡田2000）に類似した文様を施したもの（70）も見られる。III類の上胴部には2条の区画沈線の上に重弧文を施す例（71）が複数例見られる。VI類とした大洞式上器（77・78）はすでに多くの研究者によって注目されている。78は大波状突起を配し内面には蓋受けの突起を巡らせ、見事な赤漆が塗られている。77は降帯による区画文を施した胴部片で、隣接調査区（1A区）から出土したものであるが、78の胴部と考えられる。本例は石川日出志氏によると大洞A1式上器に併行し「東北地方中部からの搬入品として誤り」ないものとされる。（石川2000）。

#### ④ IVD層・IVB層出土晩期土器の編年的位置付け

最も多くを占める刻目突帯文深鉢の大半は瀬戸内を中心分布する屈曲型の一条突帯深鉢に属する。IVD層・IVB層の編年的位置付けは、一定量の壺の存在、II類やIV類の浅鉢が主体を占めていることなどから見て突帯文土器の後半期に位置付けられることは間違いない。浅鉢の中にはVI類としたいわゆる方形浅鉢が3点IVB層から出土しているが、これは混入の可能性もある。また高杯の可能性があるとしたIII類の51やII A類の52は下月限C遺跡で板付1式古とされるSK488出土例や板付遺跡G 7a・b中層出土例（山崎1980）に類似する。

高知平野の晩期土器は、資料に乏しく詳細な編年は組まれていないが、岡本健児氏は倉岡I式一倉岡II式を設定している（岡本1983）。前者は滋賀里IIIb式、後者は刻目突帯文土器の出現期のもので菜畠9～12層に併行関係をもとめている。しかし後続諸型式については資料に恵まれず空白の状態が続いている。IVD層・IVB層は倉岡II式に後続する空白期を埋める型式、高知平野の突帯文土器の後半期の資料として位置付けることができよう。

周辺地域に当該期の類似例を求めれば、すでに曾我氏が指摘しているように沢田式（岡田1985）や林・坊城遺跡、道後今市遺跡11号土坑出土の土器を挙げることができよう。この中でも深鉢頸胴部界の沈線や刻目突帯文深鉢の口唇部刻目の頻度の多さなどから道後今市遺跡SK11との類似性が高いものと考えられる。

ここでは、後述する遠賀川式土器との関係もあって少し細かな検討を加えて見たい。層位別に器種毎に観てきたが、IVD層とIVB層で深鉢・浅鉢共に大きな型式差を見出すことはでない。器種組成にも大きな変化は認められない（表5）。ただ、以下のような属性について変化を確認することができる。①深鉢では突帯文・非突帯文を問わず口唇刻の有無が両層の間で逆転して

いる。すなわちIVD層では口唇部の1類が6割台と大半を占めていたものがIVB層では逆転して口唇部の無い2類が6割余りを占めている。②IVB層は深鉢の2条突帯が増加。③IVB層ではd類とした口縁端部から2cmほど下がったところに刻目突帯を貼付するものが出現。④孔列土器はIVB層にのみ存在。⑤浅鉢は、僅少な差異ではあるが逆「く」字状口縁のII類の比率がIVB層よりIVD層が高い。⑥IVB層には大洞式土器など東日本系土器の搬入品や模倣品、折衷品多い。ことなどを挙げることができる。①～③・⑤は、一般的に型式が新しくなると生じる現象と捉えられており、③は徳島の三谷遺跡などに典型例が見られるように刻目突帯文土器最終段階の特徴として考えられている。

従って、IVD層→IVB層への変遷を考えられる。また高知平野が、徳島平野などと同様の型式変化を辿るとすれば、IVB層には突帯文深鉢の突帯位置d類とd類出現以前の2型式の存在を想定することができよう。これを仮にIVB層古、IVB層新とすれば、IVD層・IVB層では、IVD層期→IVB層古相→IVB層新相と都合3小期の変遷が考えられる。この変遷は今後遺構出土資料などにおいて検証されなければならないことは言うまでも無いことである。

### (3) IVD層・IVB層出土晚期土器の特徴

両層出土の土器を広域的に見れば瀬戸内分布圏に属し類似例にも触れたが、かなり強い独自色をも兼ね備えていることが指摘できる。深鉢では、非突帯文深鉢が両層ともに2～3割の比率を占めていることが先ず上げられる。これは突帯文土器前半の前池式土器などに見られる比率（平井1996）に近く、突帯文土器後半期にこれ程の高比率で非突帯文土器が存在する遺跡は管見の限りでは他に類例を見ない。この中には突帯文以前の深鉢の混入も無しとは言えないが、高知平野の地域性として捉えることもできる。すなわち非突帯文土器は突帯文土器終末からその基本的な形態を保ちつつ非達賀川式土器系へ、さらに弥生時代前期末以降に盛行する南四国型壺（出原2003）へと変遷を遂げるのである。

刻目突帯文深鉢の属性についても地域性をいくつか指摘できる。口唇部刻がIVB層では減少するがそれでも3割台を保っている。沢田式で口唇部は10%、先行する津島岡大式で20%（平井1995）、林・坊城遺跡で23%に対して、本例は高比率である。口唇部形態についても同様のことと言える。口唇部形態C類が沢田式では80%、本例は2割前後に過ぎない。これらの属性は、突帯の位置と共に先後関係を示す目安とされてきたが、藤尾慎一郎氏も指摘する（藤尾2003）ように必ずしも一様に現象するものではない。深鉢の孔列文や木葉文も注目しなければならないが、前者は旧稿（出原2005）で触れたこともあるのでここでは割愛する。後者については後述する。

次に壺について触れなければならない。壺はI類が主流を占めているが、すでに触れたようにII・III類も定量存在している。I類は瀬戸内や北部九州の例に比べて頸部が長く胴部が著しく扁平であり、またこの系統の壺には珍しく胴部最大径付近に沈線を持つ例が多いなど強い地

表5 1C区IVD層・IVB層出土の縄文晩期土器と遠賀川式土器の組成比率

	縄文晩期土器				遠賀川式土器					
	深鉢	浅鉢	壺	小計	壺	壺	鉢	高杯	蓋	小計
IVD層	76点	14点	10点	100点	0	3点	0	0	0	3点
	76%	14%	10%							
IVB層	484点	108点	39点	631点	327点	94点	8点	3点	1点	433点
	76.70%	17.10%	6.20%		75.50%	21.70%	1.80%	0.70%	0.20%	

域性が窺える。短頸壺（II類）や胴部屈曲壺（III類）も他の地域ではほとんど例を見ないタイプである。III類でもう一つ指摘しておきたいことは上胴部に施された重弧文の存在であり図示したもの以外にも数例認められる。弥生前期の壺に見られる重弧文の成立について、北部九州の彩文にその起源を求めるもの（山崎1980・田畠2000）や、最近では、亀ヶ岡系土器の隆線文にその起源を求める見解も示され注目されている（設楽・小林2007）。遠賀川式土器の発展・展開に東日本系土器の影響があったことは間違いないものと考えられるが、重弧文が西日本の晩期壺に認められる以上これを隆線文に求める必要はなかろう。これらの壺に施されている沈線はヘラ括沈線ではなく重ね引きによる幅広の沈線が多いが、多分に東日本の手法の影響が考えられる。

壺について今一つ指摘しておかなければならぬことは、ここではいわゆる浅鉢変容壺や船橋式、長原式に伴う突帯文を施した壺が見られないことである。このことも瀬戸内や近畿との大きな違いであり、高知平野では、独自の黒色磨研壺をすでに具備していたのである。西日本における晩期の壺の成立については、朝鮮半島からの影響によるという考え方方が根強いが、独自の地域色を持ちバリエーションも備え、一定量の組成比率も維持していることから高橋護氏の指摘のようにすでに晩期社会の中で壺を保有していたと見なければならない（高橋1987）。土器組成は表5に示した。先に挙げた林・坊城遺跡など瀬戸内の諸遺跡では、深鉢が5～6割、浅鉢が4割前後、壺が1割で推移しているのに比べると深鉢の比率が多く、浅鉢が少ないことが指摘されよう。壺はほぼ同様に推移している。

#### (4) 1C区IVD層・IVB層の遠賀川式土器（図7～9）

IVD層からは壺3点、IVB層からは壺・壺・鉢・高杯・蓋の計433点の遠賀川式土器が出土している。ここでは田村遺跡前期上器編年（田原2006）に基づいてIVB層出土の土器を中心に見ていく。先ず田村前期1a期（以下1a期）に壺の4割以上を占め、同期の最大の特徴である弥生土器化した突帯文土器系壺が認められないことが挙げられる。居德遺跡の遠賀川式土器は、前期初頭の1a期が欠如し1b期から始まっている。

IVD層からは大型壺細片が図示した79・80を含めて3点出土しているのみである。79は外傾接合の擬口縁が明瞭に認められる。外面に赤彩を施す例も見られる。

IVB層からは晩期土器と共存して大量に出土しており、まさに土器型式の二重構造の典型例として現象している。IVB層の遠賀川式土器は、層位的に分けることはできないが、明らかに先後する二型式からなっている。すなわち1b期と1c期である。これらの土器の成形に外傾接合が採用されている点は田村遺跡と同様であるが、比較的幅広い粘土帶のものと幅の狭い粘土紐を積み上げる二者が見られる。後者は田村遺跡では見られなかつた手法である。

1b期の土器について器種別に見ると、壺は中型壺(85~87)と大型壺(93・94)があり、しっかりした段部もつものと段の無いものがある。大型壺には赤彩を施す例が目立つ。形態的に田村遺跡との間に大きな違いは認められないが、大型壺の赤彩は田村遺跡ではほとんど見られない。壺は田村遺跡の分類に従えば、段や沈線を持たないE1類(91・92)、段を持つE2類(82~84・90)、貼付突帯を持つE8類(88・89)、削り出し突帯を持つE9類(95)からなる。前二者が主体となるのは田村遺跡と同様であるが、いくつかの点で相違点を指摘することができる。まず段壺のE2類に刻目を持つ例が多いことが挙げられる。E2類は28点出土しており、壺全体の中でどれ程の比率を持っているのか明らかにできないが、そのうち19点(69.6%)が刻目を有する。田村遺跡ではE2類は、1a期に417点中38点(9.1%)、1b期に231点中64点(27.7%)と1b期に盛行し1c期以降急減するが、これらの中で刻目を持つものは1a・b期を通して4~5割である。ここではかなり高い比率を示している。

段壺の中でもう一つ注目すべきことは、83・84のような「直線紋刻目段」の典型例が5例認められることである。段壺の3割を占め高い比率を示している。田村遺跡では、1a期には見られず1b期に極少量見られるに過ぎない。すでに周知のように「直線紋刻目段」は、深澤芳樹氏によって提示された刻目段から「両直線紋間刻目」への型式変化の中間に位置するタイプに他ならない(深澤2000)。そして秋山浩三氏は、刻目段→直線紋刻目段→両沈線紋間刻目の変遷に「遠賀川系集団」と「縄文系集団」との接触、共生を想定した(秋山2007)。この典型例が田村遺跡ではなく居德遺跡で見られることは深澤氏が課題としている「段壺のおいたち」に迫ることを可能にするものもある。また、88・89に示した突帯を有するタイプは田村遺跡では1~2%に過ぎないが、ここでは1割以上を占める。晩期の二条突帯文深鉢と遠賀川式壺の折衷タイプとして理解できよう。これらの中には削り出し突帯や突帯の上下に沈線を施す例も見られることから、これらのタイプからも「両沈線紋間刻目」への移行は想定されよう。

鉢は僅少であり81のような段部を持ったものが2例確認できるに過ぎない。田村遺跡では1割前後を占めるが、ここでは数%以下と思われる。高杯は、口縁部を特定することはできないが、脚部と杯部との接合部(108・109)が数点と脚端部(110)が出土している。前者には突帯の付くものと無いものがあり、加えて他の地点では刻目突帯を有する例も出土していることから田村遺跡とほぼ同様の展開をしているものと見られる。

1c期の土器は図8に示した。壺に少条沈線が登場し、「両沈線間刻目」(105)も見られる。各

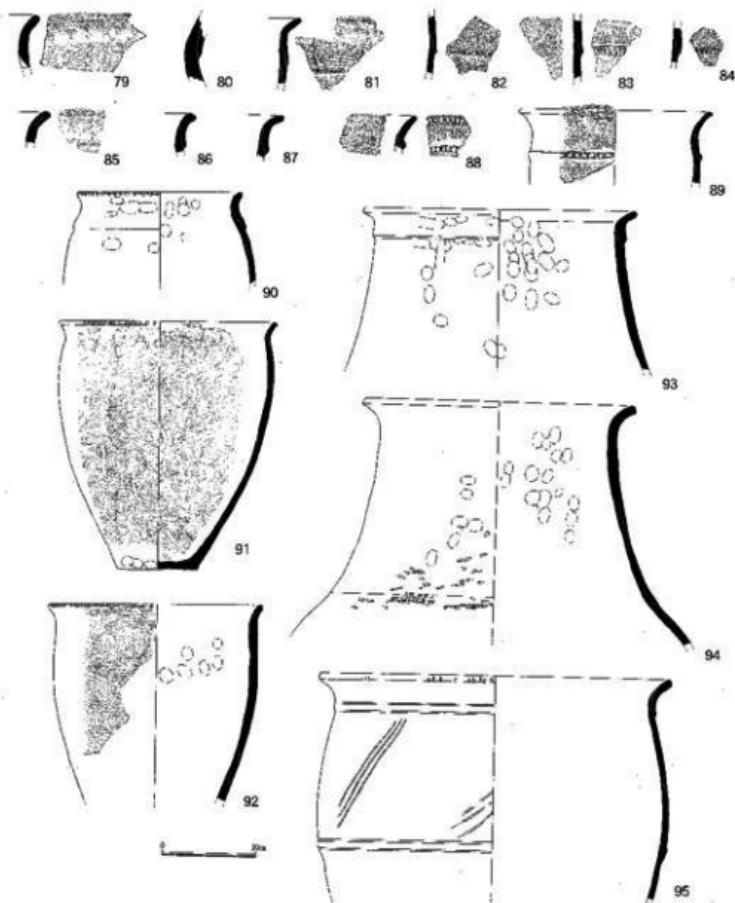


図7 1C区 IVD・IVB層出土の遠賀川式土器（前期Ib期）

IVD層：壺（79・80） IVB層：壺（85～87・93・94）、甌（82～84・88～92・95）、鉢（81）

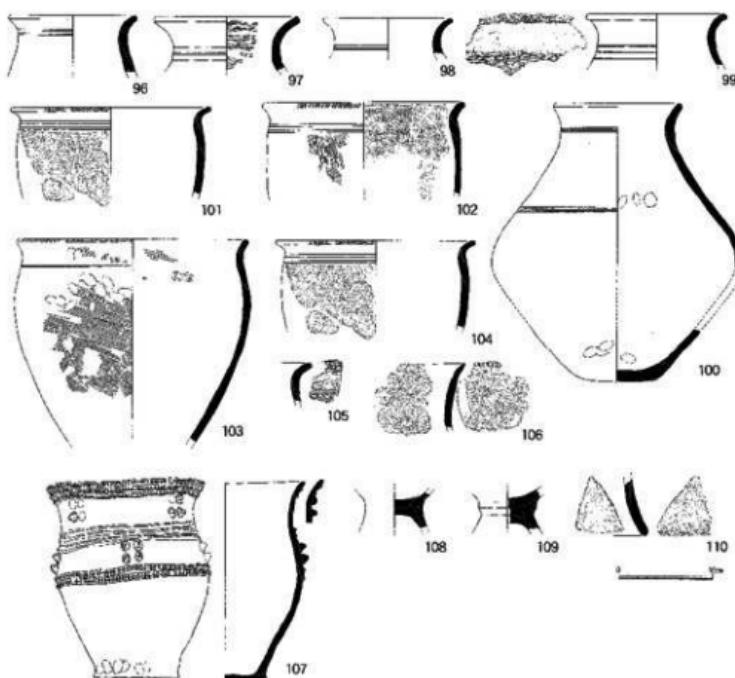


図8 1C区 IVB層出土の遠賀川式土器 (96~105・108~110) と南四国型甕 (106・107)  
盤 (96~100)、甕 (101~105)、高杯 (108~110) (高杯以外は1C期)

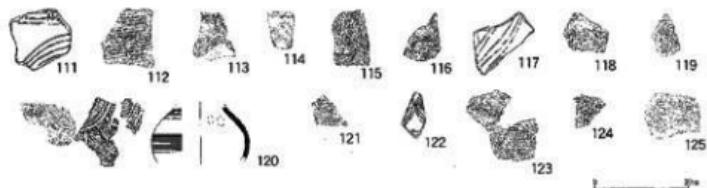


図9 1C区 IVB層出土の壺文様  
垂弧文 (111・112)、複縞山形文 (113・114)、木京文 (115~125)

器種から段部を有するものが減少すると共に主として壺に各種文様が多く施されることを特徴とする。大型壺の減少、甌の口唇部は丸味を帯び口唇部全面に刻目を施すものが増加するなど田村遺跡と同様の現象が見られ遠賀川式土器を見る限りでは田村遺跡と大きな違いは認められない。しかしながら田村遺跡のIa～Ic期を通して見られない106や107のような深鉢状を呈した非遠賀川式土器系統の甌が登場する。前者には頸部外面に木葉文が施されているが、先述した非突帯文深鉢に系譜が求められる。後者は、口縁、頸部、上胴部に小突帯3条を単位とする突帯文を施し、その間に大型の浮文を貼付する。もっと繁縝な文様を施す例も見られる。これらの上器こそ前期末から中期にかけて南四国を席巻する南四国型甌の原型に他ならない（出原2003）。南四国型甌には、遠賀川式土器と晩期深鉢との折衷タイプも見られるが、ここでは折衷というより晩期深鉢の延長線上にあるタイプとして捉えなければならない特徴を有している。

次に、壺の胴部文様（図8・9）について見ていく。口縁部と同一固体で捉えられるものが少ないためにこれらがIb・c期の何れに属するものか決定することは難しいが、複線山形文、重弧文、木葉文、斜格子文、綾杉文などが見られる。これらの文様は、ヘラ状工具で繊細に描かれており、すでに触れたように晩期のそれが重ね引きによる太い沈線とは異なる。細片が多く正確な頻度を求めることは難しいが、複線山形文が23点、木葉文22点、重弧文19点、他は数例である。文様の種類、使用頻度ともに田村遺跡と類似しているが、木葉文の頻度が田村遺跡に比べてかなりの高比率を示している。複線山形文は瀬戸内の晩期深鉢はじめ西日本の晩期土器に広く見られ、重弧文は先に述べたとおり晩期壺にある文様であり施文手法は異なるが伝統的な文様として捉えることができよう。

木葉文はどうであろうか。周知のように、かつては樋原式文様からの系譜に求められていた（坪井1971）が、最近では浮線文など東日本系土器との関連が考えられている。ここで出土している木葉文は、笠描無軸木葉文（117・118・120～122）、笠描細軸木葉文（119・124・125）、笠描斜軸木葉文（106・123）が見られる<sup>10</sup>。ここで注目したいのは120である。上胴部と中位に多条沈線による文様帯を持つ東日本系上器である。東日本系土器については後述するが、木葉文が明瞭に見られるのでここに示した。上下の文様帯間を縱に窓枠状に区画しその中に無軸木葉文をジグザグ状（連続型）に充填している。般楽氏は、北陸の浮線文系土器が木葉文の祖形を形成するという示唆に富む見解を示している（般楽博巳2004）。120は般楽氏の言われる単位文として捉えることはできないだろうか。すなわち後述する東日本系土器の図10-126～128の口縁部に施された工字文風な単位文が祖形となって、それが西日本の伝統的な連続山形文の影響を受けて連続型の木葉文へと展開した可能性を指摘しておきたい。したがってここでは中村豊氏（中村2006）も指摘するように最も古の木葉文として位置付けたい。

深澤氏は、弥生土器に施される笠描木葉文について詳細な分析を行い、彩色表現の木葉文か

ら箋描無軸木葉文→箋描縦軸木葉文→箋描斜軸木葉文の変遷を提唱している（深澤1989）。ここでは出土状況から先後関係を求ることはできないが、使用頻度について注目したい。すなわち居徳遺跡の数倍の土器量を有する田村遺跡に対して居徳遺跡の出土点数22点は、使用頻度が田村遺跡に比べてかなり高いことになる。また田村遺跡で見られなかった現象として、甕にも施文され先に挙げた106以外にも認められる。後述のように田村遺跡ではIa・b期を通して木葉文は見られず、Ic期になって木葉文の単位である有軸紡錘形の文様や木葉文が少數見られ、Id期になって上記の各種木葉文が一齊に描う。このことは高知平野の木葉文は居徳遺跡において成立し田村遺跡に波及した可能性がある。

次に器種別の組成比を見れば表5のとおりである。晩期土器と比べると煮沸形態は同じ割合を示し、壺は遠賀川式土器が3倍ほど多い。遠賀川式土器の鉢は1.8%と極端に少ないが晩期の浅鉢（17.1%）が描っているものと考えられる。田村遺跡の1b・c期と比較すると甕が15ポイントほど多いが他はそれほど大きな差異はない。ただ居徳遺跡の場合、甕用蓋が極端に少ないと指摘できよう。以上、IVB層の遠賀川式土器を中心見てきた。IVB層の1064点のうち、遠賀川式土器が4割（433点）、晩期土器が6割（631点）の比率で共存使用されていたものと考えられる。すでに指摘したようにIVB層の晩期土器はIVB層古相とIVB層新相に、遠賀川式土器も2小期に分かれるがそれぞれの割合を正確に出すことはできない。しかし、IVB層古相には晩期土器の割合が更に多く、IVB層新相には遠賀川式土器が多くを占めていたことは容易に推定できる。

#### （5）居徳遺跡出土の東日本系土器

##### ① 東日本系土器（図6・9・10）

居徳遺跡のもう一つの特徴は、東日本系、北陸系、山陰系の晩期土器が多く見られることである。図6-77・78についてはすでに石川氏や小林氏によって広く紹介されているが、それ以外にも多数出土している（図10）。1C区以外の調査区出土例も提示し、少し煩雑ではあるが個別に紹介しておきたい。126・128は蓋と考えている。126は口径14.6cmに復元される。外面は口縁立ち上がりと天井部の間に一条の界線を施し、立ち上がり部分には細線で工字文風な単位文を描き、その中を横位の沈線で充填する。天井部は単位文の会合部上を三角形状に弱く削り込み左右に幾何学文を充填している。モチーフを明らかにすることはできないが、北陸の長竹式土器の文様に類似していると考えている。内外面丁寧な箋磨が施された黒色磨研土器で外面は赤彩されている。搬入品の可能性がある。128は口径10.8cmに復元できる。外面に工字文風の単位文を浮線文で描き棒内も3本の浮線文が横に配される。会合部は接しており上下に三角形削り込みが対向している。上部は浮線文が3条まで確認できる。このようなモチーフは長竹遺跡出土の蓋文様に類似している。内外面丁寧な箋磨が施されている。胎土から在地製作と考えられる。

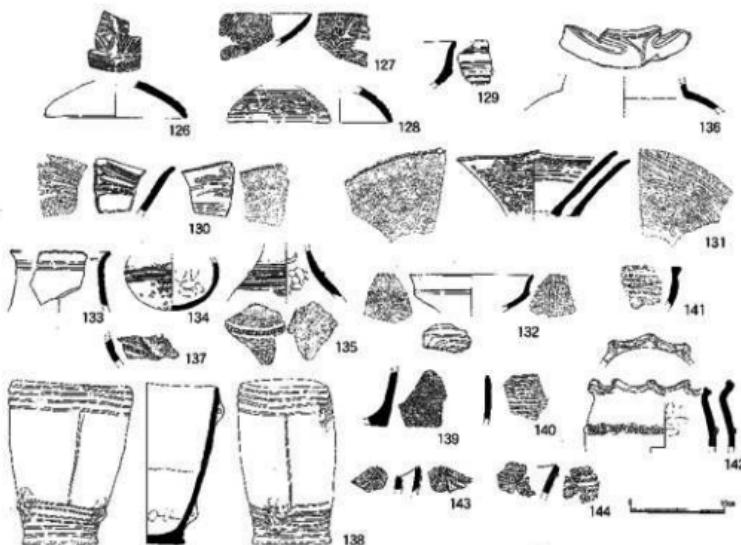


図10 居德遺跡出土の東日本系土器(126~140)と接裏土器(142~144)  
1A区(126・130~133・138・140・141)、1C区(127・138・139・142~144)、  
1F区(134・135)、3A区(128・129) 3B区(37)

127・129~132は鉢としたが、127・130・131は蓋の可能性もある。127は口縁部下に126と同様の単位文が描かれ会合部が接している。会合部下に三角形の刺り込みが施され、それを挟むように一条の界線が巡りその下に沈線による文様が展開するが詳細は不明である。内外面丁寧な施磨きが施された黒色磨研土器である。129は3A区VA層出土の浅鉢、口縁部の上部と下部に2条ずつの沈線、屈曲部の下位にも2条まで沈線が見られる。黒色磨研土器で外面は赤彩されている。本例は、大分県古殿遺跡出土例に類似している。石川氏によって東日本系土器B種として位置付けられ、時間的には大洞C2式～大洞A1前半に求められている（石川2000）。搬入品である。130・131は同一固体と考えられる。底部は接合部から剥離している。僅かに波状口縁を有し口径16.6cmを測り、波頂部に棒状工具による圧痕と口縁部には細かな刻目が施されている。内面は波頂部から垂下した沈線と上下の界線の中に台形状の単位文を対向させ内部に三叉状文様を刺り込み上下に配している。単位文の会合部上下や垂下沈線と下部界線の接触部は三角形に刺り込みが入れられている。本例は東日本や北陸では見られないモチーフであるが三角形刺り込みは最近注目されている三田谷文様（岡田2000）に属する。山陰との関連がある土器である。内外面施磨きが施されているが、これまで見てきたものに比べると粗く単位も大きい。

弥生土器の影響が多分に考えられる。132は口径12.9cmを測る。体部外面に幾何学文様を配している。長竹式土器に見られる文様であり、類例を津島岡大遺跡出土の胸部文様に求めることができる（石川2000）。

133～135は壺である。133は口頭部で形態的には先に述べた壺Ⅰ類に類似する。口縁部は冠状に抉りを連続させ、外面に2条、内面に1条の沈線を有する。沈線は弥生土器に施されるものに比べると太い。外面と口縁部内面は丁寧な範磨きがなされ赤色顔料が塗布、胴部内面は横位擦痕が見られる。明らかに搬入品である。134は丸底壺の下胴部である。中位に1条のやや太い区画沈線を施し下部文様帶として細線6条を配している。上には連続型木葉文が僅かに確認され、接点に珠点が見られる。先に見た図9-120のモチーフと似ている。外面はやや粗い範磨きがなされ、胎土・色調とも弥生土器で在地産である。135は頸胸部界に刻目突帯文を貼付し、頸部に5条、胴部に4条の沈線帯を配す。胴部沈線帯の下には木葉文の一部が見られる。本例も134と似た文様モチーフを有し、弥生土器化した胎土・色調を呈する。136は上胸部に三角形の刺込みを入れ先端から沈線が垂下し両脇には窓枠状の梢円形文が配される。典型的な三田谷文様である。黒色磨研で刺込みには赤色顔料が見られる。

138～140は筒形土器である。138は完形復元ができる。胎土発色は弥生土器である。口径12.3cm、器高17.3cmを測る。口縁部外面に4条、底部付近に7条の箇描沈線を巡らし、沈線帯を垂下沈線で4等分するように繋ぎ、さらに上下2個ずつ耳状の突起を千鳥に配している。139は底盤片である。3条単位の沈線帯で上下に区画し、その巾を沈線で窓枠状に区画し、更に複線山形文や重弧文を充填している。明らかに搬入品である。140は1A区出土の口縁部である。外面に多条沈線が施され10条まで確認することができる。黒色を呈し細かな範磨きが施されている。これらの筒型土器は、乾遺跡出土の長竹式土器に類似している。

142は在地の突帯文土深鉢と大洞式土器の折衷タイプで、冠状の多頭突起を有し上胴部には刻目突帯文上器を貼付する。在地産で弥生土器化している。137は副部細片で断面カマボコ状の突帯がY字状に貼付されている。類例を目久美遺跡などに見ることができる。

143・144は波状口縁の深鉢である。大洞A2式の特徴とされる内面に弧状沈線を配し外面には8図107と同じ刻目突帯を貼付している。大洞式土器と在地深鉢の折衷タイプである。141は浮線網状文土器である。外面には漆が厚く塗られている。口縁部は押圧文が巡り、胴部外面は幅広い沈線が施され筋節部は肥厚している。水Ⅰ式土器に先行するタイプで、搬入品である。

## ② 東日本系土器の検討

以上、東日本系の土器について見て来た。これらの他にも候補に上る土器は存在するが主なものを紹介した。出土状況から詳細な時期や共伴する在地土器を明確にすることはできないが、現状ではこれまで見てきた1C区IVD層～IVB層の土器群と時間的に併行関係を有し、一定の間隔をもって推移しているものと考えている。

近年、西日本各地で東日本系土器の出土例が数多く知られるようになり注目を集めている。石川氏、小林氏らによって集成され系譜や編年的位置付け、遠賀川式土器の成立や展開との関係などの研究が精力的に進められている。それらによると晩期前半までは近畿地方までとどまっていたものが、後半の大洞A1式段階にいたって腰を切ったように西方展開することが明らかとなっている。居徳遺跡の例は、このような動向の中で捉えられる現象である。そして小林・青樹氏の設定された第3・4段階に該当させることができよう（小林1999）。

これらの土器については、いくつかの特徴を挙げることができる。第一に量の多さである。図6-77・78も含めて17点を図示したがそれ以外も含めると30点以上は確認できる。四国でまとまった東日本系土器が出土しているのは徳島の三谷遺跡であるが、それをはるかに凌駕している。中四国、九州を含めて一つの遺跡からの出土数としては居徳遺跡が最も多い。これは当該期、居徳遺跡が東西交流の要衝的な位置を占めていたことを示している。今回は触れることができないが、土偶、冠石などいわゆる第二の道具の存在からも裏付けられよう。

第二に東日本系とした土器の中で138～140の複数の筒型土器や128に代表されるように北陸、三田谷文に見られるように山陰との共通点が多く見られること。中・四国で筒型土器の出土例は管見の限りでは居徳遺跡を除くとタテチョウ遺跡で底部が1例知られるのみである。

図6-77・78はすでに述べたように東北の優品の搬入土器であるが、同様の土器が北陸の波並西の上遺跡からも出土しており<sup>4</sup>、高知への搬入ルートを考える上で示唆的である。また蓋の多いことも北陸との関係が指摘されよう。したがって居徳遺跡の東日本系土器は大洞式土器も見られるが、北陸や山陰とのより密接な交流の中で登場したものである。このことは三谷遺跡や九州各地の事例（遠部2006）とも共通する現象である。

第三は在地の突帯文土器や遠賀川式土器との折衷タイプの存在である。すでに見たように130・131の刻目や外縁の範疇は遠賀川式土器からの影響であり、135の刻目突帯、特に142は象徴的な存在である。142は内傾接合であるが胎土は弥生土器化しており、大洞式土器と在地の晩期土器と遠賀川式土器の三者を体現した土器とができる。143・144もすでに触れたように南四国型土器の祖形との折衷タイプである。このような折衷タイプの存在は、彼我の土器の併行関係を求めることが可能とするものである。すなわち、142は胸部突帯から前期Ib期に、143・144は前期Ic期に編年されることから、大洞A1式と高知平野の前期Ib期が、大洞A2式が前期Ic期と併行関係にあることを示唆するものである。

第四に先に見た木葉文様の成立について触れておきたい。初現の木葉文の単位文が126～128の工字文風の単位文にあるとすれば大洞式A1式、すなわち前期Ib期には木葉文はまだ出現せず、Ic期以降に成立したことになろう。そして木葉文も東日本系土器との交流の結果成立した文様として位置付けることができる。

これらの東日本系土器は、大洞式A1式土器から同A2式土器の時間幅をもって推移しており、

搬入品と在地製作品の両者が見られる。当該期の搬入品の意味については「交換財」「贈答品」などの解釈がなされており、在地品については移住者が製作した可能性も指摘（浜田1997）されているが、当該期、東日本との密接な関係があったことの何よりの証である。

#### (6) 居德遺跡に見られる多重構造

以上1C区IVD層・IVB層出土の土器を中心見てきたが、ここで整理をしておきたい。IVD層は基本的に晩期上器のみで構成されており、IVB層において晩期土器と遠賀川式土器、東日本系土器が混在して出土している。晩期突帯文土器は屈曲一条突帯の瀬戸内型が多くを占めており、壺が定量的作ることや浅鉢の形態などから晩期後半期に位置付けることが可能で、沢田式にはほぼ併行関係を求めることができる。しかし詳細に見れば、口唇部刻みや二条突帯文などからIVD層→IVB層古相→IVB層新相へと漸進的な型式変化を確認することができる。そして独特的な形態や文様を持った壺の存在を強調しておきたい。

遠賀川式土器は、IVB層古相に登場し、IVB層新相へと共存して二重構造を保ちながら変遷するが、これはおよそ古相にIb期、新相にIc期の対応関係を求めることができる。したがって居德遺跡の遠賀川式土器は、後述する田村遺跡とは異なりすでに型式として完成されたものが持ち込まれたところから開始されており、伝播現象を示している。このような二重構造の遺跡を南四国で求めれば、県西部の入田遺跡（出原1993）や其同中山遺跡群（山崎1997）、仁淀川を挟んで対岸の八田神母木遺跡（久家1998）などを挙げることができる。何れも高知平野中央部から西に位置する遺跡であり東部には見られない。

東日本系土器は、一遺跡の出土量としては西日本では群を抜いて多いこと。大洞式土器とともに北陸や山陰からの搬入品や模倣形態が顕著であり、それらと在地土器との折衷形態も生み出されている。木葉文は、工字文風の単位文様が影響を与えて成立した可能性が多分にある。

このように居德遺跡の土器様相はさまざまな系譜の土器が共存し影響を与えながら複雑に展開をしている。そういう意味では多重構造と言るべきかもしれない。

## 2 弥生文化成立期の二相—田村タイプと居德タイプ

#### (1) 田村遺跡の概要

次に田村遺跡の前期前半の土器様相を紹介しながら居德遺跡との対比を通して弥生文化成立期の土器に見られる対照的な二相について検討する。田村遺跡の土器についてはすでに旧稿において何度か述べており重複する点の多いことを断っておかなければならぬが、居德遺跡の調査によって得ることのできた新たな知見や課題も浮上している。

田村遺跡は高知平野東部を潤す物部川右岸の扇状地や自然堤防上に立地する遺跡で居德遺跡とは直線距離にして20kmの地点にある。1980年代と1990年代に実施された二度の大規模調査によつて、西日本外帯における最大の拠点的集落であることが判明している。1次調査では弥生

文化成立期の集落の全貌を初めて明らかにすることができた。その内容は、堅穴住居10棟と掘立柱建物18棟からなる集落で堅穴住居の5棟はいわゆる松菊里型住居に属するものである（出原恵三1987）。この段階で大陸系磨製石器はほとんど全て揃っている。2次調査では前期初頭に継続する集落の調査がなされ、ここでも環濠をはじめ良好な集落関連の遺構や遺物を得ている。なお田村遺跡周辺において、現状では晚期突帯文期の遺跡は確認されていない。前期初頭に忽然と登場する遺跡である。土器編年は前期を大きくⅠ期（前半）とⅡ期（後半）に分け、前半をⅠa期～Ⅰd期、Ⅱ期をⅡa期・Ⅱb期に細分し都合6小期に編んでいる（出原2006）。前半の編年を居徳遺跡と対比して示したのが図11・12である。

## （2）田村遺跡と居徳遺跡の前期前半の土器

### ① Ⅰa期

遠賀川式土器の生成期として位置付けることができる。壺、壺、鉢、高杯、蓋から構成される。居徳遺跡のIVD層に時間的併行関係を求めることができると考えているが、縄文晚期土器を全く含まず、弥生土器のみで構成されている。製作手法は、朝鮮半島の無文土器に見られる粘土帯による外傾接合、分割成形が採用されており、器面調整もほとんど刷毛調整がなされるなど、土器製作を見る限りではすべて弥生文化に転換している。生成期の特徴は壺に最も象徴的に現れている。すなわち遠賀川式土器の壺（146・147）とともに口縁に刻目突帯を持つもの（△類148・149）や突帯の名残を見せる「口縁下端凸状壺」（D類150）（矢谷1995）などの存在であり、遠賀川式土器の壺：突帯文系壺：その他の壺がおよそ5：4：1の割合で存在している。まさに生成期の段階にあることを如実に示している。

この刻目突帯文系の壺について旧稿では、高知平野が晚期土器資料に恵まれていなかったこともあって、その系譜を単純に先行すると考えられる晩期の刻目突帯文深鉢に求めていた。しかし①居徳遺跡で明らかとなった刻目突帯文土器の特徴や②家根祥多氏（家根1993）、田端直彦氏（田端2000）の研究とも相まってその出自については再考を要する段階に至っている。A類とした刻目突帯を貼付する壺のうち8割がバケツ型であるが、①ではそのほとんどすべてが口縁部外反の瀬戸内型であり、中部瀬戸内の諸例を見てもバケツ型は極少であることが明らかとなっている。高知平野も瀬戸内型の広域分布内にあることは容易に想定される。であるならば、A類の系譜を単純に周辺地域の晩期土器に求めるには無理がある。②は、朝鮮半島の前期無文土器に求めるものである。これは田村遺跡での大陸系磨製石器の出現やその他の諸現象とも相まって検討に値する。しかしこのことについてここで深入りすることはできない。後日に期したい。

遠賀川式土器の壺は、417点中38点（9.1%）が段壺でその内の約半数の17点が段刻みを持つが先に挙げた「直線紋刻日段」は見られない。また焼成後に底部穿孔をするものが全体の2割近くを占めている。これも朝鮮半島の前期無文土器以来見られる特徴であり彼我の関係を示すも

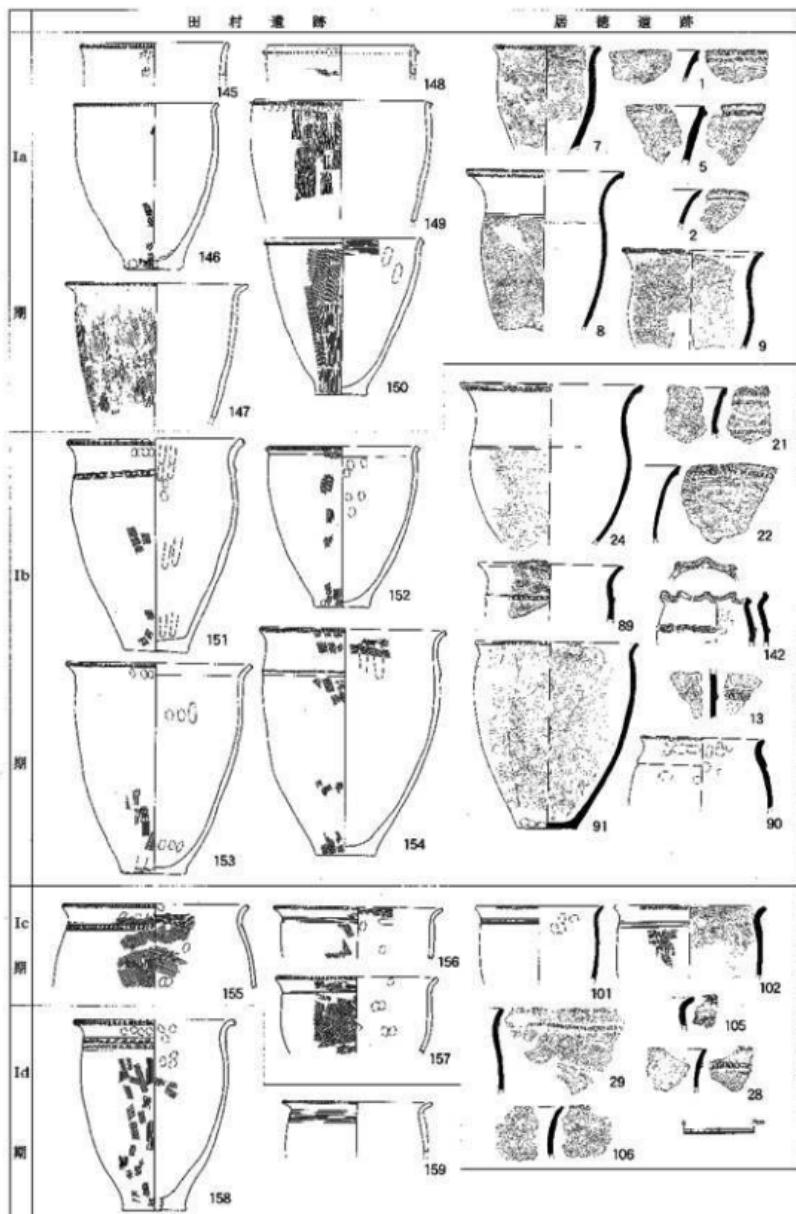


図11 前期Ⅰ期編年(表) 緊密面島が波施遺跡

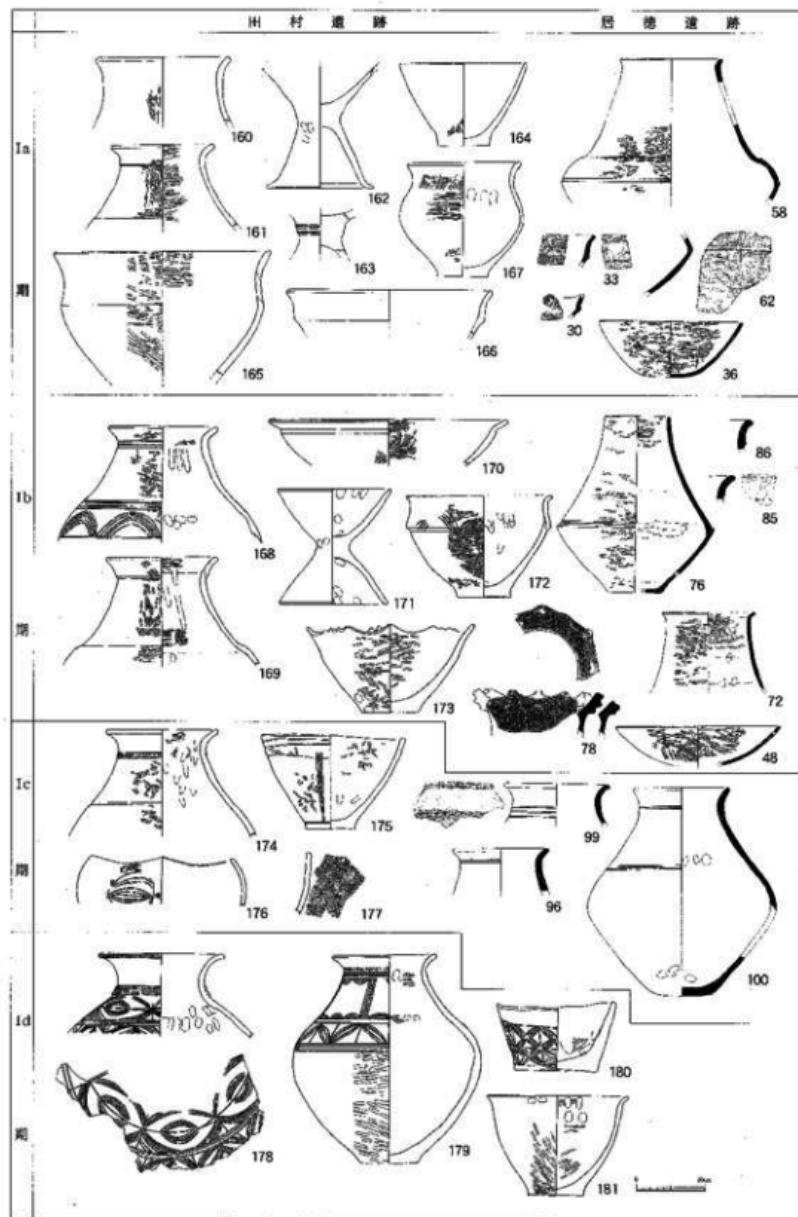


図12 前期Ⅰ期細年（壺・鉢・高杯） 断面図が岩徳遺跡

のと言えよう。壺は大・中・小型があり中型壺が多い。279点中の219点、約8割が有段部を持ち、ほとんどが粘土帶接合時に生じた段部である。文様を有する例は少なく重弧文や複線山形文を施文するものが極少数存在するのみである。焼成前丹塗り磨研を施す例が見られる。鉢は内渦気味に立ち上がる単純な器形が主流であるが、晩期に系譜を持つもの（165・166）なども見られバリエーションに富んでいる。166は居徳遺跡でIIA類とした33と形態的に一致している。高杯（162・163）は晩期以来の低脚のものが多い。

田村遺跡出土の松菊里型土器については、これまで包含層出土例（下村1986）を挙げていたが、新たに167を加えたい。167は松菊里型住居のピットから太形始刃石斧の未製品とともに出土したものである（出原1986）。口径に対して器高が低いことから「朝鮮無文土器との関係が考えられる土器」（出原2000）として位置付け、これまで松菊里型土器とすることに躊躇していたが、韓國的新豊遺跡などで類似例が確認できた（李・朴2005）。ただし本例は胎土等からみて搬入品ではなく在地製作されたものである。

### ② I b期

居徳遺跡のIVB層古朴に併行関係を求めることが出来る。Ia期集落の北400mの地点に営まれた集落遺構から主として出土している。刻目突帯文系の甕が激減し250点中231点、9割以上が遠賀川式の甕で占められる。特徴としては段甕がIa期よりも増加し3割近く（64点27.7%）を占め、段甕の盛行期を迎える。この中で31点、半分近くが刻目段を有し、Ia期には見られなかつた「直線紋刻目段」を持つ例が僅少ながら登場する。居徳遺跡では段甕の3割に「直線紋刻目段」が見られたことから、この段階に居徳遺跡からの影響によって生じたものと考えられる。また、居徳遺跡では二条突帯（21）と遠賀川式甕の折衷タイプである89が見られるが、田村遺跡にも同様の151が見られる。しかしこの段階、居徳遺跡では器面調整に刷毛目が見られるものは少なく、用いられてもナデ消されている。

壺（168・169）はIa期に較べてバリエーションが増加するが、有段口縁の例は約4割に減少する。文様を有する例は依然少ないもののIa期よりは増加しており特に胴部や頸部に沈線帯を有するものが多くなる。この時期まで大型壺が比較的多く見られる点は居徳遺跡と共通している。鉢はIa期とは異なり単純な器形のものが多くなるが、波状口縁を持った晩期系譜の173のような例が少數見られる。これも居徳遺跡との交流の結果生じたものである。Ib期は甕に典型的に現れているように遠賀川式土器が型式として確立した段階として位置付けられる。居徳遺跡にはこの段階に遠賀川式土器が伝播し、重構造が生じる。

### ③ I c期

居徳遺跡のIVB層新相に併行関係が求められる。甕はほとんど遠賀川式甕のみで占められる。少条沈線（156・157）が多く認められ、「内沈線間刻目」（155）が一般化する。口唇部が丸みを持ち刻目を全面に施文する例が主体を占める。居徳遺跡でも同様の現象が進行し、刷毛調整が

見られるなど遠賀川式壺を見る限りでは両者に殆ど違いを見出すことができない。

壺は有段のものが更に減少する。文様を施す例は更に増加し「両沈線間刻目」も見られる。これまでに見られなかった木葉文が初めて登場する。図示した177の他もう一例見られるが、両者とも無軸であり居徳遺跡で見た古相のタイプである(図9-120)。居徳遺跡で成立した木葉文がほぼ同じ時期に伝播したものと考えられる。ただすでに述べたように、当該期居徳遺跡では各種の木葉文が展開しているが、田村遺跡には無軸木葉文だけがもたらされたことになる。また176のような紡錘形の文様が見られるが、先に述べた単位文様でありこれも交流の結果得られたものであろう。

I c期は、各種文様から居徳遺跡と田村遺跡で最も交流が盛んに行われたことが窺われる。当該期は前期集落が最も拡大した時期であり、その背景にはこのような彼我の交流があったことも見逃すことのできない要因である。しかし居徳遺跡では、刻目突帯文土器が変化しながらも根強く残り図8-106・107に見られるような南四国型壺の祖形が作られているが出村遺跡では認められない。

#### ④ I d期

田村遺跡の前期拠点集落の終焉期であり、居徳遺跡ではこの時期の土器を様式として抽出することができない。壺は遠賀川式土器が主体を占めるが、I c期まで見られた段壺はほとんど消滅し、沈線文や列点文などの文様を持ったものが増加するとともに、II期以降の主体となる南四国型壺が僅少ながら登場する。壺にも変化が見られ文様を過度に施す例や頸部が直立したタイプが登場するなど遠賀川式土器からの承繼が窺われる。木葉文はこの時期に各種文様が描い多用される(178~180)。I d期を最後に田村遺跡の前期集落は散村へと再編成され遠賀川式土器も主役の座を居徳遺跡で譲成されていた南四国タイプに譲る。

#### (3) 田村遺跡I期の位置付け

以上前期前半の土器について居徳遺跡と比較しながら見て来た。I期各小期について他地域との併行関係についても旧稿で触れて来たところであるが改めて確認しておきたい。I a期は遠賀川式土器の生成期である。現状では田村遺跡以外では良好な資料をほとんど見出しえない。

I a期の特徴である突帶文系壺は周防灘沿岸の例(田畠2000)や山陰の「タテチョウ型」(藤尾1999)に類似する。前者の畠山C地点などの一群はほぼ併行関係にあると考えられるが、後者は、共伴する遠賀川式土器がI c期併行期であり本例より後出としなければならない。I b期は、西日本各地で最古の遠賀川式土器とされる一群と併行関係を求めることができる。北部九州の今川遺跡V字溝下層や雀居遺跡SK188、山陰の出雲原山式、岡山では高橋編年1-a期(高橋1983)、香川では下川津遺跡SH-1-01、近畿では讀良郡条里遺跡124上坑などが該当する。I c・I d期はおおよそ前期中葉に該当し遠賀川式土器が普遍的な広がりを示す時期である。

#### (4) 田村タイプと居徳タイプ

高知平野の弥生文化成立期にはその内容を大きく異なる二つの種類の遺跡が同時併存することが明らかになった。田村遺跡でIa期の弥生集落が成立した時期、居徳遺跡は突帯文土器単純期である。田村遺跡Ia期は、先に見た土器製作手法の転換や松菊里型住居、松菊里型土器、完成された大陸系磨製石器群（出原2008）、朝鮮半島産の石材による管玉（糸田他2008）などの存在から青銅器文化（松菊里型文化）の強い影響下に成立した最古の弥生集落として位置付けられる。この背景や前史には家根氏の言われるような朝鮮半島からの無文土器文化の流入と晩期文化の接触・交流のあったものと考えられる（家根1997）。このような接触は西北部九州から瀬戸内にいたる広い範囲で現象したが、それが最初に独自の弥生文化へと飛躍を遂げた地域は、Ia期を特徴づける弥生化した突帯文土器が分布し二重構造を示さない三郡山地以東から中部瀬戸内の中に求められる。その中で現状において質量共に最も良好な資料を示すことのできるのが田村遺跡Ia期である。

Ia期から居徳遺跡との交流はあったが、Ib期に至って交流は相互に進展し遠賀川式土器が居徳遺跡に本格的に伝播し、田村遺跡では晩期系の鉢や二条突帯深鉢、「沈線刻目段」などが登場する。Ic期は更に相互の融合が進み居徳遺跡では刷毛調整が一般化するなど田村遺跡と大差ない遠賀川式土器が製作されるようになり、田村遺跡では居徳遺跡で成立した木葉文が見られる。二重構造は継続しながらも遠賀川式土器の割合も増加していることが推定される。このように両者間の相互の影響によって初期の弥生文化は展開していくのである。

田村遺跡のように出発点から弥生土器単純の様相を示し晩期的な要素を受容しながらも二重構造をとらない集落を田村タイプ。晩期集落の伝統の中に遠賀川式土器が伝播し刻目突帯文土器との二重構造をとりながら変質していく集落を居徳タイプと呼称したい。弥生文化を生成したのは田村タイプであるが、初期の弥生文化の展開は両者の関係によって規定される。

#### (5) 繩文晩期文化ネットワークの形成と弥生文化の成立

田村遺跡においては、居徳遺跡で見られたような東日本系土器の搬入や模倣品は皆無である。これは両遺跡の関係のみならず、当該期の西日本社会の構造を知る上で極めて重要な現象である。すでに見たように弥生文化成立期に重なるように東日本系の土器が広く西日本各地に分布するが、小林氏は弥生前期前半の東日本系土器の出土について大景に出土する遺跡と少量出土の遺跡があるとし、前者については「遠賀川系土器を主体とする集落ではなく突帯文土器を主体とする遺跡に集中して東日本系土器が出土」するという指摘をしている。居徳遺跡はまさに前者に合致するが、その背景に「在地の繩文系弥生集団が何らかの理由で繩文的復古主義に回帰する戦略」があったとしている（小林1999）。この「戦略」の歴史的評価について直ちに答えを出すことは難しいが、西日本で東日本系土器を出す遺跡のほとんどが居徳タイプか晩期土器単純の遺跡に限られる。

かかる現象は当該期、西日本に縄文晩期文化の強固なネットワークが形成されていたことを意味するのではないか。その分布を巨視的に見れば、三谷遺跡、居徳遺跡は大量出土の遺跡であり、西に向かって大分においても出土遺跡が集中し福岡平野へと続く、あたかも終末期の青銅祭器のベルト地帯（出原1993）を勢揃させるような分布を示している。山陰でも最近注目されている智頭枕田遺跡や三田谷I遺跡など集中する遺跡が知られ、沿岸部にも出土遺跡が点在している。瀬戸内にも見られるが太平洋岸や山陰に比して出土數、遺跡ともに僅少である。筆者が弥生文化の生成地域として挙げた中・西部瀬戸内やその周辺を囲繞するような分布は何を意味するのか。まさに縄文晩期文化の強固なネットワークの形成に他ならない。このようなネットワークの連鎖の中に存在する遺跡は居徳タイプであって田村タイプが出現する余地はない。弥生文化は、連鎖の外すなわち・西部瀬戸内沿岸地域に生成の土壤があると見なければならぬ。

小林氏は、福岡平野を「最初の弥生文化の中核的最前線」（小林2007a）として「亀ヶ岡系土器が関与して板付1式土器が生まれた」（小林2007b）としている。確かに縄文から弥生への転換期に「日本列島を駆け抜けた縄文人がいた事実は、今後、弥生文化成立を再考する上で重要」（小林2007a）と考えられるが、板付遺跡や雀居遺跡など福岡平野の諸遺跡は土器の二重構造だけでなく東日本系や北陸系土器の存在からみても居徳タイプの典型例である。福岡平野は縄文晩期文化交流の太平洋沿岸ルートと山陰ルートの交点あり、むしろ縄文晩期文化ネットワークの「最前線」と言うべき位置にある。

旧稿でも触れたように、田村遺跡を含めて中・西部瀬戸内には、朝鮮半島との独自のネットワークが形成（山原2008）されており、松菊里型文化成立が飛躍の契機となって弥生文化を生成するに至ったと考える。

### 3 まとめ

弥生文化成立期の高知平野には、田村タイプと居徳タイプというその系譜を異にする対照的には二つの遺跡が存在し、相互に影響し合いながら弥生文化を形成発展させていることを述べた。

高知平野では、先ず田村遺跡前期Ia期に松菊里型文化の影響を強く受けた最古の弥生集落が成立するが、周辺部は居徳遺跡のように突唇文土器単純期の遺跡が存在していた。田村遺跡の成立と同時に縄文集落との交流が開始されるが、Ia期の段階、すなわち居徳遺跡IVD期には少量の土器が運ばれる程度で晩期社会に顕著な変化を与えることはない。弥生文化的な要素は晩期社会の中に埋没していたことが窺われる。Ib期になると相互に影響を受けるようになり、居徳遺跡では晩期土器の中に遠賀川式土器が持ち込まれ、土器の二重構造が見られるようになる。続くIc期は居徳遺跡の弥生化が一段と促進され田村遺跡との共通性が多く見られるようになる。東日本系土器の影響下に居徳遺跡で成立した木葉文や「岡沈線間刻目紋」が田村遺跡でも

採用されるなど両者の融合が図られる。田村遺跡の前期集落が最も大きくなるのはこの時期であり、相互交流の進展もその大きな要因であろう。この一連の過程は、弥生文化の形成過程を示すものであり相互の関係によって形成されていることは明らかである。

しかしながら居德遺跡に顕著に見られた東日本系土器は田村遺跡からは全く認められない。田村遺跡を素通りしないしは避けて居德遺跡に持ち込まれている。繰り返しになるが、新生弥生文化を誕生させた田村遺跡が、伝統的な晩期社会のネットワークに組み込まれていなかつことを意味している。これは弥生文化の成立と縄文社会との関係を知る上で極めて興味深い重要な現象である。居德タイプが遠賀川式土器と晩期土器との単なる二重構造だけに留まらない縄文晩期の伝統社会を体現しており、居德タイプの構造は新しい文化を吸収し変質させることはあっても決して新たな文化を創造する方向には作用しないのではないか。

このことは高知平野だけで見られる現象ではなく、弥生文化成立期の西日本に広く認められる二相である。これまで弥生文化の生成地として多くの研究者から支持してきた玄界灘沿岸地域は、朝鮮半島に近く大陸文化模倣の玄関としての地勢を得ておき弥生文化の発展の過程においては中心的な舞台であったことは贅言を要しない。しかしながら弥生文化の生成期においては、居德タイプの典型として存在していたことを見なければならない。弥生文化が田村タイプで生成されるとすれば、晩期ネットワークの境外にあって朝鮮半島との交流が行われていた三都山地から東の高知平野東部も含めた中部瀬戸内に求めなければならない。新たに蓄積されつつある知見を前に、従来の伝播論は再考しなければならない。新たな事実は、既成概念に従属させるのではなくそれを変革するためにこそ位置付けなければならない。今や弥生文化成立期の歴史像は再構築されなければならないのではないか。

#### 謝辞

本小論を執筆するにあたり、特に東日本系土器について石川日出志氏・高橋謙氏・中沢道彦氏・浜田竜彦氏・久川正弘氏から多くのご教示を受けました。厚くお礼申し上げます。

#### 注

- (1) 北部九州の刻目突帯文土器單純期に水田や大陸系磨製石器など弥生文化を構成する要素が伴うことは承知しているが、これらは弥生文化を構成する主要な要素ではあっても決定的な要素ではない。弥生文化はもっと総合的な内容を有するものとして理解する。それを表象する最も普遍的なものとして遠賀川式土器の成立に求めたい。遠賀川式土器が成立する弥生時代前期を弥生時代の始まりと考える。
- (2) 木葉文の種類や名称は深澤芳樹の呼称に従った（深澤1989）。
- (3) 石川県埋蔵文化財センターで実見し久川正弘氏にご教示いただいた。

## 参考文献

- 秋山浩三 2007『弥生人形農耕集落の研究』青木書店
- 岡木健児 1983「土佐考古学の諸問題」『高知の研究1 地質・考古編』清文堂 : pp.96-125
- 岡田憲一 2000「三田谷I遺跡出土土器文様をめぐる問題」『三田谷I遺跡Vol.3』島根県教育委員会
- 遠藤慎 2006「九州における縄文・弥生移行期の東日本系資料」『月刊考古学ジャーナル』NO.549 : pp.21-26
- 石川日出志 2000「突帯文期・遠賀川期の東日本系土器」『突帯文と遠賀川I土器特寄会論文刊行会 : pp.1221-1240
- 久家隆哉 1998「八田神母谷追跡」高知県文化財团埋蔵文化財センター
- 小林青樹 1999『考古学資料集9 縄文・弥生移行期の東日本系土器』国立歴史民俗博物館春成研究室
- 小林青樹 2007a「縄文から弥生への転換」「弥生時代はどう変わるか」学生社 : p.150
- 小林青樹 2007b「縄文社会の変容と弥生社会の形成」『考古学研究』第54巻2号考古学研究会 : pp.18-33
- 設楽博巳 2004「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』第20・21集合併号島根考古学会 : pp.189-210
- 設楽博巳・小林青樹 2007「板付I式土器成立における集ヶ岡系土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』雄山閣 : pp.66-107
- 下村公彦 1986「高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群」第2分冊高知県教育委員会 : 第149図20
- 曾我貞行 2001「考察」『居徳遺跡群I』高知県文化財団埋蔵文化財センター : pp.171-174
- 曾我貞行 2004「高知平野における突帯文土器の一様相」『考古論集』河瀬正利先生退官記念半業会編 : pp.223-230
- 高橋謙 1983「山陽」「弥生土器I」ニューサイエンス社 : pp.135-160
- 高橋謙 1986「遠賀川式土器の伝播」『弥生文化の研究9 弥生人の世界』雄山閣 : pp.34-44
- 高橋謙 1987「遠賀川式土器」「弥生文化の研究4 弥生土器II」雄山閣 : pp.7-16
- 田中清美 2000「河内潟周辺における弥生文化の着床過程」『突帯文と遠賀川』土器特寄会論文集刊行会 : pp.869-900
- 田畠直彦 2000「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突帯文と遠賀川』土器特寄会論文集刊行会 : pp.913-958
- 坪井清足 1971「縄文文化論」『日本歴史1』岩波書店 : pp.109-138
- 出原恵三 1986「高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群」第2分冊 : 第96図40
- 出原恵三 1987「初期農耕集落の構造」『考古学研究』第34巻3号考古学研究会 : pp.119-130
- 出原恵三 1993「弥生から古墳へ」『考古学研究』第40巻第2号考古学研究会 : pp.119-139
- 出原恵三 1994「四国西南部における弥生文化の成立」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 : pp.229-240
- 出原恵三 2000「四国における遠賀川式土器の成立」『突帯文と遠賀川』土器特寄会論文集刊行会 : pp.825-866
- 出原恵三 2003「〈南四国型〉の成立と背景」『縄文文化財論集』文化財学論集刊行会 : pp.77-86

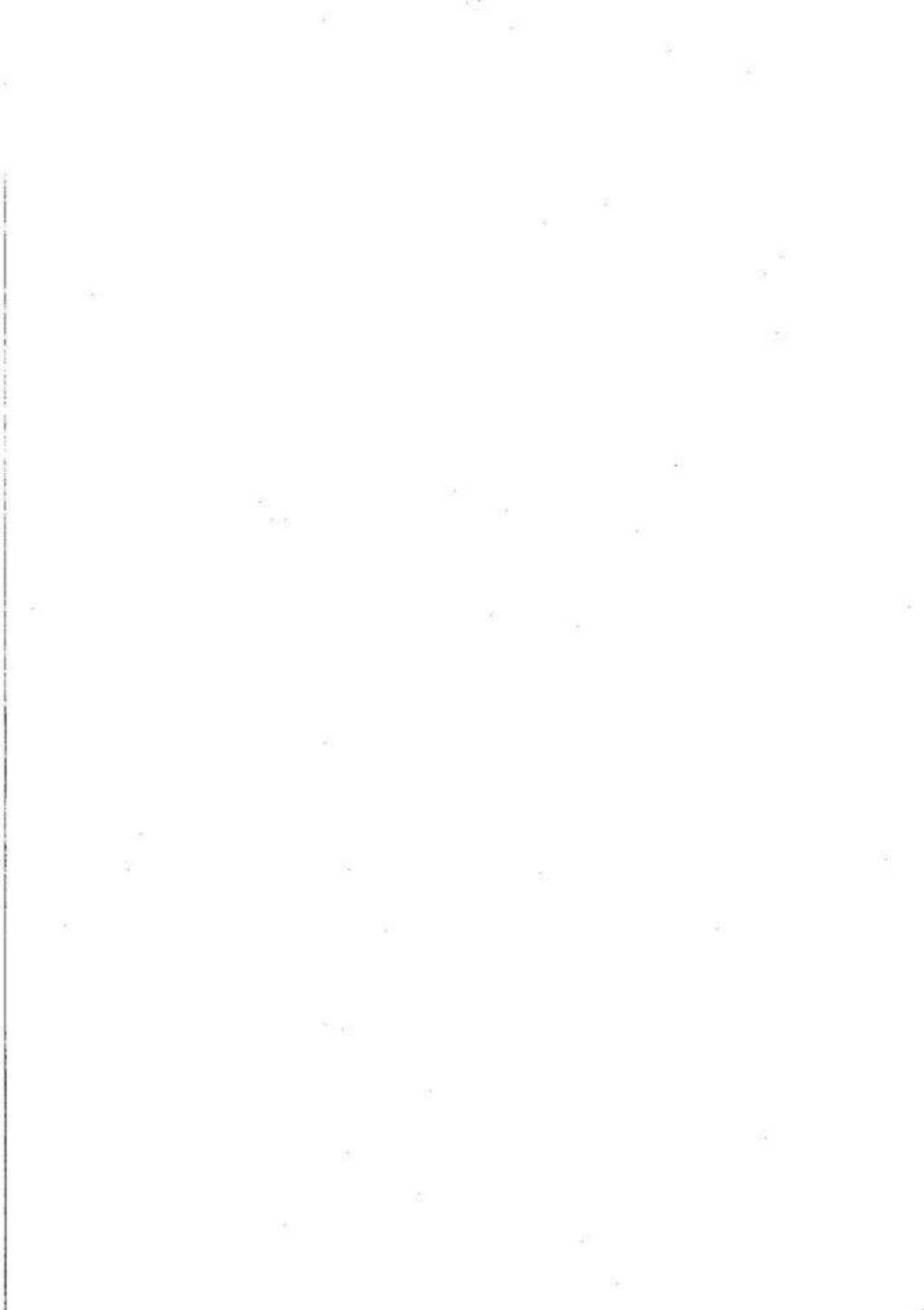
- 出原恵三 2005「弥生文化の成立と高知半島」『高知市史研究』第3分高知市企画調整課市史編さん室：pp.3-24
- 出原恵三 2006「弥生時代前期土器の編年」『田村遺跡群Ⅱ総論』第9分冊高知県文化財団埋蔵文化財センター：pp.137-169
- 出原恵三 2008「人體系磨製石器の成立－田村遺跡からの新知見」『古文化談叢』第55号九州古文化研究会：pp.1-24
- 中西靖人 1992「農耕文化の定着」『新版古代の日本Ⅴ近畿Ⅰ』角川書店：pp.93-118
- 中尾智行 2007「近畿最古の弥生集落」考古学研究会関西例会第145回研究会資料
- 中村豊 2006「四国地域の亀ヶ岡式土器」『月間考古学ジャーナル』NO.549：pp.17-20
- 瀬田章彦 1997「近畿地方における亀ヶ岡系土器の受容について」『滋賀考古』第17号滋賀県考古学研究会
- 平井勝 1996「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代古備』古代古備研究会：pp.22-37
- 平井勝 2000「遠賀川式土器について」『矢条文と遠賀川』土器持寄論文集刊行会：pp.930-909
- 平井泰男 1995「绳文時代後葉の土器について」『南溝手遺跡Ⅰ』岡山県文化財保護協会：pp.426-430
- 深沢芳樹 1989「木葉文と流水文」『考古学研究』第36巻3号考古学研究会：pp.39-66
- 深沢芳樹 2000「刻目段變のゆくえー前期弥生土器における広域編年試みー」『矢条文と遠賀川』土器持寄論文集刊行会：pp.983-99
- 藤尾慎一郎 1999「中・四国地方の弥生Ⅰ期突唇文形土器ー出雲市藤小路西遺跡出土土器の位置づけー」『藤小路西遺跡』島根県教育委員会：pp.251-259
- 藤尾慎一郎 2003「弥生変革期の考古学」同成社：pp.133-134
- 豆谷和之 1995「前期弥生土器出現」『古代』第99号早稲田大学考古学会：pp.50-56
- 家根洋多 1987「弥生土器の誕生と変貌」『季刊考古学』第19号雄山閣：pp.18-23
- 家根洋多 1993「遠賀川式土器の成立をめぐって－西日本における農耕社会の成立」『論苑考古学』天山社：pp.267-329
- 家根洋多 1977「朝鮮半島無文土器から弥生土器へ」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会：pp.39-64
- 山崎純男 1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鎌山翠先生古稀記念 古文化論叢』：pp.117-192
- 山崎正明 1997「小結 遺物について」『具同中山遺跡群Ⅰ』高知県文化財団埋蔵文化財センター：pp.74-77
- 葉科哲男・丹羽佑一・出原恵三・中村大介 2008「石器・玉類の原料産地分析(24)」日本文化財科学会第25回大会発表要旨

## 報告書

石川県教育委員会 1977『松任市良竹遺跡発掘調査報告』：第34回217

(別) 石川県埋蔵文化財センター 2001『松任市乾遺跡発掘調査報告書』

- 岡山県文化財保護協会『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』: pp.273-290
- 福岡県津屋崎町教育委員会 1981『今川遺跡』
- 香川県教育委員会 1990『下川津遺跡 第1分冊 (瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V)』
- 徳島市埋蔵文化財調査委員会 1997『三谷遺跡』
- 福岡市教育委員会 2005『下月隈C遺跡V』福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 1995『板付遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第410集: Fig.10-5
- 福岡市教育委員会 1995『雀居遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集
- 鳥取県智頭町 2008『智頭枕田遺跡 繩文の終焉』
- 愛媛県埋蔵文化財センター 1994『伊予今山遺跡X』
- 鳥取県教育委員会 1990『タテヨウ遺跡発掘調査報告III』
- 香川県文化財研究会 1993『林・坊城遺跡』
- 米子市教育文化事業団 2003『日久美遺跡IV』
- 李啖澈, 朴秀鉉 2005『長興 新魯遺跡1』(財)湖南文化財研究所 -그림사진-390頁  
著者: pp.128-130



## 2. 石器からみた弥生時代開始期の交流 —西日本太平洋沿岸地域を中心として—

寺前 直人

### はじめに

中国大陆や朝鮮半島の石器と日本列島の弥生式土器に伴う石器の共通性を最初に指摘したのは、鳥居龍藏であった（鳥居1908・1917）。続いて梅原末治は挿入柱状片刃石斧の分布が朝鮮半島と畿内、山陰、そして九州に認められることに注意を促した（梅原1922）。その後、資料の増加と比例して、研究は飛躍的に進展する。玄界灘沿岸の地から弥生時代開始期の土器とともに出土する石器の中には、朝鮮半島のそれと同石材、同形態のものが認められることから、半島から水稻農耕の伝播とともに伝播した「大陸系」磨製石器の製作や使用法が、この地から列島各地に伝播したことが実証的に論じられることとなった（下條1977ほか）。さらに石器の型式学的比較を通して、玄界灘沿岸地域と瀬戸内から大阪湾沿岸地域や日本海沿岸地域の関係がしだいに明らかになっていったのである。

一方、西日本の太平洋沿岸地域における石器のありかたは、発掘調査件数が少ないため日本海沿岸地域や瀬戸内回廊のそれと比べると長らく不明瞭であった。しかし、1980年代以降に進展した高知平野における大規模な発掘調査（高知県教育委員会1986・2004）、宮崎県都城市盆地における弥生時代早期に遡る水田の発見（都城市教育委員会2006）、あるいは和歌山県南部における弥生時代前期に遡る環濠集落の調査（御坊市教育委員会ほか2002）において、さまざまな石器が出土している。そこで、水稻農耕の伝播を論じるうえで、これまで重視されてこなかった太平洋沿岸地域の交流を、本稿では石器のありかたに注目して明らかにすることをめざす。具体的には南九州地域（宮崎県・鹿児島県）、西南四国地域（愛媛県南部・高知県）、紀伊半島南部（和歌山県・三重県南部）の弥生時代開始期における石器のありかたを整理したうえで、その特色と相互の影響関係に留意しながら、議論を進めていくこととする。なお、図1において本稿で言及する遺跡を示している。

### 1 南九州地域（鹿児島県・宮崎県）の様相

鹿児島県ならびに宮崎県の資料を対象とする。南九州の気候は北上する黒潮の影響を受け高温多湿である。地形的には原（ばる）とよばれる台地が多い。台地上は水源に乏しく、近代の開拓事業が進展する以前は島地として利用されていた。

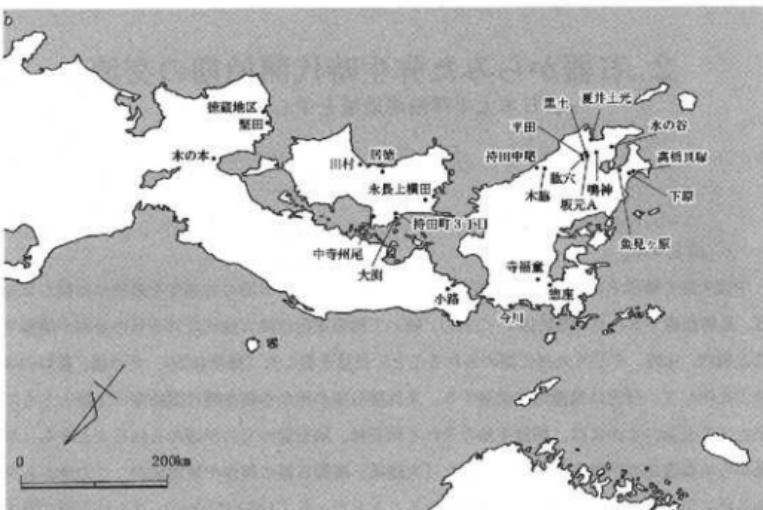


図1 本稿でとりあげる遺跡

## (1) 鹿児島県の様相

南九州地域における弥生時代開始期の石器としては、1960年代に調査された鹿児島県南さつま市高橋貝塚出土の石器群が著名である（河口1965）。薩摩半島西南、吹上浜に位置する当遺跡からは石製工具を中心とする外來系石器が出土しているが（図2-5・9～11）、層位的に弥生時代前期に断定できるものは多くない。両刃石斧（図2-6）は高橋I式と伴っていると報告されている。両刃石斧の平面形はバチ状を呈するものが多く、狭義の大型蛤刃石斧である下條信行による分類のA3型に属するものは認められない（下條1985）。柱状片刃石斧は6点が報告されており、うち3点に抉りが認められる。ただし、図2-9・10ともに横断面形は正方形に近い。10の前面側は丸みをおびている。いずれも北部九州地域にみられる初現期のそれと比べると、新しい属性を有する（下條1997）。なお、表土出土であるものの長身の磨製石鎌（図2-11）も前期に属する可能性が高い。

また、弥生時代前期あるいはそれ以前に遡る可能性のある磨製石庖丁が、南さつま市下原遺跡（彌榮2005：p.221、堂込2008：p.15）や鹿児島市魚見ヶ原遺跡において認められる。魚見ヶ原遺跡からは擦り切りによる穿孔が施されている磨製石庖丁（以下、擦切式磨製石庖丁とする）の可能性のある破片も出土している（堂込2000：p.208）。さらに図2-4のような扁平片刃石斧も出土している（鹿児島県立埋蔵文化財センター2007）。なお、当遺跡からは打製石鎌が製作途中品を含めて多数出土しているが、これらの素材は西北九州産サヌカイトであるとみられる。

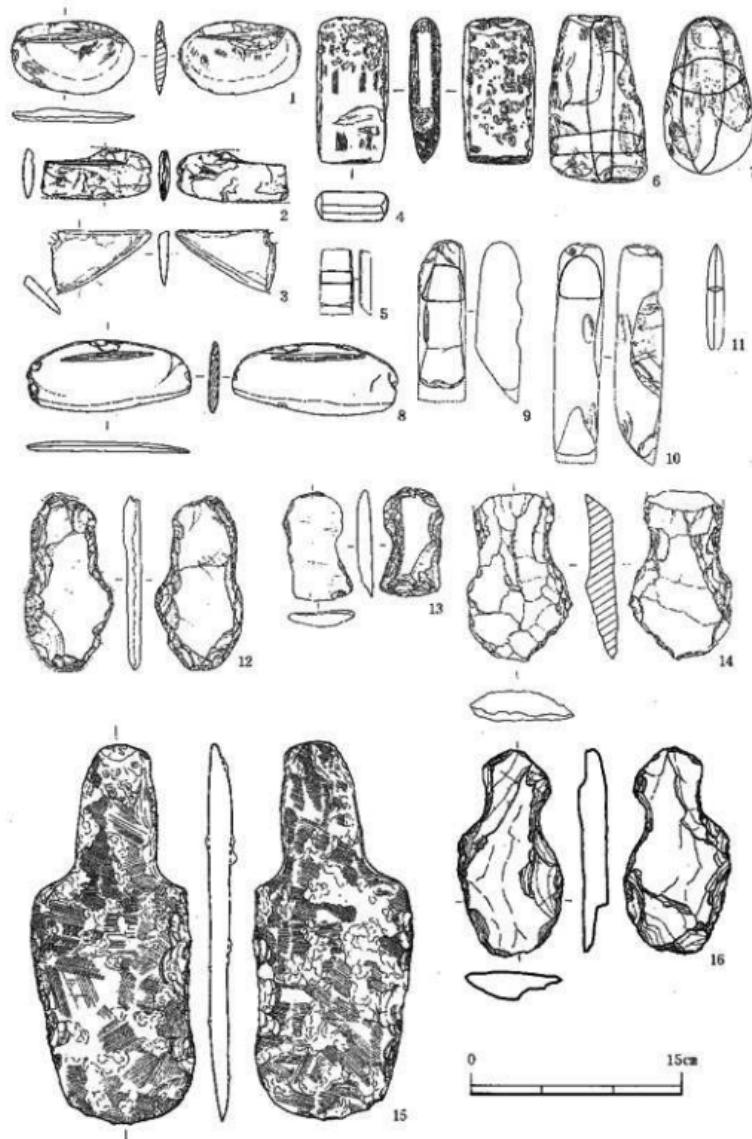


図2 南九州地域における赤土時代開始期の石器

1・14. 鹿穴(都城市) 2. 木屋(都城市) 3・12・13. 坂元A(都城市) 4. 魚見ヶ原(都城市)  
5~7・9~11. 高橋貝塚(高崎市) 8. 風上(都城市) 15・16. 平田(都城市)

さらに魚見ヶ原遺跡からは打製土掘具が81点出土している。打製土掘具とは打製石斧、打製石鎌とも呼称される縄文時代を代表する石器であり、いわゆる「縄文農耕論」とも関連して、さまざまな視点から研究が進められてきた。平面形はバチ形、短冊形、分離形などがある。側面からみると刃部が湾曲するものもみられ、棒の先に装着し、土掘具として用いられたと考えられている。南九州地域でも縄文時代後期中葉以降に打製土掘具が増加していくことが指摘されており（半井2008）、弥生時代中期まで普通的にみられる石器である（長井1996）。

大隅半島でも前期に遡りうる柱状片刃石斧が鹿屋市水の谷遺跡（山口2005）や志布志町夏井土光遺跡（小村2005）から出土している。当地域でも突帯文土器と共に打製土掘具が多数出土している。

## ② 宮崎県の様相

当地域の石器で目立つのは擦切式磨製石庖丁（図2-1・2・8）の存在である。南九州地域の磨製石庖丁あるいは擦切式磨製石庖丁については桑畠光博や長井宗重らによって集成、分析が進んでいる（桑畠1994、桑畠・栗山2008、長井2004）。磨製石庖丁の穿孔に擦り切りを用いる技法は朝鮮半島東南部にみられ（端野2008）、九州島では22点出土している（桑畠・栗山2008）。その分布は九州島西北部と、宮崎平野・都城盆地から鹿児島湾沿岸の南九州地域に偏っている。さらに前者の地域と宮崎県北部の事例は、平面が外湾刃半月形を呈するのに対して、都城盆地に位置する肱穴遺跡や黒土遺跡出土例（図2-1・8）はいずれも背面が屈曲する橢円形を呈するという地域差がうかがわれる。この要因として、桑畠は都城盆地において在來の横刃形石器の平面形を踏襲して擦切式が生産された可能性を指摘している（桑畠・栗山2008：p.110）。なお、宮崎県新富町木脇遺跡では、抉りを有する擦切式磨製石庖丁（図2-2）が出土しており、擦切式ではないものの前期に遡る磨製石庖丁は都城市坂元A遺跡からも出土している（図2-3）。

いわゆる大陸系磨製石器の出土は少なく散在的であり、磨製尖頭器類や磨製石斧類が確実にセットで認められるのは、いまのところ前期末から中期前半に属する宮崎県高鍋町持田中尾遺跡（高鍋町教育委員会1982）の段階である。むしろ、鹿児島県と同様、宮崎県でも弥生時代に属する土掘具の存在が目立つ。弥生時代早期に遡る水田遺構が検出された坂元A遺跡からも土掘具（図2-12・13）が出土している。また、図2-14～16のように刃部が拡張することにより、闊部をもつ有肩式が認められる。さらに有肩式のなかには、図2-15のように研磨が施されたものも存在する。同様の磨製土掘具は、鹿児島県曾於市鳴神遺跡において検出された夜臼式土器段階の石斧埋納遺構からも出土している（清水2005）。

## 2 西南四国地域の様相

佐田岬以南から室戸岬にかけての地域、愛媛県南予地域から高知県を西南四国地域とする。東は宇和海、南を土佐湾に面する太平洋に区分される。南予地域から足摺岬周辺まではリアス

式海岸が発達している。四万十川下流域の中村平野、物部川下流域の高知平野をのぞくと平野に乏しい。気候は南九州同様、黒潮の影響を受け温暖湿润である。

当地域における弥生時代開始期の石器を論じるうえでさけることができないのは、高知県南国市田村遺跡における状況である。田村遺跡を中心とする当地域の動向については、山原恵三により詳細に論じられている（山原1999・2005・2008）。以下、出原の検討を参考に当地域の状況を整理していきたい。なお、遠賀川式土器の成立を瀬戸内地域に求める出原は（出原2000：p.863）、田村遺跡の形成時期を板付I式段階に並行する時期に求める。

#### (1) 外来系石器の様相

**磨製石庖丁** 出原がIa段階とする前期初頭の段階には8点の磨製石庖丁が出土している。形態が判明したものは三角形あるいは外湾刃半月形を呈する。石材は玄界灘沿岸の初現期の磨製石庖丁に用いられる頁岩質砂岩と酷似しており、平面形とともに両刃のものが多い点も共通している（図3-1・4・5）。Ib段階以降、在地石材による生産が開始された後も、平面が三角形あるいは外湾刃半月形で、薄手、両刃といった特徴は踏襲される。なお、両刃の特徴は既に少条沈線が登場するIc・Id段階まで維持される。また、Ic段階には抉りを有する打製石庖丁（図3-2）も存在する。地域は異なるが愛媛県松山市大瀬遺跡（松山市教育委員会2000）でも弥生時代早期に遡る可能性のある抉りを有する石庖丁が出土している。

**磨製石斧類** 田村遺跡からは図3-6のような光沢のある柱状片刃石斧が出土している。全長19.7cm、幅3.5cm、厚さ5.0cmをはかる層灰岩製である。形態的には下條信行のB型式に相当する（下條1997）。下條によれば、ほかに愛媛県西予市永長上横田遺跡出土例がB型式に該当するという（下條2002）。扁平片刃石斧（図3-8）は、下條が設定したもっとも占い型式であるH1-1式に相当する（下條1996）。6と同様、石材は層灰岩であり、搬入品であるとみられる。両刃石斧には厚さ2cmにみたない在来系のものとともに、図3-7のような狭義の太型始刃石斧に分類できる石器が認められる。図3-7は全長19.0cm、幅8.3cm、厚さ5.0cmで重さ1350gをはかり、Ia期に属する。平行する側縁と肉厚の横断面形から、下條信行による磨製石斧分類（下條1985・1994）のA3型式に該当する。

田村遺跡の西方20kmに位置する高知県土佐市居德遺跡1C区でも突蒂文土器に少量の遠賀川式土器、そして搬入品とみられる大洞式土器を含むIV層から磨製石斧が出土している（高知県文化財埋蔵文化財センター2002）。柱状片刃石斧には搬入品がみられるが、扁平片刃石斧に確実な搬入品は認められない。伐採斧として使用されたとみられる両刃石斧の平面はバチ状を呈し、軽薄なものが多く、田村遺跡のような重厚な両刃石斧はみられない。

なお、南予地域に位置する愛媛県西予市永長上横田遺跡からもまとまった量の磨製石斧類が出土している。永長上横田遺跡は南予地域唯一の平地面積をはこる字和盆地に位置する。A3類に属する重厚な両刃石斧を含む両刃石斧5点以上と抉り柱状片刃石斧が出土している。弥生

時代前期前半から前期末段階の土器と共に伴したようである<sup>⑩</sup>。

**磨製石鎌** 次に磨製石鎌の様相をみていく。田村遺跡からは100点をこえる磨製石鎌が出土している。前期にかぎれば打製石鎌を凌駕する数の磨製石鎌が存在する。朝鮮半島南部でこそこのような状況はみられるが、日本列島で打製品を上回る磨製石鎌が出土しているのは田村遺跡のほかは福岡県福津市今川遺跡（津屋崎町教育委員会1981）があげられるのみである（出原2008：p.19）。また、磨製石鎌に独自の型式変化がみられるのも特徴である。出原恵三は当地域の磨製石鎌のうち前期に属するものを次の3型式、鎌身が平行する細身の有茎式を1類（図3-13・15・16）、幅が広く鋒近くに最大幅をもち主頭型の上半をもつ有茎式を2類（図3-10・12・14）、そして両者の中間的な形態を3類（図3-9・11）と分類した（出原1999：p.32・2008：p.11）。これらのうちもっとも幅広である2類の類例は、集落出土例としては福岡県今川遺跡（津屋崎町教育委員会1981）で3点、山口県小路遺跡（山口市教育委員会1988）で1点、愛媛県中寺町尾遺跡（愛媛県埋蔵文化財センター1989）で1点が出土している。また、埋葬施設に副葬された例としては、福岡県寺福童遺跡R10木棺墓（小郡市教育委員会2007）の1点と愛媛県持田町3丁目遺跡SK37（愛媛県埋蔵文化財センター1995）の1点があげられる。佐賀市惣座遺跡SC427（大和町教育委員会1986）から出土した例も、この型式に含めることができるかもしれない。いずれにせよ、集落出土例は周防灘沿岸地域に多い（出原2008：p.14）。このように類例が少ない形態の磨製石鎌が田村遺跡から10点近く出土している。

さらに鎌身部と茎部の屈曲が明瞭でなく、鎌身最大幅から下端までを直線的に形成した磨製石鎌（図3-13～16）も他では例をみない型式である。西日本の磨製石鎌は、関部の屈曲を維持しながらも扁平化が進展していく（寺前1999・2010）。それらと比べると、図3-13～16は関部が失われる一方で、茎の厚さが維持される点が、西日本の他地域とは異なる独自の型式変化であると評価できる。

## (2) 在来系石器の様相

次に外来系石器以外の石器の様相についてみていく。まず、興味深いのは大型直線刃石器と呼称されている石器（図3-21・22）の存在である。前期に属する造形より数多く出土している。扁平な砂岩の円錐を素材とし、打撃により扁平な板状剥片を作り出している。顕微鏡観察によりBタイプの使用光沢面が確認されたことから、イネ科植物の根刈りに用いられた可能性が指摘されている（小野ほか2006：p.272）。

居徳遺跡1C区IV層からは多数の土掘具（図3-17・18）が出土している（高知県文化財団埋蔵文化財センター2002）。多くは打製品であるが部分的に研磨が施された可能性のある資料も散見され、図3-18のような有肩式とみられる資料も存在する。田村遺跡からも打製土掘具は検出されている（図3-19・20）。これらのうち図3-18の形状は、先述の南九州地域の上掘具のそれとの共通性をみいだすこと也可能かもしれない。ただし、瀬戸内側の四国島でも、弥生時代前期

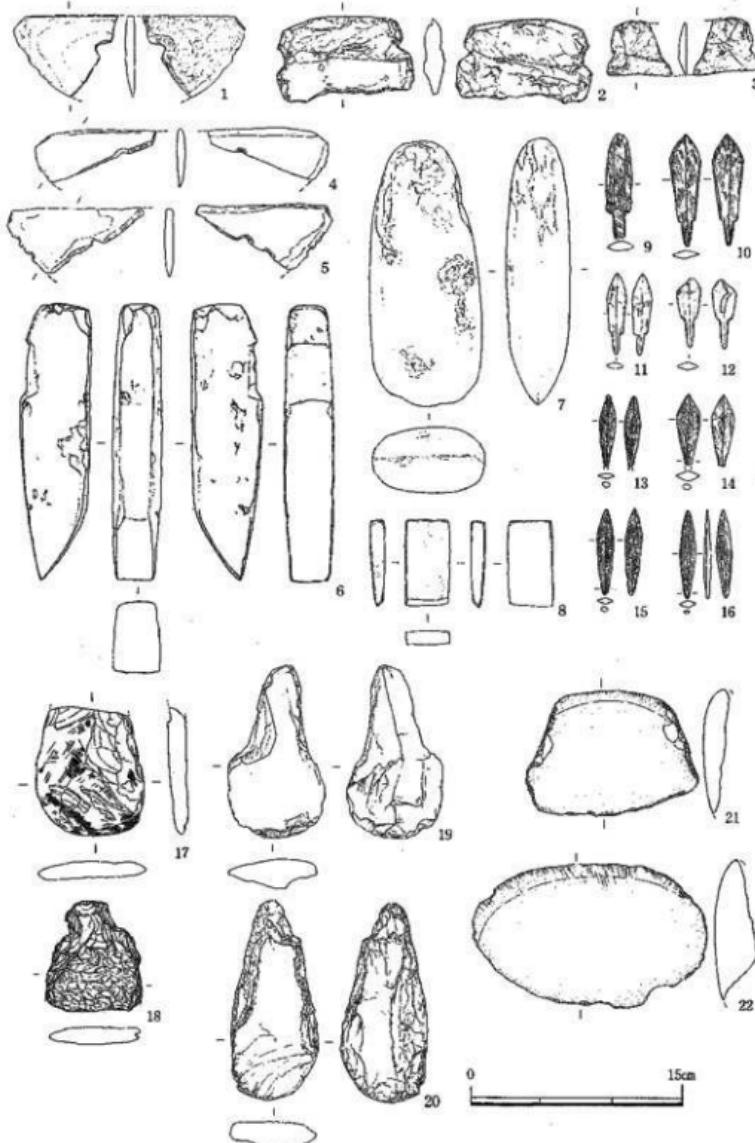


図3 南西四国地域における弥生時代開始期の石器  
1~16・19~22、田村（高岡市） 17・18、尼徳（土佐市）

にはあらたにバチ状の打製土器が出現することが指摘されている（信重2000：p.102）。現状では太平洋側の事例が先行する可能性もあるが今後検証が必要であろう。なお、出原恵三は当遺跡において四国島で唯一、孔列土器が山上していることに注目している（出原2005：pp.19～21）。居留遺跡出土の孔列土器は、半貫通のものが多数を占め、外側から穿孔されているものばかりであった。片岡宏二の2b類や4類が多い（片岡1999）。これらのうち4類の分布は宮崎県と鹿児島県に偏在することから（片岡1999：p.40）。出原は南九州地域と当地域の交流を想定している。

また、用途は不明なものの田村遺跡I-C期に属するST415とST421、そしてST412からチャート製の石錐や楔を含む多数の剥片類が出土している。

### 3 紀伊半島南部の様相

ここで紀伊半島南部とするのは、和歌山県および伊勢志摩以南の三重県とする。ただし、後者の地域においては該当期の資料がほとんどみあたらない。当地域の沿岸は温暖な太平洋側気候であり、南東部の熊野灘沿岸地域は日本でもっとも年間降水量の多い地域である。中央構造線と平行する紀ノ川下流域の和歌山平野をのぞくと平野は少なく、急な傾斜の山地が海岸線まで迫っている地域が多い。

まず、紀伊半島南部における弥生時代開始期の集落としては日高川下流の和歌山県御坊市堅田遺跡があげられる（御坊市教育委員会2002）。畿内地域における土器編年上、前期古段階に相当する変形土器もみられるものの、主体となる古い型式は三条沈線が施された變形土器であることから前期中段階以降に盛行期をむかえる集落である。

#### (1) 外来系石器の様相

**磨製石庖丁** 堅田遺跡から12点が出土している。片岩製が主体であるが凝灰岩系の石材を利用したものも少数みられる。刃部形態は片刃が主体となる（図4-1～4）。西日本における初現期の磨製石庖丁を整理した上田健太郎によれば、東北部九州以東の瀬戸内沿岸地域では磨製石庖丁の出現当初から、片刃あるいは偏刃両刃が主体であり、両刃が主体を占める北部九州地域とは異なるという（上田2005：p.155）。上田の指摘をふまえれば、片刃が目立つ当遺跡の磨製石庖丁の系譜は、前期中段階並行まで両刃が主体であった西南四国地域ではなく、大阪湾沿岸地域に系譜をもつと推定できる。

**磨製石斧類** 柱状片刃石斧は2点認められる。図4-8は十坑1921から出土した完形の資料である。全長20.1cm、厚さ5.4cm、幅3.0cm、重量553gをはかる。明瞭な抉部を有するものの、横断面形をみると前主面側の稜はあまく、やや丸みをおびる点や基部が斜行する点は、先述の田村遺跡出土例（図3-6）より後出する属性が目立つ。扁平片刃石斧（図4-7）も数点認められるが、いずれも下條分類のH1-2式以降とみられる（下條1996）。磨製両刃石斧には在来系

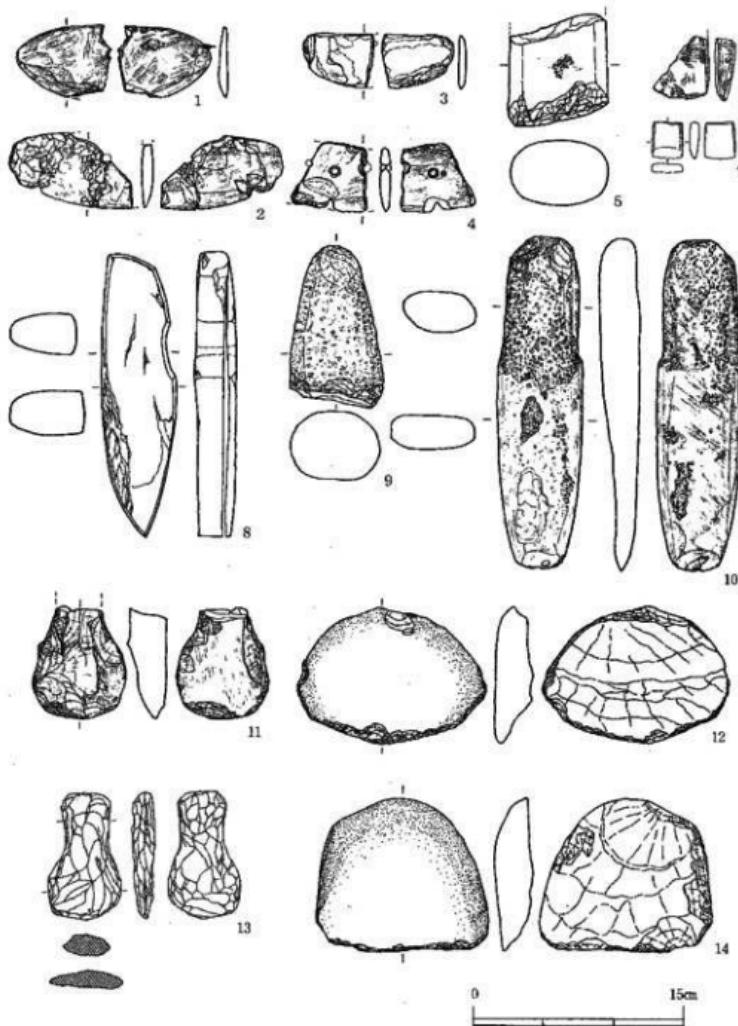


図4 紀伊半島南部における弥生時代開始期の石器

1~12~14. 堂内遺跡(那智市) 13. 鮎森地区(南丹町)

の定角式（図4-6）や乳棒状磨製石斧（図4-9）が認められる。一方で、A3型式に属する破片（図4-5）が、堅穴式住居356より四条以上の沈線を有する土器片とともに出土している。A3型式は環濠出土資料にも認められる。これらのありかたは先述の田村遺跡にみられる状況と類似しているが、中部瀬戸内地域のそれとも共通している（寺前2001）。

なお、田村遺跡や居籠遺跡でみられた磨製石鎌は、当地域において1点も出土していない。

## ② 在来系石器の様相

堅田遺跡の自然流路1568からは、バチ状を呈する泥岩製の打製土掘具（図4-11）が検出されており、摩耗状況から横斧状の使用が想定されている。刃部が拡張する打製土掘具は、堅田遺跡の南東約20kmに位置するみなべ町徳蔵地区遺跡からも出土している（和歌山県文化財センター2005）。図4-13は弥生時代後期末の溝21から検出されているが、周囲からは大型粗製石棒や突帯文土器、ごく少量ではあるが削り出し突帶を有する壺形土器が出土している。

また、磨製石斧と報告されている図4-10のような石器の存在にも注意が必要である。堅田遺跡の環濠2-a上層より出土した図4-10は全長23.5cm、幅6.1cm、重量630gをはかる完形の片岩製である。基部付近の厚さは3cmをはかるが、刃部付近では厚さ1.5cm程度となり、刃部付近が反りを有する他に類例をみない特殊な「石斧」である。ただし、基部から刃部がわずかながら拡張する点、側面からみると反りを有する点は南九州地域にみられた有肩式の磨製土掘具（図2-15）と共に通しており、何らかの関係が想定できるかもしれない。

また、堅田遺跡からは縄文時代に盛行する多頭石斧が出土している（江塚2005）。同様の資料はほぼ同時期の大坂府八尾市木の本遺跡（大阪府教育委員会2004：p.137）に認められる。さらに堅田遺跡からはチャート製石鎌が1000点以上出土している。とくに堅穴住居683からはチャート剥片や石核とともに集中して検出されている。用途は不明であるが、田村遺跡における状況ときわめて類似している。さらに報告書において粗製剥片石器と呼称される砂岩製石器（図4-12・13）の存在も興味深い。第1環濠埋土を中心に35点出土している。片面に自然面を残すのが特徴的な一群であり、凹縫から打撃により、素材剥片を獲得しているとみられる。一部に対して金属顕微鏡による使用痕分析が実施されており、AとBタイプの使用痕光沢が観察されている。使用痕のありかたを含めて、高知県田村遺跡出土の大型直線刃石器（図3-21・22）と同じ器種であると判断できる<sup>④</sup>。

なお、堅田遺跡からは175点のサヌカイト製品が出土している。これらは肉眼観察に基づき5種類に区分されている（池谷2002：p.163）。これらのうち29点については蛍光X線による原産地分析が実施されており、肉眼観察によりサヌカイト1とされた資料6点中4点が香川県に産出する金山サヌカイトであると指摘されている。サヌカイト1は175点中132点を占めていることから、当遺跡で用いられたサヌカイトの半数以上が讃岐地域からもたらされた可能性が高い。

最後に土器のありかたについても概観しておきたい。まず、搬入土器としては胎土に結晶片

岩を含むことから紀北地域産の土器とみられるものがもっと多く、角閃石を含む河内地域の生駒西麓帯とみられる土器も認められる。また、金雲母を含む胎土の特徴や施文から伊勢地方産の壺や壺形土器、水神平式併行期の三河西岸地域産とみられる条痕文土器が、東日本からの搬入土器であるとみられる。このような状況をふまえて、久貝健は堅田遺跡に環瀬戸内圏と東海圏を結ぶ太平洋ルート中継港という意義をみいだしている(久貝2002:p.244)。すでに柴垣勇夫や設楽博己などによって、縫面線刻表現の分布が、東海地方と瀬戸内地域に偏在し、いわゆる畿内地域を空白地とすることが指摘されている(柴垣1989、設楽1990)。本稿では紀伊半島以東の太平洋ルートの問題について論じることはできないが、縫文系意匠ともいえる縫面表現の分布は、可耕地の乏しい紀伊半島沿岸を介して文化を伝達した人々の動向を探るうえで大きな手がかりであるといえよう。なお、堅田遺跡から南四国形の壺や壺形土器が出土していることが、出原恵三により指摘されている(出原2002:p.23)。

#### 4 まとめ

三地域とも時期や量的差違はあるものの、弥生時代開始期に外來系石器の伝播が認められた。ただし、地域ごとに異なる器種に特化した受容、あるいは特定器種の欠如が認められ、そのありかたは三者三様であった。南九州地方では外來系の磨製石器の受容は低調であるが、他地域にはまれな擦切式磨製石砲丁が目立ち、都城盆地では梢円形を主とする独自の型式が認められた。西南四国地域では高知平野の田村遺跡を中心に外來系の磨製石器のセットでの受容が明瞭であった。とくに打製石器を凌駕する量の磨製石器が使用されており、北部九州地域とも瀬戸内海沿岸地域とも異なる独自の型式変化をとげる。一方、紀伊半島南部では磨製石器をはじめとする武器形石器は全く認められず、磨製石斧頭を中心とする外來系磨製石器の受容がみられた。このようなありかたは中部瀬戸内地域から大阪湾沿岸地域の弥生時代前期前半にみられる傾向と一致する(寺前2001・2010)。堅田遺跡においてサヌカイト製品の多くに金山サヌカイトが用いられている点や片刃の磨製石砲丁が主体であること、この想定と矛盾しない。以上の検討をふまえるならば、太平洋沿岸各地に外來系石器の受容は確認できるものの、黒潮ルートを介して相互に共通する器種や型式が出現した様相は認めないと判断できるのである。

ただし、外來系石器以外の石器には次のような共通性が認められる。まず、西南四国地域と紀伊半島南部地域、具体的には田村遺跡と堅田遺跡ではチャート製石錐の大量生産と大型直線刃石器の存在が共通している。前者の用途は不明であるが、金屬顕微鏡による観察の結果、いずれの地域の後者にもイネ科植物に対する使用が推定されている。

農具としての用途が想定できる石器としては十掘具の存在も重要である。南九州地域では、整った導水施設をもたない水田が検出された坂元A遺跡や、乾燥した緩斜面での陸稲栽培が想定される宮崎県都城市黒十遺跡から有肩式土掘具が出土している。そして、南九州地域に多く

みられる孔列土器4類（片岡1999）が出土している高知県土佐市居徳遺跡において、形態に共通性が指摘できる石器（図3-18）が出土している。時期的に近いとはいえ、直線距離にして300kmをはかる地域間の資料を直接的に結びつけることは慎重にならざるをえないが、和歌山県の堅田遺跡出土例（図4-11）や徳蔵地区遺跡出土例（図4-13）などを含めて、今後検討が必要である。

ここで重要なのは太平洋沿岸諸地域の弥生時代開始期の集落石器で共通する器種が、いずれも在来の伝統をひく石器であり、いわゆる「大陸系」磨製石器と比べると非定型的で製作が簡易な点である。つまり、黒潮ルート沿いに西日本を広域に移動した「集団」は、「磨製石窓」などの定型的な収穫具や工具を重視しない、あるいは使用しない人々であった可能性がある。具体的には高知県居徳遺跡のような集落を営んだ人々が想定できるかもしれない。ただし、このことは、彼らが非稻作民であることを意味するわけではない。なぜなら、坂元A遺跡などでみられる段丘崖下の湧水を用水とする開拓谷立地の水田は、地形的制約から水田域の拡大に限界がある一方で（桑畠2008）、導水と排水に大規模な施設を必要としないことから、薩摩同様、水利施設を伴う水田と比べると労働力の投入が小規模ですむ可能性がある。つまり、坂元A遺跡で稲作を開始した人々は既存の利器を用いつつ最小限の労働力投入で稲作を受容したのである。

以上の分析の結果、弥生時代開始期において典型的な「大陸系」磨製石器を必ずしも保有しないながらも稲作を生業に取り入れ、太平洋沿岸を往来した集団の存在が浮かび上がってきた。彼らが、東日本への水稻をはじめとする生産の伝播や受容に果たした役割について、今後は検討を進めていきたい。

#### 註

- (1) 永長上横田遺跡出土資料の実見に際しては、西予市教育委員会の高木邦宏氏・児玉洋志氏および下條信行氏、村上恭通氏、吉田広氏のご教示とご配慮を賜った。記して感謝します。
- (2) この資料の重要性は、愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人氏にご教示いただいた。記して感謝します。

#### 参考文献

- 池谷勝典 2002 「石器」「堅田遺跡」御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会
- 上田健太郎 2005 「近畿地方における直線刃半月形石刀丁の成立」『待兼山考古学論集』都山比呂志先生退任記念、大阪大学考古学研究室
- 梅原末治 1922 「鳥取歴史蹟勝跡調査報告書」第1回 鳥取懸下に於ける有史以前の遺跡、鳥取県教育委員会
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989 「中寺州尾遺跡」『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 墓葬
- 文化財発掘調査報告書第31集
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995 「持田町3丁目遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第58集

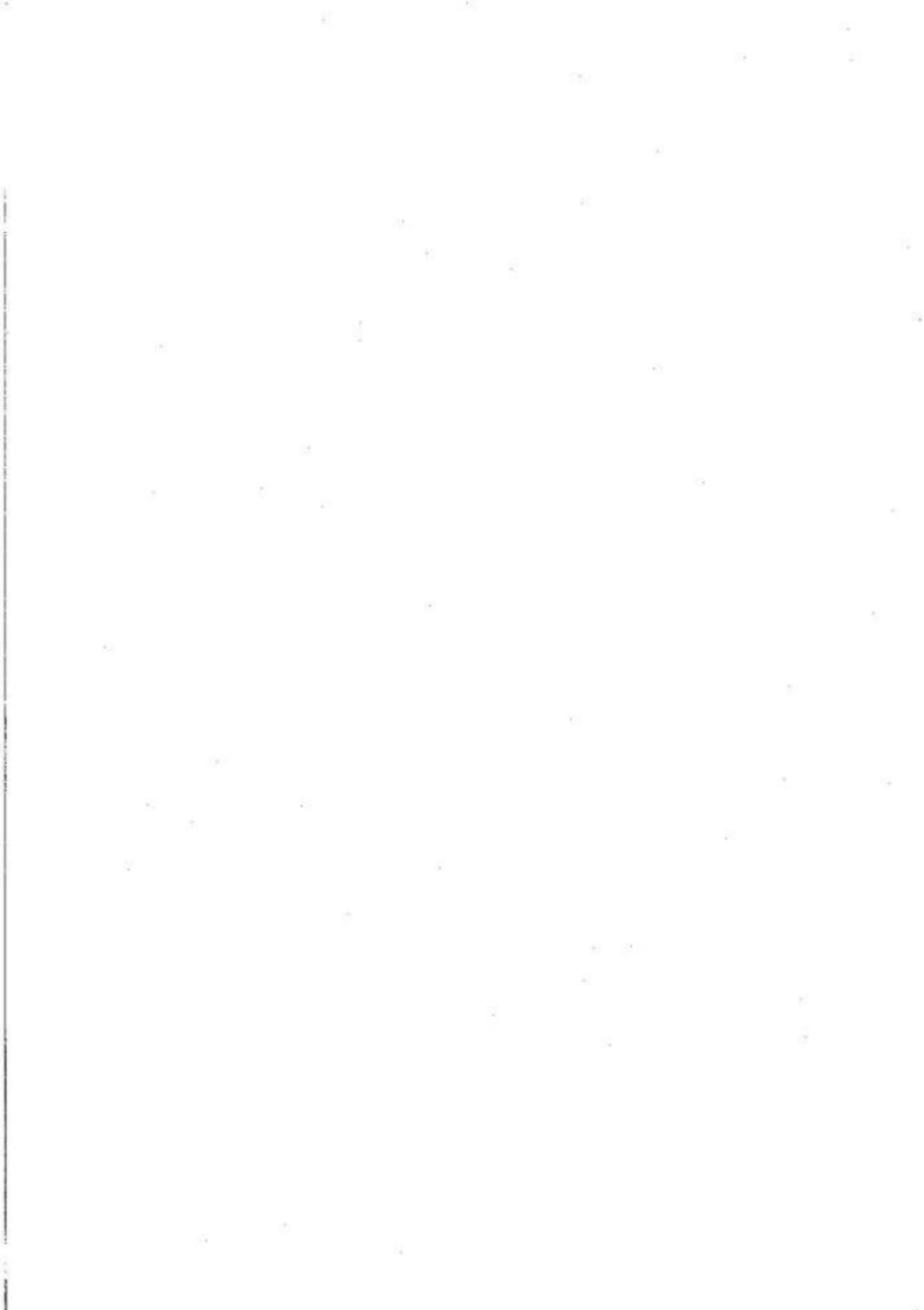
- 大阪府教育委員会 2004『木の本遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告書第2003-2
- 小都市教育委員会 2007『寺福堂遺跡』5小郡市文化財調査報告書第208集
- 小野由香・小島恵子・畠中宏一・前田光雄 2006『弥生時代の石器・石製品』『田村遺跡群』Ⅱ高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集、高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『魚見ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第111
- 片岡宏一 1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版
- 河口貞徳 1965『鹿児島県高横貝塚』『考古学雑誌』第3巻第2号、東京考古学会
- 久貝 健 2002『まとめ』『堅田遺跡』御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会
- 桑畠光博 1994『擦り切り孔をもつ石庖丁』『大河』第5号、大河同人
- 桑畠光博 2008『シラス地帯に根づいた弥生農耕—南九州の水田と畑について—』『2006年度共同研究成果報告書』大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館・大阪府文化財センター
- 桑畠光博・奥山葉子 2008『都城盆地における擦り切り穿孔をもつ石庖丁について—付 九州出土の擦り切り穿孔をもつ石庖丁集成—』『南部九州における水稲農耕受容期の様相—西日本における他地域との比較を通して—』平成20年度宮崎考古学会研究会資料集、宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 奉泉満夫 2008『西日本における打製石斧の出現』『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集、下條信行先生退任記念事業会
- 高知県教育委員会 1986『田村遺跡群』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『居德遺跡』Ⅲ高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第69集
- 高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『田村遺跡群』Ⅱ
- 小村美義 2005『井戸土光遺跡』先史・古代の鹿児島』資料編、鹿児島県教育委員会
- 御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会 2002『堅田遺跡』弥生時代前期集落の調査
- 設楽博巳 1990『縄刻人面土器とその周辺』『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集、国立歴史民俗博物館
- 柴垣勇夫 1989『弥生土器から土師器にみられる絵画土器について』『愛知県陶磁資料館研究紀要』8
- 清水周作 2005『鳴神遺跡』『先史・古代の鹿児島』資料編、鹿児島県教育委員会
- 下條信行 1977『九州における大謙系磨製石器の生成と展開—石器の組合・型式の連続性と文化圈の設定—』『史蹟』114、九州大学文学部
- 下條信行 1985『伐採石斧』『弥生文化の研究』5道具と技術Ⅰ、雄山閣
- 下條信行 1994『弥生時代・人頭系磨製石器の縄年縦の作製と地域間の比較研究』平成5年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書
- 下條信行 1996『扁平片刃石斧について』『愛媛大学人文学会創立20周年記念論集』愛媛大学人文学会
- 下條信行 1997『柱状片刃石斧について』『古文化談叢』伊達先生古稀記念論集、伊達先生古稀記念論集編集委員会

- 下條信行 2002「片刃石斧の型式関係から見た初期縄作期の韓日関係の展開について」『清済史学』16・17合輯、清済史学会
- 高鍋町教育委員会 1982『持田中尾遺跡』高鍋町文化財調査報告書
- 津屋崎町教育委員会 1981『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第4集
- 長津宗重 1996「宮崎県の石器組成の変遷：『農耕開始期の石器組成』2九州、国立歴史民俗博物館
- 長津宗重 2004「日向における石臼丁の変遷」「西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究」平成14～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究C）(1)
- 山原恵三 1999「南四国の石器－弥生時代の磨製石器を中心として－」『古代吉備』21集、古代吉備研究会
- 山原恵三 2000「四国における達賀川式土器の成立」『突厥文と道賀川』土器特寄会論文集刊行会
- 山原恵三 2002「黒潮沿岸地域の交流と南四国」「田辺昭三先生古稀記念論文集」田辺昭三先生古稀記念の会
- 山原恵三 2005「弥生文化の成立と高知平野」「高知市史研究』第3号
- 山原恵三 2008「弥生文化成立期の大肱系磨製石器－田村遺跡からの新視点－」「古文化談叢』第60集
- 山原恵三 2009「南国・土佐から問う弥生時代像・田村遺跡」シリーズ遺跡を学ぶ060、新泉社
- 寺前直人 1999「近畿地方の磨製石器にみる地域間交流とその背景」「国家形成期の考古学」大阪大学考古学研究室10周年記念論集、大阪大学考古学研究室
- 寺前直人 2001「弥生時代開始期における磨製石斧の変遷－中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域を中心として－」「古文化談叢』第46集
- 寺前直人 2010【刊行予定】『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 堂込秀人 2000「南九州における弥生文化成立期の具体像」「各地域における弥生文化成立期における具体像」発表要旨集、埋蔵文化財研究会
- 堂込秀人 2005「施鬼島県の石器からみた弥生時代の様相」「考古論集」川越哲志先生退官記念論文集、川越哲志先生退官記念事業会
- 堂込秀人 2008「鹿児島県における水稻農耕受容期の様相」「南部九州における水稻農耕受容期の様相－西日本における他地域との比較を通して－」平成20年度宮崎考古学公研究会資料集、宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 戸塚洋輔 2005「環状石斧頭の系譜と編年」「浜松市博物館報』第17号、浜松市博物館
- 鳥居龍藏 1908「潤州の石器時代遺跡と朝鮮の石器時代遺跡との関係に就いて」『東京人類学会雑誌』262、東京人類学会
- 鳥居龍藏 1917「畿内の石器時代に就いて」「人類学雑誌』32-9
- 信里芳紀 2000「北四国における弥生文化の成立－讃岐地方を中心として－」「弥生文化の成立」各地域における弥生文化成立期の具体像発表要旨集、埋蔵文化財研究会
- 端野晋平 2008「計測的・非計測的属性と型式を通じた石臼丁の検討－紀半島南部と北部九州を素材として－」「日本考古学』第26号

松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 2000『大割遺跡』1・2次調査  
 都城市教育委員会 2000『横市地区遺跡群』都城市文化財調査報告書第50集  
 都城市教育委員会 2006『坂元A遺跡・坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書第71集  
 都城市教育委員会 2008『平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第87集  
 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『木底遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第43集  
 篠原久志 2005『下原遺跡』『先史・古代の鹿児島』資料編、鹿児島県教育委員会  
 山口市教育委員会 1988『小路遺跡』  
 山口俊博 2005『水の谷遺跡』『先史・古代の鹿児島』資料編、鹿児島県教育委員会  
 大和町教育委員会 1986『惣座遺跡』文化財調査報告書第3集  
 和歌山県文化財センター 2005『徳藏地区遺跡』

#### 博図出典

- 図2 1. 都城市教育委員会2000:20頁図14-1 2. 桑畠・栗山2008:104頁図1-14 3. 都城市教育委員会2006:47頁図37-91 4. 鹿児島県立埋蔵文化財センター2007:75頁図61-S 182 5~7・9~11:河口1965:99頁図15-3(5)・100頁図16-13(6)・14(7)・99頁図15-1(9)・8(10)・101頁図17-34(11) 8. 杉畠・栗山2008:104頁図1-16 12. 都城市教育委員会2006:46頁図37-83 13. 都城市教育委員会2006:46頁図37-84 14. 都城市教育委員会2000:20頁図14-2 15. 都城市教育委員会2008:100頁図86-548 16. 都城市教育委員会2008:100頁図86-550
- 図3 1. 第7分冊(以下、高知県教育委員会1986):276頁図124-101 2. 第3分冊:432頁図229-738 3. 第2分冊:382頁図182-100 4. 5. 第2分冊:250頁図121-314(4)・315(5) 6. 第8分冊:302頁図135-90 7. 第2分冊:151頁図68-908 8. 第2分冊:343頁図157-147 9. 10. 13~16. 高知県教育委員会ほか2006:239頁図14-1(9)・2(10)・240頁図15-36(13)・239頁図14-9(14)・240頁図15-19(15)・32(16) 11. 第2分冊:251頁図122-321 12. 第2分冊:355頁図169-332 17. 高知県文化財团埋蔵文化財センター2002:94頁図73-401 18. 高知県文化財团埋蔵文化財センター2002:167頁図125-1397 19. 20. 第3分冊:192頁図91-208(19)・209(20) 21. 22. 高知県教育委員会ほか2004:265頁C 4-73図-23(21)・24(22)
- 図4 1~12・14. 御坊市教育委員会ほか2002:193頁図129-1530(1)・1531(2)・1525(3)・1528(4)・1521(5)・1506(6)・1504(7)・1512(8)・1519(9)・1513(10)・1523(11)・1546(12)・1545(14) 13. 和歌山県文化財センター2005:64頁図37-390



### 3. 青銅器から見た古墳成立期の太平洋ルート

福永 伸哉

#### 1 はじめに

西日本の太平洋沿岸には初期の弥生文化の受容地があり、また沿岸ルートがこの文化の東伝に大きな役割を果たしたことは、高知県南国市田村遺跡において弥生前期に始まる大規模な拠点集落が発見されたことにより、研究者の間に広く知られるところとなった。その後、1999年には、紀伊南部の和歌山県御坊市堅田遺跡において、同じく弥生前期の環濠集落と青銅ヤリガシナ鋳物などが確認されるに至り、そうした理解はいっそう確かなものとなった。両遺跡からは「松菊里型住居」も検出されており、朝鮮半島南部を出発点とする新たな文化の波が高知平野を一つの拠点とし、また中継地として東方へ波及していく様子を復元することができる。

弥生中期にも、南四国には北部九州系の武器形青銅器が一定量もたらされており、南予地域を経由してのものであろうが、西から東への波及ルートが維持されていたと考えられる。いっぽう、扁平紐式段階の銅鐸も仁淀川以東から複数出土しているので、弥生中期になると畿内・瀬戸内系の文物が東方から流入する動きも確実に生まれている。南四国には東西の文物が行き交う交易ルートが存在していたものと思われる。

このような前史の上に、南四国の弥生時代後期は、北部九州系の広形銅矛、畿内系の突線紐式銅鐸が分布域を接するような、西日本でも特異な地域相を呈するようになる。しかし、東西の有力青銅器を多数手にしながらも、続く古墳時代成立期には前方後円墳はおろか、古相の古墳建築自体も確認できないような、古墳空白地へと転じていくのである。

弥生後期と古墳前期を比較した時の、この対照的なあり方はどういうことなのか。おそらくそこには、前方後円墳成立に示されるような列島規模の政治統合へと向かう時代の中で、南四国地域内の事情を超えた地域間の力学が作用していたと考えるべきであろう。そうであれば、この南四国の弥生後期以降の文物の動向に照らして、列島のダイナミックな地域関係を検討することも可能ではなかろうか。

このような理解に立って、小稿では西日本の太平洋地域、とりわけ土佐、阿波、紀伊における弥生後期の青銅器の存在状況から議論を立ち上げ、前方後円墳成立期の銅鏡分布からの視点を結合させながら、古墳成立期に向かう太平洋地域の動向について、一つの仮説的などらえ方を提示してみたい。なお、小稿でとくにことわりなく「太平洋地域」と呼称する場合は、この3地域を指すこととする。

## 2 弥生後期太平洋地域の大型青銅器分布

### (1) 青銅器の出土地

弥生後期の大型青銅器の代表例としては、北部九州で製作された広形武器と近畿東海を中心には分布する突線鉢式銅鐸があげられる。太平洋地域から出土しているのはこのうち広形銅矛と近畿式銅鐸である。後者は、確実な製作地が押さえられているわけではないが、これまでに確認されている上製鋲型の中では最大級のものが奈良県唐古・鍵遺跡から出土していることや、製品の分布状況を勘案すると、畿内地域のどこかで製作され、この地にもたらされたと考えるのが妥当であろう。現在、太平洋地域から出土が確認されている広形銅矛、近畿式銅鐸には次のようなものがある(図1)(岡本1983、難波2007など)。

#### <広形銅矛>

##### 【土佐】

1. 四万十町作屋西ノ川口 1式  
四万十町作屋西ノ川口 1式  
四万十町作屋西ノ川口 1式  
四万十町作屋西ノ川口 1式
2. 四万十町七里小野川(熊野神社旧蔵) 1式
3. 四万十町根々崎(高岡神社祭礼使用) 1式
4. 土佐市波介東本村万福寺内 1式
5. 高知市久万(久万神社旧蔵)
6. 南国市田村カリヤ 1式  
南国市田村カリヤ 1式  
南国市田村カリヤ 1式  
南国市田村カリヤ 1式
7. 南国市田村遺跡
8. 土佐町柚ノ木(星神社蔵) 1式
9. 安芸市川北江川(鋒部のみ) 1式

#### <近畿式銅鐸>

##### 【土佐】

10. 高知市春野町西分増井 節平鉢式新～突線鉢 2式(破片銅鐸)
11. 土佐町土居付近 突線鉢 2式(伝)
12. 馬路村和名熊野神社付近 突線鉢 2式(伝)

13. 南国市田村正善 突線鉢2式
14. 香美市土佐山田町楠目 突線鉢3Ⅰa式
15. 香美市香北町葦生野付近 突線鉢3Ⅰa式 (伝)
16. 香美市香北町葦生野付近 (美良布神社蔵) 突線鉢3Ⅰb式 (伝)
17. 安芸市伊尾木切畑山 突線鉢4式

## 【阿波】

1. 阿南市山口町田村谷 突線鉢2式
2. 阿南市下大野町畠田 突線鉢2式
3. 喬門市大麻町捨乾谷 突線鉢4式
4. 阿南市下大野町八賀渡 突線鉢4式～5Ⅰ式
5. 徳島市国府町矢野 突線鉢5Ⅰ式
6. 徳島市八多町 突線鉢式?
7. 徳島市八多町居内 突線鉢式?

## 【紀伊】

1. 和歌山市宇田森大星郡蛭神社境内 突線鉢2式 (伝)
2. みなべ町晚稻常楽 突線鉢2式
3. みなべ町西本庄 (玉谷) 突線鉢3Ⅰ式?
4. みなべ町晚稻 (久地峠) 突線鉢3Ⅰa式
5. 日高町菊木向山 突線鉢3Ⅰb式  
日高町菊木向山 突線鉢3Ⅱb式
6. 和歌山市小豆島砂山 突線鉢4式
7. 田辺市秋津町山田代 突線鉢4式
8. みなべ町西本庄 (大久保) 突線鉢4式
9. 日高郡 突線鉢4式 (伝)
10. 新宮市新宮權現山神倉神社ごとびき岩 (神倉山) 突線鉢4式～5Ⅰ式
11. みなべ町西本庄雨乞山 突線鉢5Ⅰ式
12. 日高町鐘巻大門 突線鉢5Ⅰ式 (伝)
13. 上富田町岩崎 (朝来) 突線鉢5Ⅱ式
14. 田辺市三橋谷後口谷 突線鉢5Ⅱ式

## (2) 型式と分布状況

**分布図の意味** 西日本の東西で重心を異にして広がる武器形青銅器と銅鐸の分布に着目して、その背景にそれぞれを担った地域の文化的、政治的対峙関係を読みとる理解は、和辻哲郎による「銅鉢銅劍文化圏」と「銅鐸文化圏」の提唱によって、はやくも戦前には一定の体系的理解

に達していた（和辻1939）。和辻説の形成や、青銅器分布の意味にかんするその後の議論の展開は、田中琢や岩永省三が的確に整理したとおりある（田中1987、岩永1997）。

このうち、同形式の青銅器の分布図の背後にある種の政治勢力の存在を想定する立場からの議論は、特に銅矛については下條信行（下條1982）、銅鐸については酒井龍一（酒井1978）、両者の対比という視点では春成秀爾（春成1982）によって、積極的に展開されている。また、高知県の銅矛の分布状況を悉皆的に分析してきた岡本健児も、南四国において銅矛と銅鐸が「対立的な分布を示している」という表現を用いて分布の特徴をとらえている（岡本1983：p.240）。これに対して、土佐の弥生社会像の復元を精力的に進める出原恵三は、広形銅矛と近畿式銅鐸が高知平野東部や吉野川上流域の嶺北地域で混在して分布することを重視して、「銅鐸と矛壇祭器の分布から短絡的に両勢力の対峙あるいは拮抗を想定することには慎重であらねばならない」と主張する（出原1993：p.133）。

筆者は、すべての時期の青銅器が背後に特定の政治勢力の影響を帯びていたと考えるものではない。ただ、弥生後期の広形銅矛と突線鉢式銅鐸にかんしては、製作を担った地域間での競争的な対抗意識が強くあらわれていると見ればその極端なまでの肥大化が無理なく説明できることから、矛と鐸をシンボルとしてまとまる二つの利害勢力が西日本で影響力を競いあつたことを想定してもよいのではなかろうか。広形銅矛と近畿式銅鐸の「供給元」が器物に政治性を込めていたとする見方は、それらの製作体制や流通のメカニズムがなお不明瞭な現状では、さまざまな資料の状況を勘案した一つの仮説に過ぎない。しかし、このようにとらえた時、太平洋地域、とりわけ土佐地域で後期の二つの大型青銅器の分布域が、局所的には一部重複しながらも、全体としてはまさに接するように形成されていることは、きわめて注目される。

**広形銅矛の型式と分布**さて、太平洋地域の後期青銅器のあり方を細別型式のレベルでやや詳細に見た時、これまで十分に注意されてこなかった傾向がうかがえることは重要である。

まず広形銅矛を見よう。太平洋地域での出土は土佐のみで16本が確認できる<sup>⑩</sup>。先に掲げた一覧には、近藤喬一による細別型式も併せて示しているが<sup>⑪</sup>、判明しているもの多くは広形I式である。また、広形II式とした十佐町柚ノ木の例も、岡本健児の観察によれば節帯の痕跡表現である刻線をわずかに残しているようであり、型式学的にはI式の最新段階と位置づけてもよいものである（岡本1983：p.222）。つまり、出土数の多さが注目される土佐の広形銅矛ではあるが、それらは古相のものが圧倒的に多数派を占めているのである。

広形銅矛の製作時期を推定する手がかりとしては、古くは長崎県塔の首3号石棺からI式、II式が「後期前半代」の土器と共伴した事例があり（小川・武末ほか1974）、近年では北九州市重留遺跡において、「高三浦式から下大隈式にかけて」の時期の住居址内からII式の広形銅矛が埋納状態で検出された事例があげられる（谷口編1999）。I式から型式変化を経たII式も含めて後期前半の内には製作が始まっていたことを示すとともに、II式の使用の終焉も後期後半の新

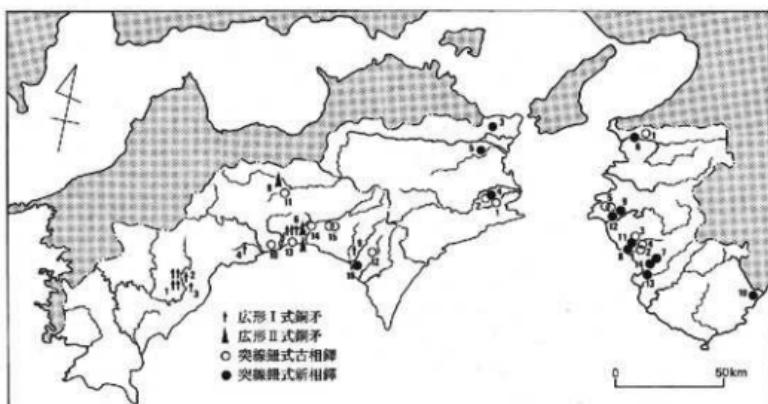


図1 太平洋地域の大型青銅器の分布（番号は第2章の出土地一覧に対応）

相まではくだらないであろうことを強く示唆する状況といえよう。

このような相対年代観でとらえるなら、広形銅矛の土佐への流入は、下っても後期半ば頃までの現象であったと理解することができる。

**突線鉢式銅鐸の型式と分布** 太平洋地域に分布する突線鉢式銅鐸についても、細別型式との関連で整理すれば興味深いあり方がうかがえる<sup>10</sup>。筆者は後述するように、突線鉢式銅鐸の中で突線鉢3式までと4式以降では製作や流通のあり方が異なると考えている。前者を突線鉢式古相鐸、後者を新相鐸と呼び分けた場合、土佐における突線鉢式古相鐸の卓越と、阿波・紀伊における突線鉢式新相鐸の卓越という対照的な様相を指摘することができるのである。

土佐では出土が伝えられるものも含めて8例（西分増井を含めると）の突線鉢式銅鐸が知られるが、突線鉢4式以降の新相鐸は安芸市切畑の1例だけであり、ほかは古相鐸の突線鉢2式～3式で占められている。これに対して、阿波では型式のわかるもののうちでは、突線鉢5Ⅰ式の埋納銅鐸として知られる徳島市矢野鐸を含めて新相鐸3例、古相鐸2例と比率が逆転している。さらに紀伊でも、最終段階の突線鉢5Ⅱ式を含めて新相鐸9例、古相鐸6例というように、阿波で見られた比率の傾向がいっそう強まっているように思われる。畿内西方にあって弥生後期の突線鉢式銅鐸が集中する点で分布傾向の共通性が指摘される太平洋地域ではあるが、仔細に見ればこのように土佐と阿波・紀伊の間には顕著な相違が存在するのである。

古相鐸と新相鐸の境界時期を確実にとらえうる情報はないが、突線鉢5Ⅰ式鐸が埋納された土坑内で後期後葉の土器片が出土した徳島市矢野遺跡の事例（菅原ほか2003）から逆算すれば、突線鉢3式の製作が後期中葉頃までに求められる可能性はきわめて高い。そうすると、土佐の突線鉢式銅鐸のほとんどが古相鐸である点は、先に見た1式が多数派を占める広形銅矛のあり

方にも類似する流入状況と理解すべきことになろう。つまり、広形銅矛を製作した北部九州、突線鉢式銅鐸を製作した畿内地域が、土佐に対する連携の働きかけをとくに競ったのは、弥生後期半ばまでのことであったと整理できるのである。

その後は、土佐への広形銅矛、突線鉢式銅鐸の流入量がともに激減するいっぽうで、広形銅矛が及ばなかった阿波や紀伊の地域で突線鉢式新相鐸が増加する。

**突線鉢式銅鐸の新古** 上述のように、突線鉢3式以前と4式以後に分けて突線鉢式銅鐸をとらえた時、太平洋地域における分布のあり方は対照的な2者に整理できた。新古の区分境界の取り方を変えれば当然ながら結果は違ったものになるが、筆者は3式と4式の間には製作や使用のあり方の点で型式変化を超えた性格の変化が存在すると見ており、その意味では小論のような新古の比較には一定の有効性があると考えている。

たとえば文様面では、突線鉢4式の大きな特徴としてあげられる横軸突線は近畿式の突線鉢3式まではまったく認められない要素である。また、三連式の最終段階である三連4式を近畿式の突線鉢3Ⅱ式に併行するととらえる難波洋三の立場に立てば（難波1986）、突線鉢4式以降は近畿式のみとなり、その製作体制にも少なからぬ変化があったと推定できる<sup>44</sup>。

さらに、表1にあげた共伴銅鐸の型式の組み合わせを見ると、突線鉢3式以前と4式以後の共伴は滋賀県大岩山遺跡1地点のわずか1例のみであることがわかる。共伴する銅鐸群が同じ集団あるいは関連の深い集団によって集積されたものと理解してよければ、このあり方は3式までの占相鐸を所持した集団が引き続いて4式以後の新相鐸入手するという場合の少なかつたことを示唆しているようである。4式、5式になると、共伴例も急減していることから、同じ集団のもとに複数の銅鐸がもたらされること自体が例外的なものになった可能性が高い。

製作、流通の両局面で認められる突線鉢3式と突線鉢4式の間の不連続な変化の背後にどのような地域関係の動きが存在したのかという点は、別途追求する必要のある興味深い課題であるが、ここではそうした突線鉢式銅鐸の変化期に、太平洋地域における分布状況が変動したことと指摘するにとどめておきたい。

### 3 太平洋ルートの盛衰と地域関係

#### (1) 田村遺跡の盛衰

広形II式銅矛、突線鉢4式段階に土佐への青銅器の流入量が急減する頃、縄文時代後期以来、土佐有数の集落として存続してきた南国市田村遺跡の勢いが急速に失われていくことは象徴的で、両事象の間にはおそらく関係があったと見るべきだらう。

弥生時代の田村遺跡の推移は、出原恵三の近著においてわかりやすく整理されている（出原2009）。それによると中期前半にいったん「散村的景観」となっていた田村遺跡では中期後半頃から再び集住化が進み、中期末から後期初頭にかけては西日本でも有数の拠点的集落へと発展

する。その背景には、鉄器、青銅器、ガラス小玉、回線文を施す中部瀬戸内系の土器などに示されるように、東西軸と南北軸での各地との活発な交流をうかがうことができる。しかし、この時期を最盛期として田村遺跡の勢いはかけりを見せ、後期中葉を最後に集落の造営を停止してしまう。出原によると、出村弥生集落の消滅は「かなり急激」に生じた動きであり、その後、古墳時代初頭にかけて、高知平野では中小規模の集落が散在して核を失った状態が続くのである（出原2009、p.83）。

中期末から後期初頭の田村遺跡繁栄の要因として、太平洋沿岸地域の交流の要衝としての役割を考える出原の理解は、正鶴を射ていると思われる。また、後期中葉を境に、「政治、経済の大動脈が、時期瀬戸内に集中した」ことによって、そうした「田村遺跡の歴史的役割に一つの終止符が打たれた」とする氏の評価も、大枠では首肯できるものである。ただ筆者は、土佐を含む太平洋ルートの地域交流を理解する際には、さらに日本海ルートのあり方をも加えて検討すれば、よりダイナミックな像が描けるのではないかと考えている。

## (2) 木平洋ルート活性化の局面

弥生時代中期までに土佐にもたらされた青銅器としては、いわゆる武器形青銅器が圧倒的多数を占めている。中広形までを中期の所産とした場合、銅劍5、銅戈6、銅矛38が確認されている。破片を含めたとしても4例にとどまることはない。

このなかでとくに数の多い銅矛は、38例すべてが中広形に属する。銅矛は弥生後期の広形段階で北部九州の地域シンボルとしての役割をいっそう明確にするが、すでに中期後葉の中広形段階から周辺地域への搬出量が急増しており、北部九州系の青銅器として倭人社会の中でも十分に認知を得ていたものと思われる。こうした中広形銅矛が十佐に多数導入し始めることは、

表1 共伴銅鏡の型式組合せ

この時期に北部九州から土佐への交流の働きかけが加速したことを物語るものである。

ほぼ同時に扁平鋸式銅鐸が土佐東部にもたらされるようになる。太平洋地域の銅鐸分布は、外縁付鋸式以前は紀伊、阿波までにとどまっていた。これが扁平鋸式となってついに土佐の地に流入してくることは、東方の集団も太平洋回りの物資流通の重要性を認識し始めたことをうかがわせる。

こうした動きがあらわれる弥生中期後葉には、瀬戸内を介した人、もの、情報のやりとりが活発になり、その動きは中期末から後期初頭にかけて一つの頂点に達する。ただ、瀬戸内ルートの物流には沿岸の多くの地域勢力が関与するだけに、地域関係は複雑な利害をはらみながら展開し、時として高地性集落の利用を要するような緊張状態が生まれたことも推定できる。瀬戸内地域から畿内地域にかけて登場する弥生中期末から後期初頭の高地性集落は、そうした事情を語る考古資料といえよう<sup>10)</sup>。

この時期に列島弥生社会が鉄器化へと歩を速め始めたことは、地域集団が対外交易の重要性を認識する上で強い追い風として作用したのではないか。東方への影響力を増そうとする北部九州、鉄器などの先進物資を安定的に入手しようとする畿内地域。それぞれの集団にとって、緊張関係をはらむ瀬戸内ルートに依存するだけでなく、複雑な物資流通ルートの開拓、維持が有効に働くであろうことは十分理解できることである。

流動的な時代動向の中で、太平洋ルートは各地の地域集団の利害関係とも絡み合いながら存在感を増していく。そして、太平洋ルート上の有力集落としての位置を継続的に占めてきた田村遺跡も、この時期に集落規模と物資集散機能を增大させることになったと考えられる。

鉄器をはじめとする先進物資を安定的に入手することが集団の繁栄につながることを勘案すれば、その交流ルートの確保をめぐる主導権争いは政治的性格を帯びて来るであろうし、場合によってはそれが実力行使を伴うものに発展することもありえたであろう<sup>11)</sup>。筆者は、弥生後期の広形銅矛と突線鋸式銅鐸が、北部九州と畿内地域の首長連合のシンボルとして単なる祭器を超えて政治的なつながりを表示する器物になったと考えている（福永1998）。そうした立場からすれば、これらの土佐への量的な流入は、内地域からの連携の恩恵を込めた働きかけがあったことを示すという理解になる。

突線鋸式銅鐸の数量が扁平鋸式段階の約2倍に増えている点からは、畿内地域からの働きかけがより強まったことが読みとれるのではないか。そして、それに対抗するかのように北部九州からの広形銅矛の流入も続き、その分布は太平洋沿岸では土佐東部の安芸市にまで及んだ。

### (3) 青銅器流入の途絶と東西交易3ルートの浮沈

しかし、これらの大型青銅器は北部九州や畿内地域における製作の終焉に幾分先んじて、後期半ば過ぎには土佐からは姿を消してしまう。ほぼ同時期に起こる田村遺跡の解体现象はこうした青銅器のあり方と関連していると思われるが、この遺跡が南回りの物資集散の拠点として

機能していたことを考えるなら、中期後葉以降に顕著になった太平洋ルートの役割が再び低下して、いつの時代にもあるいは通常レベルのそれに戻ったと理解するのが最も妥当であろう。

太平洋ルートの重要性が失われていく後期後葉において、瀬戸内の人動脈が順調に機能していたかどうかは、必ずしも明確ではない。むしろ、環瀬戸内地域の中でも各地の土器様式の地域性は顕著になっていること、この時期の中国鏡が瀬戸内以東に潤沢に流入する様子も認められないことなどを考えると、太平洋ルートが意義を失うほどに瀬戸内の物流が達成されていたとは言い難い状況なのである。

鉄器化はいよいよ本格的に進行しており、以前にもまして長距離交易への依存度は高まっていたであろう。筆者は、こうした状況にもかかわらず太平洋ルートが續っていく土因として、日本海回りの東西交易ルートの活性化を指摘しておきたい。

後期における西日本の日本海沿岸勢力の台頭ぶりは、出雲地域の大型四隅突出壇墳丘墓の存在が判明して以降広く認識されるところとなったが、近年ではさらに東方の因幡や丹後における資料の充実が顕著である。とりわけ京都府北部の丹後地域では、後期前葉には京丹後市三坂神社墳墓群や左坂墳墓群のように、素環頭鉄刀やガラス玉を副葬する有力墓があらわれはじめた。こうした動きは、ガラス剣、銅劍13、貝輪、ガラス勾玉6、碧玉管玉356、鉄劍14などを副葬した後期後葉の与謝野町大風呂南1号墓（白歎ほか2000）をへて、後期末には丹後最大の弥生墓である京丹後市赤坂今井壇丘墓（石崎ほか2004）の築造で頂点に達する。

平野が発達せず農耕生産力に恵まれた地域でもない丹後に、これだけの有力者があらわれた基盤は、その副葬品からも推し量れるとおり、鉄、ガラスなどを中心とする外來物資の交易にあったと見るのが妥当である。丹後地域では平地部の発掘調査が進んでいないが、沿岸部には物資集散の拠点となる「津」が存在したことは確実であろう。因幡地域の鳥取市青谷上寺地遺跡はこうした集散地の実例である可能性が高く、豊富な鉄器を含む後期後半の資料の充実は、この時期の日本海回りの物流ルートがいかに大きな意味を有していたかを物語っている。

弥生時代の日本海ルートが顕著な活性化を始めた時期は、京丹後市奈具岡遺跡で大規模な鉄器・玉類の製作工房が操業した中期後葉頃であり、これが太平洋ルートにおいて出村遺跡が急成長する時期に符合していることは偶然ではあるまい。東西の物流が増したこの時期に、日本海、太平洋という2ルートが、常在の瀬戸内ルートを補完する形で存在意義を高めていったものと思われる。

そして日本海ルートは、大陸への近さ、ルートに連なる集団の多さ、畿内地域や東海地域への良好なアクセス<sup>10</sup>という利点から、後期を通じて活発な行来が続いたと考えられるが、特にその後半期には先述したような有力首長墓や集散地と思われる遺跡の存在から見ても、瀬戸内ルートをしのいで西日本で最も主要な物流ルートになっていたと評価してもよかろう。

筆者はかつて、後期後半の瀬戸内ルートが前後の時期と比較してやや閉鎖的になった可能性

と、それが瀬戸内の東西、すなわち北部九州と畿内・東海の首長連合の間での鉄素材の流通をめぐる確執によるものではないかとする仮説を示したことがある（福永1998）。この理解に立てば、そうした状況下において日本海ルートは、東部瀬戸内以東の集団にとって先進必需物資入手のライフラインとして機能したという説明になる。

日本海ルートの物流が太くなればなるほど、大陸から北部九州をへて太平洋岸まで南下する遠隔ルートの必要性は相対的に低下するという関係である。太平洋ルートが、後期半ば過ぎに勢いを失っていく背景には、鐵器化の進行という時代背景の中で変動する3ルートの相対的関係が横たわっていたといえよう。そうした動きの中で、畿内地域の側から土佐地域への働きかけは終息し、呼応するように北部九州からの広形銅矛も流入停止に至ったと考えられる。

では、なぜ太平洋ルートの役割が低下した後に、阿波や紀伊にだけ突線鉢4式、5式の新相鉢が前段階にもまして流入し続けるのであろうか。個々の出土地の厳密な検討を行うにはなお情報が不足しているが、マクロな視点で見るとやはり紀伊水道を強く意識した分布であるようと思われる<sup>⑩</sup>。南紀において突線鉢式銅鐸と高地性集落とがともに多いことに相関関係があるのではないかという小賀直樹の示唆も検討に値する（小賀1979：p.198）。

肥大化する広形銅矛、突線鉢式銅鐸が示す弥生後期の地域関係が、先述のように時として軍事的な緊張をはらんだものであったとしたら、紀伊水道は畿内地域の首長連合にとって南回りの脅威に対する安全保障上の要衝ともなりうる。太平洋ルートの衰退に伴って土佐地域が持っていた物資集散機能が薄まっていくいっぽうで、銅鐸をシンボルとする畿内首長連合としては、紀伊水道に面し、かつて広形銅矛を受け入れなかつた阿波、紀伊の集団を安全保障上の重要なパートナーと認識し、突線鉢式新相鉢の重点的な贈与によってあらためて連携の強化を図ったと解釈できるのではなかろうか。

#### 4 古墳の成立と太平洋地域

##### (1) 豊富な青銅器と初期古墳不在の対照性

最後の弥生大型青銅器である突線鉢式新相鉢と広形II式銅矛が消滅すると、関東以西の各地は首長層が共通形式の墳墓をつくる時代へと歩を進める。近年では、大型青銅器の製作が弥生後期後半のうちに終息した後、畿内の土器様式でいうと庄内式期をへて、布留式最古段階で巨大な定型前方後円墳が出現するという段階的な推移が、考古資料の上でも的確に整理できるようになってきた。筆者は庄内式期を弥生時代終末期ととらえる立場に立っている。

小稿の検討対象である太平洋地域は、弥生後期段階の大型青銅器を多数入手していることから見て、ある意味で西日本の地域関係や利害関係と密接に絡むような存在感を有していたと理解できる。そうした地域では、エリート層の政治的な成長がうながされ、弥生終末期から古墳前期にかけていち早く有力墳墓や前期古墳の築造が行われてもよさそうなものである。しかし

よく知られるように、実態としては土佐や阿波・紀伊の南部には弥生終末期から古墳前期にかけての頗著な首長墓がいまだに確認されていないのである。

高知平野の弥生青銅器の豊富さと前期古墳の不在という対照的なあり方について考察した出原恵三は、原始共同体の変質によって生じた内部矛盾に対して、共同体規制の強化で対処した地域には前期古墳は生まれず、共同体規制をうち破る動きを見せた地域では前期古墳が登場したと考え、高知平野・阿波南部・紀伊南部は前者であると位置づけた（出原1993）。具体的には青銅器の存否と土器の生産体制に着目しており、装饰性に富んだ伝統的土器づくりや青銅祭器（近畿式銅鐸）からうかがえる共同体規制の強化で臨んだ地域として高知平野を、青銅祭器からの脱却や土器の専業化という新たな動きをした代表地域として古備をあげている<sup>⑩</sup>。

前期古墳の不在現象を、弥生時代の地域的特徴と関連づけてとらえるアプローチは重要である。ただ出原が、原始共同体の構造と密着した、言い換えれば共同体の規制と関連する祭器ととらえた近畿式銅鐸については、筆者はすでに畿内首長連合の政治的シンボルに変質したものと判断している。したがって、その存在は古墳出現への動きと相反する性格のものではなく、むしろ弥生後期の畿内地域との政治関係を示す意味に解すべきであろうと考える<sup>⑪</sup>。

筆者は、高知平野・阿波南部・紀伊南部に初期の古墳が存在しない背景としては、物資流通ルートとしてこの地域が有していた重要性が低下するにつれて、畿内地域や他地域との関係が疎遠になり、前方後円墳に示されるような列島首長層の政治統合の枠組みに参入する意義自体が失われたのではないかと推定する。弥生終末期には列島への画文帶神獸鏡の流入が始まり、それが畿内を中心に瀬戸内沿岸に厚く分布するようになることから、大陸から瀬戸内海を介して畿内地域に至るルートが物流の大動脈として再び機能することになったと考えられる。

太平洋ルートはもはや東西の勢力が競ってまで依存すべき物流ルートではなくなるとともに、畿内を核とする倭人社会の政治統合が成立した後は、安全保障上の要衝としての意義も薄れていった。こうして太平洋地域では有力者間で主導権争いが生じる契機も少くなり、ましてや地域内の確執が中央政権との政治的連携によって決着を見るような局面に立ち至ることもなかつたのではなかろうか<sup>⑫</sup>。古墳の出現は中央政権との中心周辺関係の成立を基礎とするが、同時に地域の有力者の側にもそうした記念物を必要とする政治環境が生まれたことを示すものと考えれば、太平洋地域における初期の古墳の不在現象はよく理解できるのである。

なお、初期古墳の不在という点では、弥生後期の段階で日本海ルートの活性化を背景に有力首長墓の築造が続いた丹後地域でも類似の現象が認められる。丹後では弥生後期末の京丹後市赤坂今井墳丘墓を到達点として、その後は傑出した有力墳墓の築造が不明確となる<sup>⑬</sup>。古墳時代前期前半にも京丹後市大田南5号墳のように中國鏡を副葬する首長墳は存在するが、墳丘は地元の弥生墓の伝統を引く小方墳にとどまっている。また、船載三角縁神獸鏡も与謝野町加悦丸山古墳でわずかに1面確認されているに過ぎない。丹後地域における前方後円墳の確実な出

現は、前期半ば過ぎの与謝野町蛭子山1号墳の築造まで待たなくてはならず、赤坂今井墳丘墓からの時間的隔たりは大きい。日本海ルートの物流が東方集団の生命線であった時期を過ぎると、長距離交易を基盤とした丹後地域の政治的発展も一段落してしまうのである。

## (2) 庄内式期から布留式期への状況変化

議論を太平洋地域に戻すと、大型青銅器が消えた弥生終末期において、遠距離の交流がまったく失われたわけではないことは注意すべきである。特に高知平野には一定量の搬入土器が確認されており、出原恵三の整理によると河内のものが最も多く、吉備・阿波のものがこれに次ぐという（出原1993：p.125）。また、四国島内の畿内系土器の存在状況を検討した藏本晋司は、搬入土器が特に土佐に多いことは意味があると考え、「阿波南部を経由した土佐と畿内とのより直接的な関係」を想定している（藏本2001：p.90）。

搬入土器は時期的に庄内式新段階～布留式最古段階のものを中心としており、器種としては「河内型庄内壺」が主体を占めている。このことは、大型青銅器の流入が弥生後期半ば過ぎに停止して以降も、ほぼ庄内式期にかけて畿内地域と土佐の間には、人、ものの交流があったことを示している点で重要である<sup>10)</sup>。ただ、そうなると、なぜ前方後円墳が成立する布留式期になるとそうした交流が失われていくのかという問題を考える必要がでてくる。

筆者は、庄内式期の3世紀前葉には倭人社会の政治統合が生まれたと理解しているが、その後各地に古墳が出現する3世紀半ば過ぎから後葉にかけての地域関係を考える手がかりとして、舶載神獸鏡の分布に注目している（図2）。神獸鏡の人手が、大和に核を持つ中央政権と地域の政治的な親疎関係を反映していると考えれば（榎永2005）、その分布の推移をたどることは意味のあるアプローチとなる。表2は、畿内地域の摂津六甲山南麓、摂津三島（淀川水系）、中・南河内（大和川水系）、和泉の4小地域を対象に、3世紀前葉に製作、流入の中心があると考えられる両文帯神獸鏡・上方作系神獸鏡と3世紀中後葉の舶載三角縁神獸鏡の分布を示したもので



図2 3世紀の舶載神獸鏡

表2 摂津・河内・和泉における3世紀の船載神獸鏡

	古墳名	後漢末期の鏡 (3C前葉・庄内式期)	船載三角縁神獸鏡・魏鏡 (3C中葉~末・布留式期)	
六甲南麓	神戸市・西求女塚古墳	圓文帶環状乳神獸鏡 圓文帶環状乳神獸鏡 上方作系獸帶鏡(六像式)	船A・吾作三神五獸鏡 船A・吾作三神五獸鏡 船A・吾作四神四獸鏡 船A・吾作四神四獸鏡 船B・吾作徐州銘四神四獸鏡 船B・原是作五神四獸鏡 船B・吾作三神四獸鏡	繼 統 發 展 型
	神戸市・東求女塚古墳	圓文帶神獸鏡	船B・唐草文帶四神四獸鏡 船C・獸文帶二神二獸・虫鏡 船C・獸文帶三神三獸鏡	
	神戸市・ヘボソ塚古墳	圓文帶環状乳神獸鏡 上方作系獸帶鏡(六像式)	船C・唐草文帶三神二獸鏡 船C・唐草文帶二神二獸鏡	
芦屋市・阿保朝王塚古墳			船D・波文帶三神二獸・山炉鏡 船D・波文帶四神三獸・山炉鏡 船D・波文帶神獸鏡 船E・角緣神獸鏡(鏡式不明)	
摂津三島	高槻市・安満宮山古墳		船A・吾作四神四獸鏡 船B・獸文帶四神四獸鏡 魏・青龍三年方格規矩四神鏡 魏・半円方形帶同向式神獸鏡	台 頃 型
	高槻市・關鷺山古墳		船B・橢圓文帶四神四獸鏡?	
	高槻市・赤天山C1号墳		船B・橢圓文帶四神四獸鏡?	
	茨木市・安政O号墳	上方作系獸帶鏡(六像式)	船D・波文帶三神三獸鏡	
	茨木市・紫金山古墳		船C・獸文帶三神三獸鏡 船C・唐草文帶二神二獸鏡	
中・南河内	茨木市・村屋山古墳(伝)		船B・獸文帶四神四獸鏡 船C・唐草文帶二神二獸鏡 船C・唐草文帶二神二獸鏡	停 滞 型
	東大阪市・石切劍箭神社(伝)	圓文帶求心式神獸鏡	船B・獸文帶四神四獸鏡 船C・唐草文帶二神二獸鏡 船C・唐草文帶二神二獸鏡	
	東大阪市・池島福万寺遺跡	圓文帶神獸鏡(鏡片)	船B・新作徐州銘四神四獸鏡 船C・吾作四神二獸鏡	
	柏原市・国分茶臼山古墳		船B・新作徐州銘四神四獸鏡 船C・吾作四神二獸鏡	
	柏原市・玉手山6号墳	圓文帶神獸鏡	船B・吾作四神四獸鏡	
	藤井寺市・味金塚古墳	圓文帶環状乳神獸鏡	船D・獸文帶三神三獸鏡	
和泉	羽曳野市・鹿島塚古墳		船B・吾作四神四獸鏡	停 滞 型
	富田林市・真名井古墳	圓文帶神獸鏡	船D・獸文帶三神三獸鏡	
	河南町・寛弘寺10号墳	半円形帶神獸鏡	船C・唐草文帶二神二獸鏡	
和泉	和泉市・和泉黄金塚古墳	圓文帶同向式神獸鏡 圓文帶環状乳神獸鏡 圓文帶環状乳神獸鏡	魏・景初二年圓文帶神獸鏡 船B・波文帶盤龍鏡	停 滞 型
	岸和田市・風吹山古墳	圓文帶神獸鏡		

ある。つまり、政權と畿内各地との関係を庄内式期と布留式期で比較する材料である。

これをみると、圓文帶神獸鏡・上方作系獸帶鏡に続いて三角縁神獸鏡も潤沢に存在している六甲南麓、三角縁神獸鏡段階になって突然分布が増加する摂津三島、圓文帶神獸鏡は多いが三角縁神獸鏡の数量が増えない中・南河内や和泉という3つのパターンに整理できるように思われる<sup>94)</sup>。政権中枢地たる大和との親疎を念頭に置いて、継続発展型、台頭型、停滞型の呼称を

与えておこう。

庄内式期から布留式期にかけて、大和と中・南河内の関係はやや疎遠になったように見える。これに対して、攝津三島は布留式期に急速に台頭して大和との関係を密にしたように解釈できる。資料の実態から見ると、前方後円墳が出現する布留式期前後になって、大和盆地から瀬戸内海東部へ通じる最重要ルートとしての位置づけが南の大和川ルートから、北の淀川ルートに移ったことを推定できるのである。この現象の背景については畿内内部の政治関係とも関連づけてすでに考えを示したことがあるので詳論しないが（福永2007）、土佐地域で確認されている畿内系搬入土器の大部分が、「停滞型」の地域に相当する中・南河内の「河内型庄内墳」であった点は重要である。土佐において布留式期頃から畿内地域といっそう疎遠になっていくことは、政権のメインルートが南部の中・南河内を経由しない北部の淀川ルートにシフトしたこととも関連する現象であった可能性を指摘しておきたい。

## 5 おわりに

弥生後期以降の青銅器の分布に着目し、地域関係の変化と関連づけて太平洋ルートの推移を検討してきた。特に土佐地域は、弥生後期に北部九州系の広形銅矛と畿内系の突線錐式銅鐸が対峙するように分布することで注目されてきたが、それは太平洋ルートの物流が列島各地の集団にとって大きな意味を持つ局面において生じた、特徴的な現象と理解すべきであろう。

また小稿では、突線錐式銅鐸を古相と新相に分けた時、太平洋地域のなかでも土佐と阿波・紀伊の間には意味のある分布状況の違いが見出せること、さらに、土佐の畿内系搬入土器のあり方に認められる庄内式期と布留式期のギャップが、中央政権のメインルートの転換という背景を持っていることなどを新たなとらえ方として提示してみた。太平洋地域の資料的状況の変化期として注目した弥生時代後半や古墳時代開始期（布留式期）は、西日本の地域関係においても顕著な変革期にあたっている。そうしたやや外部からの視点で提起したいいくつかの指摘が妥当なものかどうかの判断は、今後の当地域の調査研究の進展にゆだねておきたい。

### 注

- (1) このほかに、岡本健児は高知県須崎市飛田坂本で1884年に出土した2木の銅矛のうちの1本が長さ84.8cmであることから、「中広形Ⅱ式の新しいものか、あるいは広形銅矛の1式であろう」としているが、すでに現物の所在が不明なため確定は難しい（岡本1983：p.211）。
- (2) 銅矛の細別型式は広形Ⅰ式、広形Ⅱ式とする近藤尚一1974文献に従う。
- (3) 突線錐式銅鐸の細別は、越波洋二1986文献の分類に従う。
- (4) 三連式銅鐸が突線錐4式段階までつくられた後、突線錐5式段階になって三連式と近畿式の工人が統合されたと考えたのは佐原眞であったが（佐原1960）、三連4式と突線錐3式を併行関係にあると見る雄波は「工人集

- 団の統合があったとすれば、それは突線鉢5式成立時よりも突線鉢4式成立時であった可能性が高い」と理解する。ただ、それが近畿式工人による三連式銅鐸の模倣であった可能性も排除していない（難波1997：p.25）。
- (5) 兵庫県会下山遺跡、表山遺跡、大阪府古畠部・芝谷遺跡などの高地性集落はその好例である。
- (6) 筆者は、広形銅矛と突線鉢式銅鐸が肥人化するような競争的な動きの背後に、鉄素材をはじめとする大陸物資の獲得をめぐる北部九州勢力と瀬戸内・畿内以東の勢力の主導権争いがあったのではないかと見る解釈に一定の蓋然性を見出している（福永1998）。
- (7) 丹後からは、由良川を南下して東部瀬戸内や畿内地域へ向かうルートが開けており、また若狭までいけば琵琶湖を介して瀬尾平野方面へのアクセスが容易になる。舞鶴市匂ヶ崎遺跡から次縦鉢3式段階の近畿式、三連式の両鐸が出土していることは、日本海ルートの物資供給先の一端を示唆している。
- (8) 紀伊の銅鐸出土地と集落の様相について悉皆的に整理したものとして前田敬彦1995文献がある。南紀も含めて突線鉢式銅鐸出土地の近在に集落遺跡が存在する傾向はあるが、銅鐸は丘陵地からの単独出土である場合が多く、両者のダイレクトな関係はなおとらえにくい。ただ、前田も南紀の突線鉢式銅鐸の多さが「畿内の安寧」と関連した現象であった可能性を考慮に入れている（前田1995：p.37）。
- (9) 前期古墳が多数存在する畿内地域については「質疑共に前期古墳の存在に見合うような弥生墳丘墓」は確認されていないことから「それ（前方後円墳）への胎動は畿内ではなく吉備・讃岐・阿波などの地域で開始された」と述べ、畿内地域は「庄内式と伝統的V様式の共存に示されるように新・旧要素を持った二重構造の社会」であったと評価している。
- (10) また、弥生大型青銅器が消滅後、定型化前方後円墳の出現までは、庄内式期としてとらえられる半世紀あまりが介在することが確実となっているので、前期古墳築造の前史としてはまず検討すべき対象はむしろこの庄内式期の地域の状況であろう。
- (11) 阿波北部には西文帝神獸鏡や舶載三角縁神獸鏡が流入しており、弥生首長墓から前方後円墳の継続的な展開が認められる。また、紀伊北部でも和歌山市岩橋千塚古墳群中から2面の舶載三角縁神獸鏡の出土が伝えられている。小袖で太平洋地域としたエリアの中でも、瀬戸内ルートに近い一帯では古墳出現に向けての歩みが南部と異なっている点は示唆的である。
- (12) 京丹後市湊田山1号墳を「プリミティブな墳形」から前期前半の前方後円墳と見る考え方もあるが（広瀬2000：p.14）、市教委による2007～2008年の前方部の発掘調査においては、古墳時代の遺物は検出されなかった。筆者は、現在前方部として認識されている部分が後円部の中軸と微妙にずれていくように見えることから、前期後半以降の円墳である可能性も考えている。
- (13) 弥生終末期の土佐の集団が、畿内地域の河内湖周辺で有力者の墳墓築造が行われている情報に触れているとすれば、弥生終末期の副葬品を持つ有力墳墓が土佐で発見されることも十分考えられる。ただ、その後、畿内地域搬入上器の量が激減していくあり方を見ると、定型的な前期古墳が存在する可能性は高くないであろう。
- (14) このほかに3世紀中葉の神獸鏡として斜縁二神二獸鏡がある。面数が少ないので表中には示さなかつたが、六甲南麓や攝津二島で出土例があるので、ここで指摘した傾向はより明瞭になる。

## 参考文献

- 石崎善久ほか 2004『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』峰山町教育委員会
- 岩永省一 1997『金属器登場』講談社
- 岡本健児 1983『高知県発見の銅矛について』『高知の研究』第1巻、清文堂
- 小田富士雄・武木純一 1974『上対馬町古里・塔ノ首石棺群調査報告』『長崎県文化財調査報告書』第17集、長崎県教育委員会
- 歳本晋司 2001『四国島における畿内系土器の動向（予察）』『庄内式土器研究』XXV、庄内式土器研究会
- 小賀宣樹 1979『弥生時代の概説』『和歌山の研究』第1巻、清文堂
- 近藤喬一 1974『武器から祭器へ』『古代史発掘』5、講談社
- 酒井龍一 1978『銅鐸・その内なる世界』『浜河東文化資料』10
- 佐原眞 1960『銅鐸の鉄造』『世界考古学大系』第2巻、平凡社
- 下條信行 1982『銅子形祭器の牛座と波及』『森貞次郎博士古希記念古文化論叢』上、同刊行会
- 白教真也ほか 2000『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第15集、岩滝町教育委員会
- 脇原康大ほか 2003『矢野遺跡1 一般国道192号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書33、徳島県埋蔵文化財センター
- 田中琢 1987『銅鐸文化圏』と『銅劍銅矛文化圏』『弥生文化の研究』8 燐と墓と装い、雄山閣
- 谷口俊治編 1999『重留遺跡第2地点－若岡町線住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告書1－』北九州市埋蔵文化財調査報告書第230集、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 出原恵二 1993『弥生から古墳へ－前期古墳空白地域の動向』『考古学研究』第40巻第2号
- 山原恵三 2009『南国土佐から聞う弥生時代像 田村遺跡』新泉社
- 難波洋三 1986『銅鐸』『弥生文化の研究』6 道具と技術Ⅱ、雄山閣
- 難波洋三 2007『難波分類に基づく銅鐸出土土地名表の作成』平成15年度～18年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 春成秀爾 1982『銅鐸の時代』『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 広瀬和雄 2000『弥生王墓と巨大古墳の特質』『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10、雄山閣
- 福永伸哉 1998『銅鐸から銅鏡へ』『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 福永伸哉 2005『三角錐神獣鏡と円文帶神獣鏡のはざまで』『特撰山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学人文学研究科
- 福永伸哉 2007『前方後円墳成立期の大和川と淀川』（白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成17～19年度科学研究費補助金研究成果報告書）
- 前田敬彦 1995『紀伊における弥生時代集落と銅鐸』『古代文化』第47巻第10号
- 和辻哲郎 1939『改訂版 日本古代文化』岩波書店

## 4. 高知県地域における瓶形土器と竈の動向

杉井 健

### はじめに

私は、本共同研究に参加するまで高知県を訪れたことがなかった。そのため、高知県地域における瓶形土器や竈の動向については、わずかに資料を集めてはいたが、ほとんど把握することができていなかった。したがって、かつて「6世紀までに造り付け竈が普及した範囲と前方後円墳の分布図」と題した図（杉井1999c：p.116）を作成した際、日本海側については実線を用いて造り付け竈の普及範囲を提示することができたが、四国地方南部地域はアミを掛けるだけにとどめざるを得なかつた。

2008年11月15日、共同研究メンバーとともに四万十市立郷土資料館を訪れたが、そのとき古津賀遺跡と記されたラベルの前に小型瓶（鉢形有孔土器）（図1、写真1）が置かれていることに気付いた。そして、ともに展示されているほかの土器から判断すると、どうもその小型瓶は古墳時代中期あるいは後期のものであると推察された。こうした把手を有さない鉢形の小型瓶は、近畿地方から中・四国地方では一般に弥生時代後期から庄内式期までのあいだに存在するものと認識されている（木下1976、杉井1999）。しかし高知県地域はそれとは異なった状況なのではないか。郷土資料館でみたこの土器は、そのことを私に強く印象づけたのである。

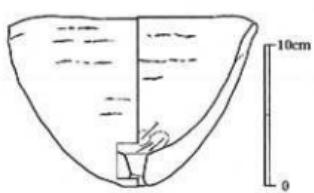
こうした小型瓶のあり方は、高知県在住の考古学研究者にとっては自明のことであるのかもしれない。しかし本稿では、日本列島全体の動向との比較を念頭に置きつつ、高知県地域の瓶形土器および竈の様相を整理しておきたいと思う。このことは、古墳時代における近畿地方中央部と列島周辺地域との関係、あるいは地域間の交流ルートを考察するうえでも有益なものになると考える。

### 1 中村平野—高知県西部地域—の様相

#### (1) 四万十市立郷土資料館展示の小型瓶

まず、四万十市立郷土資料館に展示されていた小型瓶についてみておこう。

展示ケースでは古津賀遺跡と書かれたラベルの前に置かれていたが、じつはそれは『中村市史』に共同中山遺跡出土として紹介されているものと同一である（中村市史編纂室1969：pp.140-141）。土器内面に鉛筆で書かれた注記「1953.1.6. 六世紀 東神木」からも、共同中山遺跡群出土であることを確認できる。

図1 四万十市立郷土資料館展示の  
小型瓶実測図写真1 四万十市立郷土資料館展示の  
小型瓶

この小型瓶は口縁部の一部を欠失するがほぼ完形で、口径17.5cm、高さ12cmの大きさである（図1、写真1）。ただし、口縁部付近が正円形をなしていないから、口径にかんしては計測部位によって若干の変動が生じる。体部は、丸底の底部から斜め上方に伸び上がり、ゆるやかに内縫しつつ口縁部に至る。口縁端部は丸く收められている。器壁厚は口縁部付近が約6mmであるのに対し、底部付近では2cmを超える。その底部に直径1~1.5cmの蒸気孔が1孔存在する。裁頭円錐の頂部を合わせたような蒸気孔の縦断面形状、および穿孔部の内外器壁にわずかな粘土の盛り上がりがみられることから、内外面の双方から穿孔作業が行われたことがわかる。焼成前穿孔である。調整は内外面とも縦ないし斜め方向の指ナデを基本とするが、口縁部付近のみ横ナデが行われている。内面の下4分の1には板状工具によるナデの痕跡がみられる。内外面のいずれにおいても粘土紐の継ぎ目が明瞭に残り、とくに外面器壁の凹凸が顕著である。胎土は微小な砂礫を少量含むがよく精製されたもので、焼成は良好、色調は内外面とも淡赤褐色である。

器高よりも口径が大きな鉢形をなすこと、タタキ目がみられないことに注意しておきたい。

## (2) 中村平野における瓶形土器の変遷

さて、上でみた小型瓶の位置付けはどのようになるのだろうか。それを考えるため、具同中山遺跡群、古津賀遺跡群、船戸遺跡を題材として、中村平野における瓶形土器の変遷を概観しておきたい。

**遺跡の位置と概要** 四万十市（旧中村市）の市街地の南において、四万十川右岸には中筋川が、左岸には後川が合流しているが、上記3つの遺跡のうち具同中山遺跡群は中筋川の左岸、船戸遺跡は右岸、そして古津賀遺跡群は後川の左岸に所在する。船戸遺跡は具同中山遺跡群の西約500m、古津賀遺跡群は東約4kmの位置にある。これらのうち具同中山遺跡群と古津賀遺跡群は、多くの須恵器や土師器、手捏ねミニチュア土器、土製や石製の模造品が検出されることから、古墳時代中期から後期を中心とした祭祀関連遺跡として全国的にも著名である。

**瓶形土器の変遷** まず、具同中山遺跡群IV-土器集中22および土器集中21出土の小型瓶（図2-

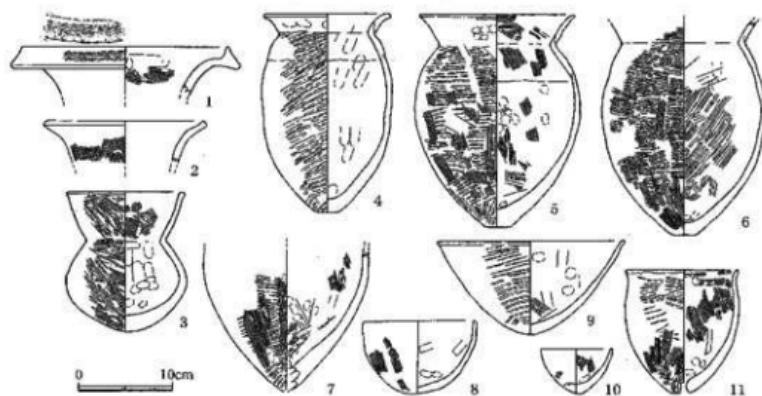


図2 四十万市具同中山遺跡群IV-土器集中22出土土器

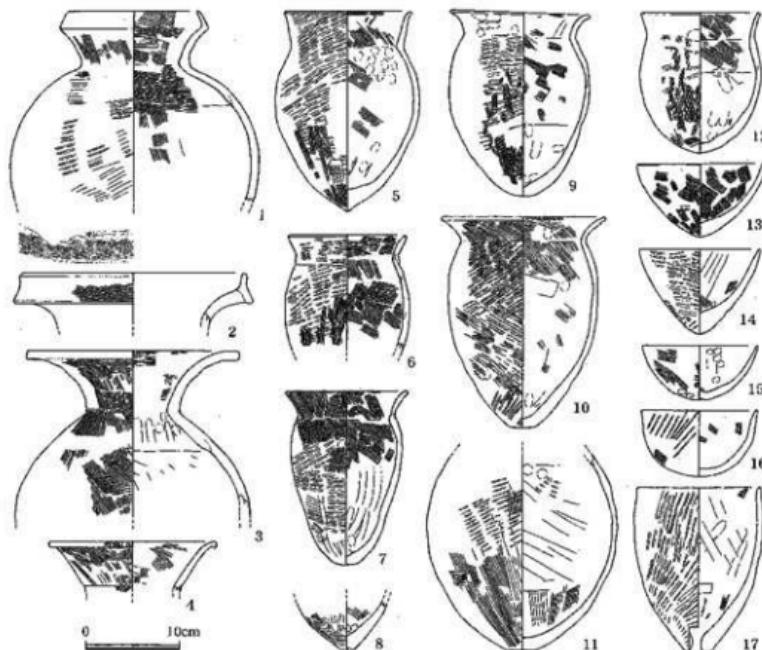


図3 四十万市具同中山遺跡群IV-土器集中21出土土器

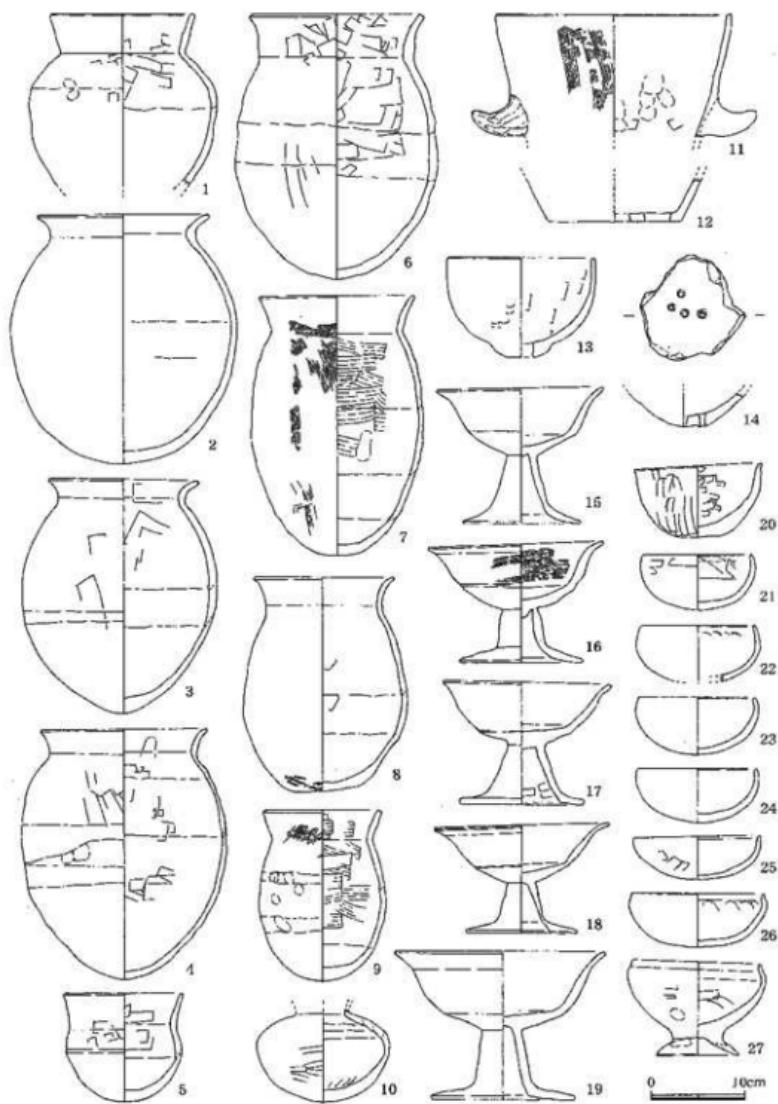


図4 四万十市具同中山遺跡群1986年度調査-祭祀跡7出土土器①（土師器）

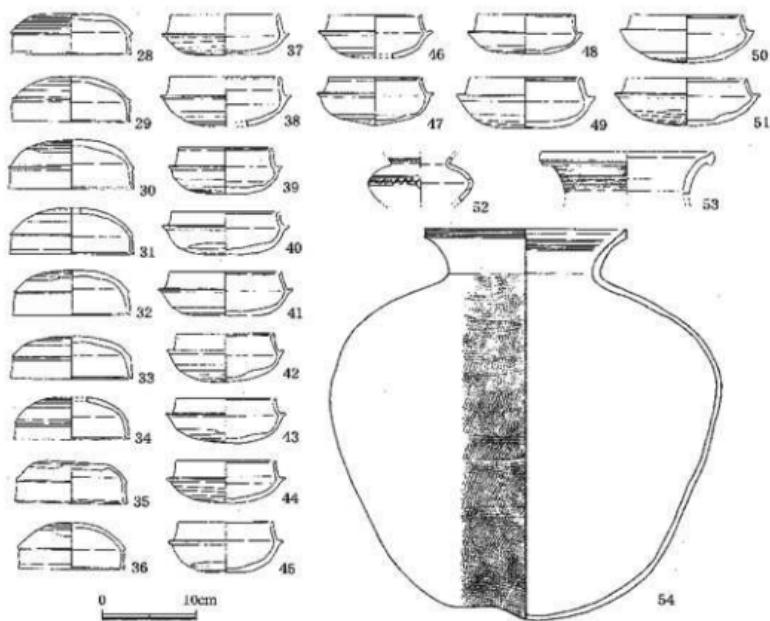
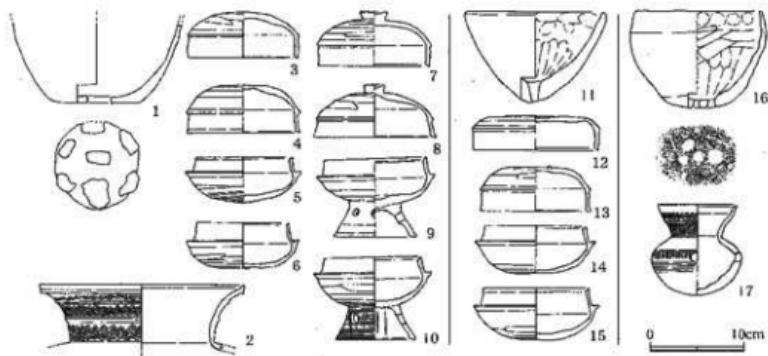


図5 四万十市具同中山遺跡群1986年度調査-祭祀跡7出土土器②(須恵器)

図6 四万十市具同中山遺跡群1989・1990年度調査-祭祀跡17・16・12出土土器  
(1~10:祭祀跡17, 11~15:祭祀跡16, 16・17:祭祀跡12) (2~10・12~15・17:須恵器)

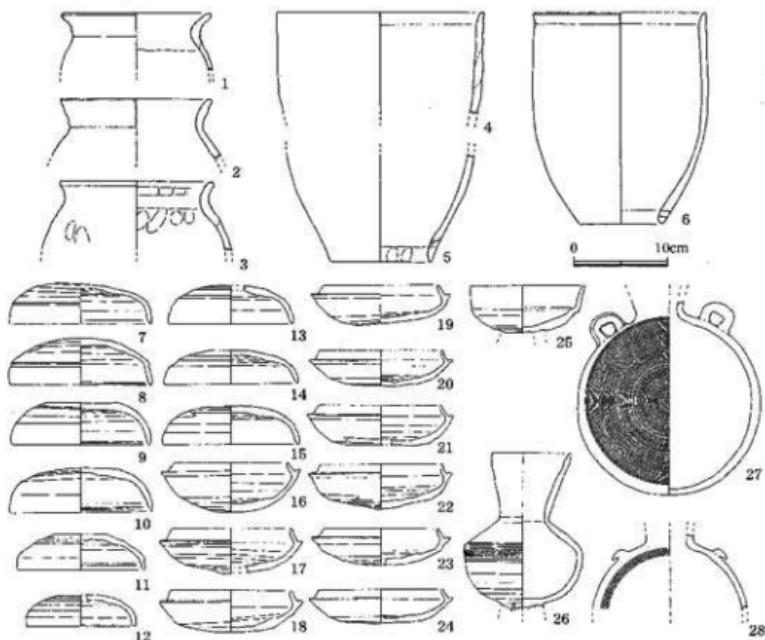


図7 四万十市古津賀遺跡群1986年度調査-祭祀跡5号土器 (7~28:須志器)

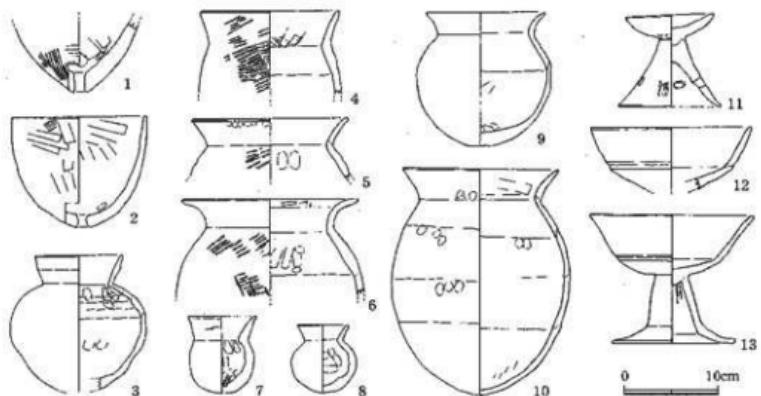


図8 四万十市船戸遺跡-第I区流路3X層川上土器

11, 3-17)を取り上げる(筒井編2001)。前者(図2-11)は、ゆるやかに外反した口縁部を有するもので、甕を小型にしたような器形をなす。その底部に焼成前に穿孔された蒸気孔1孔が存在する。全体がタタキ成形されたのち、外面下半のタタキ目がハケ調整によって消されている。内面もハケ調整である。後者(図3-17)は、縦長の砲弾形の器形をなすもので、その口縁部は外反せずに直立する。外面全体にタタキ目が残されている。これらはいずれも、その共伴土器から判断すると、出原恵三の弥生後期7期(出原1996)(これは出原2000の第VI-2様式に相当、従来のヒビノキII式後半)に位置付けられると思われる。しかし、前者、すなわち土器集中22出土の小型瓶(図2-11)は外面調整において古い特徴を残しているから、そのことを重視すれば、外反口縁を有するものが古相に位置付けられる可能性がある。

次に取り上げるのは、具同中山遺跡群1986年度調査-祭祀跡7出土の瓶である(図4-11~14)(出原・廣田・松田ほか1988)。11・12は、牛角状の把手および多孔タイプの蒸気孔を有する大型瓶である。実見をしていないが、発掘調査報告書に示された写真から判断すると、蒸気孔は中央に円孔1孔、周囲に横円孔4孔以上を穿つタイプであると思われる(山原・廣田・松田ほか1988: 図版129)。かなり手慣れた作りである印象を受ける。重要なのは、こうした把手をもつ大型瓶とともに、13・14のような把手を有さない鉢形の小型瓶が検出されている点である。13は蒸気孔1孔、14は棒状工具の刺突によって穿孔されたと思われる蒸気孔4孔を有している。共伴した須恵器(図5)を根拠にすると、これら瓶は古墳時代中期後葉、陶邑編年TK23型式期を中心とする時期に位置付けられる。当該時期に把手を有さない小型瓶が存在する点は、九州本島中北部地域および東日本と共に通する特徴であり(杉井2003: p.117)、きわめて注目される現象である。

具同中山遺跡群では、これと同時期の瓶が多数検出されているが、そのいくつかを図6に示した(前田・松田編1992)。1は1989・1990年度調査-祭祀跡17出土の大型瓶で、中央孔1孔、周囲孔6孔の蒸気孔を有している。しかし、上述の1986年度調査-祭祀跡7出土の大型瓶(図4-12)に比べてその蒸気孔はいびつであり、この種の瓶の製作に不慣れな人の手になるものと考えられる。11は1989・1990年度調査-祭祀跡16、16は1989・1990年度調査-祭祀跡12出土の小型瓶で、前者は単孔タイプ、後者は多孔タイプの蒸気孔を有している。把手をもたない小型瓶に多孔タイプの蒸気孔が穿たれることは、古墳時代中期の九州本島中北部地域や東日本の動向と矛盾しない。

図7に示したのは、古津賀遺跡群1986年度調査-祭祀跡5出土の土器である(出原・廣田・松田ほか1988)。4~6が瓶で、つつねに作った底部付近の器壁に小円孔が穿たれている。私が後付けの棲落しタイプとする蒸気孔形態である(杉井1999b: p.386)。おそらく、やや偏平な牛角状把手を有するものであろう。これらは、共伴する須恵器から古墳時代後葉、陶邑編年TK10~TK43型式期を中心とする時期に位置付けられる。なお、図は示されていないが、「底

部が、筒状をなさずに数個の小孔を焼成前に穿ったもの」（出原・廣田・松田ほか1988：p.25）が当遺跡で出土しているようであるから、同時期に小型瓶も少數ではあるが存在すると思われる。

具同中山遺跡群および古津賀遺跡群では古墳時代前期の窓の様相が不明確であるが、その時期に位置付けられる可能性のあるものとして船戸遺跡出土の瓶を取り上げておく（松田編1996）。それは図8-1・2に示した鉢形の小型瓶で、なかでも2が丸底指向の底部からなめらかに内輪しつつ口縁部に至る器形をなし、かつ口縁部付近にわずかにタタキ目を残すのみである点に注目しておきたい。ただし、これら瓶が検出されたのは流路に堆積した遺物包含層中であるから、ほかの遺物を根拠にその時期を明確にすることは難しい。ただ、3・9のような球胴の壺や甕が出土していることは重要であると考えている。

### （3）小結

**瓶形土器の様相** 中村平野における瓶形土器の動向のうち、注目されるのは、把手を有さない鉢形の小型瓶が古墳時代中期後葉、すなわち5世紀後半を中心とする時期に多数みられる点である。これは、上述したように、近畿地方や中・四国地方にみられる一般的な傾向とは異なるもので、九州本島中北部地域および東日本と共に通している。中村平野においては、弥生時代後期後半から終末期（庄内式期）にこの種の瓶が出現したと思われるが、古墳時代前期の様相は不明確ながらもそれは古墳時代後期にまで継続する器種であると判断される。私が四万十市立郷十資料館でみた小型瓶もこうした地域的特性を前提とすれば無理なく理解することができ、具同中山遺跡群の出土であることを加味すれば、古墳時代中期後葉に位置付けられる可能性が高いと思う。

一方、大型瓶については、古墳時代中期後葉に、牛角状の把手かつ多孔タイプの蒸気孔を有するものが存在する。そして、古墳時代後期後半には、つつねの底部付近に小円孔が穿たれるもの、すなわち後付けの棲渡しタイプの蒸気孔形態をとる瓶に変化している。こうした大型瓶の動向は、西日本に一般的なものである。

多孔タイプ把手付大型瓶が出現して以後にも小型瓶が存在する点、古墳時代後期に棲渡しタイプの蒸気孔がおもにみられる点をとくに重視すれば、九州本島でも中部地域の様相に近いといえるのではなかろうか（杉井1999a・2003）。

**窓の様相** さて、中村平野における窓であるが、堅穴式住居に造り付けられる窓についてはまったくその状況を把握することができていない。具同中山遺跡群III-3で検出された堅穴式住居1は5世紀前半に位置付けられるが、それが窓を有していないことを指摘できる程度である（廣田編2002：pp.90-91）。移動式窓については、遺物包含層中ではあるが具同中山遺跡群で付け底系統のものが出土している（川村編2008：p.49）。8世紀以降のものと思われる。

## 2 高知平野周辺地域—高知県中央地域—の様相

### (1) 高知平野周辺地域における瓶形土器の変遷

次に、高知県地域の中央部に広がる高知平野とその周辺における瓶形土器の様相についてみてみよう。

図9に示したのは、佐川町二ノ部遺跡-E区溝501出土の土器である（廣田編1995）。遺跡は、高知平野の西、四国山地の支脈に囲まれた斗賀野盆地の中央部に位置している。7・8が小型瓶で、くの字状に外反する口縁部を有している。いずれもタタキ成形のもの、内外面ともハケ彫刻がなされている。同じ溝から出土した十器から判断すると、出原恵三の弥生後期6期（出原1996）（出原2000の第VI-1様式に相当、従来のヒビノキII式前半）頃に位置付けられるのではないかろうか。

図10は、南国市泉ヶ内遺跡-堅穴式住居1出土の土器である（三谷編2000）。遺跡は高知平野東部、土佐国衙跡の北東約1.2km、ひびのき遺跡の西約4kmに位置している。26・27が鉢形の小型瓶で、その口縁部は直立する。いずれの外面にもタタキ目が明瞭に残されている。注目されるのは、6に示したような、胴部から鋭く屈曲して伸びる外反口縁の端部をつまみ上げ、胴部内面にはヘラケズリが施される庄内系の慶が同じ住居から出土していることである。ほかの共伴土器もあわせて考えると、出原恵三の古式土師器I期（出原1993a・1996）（山原1997によれ

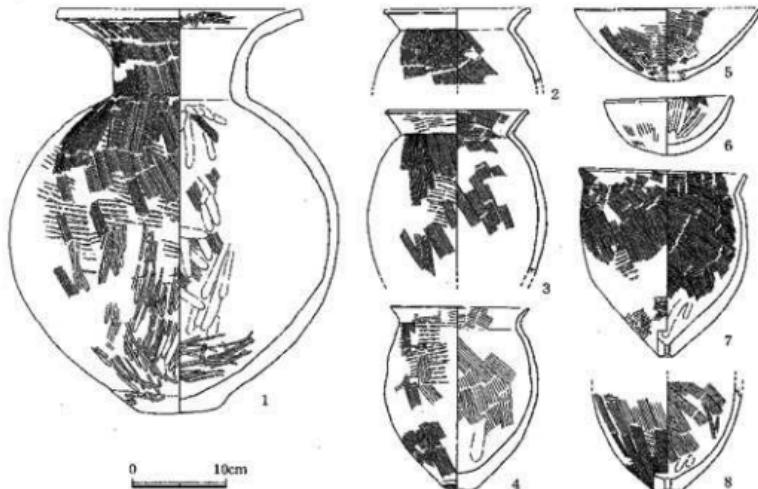


図9 佐川町二ノ部遺跡-E区溝501出土土器

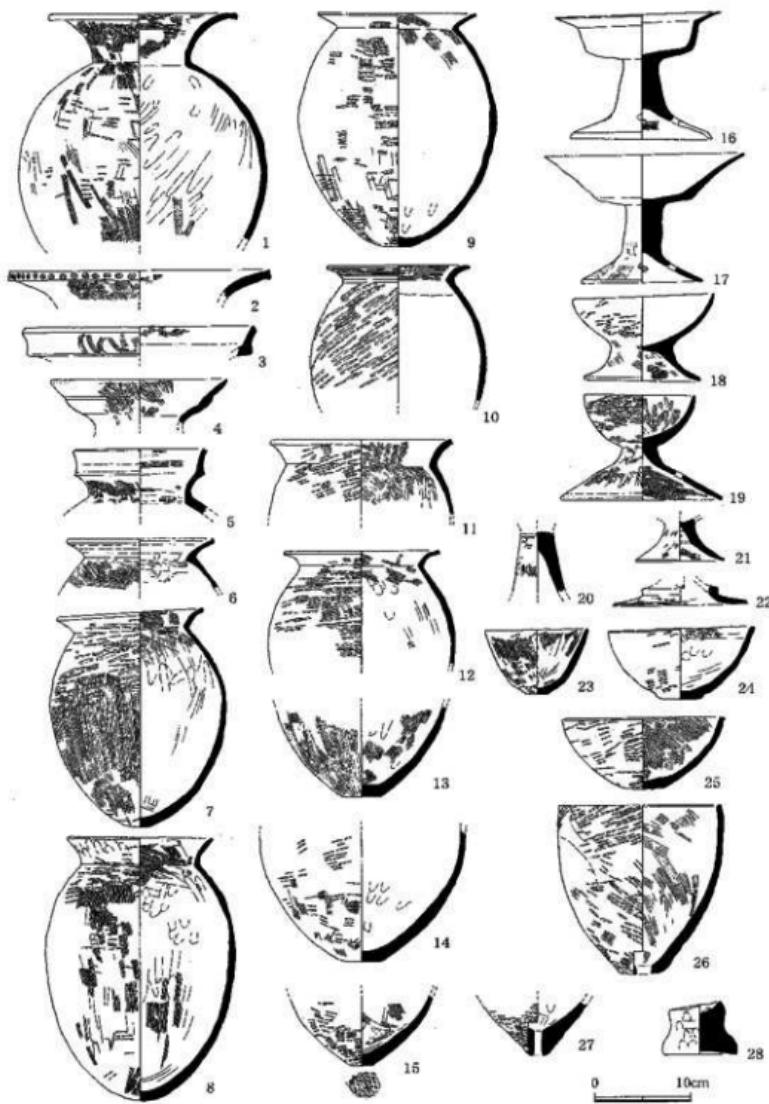


図10 南国市泉ヶ内遺跡-堅穴式住居1出土土器

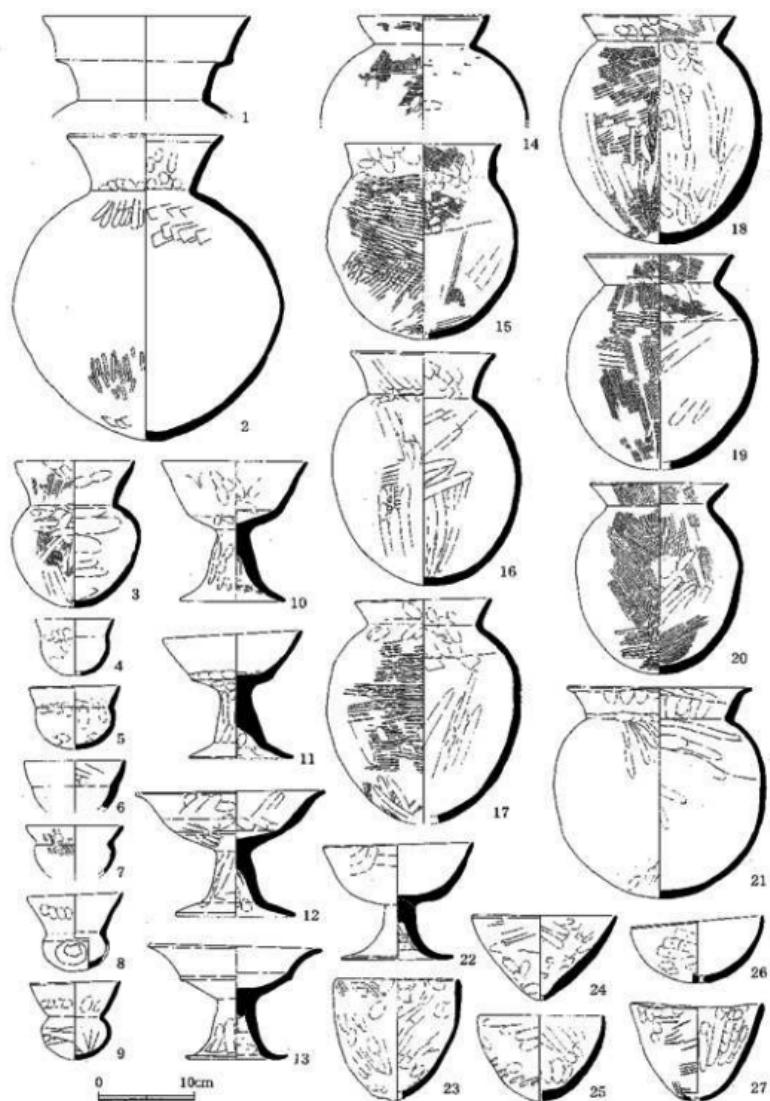


図11 土佐市居德遺跡群V-4 A区III d層出土土器

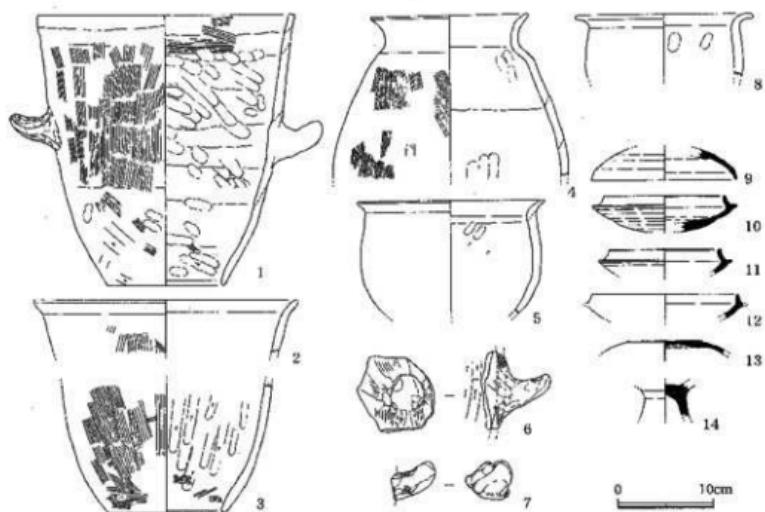


図12 香南市下ノ坪遺跡-B区堅穴式住居1出土土器（9～14：須恵器）

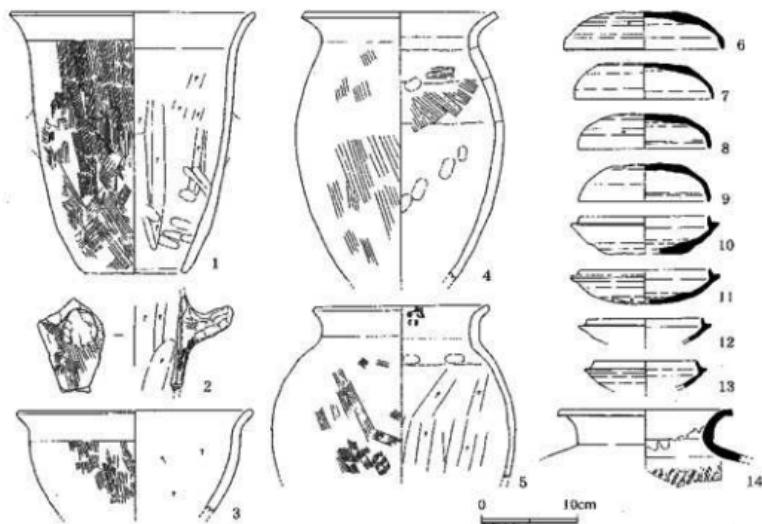


図13 香南市下ノ坪遺跡-B区堅穴式住居2出土土器（6～14：須恵器）

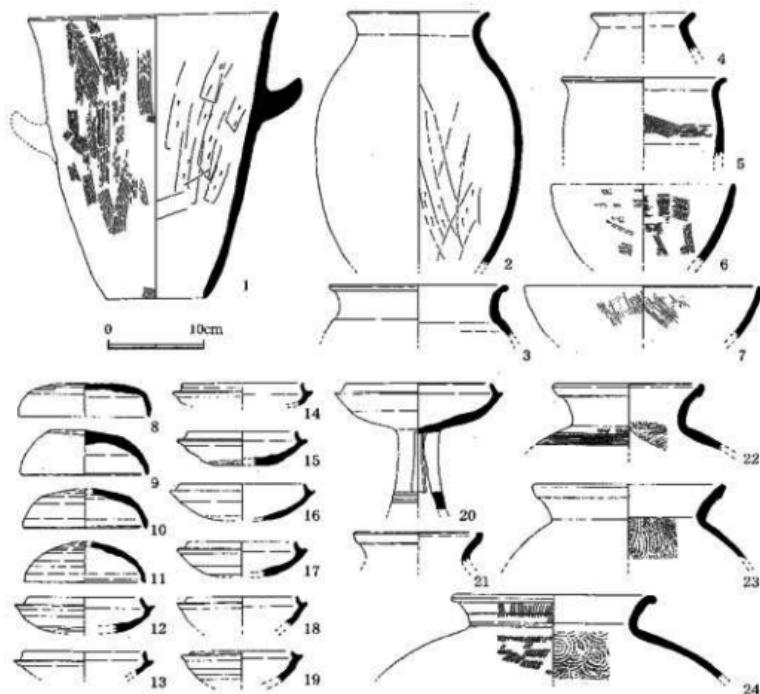


図14 香南市深割遺跡-C a 区堅穴式住居5出土土器 (8~24:須恵器)

ば「庄内式土器の後半、布留式土器との交替期に該当する時期:p.166)に位置付けられるであろう。

図11は、土佐市居德遺跡群V-4 A区III d層出土土器の一部である(藤方編2003)。遺跡は高知平野西部、仁淀川下流の右岸に位置し、沖積地を埋めるこの遺物包含層からは多量の上師器が検出された。なかでも重要なのは14のような布留式甕が存在する点で、これは布留式中段階から新段階に位置付けられる。発掘調査報告書に図示されたこれ以外のIII d層出土土器も、その

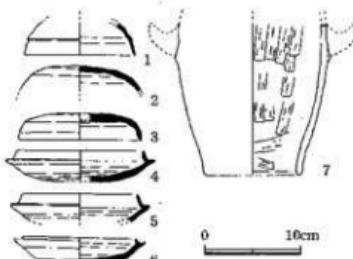


図15 香美市ひびのきサウジ遺跡-III層出土土器 (1~6:須恵器)

多くが古墳時代前期に属するものとみてよいだろう。当調査地点では明確な遺構が検出されていないが、この付近に古墳時代前期の集落が存在したことを推測できる。さて、23～27がこの遺物包含層から出土した小型瓶である。いずれのタキ日もナデ調整によって消されていること、器高よりも口径の方が大きいものが中心であることを重視すれば、これらを古墳時代前期に位置付けても大きな誤りはないと思う。

図12～15には、牛角状の把手を有する大型瓶を提示した。図12は香南市（旧野市町）下ノ坪遺跡-B区堅穴式住居1、図13は同B区堅穴式住居2、図14は香南市（旧野市町）深瀬遺跡-Ca区堅穴式住居5、図15は香美市（旧上佐山田町）ひびのきサウジ遺跡-Ⅲ層出土の土器であり、前3者が遺構にともなっている。いずれの遺跡も高知平野の東部に位置するが、ドノ坪遺跡と深瀬遺跡は物部川河口近くの左岸沿いに近接してあり、他方、ひびのきサウジ遺跡はその両遺跡から5kmほど北へさかのぼった物部川右岸の河岸段丘上に存在する。図12-1～3・6・7、図13-1・2、図14-1、図15-7が大型瓶で、把手はやや偏平な牛角状、蒸気孔はつつぬけタイプである。これらとともに出土した須恵器から、いずれも古墳時代後期後半から末、陶邑編年TK43～TK209型式期に位置付けられる。下ノ坪遺跡の堅穴式住居1・2で造り付け壺が検出されている点にも注意しておきたい。

なお、高知平野周辺地域における古墳時代中期の瓶形土器については、その様相を把握することができなかった。

## ② 小結

**瓶形土器の様相** 高知平野周辺地域においては、把手を有しない鉢形の小型瓶は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてその存在をうかがうことができる。南国市小籠遺跡出土土器の分析では、古式土器I期に「僅少ではあるが焼成前穿孔の瓶が登場する」と述べられていて（出原1996：p.131）、これを加味して考えれば、小型瓶はおよそ庄内式期を前後する時期に比較的多くみられる器種であると予想できる。古墳時代中期以降の実態はよくわからないが、下ノ坪遺跡や深瀬遺跡において大型瓶とともに小型瓶が検出されていない点をみると、中期以降にはほとんど存在しないのではないかとの印象をもっている。

大型瓶については、古墳時代後期後半から末に、つつぬけタイプの把手付大型瓶がみられる。中村平野の占津賀遺跡群出土の大型瓶は棟渡しタイプであったから、それとは蒸気孔形態が異なる点で注目される。ただ、占津賀遺跡群出土瓶の方が若干時期がさかのぼる可能性もあるため、この蒸気孔形態の差異が地域差を表すのかどうかの判断は現状では困難である。なお、私の調査・検討不足の可能性があるが、多孔タイプの把手付大型瓶の存在を知ることができなかつた。これは、その種の瓶がほとんど存在しないことを示しているのかもしれないが、それにもまして古墳時代中期の大型瓶の実態が不明なのだと思う。今後の重要な検討課題であろう。

**壺の様相** 造り付け壺についても、古墳時代中期の様相はまったく不明である。高知平野の

竈をもつ竪穴式住居については池澤俊幸によって（池澤1997）、また南国市土佐国衙跡で検出された竪穴式住居については『土佐国衙跡発掘調査報告書』第13集（三谷・坂本2008: pp.24-26）で集成されているが、それらをみても古墳時代中期の事例はみあたらない。これら先行研究から知ることができるのは、竈を有する竪穴式住居が高知平野周辺地域で一般的になるのは古墳時代後期後半（6世紀後半）以降であること、そして7世紀代にまで継続することである。また、高知平野の東部、土佐国衙跡周辺から物部川下流域を中心とする地域で多く検出されていることもわかる。つまり、上述したつつねけタイプの把手大型甌の動向と軌を一にしている可能性が考えられるのである。ただし、こうした竈と甌の関係を古墳時代中期にまで遍及させて考えることができるのかどうかはまた別の問題である。なぜなら、地方では造り付け竈よりも大型甌の出現の方がしばしば先行するからである。やはり、古墳時代中期の様相を明らかにすることが、今後に残された大きな課題であるといえるだろう。

なお、移動式竈については、香南市下ノ坪遺跡（出原編1998）や香美市ひびのきサウジ遺跡（高橋編1990）などで8世紀から平安時代後期までの出土事例を知ることができる。いずれも付け庇系統である。こうした現状で知り得たわずかな資料から推測するしかないのだが、移動式竈は8世紀以降になって出現した可能性を考えておこう。

### おわりに—日本列島南側の周辺地域としての位置付け

私は以前、表1を提示しながら、古墳時代中期以降に朝鮮半島系渡来文化の影響を受けて土師器のなかに新たに出現した要素は、近畿地方中央部を中心とした同心円型の地域性を示すことを論じた（杉井2003: pp.116-117）。この議論は、小さな地域性にはこだわらず大局をみたものであり、また近畿地方を中心にしてその東と西の比較を主眼としたものであったから、たとえば山陰地方沿岸部に造り付け竈が普及しないことなどはこの表には示されていない。また、

表1 日本列島における古墳時代土器の地域性

		沖縄諸島	奄美諸島	大隅諸島	久米南都	久留米北部	中田區・五箇	東海	関東	東北南部	東北北部	北陸道	
前方後円墳	造り付け竈												
		尖底甌	平底甌	脚台付甌			丸底甌 (舟釦文)	脚台付甌		平底甌	平底甌 (縞調文)		
中 ・ 後 期	甌	尖底甌 平底甌 ↓ くびれ平底甌	脚台付甌		長脚丸底甌	脚台 ↓		長脚平底甌			平底甌 (縞調文)		
新 規 出 現 基 本	多孔大型甌 規 出 現 基 本					△	○	×					
	つつねけ大型甌 小型甌 規 出 現 基 本					○	×	○					
						○	×	○					
						○	×	○					
						○	×	○					
						少數	多數	×					

当然のことながら、高知県地域を中心とした四国地方南部地域の様相もまったく示すことができない。つまり、日本海側と太平洋側の比較といったいわば日本列島を南北に区分するような視点ではこの表を作成していないのである。

では、ここまで検討してきた内容をもとにすると、古墳時代中期以降の高知県地域は日本列島のなかでどのような位置にあるのだろうか。

瓶形土器については、高知平野周辺地域は判然としないが、中村平野にみられるその様相は九州本島中北部地域に近いといえる。多孔タイプの把手付大型瓶が存在すること、そして把手を有さない鉢形の小型瓶が古墳時代中期以降にまで存続する点をとくに重視したい。愛媛県地域（道前平野・今治平野・松山平野）の瓶形土器を検討した白石聰が古墳時代のその地域には「旧来の弥生的な小型瓶の系譜がない（製作されない）」と述べている（白石2008：p.520）ことも参考にすると、中村平野にみられるこうした小型瓶の動向は四国地方においても注意されるべきものだと思う。一方、高知県地域における造り付け竈の様相は瓶形土器以上に判然としないが、現状の資料を根拠にすれば、その普及はかなり遅れると思われる。これを他地域と比較するならば、宮崎県地域の状況に近いと思う（杉井2004：p.309）。つまり、高知県地域における瓶形土器や造り付け竈の動向は、日本列島西側の周辺地域である九州本島と類似する特徴を有しているのである。

しかし、すべてが同じというわけではない。大きな違いであると思うのは、高知県地域では須恵器模倣杯がみられない点である。これは近畿地方や中・四国地方における一般的なあり方と共にし、他方、多くの模倣杯が検出される九州本島とは大きく異なっているのである。

こうしたことからわかるのは、日本列島西側の周辺地域である九州本島とはまた異なった周辺地域としてのあり方である。すなわち、小型瓶をみれば列島東西の周辺地域、中部地方東部地域から東北地方南部地域あるいは九州本島中北部地域に類似するが、模倣杯のあり方をみれば列島中央部の近畿地方に近いのである。つまり、古墳時代中期以降の高知県地域の生活様式にみられる様相は、列島南側の周辺地域としてのあり方の一端を示している。

以上のような高知県地域のあり方は、隣接他地域からの影響というよりは、むしろ古墳時代という中心周辺関係が顕著に表れる時代における周辺地域の動向の1つとして位置付けられるべきだろう。ただし、確実な前方後円墳が確認されていないことなど、高知県地域は政治的側面においても周辺地域とみなされるから、それが生活様式の動向とどのように関連するのかは今後の重要な検討課題である。たとえば、古墳時代後期になって高知平野に築造される横穴式石室墳との関係も気になるところである。なぜなら、現状の資料によるかぎり、横穴式石室墳と造り付け竈の出現時期がおよそ一致するようにも思えるからである。首長レベルの要素と民衆レベルの要素を安易に結びつけることには慎重であるべきだが、今後の高知大学による古墳の調査・研究活動を注視しながら考えていきたいと思う。

## 謝辞

資料調査および文献探索において、四万十市教育委員会の川村慎也氏、香南市文化財センターの松村信博氏、共同研究メンバーの出原恵三氏のお世話をいたしました。また、私が作成した実測図および写真の使用について、四万十市立郷土資料館の許可を得た。記して感謝の意を表したい。

## 引用・参考文献

- 池澤俊幸 1997「高知平野における古墳時代後期の整穴住居について—カマドより見た予察ー」『トノ坪遺跡』  
Ⅰ 農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書（野市町埋蔵文化財発掘  
調査報告書第5集） 野市町教育委員会：pp.115-124
- 岡本健児 1982「南四国における印旛のある弥生土器と土器部」『森貢次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻 森  
貢次郎博士古稀記念論文集刊行会：pp.927-946
- 木下正史 1976「古代炊飯具の系譜」『古代・中世の社会と民俗文化』和歌森太郎先生追憶記念論文集 弘文堂：  
pp.61-94
- 白石 駿 2008「古墳時代今治平野における炊事形態の受容と普及—造り付けカマドと瓶形土器の検討を通じて—」  
『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集 愛媛大学法文学部考古学研究室：pp.505-524
- 杉井 健 1999 a「熊本県における瓶形土器と竈の普及—熊本県出土瓶形土器・造り付け竈・移動式竈の集成ー」  
『文学部論叢』第65号 歴史学篇 熊本大学文学会：pp.103-131
- 杉井 健 1999 b「瓶形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集 大阪大学  
考古学研究室：pp.383-409
- 杉井 健 1999 c「炊飯様式からみた東西日本の地域性」『古代史の論点』第6巻 日本人の起源と地域性 小学  
館：pp.103-124
- 杉井 健 2003「生活様式における中心周辺関係の成立とその意義」『先史学・考古学論究』IV 考古学研究室  
創設30周年記念論文集 龍田考古会：pp.101-125
- 杉井 健 2004「前方後円墳分布圖とその周辺における生活様式伝播の多様性」「文化の多様性と比較考古学」考  
古学研究会50周年記念論文集 考古学研究会：pp.307-314
- 出原恵三 1993 a「S T 5・6出土の古式土器について」『坪原遺跡』山南地区県営圃場整備事業に伴う坪原遺  
跡緊急発掘調査報告書（香我美町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集） 香我美町教育委員会：pp.55-59
- 出原恵三 1993 b「弥生から古墳へ—前期古墳空白地域の動向ー」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会：  
pp.119-139
- 出原恵三 1996「小籠遺跡出土の弥生後期土器及び古式土器」『小籠遺跡』Ⅱ あけぼの道路建設工事に伴う  
発掘調査報告書（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第24集） 財團法人高知県文化財団埋蔵文化財  
センター：pp.130-133
- 出原恵三 1997「高知平野の山式土器」・Ⅱ期について』『小籠遺跡』Ⅲ あけぼの道路建設工事に伴う発掘

調査報告書（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第29集） 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター：pp.165-168

出原恵三、2000「土佐地域『弥生土器の様式』と紀年—四辯編一』木耳社：pp.367-446

浜田恵子 1996「小堀遺跡出土の支脚について」『小堀遺跡』Ⅱ あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第24集） 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター：pp.140-143  
廣田伸久 1991「周辺地域における土師器の様相—1. 南四国の古式土師器—」『研究紀要』第1号 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター：pp.1-22

#### 遺跡文献

##### 〈具同中山遺跡群〉

川村慎也編 2008『四十市埋蔵文化財発掘調査報告』平成2年度～平成16年度 市内遺跡試掘確認調査報告書（四十市文化財調査報告第3輯） 四十市教育委員会

筒井三葉編 2001『具同中山遺跡群』Ⅳ 県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第59集） 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

出原恵三・廣田伸久・松田直則ほか 1988『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 古津賀遺跡・具同中山遺跡群 高知県教育委員会

中村市史編纂室 1969『中村市史』中村市

廣田伸久編 2002『具同中山遺跡群』Ⅲ-3 中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書XI（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第70集） 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

前田光雄・松田直則編 1992『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ 具同中山遺跡群（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集） 高知県教育委員会・財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（古津賀遺跡群）

出原恵三・廣田伸久・松田直則ほか 1988『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 古津賀遺跡・具同中山遺跡群 高知県教育委員会

##### 〈船戸遺跡〉

松田直則編 1996『船戸遺跡』中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集） 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

##### 〈二ノ部遺跡〉

廣田伸久編 1995『岩井口遺跡、二ノ部遺跡・城跡』佐川町斗賀野地区県営開拓準備事業に伴う発掘調査報告書（佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集） 佐川町教育委員会

##### 〈泉ヶ内遺跡〉

三谷民雄編 2000『泉ヶ内遺跡』久礼田地区一般農道整備事業に伴う発掘調査報告書（南国市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集） 南国市教育委員会

## (居德遺跡)

藤方正治編 2003『居德遺跡群』V 四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集）財團法人高知県文化財埋蔵文化財センター（下ノ坪遺跡）

出原恵三編 1997『下ノ坪遺跡』I 農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書（野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集）野市町教育委員会

出原恵三編 1998『ドノ坪遺跡』II 農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書（野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集）野市町教育委員会

## (深洞遺跡)

吉原達生・高橋啓明・出原恵二 1989『深洞遺跡発掘調査報告書』（野市町埋蔵文化財調査報告書第1集）野市町教育委員会

## (ひびのきサウジ遺跡)

高橋啓明編 1990『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』（土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集）土佐山田町教育委員会

## (土佐國御跡)

三谷民雄・坂本裕一 2008『土佐國御跡発掘調査報告書』第13集 神木・国庁・中殿堂・神ノ木戸地区の調査（南国市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集）南国市教育委員会

## 挿図・写真・表出典

図1：杉井実測

図2・3：篠井編2001

図4・5・7：山原・廣田・松田ほか1988

図6：前田・松田編1992

図8：松田編1996

図9：廣田編1995

図10：三谷編2000

図11：羅力編2003

図12・13：山原編1997

図14：吉原・高橋・出原1989

図15：高橋編1990

写真1：杉井撮影

表1：杉井2003



## 5. 古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート

橋本 達也

### はじめに

筆者は以前、四国における古墳築造動態について論じたことがある（橋本1998・2000）。古墳時代前・中期の前方後円墳は四国北東部に集中し、また数も多い。一方で、その他の地域には広大な古墳非築造地域が拡がっていること、そこに瀬戸内を中心とする交流ルートが関わっていることを指摘した。

なかでも、高知地域では弥生時代には田村遺跡の大集落や多くの青銅器などを代表としてきわめて多くの資料・情報が見出せるにも関わらず、前・中期に古墳築造がきわめて不活発である。すくなくとも、古墳築造を通して社会的諸関係を表示するこの時代の社会構造には同調しておらず、そこに緊密なネットワークは形成されていなかつたものとみられる。弥生時代集落の盛行状況からすれば、そこには農業生産力の発展といった社会基盤とは異なる別の要因が背景にあることは間違いないかろう。これまでこういった地域をいかに評価できるかは積極的に取り上げられたか、あるいは遅滞した社会とみられがちであった。

また筆者が近年の研究フィールドとしている九州南部は大隅地域にまで数多くの古墳が築造され



図1 本稿でふれる九州・四国の地域名称

る一方で、薩摩地域にはきわめて限ったにしか古墳が存在しない。ここでは詳述しないが、かつて、この地域では地下式横穴墓など独自墓制の存在などを取り上げて、辺境の古墳文化とされ、前方後円墳には派遣将軍、地下式横穴墓には異民族隼人を当てはめるような言説がなされてきた。しかし、それも前方後円墳に伴う地下式横穴墓の存在や地下式横穴墓での多彩な副葬品などが知られるようになり、かつての紋切り型の理解は成り立たないことが明らかとなっていいる。

ただ、それにしても、宮崎・大隅は近畿中央部からみると地理的には四国よりも遙かに遠い地域にある。はたして、九州南部東岸に数多くの古墳が造られる背景にはどのような要因があるのか、あるいはこれまで見過ごされたかった古墳をつくらない地域が広く存在するのはなぜか。この問題を考えるために、本稿では古墳分布および出土遺物を通して、古墳時代社会の各地域を広く結びつけていたネットワークの実態に迫ろうとするものである。

ここでは太平洋に接した豊後水道・日向灘を挟んで向かい合う九州南東部と四国南西部地域を主な検討対象とするが、以前論じたように（橋本1998：pp.164-165）、四国では瀬戸内の北東部に前・中期古墳が集中する一方で、後期古墳はそれまで県だつ存在ではなかった松山平野が卓越した存在となり、高知平野においても古墳や横穴式石室が広く分布するようになるなど、古墳時代後期とそれ以前の様相は眞質といえるまでに変化する。情報・物資ネットワークが再編されたとみられ、後期とそれ以前を同列に比較できないことが明らかである。そこで、検討に当たっては各時期を通してみて行くことも重要ではあるが、本稿ではひとまず前期・中期の地域間交流に絞って論を進めたい。

## 1 九州東岸の古墳時代広域交流

### (1) 古墳時代前期

古墳時代前期における広域間のネットワークの存在を明示するのは前方後円墳の存在であることは他言を要しないであろう。また、同時に外的な要因でもたらされる代表的な文物に三角縁神獣鏡に代表される鏡がある。まずは九州東岸地域でのこれらの分布を確認しよう（図2）。

鹿児島県肝付町塚崎古墳群は5基の前方後円墳のうちに、列島最南端の前方後円墳を含む古墳群であるが、近年、古墳範囲確認の発掘調査が行われ新たな様相が明らかになった（新福輪2009）。すなわち、塚崎25号墳や43号墳では古墳時代前期中葉～後葉にさかのぼる土器が確認され、以前は墳丘形態のみで前期古墳と推定するしかなかった未発掘の前方後円墳も（柳沢1999）、前期にさかのぼることが確実な状況となった。九州南部の「原」と呼ばれる平坦な台地の縁辺に前方後円墳を築造し、その周辺に各種の古墳を築く状況は宮崎県西都原古墳群などの様相とも共通する。すでに古墳時代前期に前方後円墳はその分布の南端に到達しているのである。ただし、ここでは古墳の主体部・副葬品などの情報がないので詳細な検討はできない。

この時期の近畿中央政権との結びつきを代表する三角縁神獸鏡は現状では宮崎県西都原13号墳が南限であり、また宮崎県持田古墳群では推定44号墳出土の三角縁神獸鏡がある。その他にも持田古墳群内出土と推定される資料には景初四年銘盤龍鏡など多数の鏡がある。必ずしもすべての前期古墳に鏡が伴うとまでは言えないものの、宮崎平野地域の首長層には一定の鏡の配布が想定できるのである。副葬品の明らかになっていない前期大型前方後円墳を複数造営する生目古墳群などにも、その保有が十分想定できるであろう。また、塚崎古墳群でもその保有を想定して問題ない。

九州東岸では豊前に多量の三角縁神獸鏡をもつ福岡県石塚山古墳や大分県赤堀古墳などがある。また、大分県上ノ坊古墳では中国製三葉文環頭大刀、大分県小熊山古墳では初期の埴輪群などが確認されており、近畿中央政権との濃密な連繋をうかがわせる。これら九州東岸北部地域を拠点として経由した豊後水道・日向灘ルートではその南端の地域に至るまで、古墳時代前期から近畿中央政権に連なるネットワークが形成され、人・モノ・情報が頻繁に行き交い、各地域で首長層が古墳築造を行っていたことをまず確認しておきたい。

## (2) 古墳時代中期

古墳時代中期の地域間交流を明らかにする資料として、ここでは半島系鉄製品、九州南部の南部の初期須恵器、鉄製甲冑、南島系貝製品を探り上げる。

**半島系鉄製品(図3)** 古墳時代中期には朝鮮半島から鉄製品を中心とする多くの文物が日本列島にもたらされているが、九州東岸の広域交流を検討する際には鉄錠・鏃子・初期U字形鍛錬先などの分布が手がかりになる(橋本2008b)。

鉄錠はもっとも明確な朝鮮半島製鉄製品である。奈良県大和6号墳の872枚に代表されるように近畿中央部に分布の中心があり、その多くは政権との関係によって配布されたものと考えら

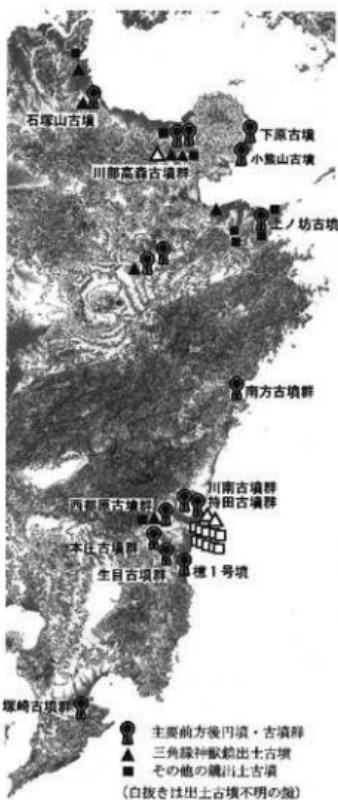


図2 九州東岸主要前期古墳と鏡

れるが、また、なかには近畿中央政権を介さない朝鮮半島との直接的な交易にもとづいて入手されたものもあるとみられる。少なくとも鐵鋌の保有は、朝鮮半島諸地域との鉄に関する価値の共有を象徴しており、加耶諸国ないしは新羅に連なるネットワークの存在を表している可能性がうかがえる資料である。

鐸子もまた古墳時代中期に現れる半島系鉄製品である。その製作技法には馬具との関連性も高く、列島内で発案されたものとは考えられない。中期後半から後期にかけての新しい段階では列島内での製作も十分想定できるが、その使用も含めて半島の文化に出自をもち、その影響がうかがえる。

朝鮮半島系の耕具であるU字形鍛鋌先はTK73～216型式段階に日本列島で出現し始め、TK208～23型式段階以降は広域に普及する。とくにTK216型式段階以前の資料は少なく、この時期の資料は半島製ないしはその直接的な影響の下に製作されたものと考えられる。よって、TK216型式段階以前の例は初期U字形鍛鋌先として半島系資料と理解する。

以上の資料の分布を九州においてみると、とくに九州東岸では北部の豊前・豊後地域から、



図3 九州における古墳時代中期の半島系鉄製品

南部の宮崎・肝属地域までの各拠点ごとに出土が確認できる。さらに、これら3器種の他にも朝鮮半島系金属製品として大隅の大崎町では鋳造鉄斧の採集品、同町神領10号墳・鹿屋市萩川29号地下式横穴墓では初期の胡籠が出土している。宮崎では下北方5号地下式横穴墓で柄付手斧・垂飾付耳飾・初期馬具、六野原6号墳で三叉の又銀、六野原10号地下式横穴墓で初期馬具、西都原4号地下式横穴墓では垂飾・冠とみられる金銅製品片などがある。

古墳時代中期では近畿中央政権からの配布も考えられるため、これらすべてを

直ちに朝鮮半島の諸勢力と九州東岸の諸勢力の結びつきを表すものとまでは言えないが、いずれにしてもその分布から古墳時代中期において九州東岸の各拠点地域を結び朝鮮半島諸地域に連なる広域ネットワークが緊密に機能していたことを確認できるであろう。

**九州南部の初期須恵器** 初期須恵器の分布をみると、近年、肝属地域の古墳から新たな出土資料が相次いでおり、この地域内に相当量の初期須恵器の存在がうかがえるようになった。近隣に生産地がないにもかかわらず、一地域内の須恵器出土量としては列島内でも屈指の量といつて良い。しかも、生産地が近在しないことを反映して、この地域出土の須恵器は少なくとも4箇所以上の複数生産地の須恵器がもたらされる多様な様相をもっていることが明らかになっている（橋本2008a）。肝属地域での須恵器の产地は大阪府陶邑窯や愛媛県市場南組窯などの瀬戸内沿岸の窯と想定され、古墳時代中期には瀬戸内ルートに連なる九州東岸のネットワーク上で首長層を中心とするきわめて頻繁な交流の存在が確認できる。

**甲冑（図4）** 鉄製甲冑は同時代において最も高度な技術を多用しつつも地方様式をもたないこと、分布の中心が大阪府古市・百舌鳥古墳群およびその周辺にあることから、その被葬者集團である近畿中央政権中枢の管理下で生産され、政策的に配布されたものとみなされる。

中期を通してみると基本的に沿岸部に面した九州の各平野において甲冑の存在が確認できるが、中期後葉にはその分布に若干の変動があり、内陸部にまで広く分布するようになる。とくに中期後葉の宮崎平野やえびの盆地での集中は全国的にみても特異な様相を呈しており、この時期の朝鮮半島情勢とも関わる近畿中央政権の軍事的な政策に関連するものと理解できる（橋



図4 九州の中紀甲冑出土古墳分布

本2003: pp.198)。とくに中期後半代の九州南東部には軍事情勢を背景として近畿中央政権と直接的な政治的紐帶を取り結んだ人物の多数存在したことがうかがえる。

**前方後円墳の分布** 古墳時代中期の九州南部では数多くの前方後円墳が築造されている。西都市西都原古墳群の女狭穂冢古墳・男狭穂塚古墳、肝属平野の東串良町唐仁大塚古墳・大崎町横瀬古墳は、いずれもその築造時期の同一時間幅の中では九州最大の前方後円墳であり、播磨以西の西日本では金蔵山・造山・作山古墳などの吉備の巨大古墳に次ぐ規模を誇っている。

また、女狭穂塚古墳はその墳形、陪冢の配置などとともに埴輪製作技術などからみても、古市・百舌鳥古墳群の巨大古墳と共に通する様式を備えている。前方後円墳の規模や数、そして質からみても列島内の前方後円墳築造集中地域の一つといって良い。

すなわち、半島系鉄製品や甲冑が多く存在することの背景には大型古墳の築造にもみられるように古墳時代社会の地域における中核的な拠点を形成していたことがみて取れるのである。

### (3) 南からの交流ルート、東西交流－貝釧と石棺・石製表飾－

**貝製品** (図5) 上記の諸要素は近畿中央政権との関係によって配布されたり、玄界灘や漸

戸内ルートを介して九州東岸に沿って九州南部にまでもたらされたものと考えられるが、一方で南の地域から北へ向かって影響を与えたことの確認できるものとして南島の貝製品がある。

弥生時代以降、古墳時代においてもゴホウラ、イモガイ、オオツタノハなどに代表される奄美諸島以南の南島を主産地とする大型貝を用いた諸製品の広く分布することが知られている。これらの古墳時代社会への流入に木下尚子は、九州西岸ルートの「西の貝の道」と九州東岸ルート「東の貝の道」の存在を指摘し、「西の貝の道」は弥生時代以来



図5 古墳時代中期の貝釧出土古墳・地下式横穴墓

の伝統的交易路、「東の貝の道」は弥生終末期以降に新しく開発された交易路と位置づけた。古墳時代中期に至っても西の貝の道は存続し、畿内や朝鮮半島とも交流を行ったとする（木下1996）。

古墳時代中期の貝釧の分布をみると、九州南部と豊後沿岸地域に集中して出土し、とくに宮崎内陸部での集中分布が目立っている。これらはほとんどが地下式横穴墓からの出土資料であるため、その遺存状態の良さから検出されやすいという側面がないとは言えないが、それにしても南島ルートとの頻繁な交流は否定できず、この地域が古墳時代中期における南島産貝釧の最大の消費地であることは間違いない。宮崎平野西部（国富）～都城盆地～えびの盆地では、ゴホウラ・イモガイ・オオツタノハが揃い、それぞれ、3・147・41個体（東2006）と數も他地域と比して圧倒的に多い。

その人手・交易に少なくとも、南島ルートを結ぶ交易拠点、港湾をもった肝属・宮崎平野地域の首長層が関わっていることは想像に難くない。

**繁根木型貝釧** かたや、九州西岸地域を代表する古墳時代中期の南島産貝釧と目されてきたものにゴホウラ製の繁根木型貝釧がある。繁根木型貝釧は木下によって、広田遺跡出土資料に代表される種子島にその源流があり、その影響下に中期前半で豊後に現れた祖型のゴホウラ背面貝釧が現れ、筑後に入り繁根木型貝釧として完成し、肥後・肥前・日向に伝わったとされているものである。そして氏は筑後の勢力が「西の貝の道」の中心的主催者である可能性を考える（木下1996：pp.48-49・53-54）

しかし、有明海沿岸の繁根木型貝釧出土古墳は貝釧を単体でしか出土しておらず、また周辺に貝釧出土古墳の面的な分布がみられない。出土古墳も塚堂古墳や伝左山古墳など九州でも屈指の有力首長墳に代表され、むしろ稀少財として入手された様相ともみられる。むろん、これらの首長がその生産と配布に関わったとみることも不可能ではないが、それにしてはこの貝釧も宮崎平野～内陸部にひとつの分布のまとまりがあることをうまく説明できない。筑後平野から宮崎平野～内陸部に至る古墳時代のルートは想定にくく、豊前ないし豊後から南へ下らねばならないが、一旦筑後まで運ばれた貝がさらに大きく南へ下ってくるのであろうか。

むしろ、繁根木型貝釧は、九州南部がその人手・製作・流通の要を握っており、豊後・豊前から阿蘇ルート・日田ルートといった内陸を介して九州西岸側へもたらされたとみる方が妥当なのではなかろうか。

豊後では中期中葉までに他地域に先行してゴホウラ製貝釧を保有する古墳が現れる。また、九州南部では一部の上位階層に限らず地下式横穴墓において、貝釧を広く受容しており、常態的な入手が行われていたとみられる。そこには南島との頻繁な交流があったものと考えられ、九州西北部の限られた階層にわずかに貝製品が入る様相とは大きく異なっている。この地域の地下式横穴墓造営者が繁根木型貝釧だけを筑後から入手するとも理解し難い。

また、九州西南部の要衝、薩摩地域では古墳時代前期末～中期初頭の薩摩川内市天辰寺前古墳の他に明確な古墳時代の貝釧がみられないことも西岸ルートが南島へのメインルートではなかったことを示している。薩摩地域では古墳時代前期後半に古墳が点在して築造されるが、中期以降では指宿市弥次ヶ湯古墳が築造されるのみである。中期以降、広域交流の痕跡がないわけではないが、相対的に不活発な地域で（橋本2009a）、熊本や筑後地域に貝製品が存在することをもって九州西岸ルートが安定的な南北交流を行っていたとする歴史像はとても描けない。

それに対して、都城盆地からえびの盆地にいたる宮崎内陸部では貝釧の質量とともに他地域を圧倒し、また武器武具を中心とする先進的な文物の入手などわめて活発な地域間交流が確認できる。南島産大型貝の人手には東岸ルートの結節点、肝属平野ないしは宮崎平野を経出したものとみて間違いなかろう。そして宮崎平野西部の国富地域での繁根木型貝釧の出土を考慮すると、宮崎平野から大淀川を上るルートがもっとも妥当性が高く、宮崎平野地域の首長層こそが、その人手・生産と流通にもっとも重要な役割を担ったものと推定できよう。

**石棺・石製表飾** 木下尚子もその関連を指摘するが（木下1996：pp.52-54）、あわせて述べておくと貝製品の分布とも関係の深い古墳時代中期における九州東西地域の交渉を明示するものに石棺と石製表飾がある。豊後臼杵地域の系譜にある石棺が筑後地域の大牟田市黒崎山古墳の埴輪施設に採用されており、石工の移動を含む人・情報ネットワークの存在がうかがえる（高木1987：p.245・柳沢1987：p.209）。そもそも九州において阿蘇溶結凝灰岩製の削抜式石棺は熊本北部・南部地域で出現し、筑後地域などの周辺に影響が及ぶものである。臼杵地域などにおける九州東岸の石棺の出現もこれと無縁とは考えられず、豊後地域-筑後地域-熊本各地域には人的移動を含む内陸経由のネットワークが間違いなく形成されている。

同様に、石製表飾はその最も初期の資料が臼杵地域の白堀古墳・下山古墳の短甲形にあり（図6-2・3・5）、そこから筑後地域に波及し、さらに多様化しつつ熊本地域などにも及んだとみられている（柳沢1987：p.183-184）。この背景に、柳沢一男は石工集団の交流を介した両地域勢力の交渉を想定している。すなわち、石棺・石製表飾からみて臼杵地域と筑後平野の両地域間にはきわめて頻繁な交渉を行うネットワークの存在が確認できるのである。

また、臼杵地域の石棺は宮崎県延岡地域の石棺とも形態的な共通性が高く、同型とまでは言えないまでも関連性の高い系譜であることはこれまでから論じられている（高木1987：p.245・柳沢1987：p.209）。延岡地域の石工が関わったとみられる石棺は肝属地域の神領10号墳に採用されていることが近年判明しており（橋本2009b）、また唐仁大塚古墳の石棺も同様に考えられる（橋本2006）。延岡から臼杵地域、とくに豊後に古墳時代九州東岸における交流拠点として、南北-東西の結節点であったことが確認できるのである。

**臼杵の二古墳（図6）** さらに、臼杵地域の古墳に目を向けておこう。白堀古墳では阿蘇溶結凝灰岩製の石棺をもち、墳丘には最古に位置づけられる短甲形の石製表飾を樹立する。その

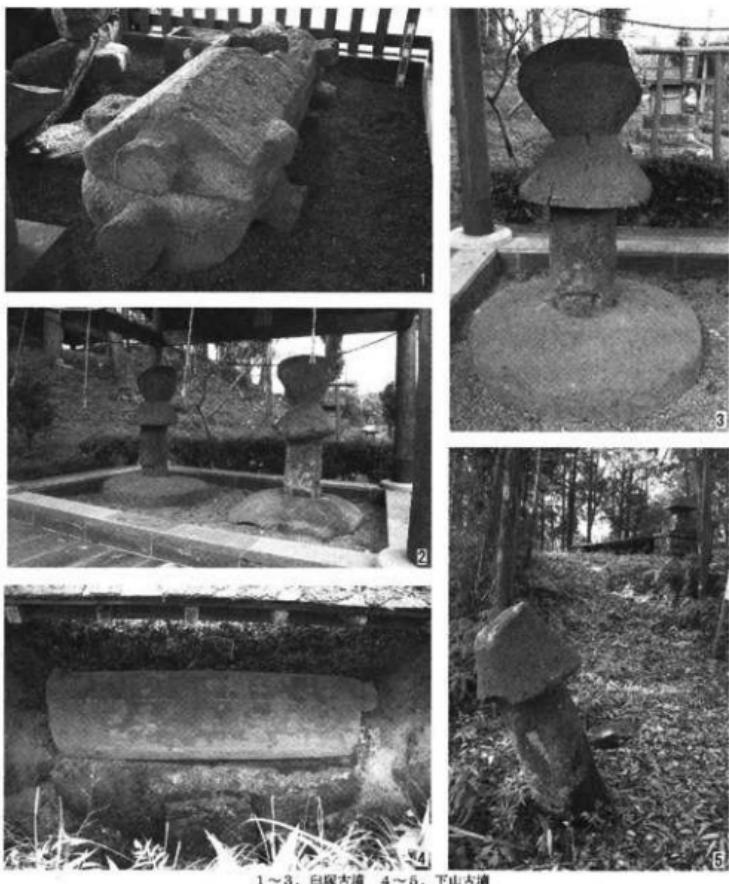


図6 白杵の二古墳の石棺と短甲形石製表飾

副葬品の中には鏡や革縫甲冑・鳥舌鐵とともにゴホウラ背面貝釧などを備えている。

近接する下山古墳は阿蘇溶結凝灰岩製の組合式家形石棺をもち、ここでは鏡・刀劍類の他、鉄艇・鍔子などが出土している。

九州西岸地域との交流、近畿中央政権からの武具の配布、種子島を経由する南島からの貝製品、朝鮮半島系鐵製品という広域交流にもとづく各種の資料がこの二古墳に集積されており、とくに古墳時代中期中葉頃に広域交流の重要な拠点としての役割を担っていたことが確認できる

のである。これらをあわせてみれば、その後の中期後葉に拡がる繁根木型貝釧の流入も九州東岸ルートを経て行われたものとみるのがより妥当性が高いと考える。

なお、繁根木型貝釧は中期後葉の韓国西南部、海南郡造山古墳や石川県孤山古墳といった広域への移動もしている。孤山古墳は新羅系帶金具などをもち半島との関わりの強い古墳である。造山古墳は貝釧の出土とともに小型微製鏡も出土し、その石室は豊前の番塚古墳に酷似する（柳沢2001：p.133）。繁根木型貝釧が出土した同系石室の佐賀市閑行丸古墳とともに、北部九州に系譜をもつ石室と理解され、またこれらの古墳の石室は巨済島の長木古墳や若狭の向山1号墳・十善の森古墳の石室との関係も指摘される（河2006・高橋2007）。

朝鮮半島諸地域や北陸にいたる広域との交流には、この時期の九州を代表する有力首長、豊前や有明海沿岸古墳被葬者が多元的に関わっているとみるのが相応しい。

以上から、南島で採集されたゴホウラは種子島を経由し、肝属・宮崎平野の港湾を経て、宮崎平野周辺で製品に仕上げられ、豊後に経て豊前や筑後地域にもたらされ、さらにそれらの中には朝鮮半島地域との交渉の中で稀少財として扱われることもあったものと考える。

## 2 古墳時代の九州・四国の交流ルート

### (1) 四国西南部の交流ルート

**太平洋ルート** 豊後水道・日向灘を経由する地域間交流の九州側の状況に対して、その対岸、四国側はいかなる状況にあったであろうか。松山平野周辺までは瀬戸内ルートとして理解できるが、とくにその西・南側の太平洋に面する地域に着目して交流ルートを確認しておきたい。

高知県西南部の幡多地域、四万十川支流の中筋川流域小盆地において3基の前期古墳、高知中央部の南国市で中期古墳が1基確認されている。これらから概観しておこう。

**曾我山古墳** 全長60mの前方後円墳とも推定されているが、残された図面から判断できる状況にない上に明確な根拠もなく、前方後円墳とは理解できない。副葬品として獸首鏡、外縁を複合鏡齒文とする獸紋鏡などが出土している（図7-3・4）。

**高岡山1号墳・2号墳** 曾我山古墳と同一地域に近在して2基の円墳が発掘調査されている。1号墳では礫構から筒形銅器のほか、勾玉・管玉・大刀などが出土している。2号墳では同じく礫構から内行花文鏡・石鏡、勾玉・管玉・小玉などが出土している（図7-1・2）。

**長歟古墳群** 南国市に所在する長歟2号墳は高知中央部において前～中期の唯一の古墳である。円墳で礫床木棺の第1主体部から鳥舌鏡を含む鉄鏡、鉄劍、方形板鏡鋏先、鎌、斧、刀子など中期前半に位置づけられる典型的な鉄製品が出土している。

**搬入土器** 古墳時代の集落遺跡は高知県域で多少は認められるが、とくに交流を考える上で特徴的な資料を出土している幡多地域の事例をみておきたい（久家2004）。中筋川流域にあり、曾我山・高岡山古墳群にも近い四万十市具同中山遺跡では古墳時代中期後葉にピークをもたらす

期前半まで存続する祭祀空間が確認されている。数多くの須恵器が出土しており、基本的には地方窯の要素はみられず陶邑産須恵器とみて問題ない。また、同遺跡では弥生時代終末期～古墳時代前期の東阿波型壺や布留系壺も出土しており、本遺跡に関わった主体者が各時期に広域交流に携わったことをうかがわせる。

おなじく、四十市西ノ谷遺跡では安国寺式壺・庄内式壺、土師器の宮崎平野系壺が出土している。前二者は弥生終末期であるが、後者は古墳時代中期中葉に位置づけられ、

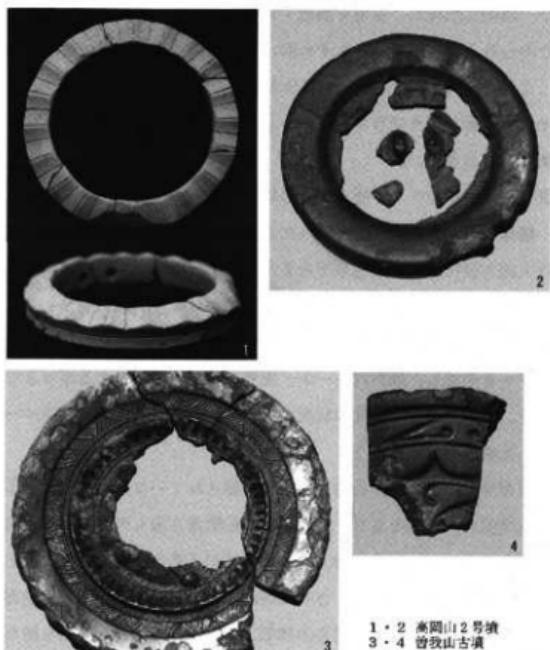


図7 嶋多地域の古墳出土資料

煮沸用の壺であり、それ自身に稀少価値を見いだせないことからすれば、宮崎平野域から移住者の存在を示している。庄内式壺に関しては高知中央部でも一定の出土があるため、太平洋ルートの存在を示す可能性があるが、それに対して、わずかな手がかりながら安国寺式壺や宮崎平野系壺の存在は古墳時代にも日向灘をまたいだ人との交流の存在を裏付けている。

**高知における交流ルート** 長歟2号墳の被葬者がどのルートで鳥舌鏡などを入手したかは1基のみの存在であるために明らかにし難いが、その所在地からすれば四国山脈を南北に越え、瀬戸内ないしは吉野川流域ルートに結びついたものと考えてよいだろう。

嶋多地域の三古墳では主要器種の重複はないが、いずれも古墳時代前期後葉の広域交流を跡づける副葬品を保有している点で共通する。銅鏡・石鏡・筒形銅器は前期後葉の近畿中央政権から入手したものと目される。しかしながら、政権との継続的な関係や面的な拡がりは認めがたく、地理的な環境から広域交流の中継地として役割を果たす場合があったという状況であり、その交流に主体的に関わる拠点としての役割は担っていなかったであろう。

政権側からの働きかけによって地域間交流のネットワーク上で権力や情報を手に入れた首長

が一時的に出現し、古墳を築造する場合があったが、継続性はなく首長系譜は定着しなかったとみられる。四国ではそもそも前・中期の前方後円墳建築城は瀬戸内沿岸地域に限定され、とくに高知地域を含む南部は大部分が古墳の空白城であり、ここでは瀬戸内を経由する頻繁な人・モノ・情報が行き交うネットワークとの連繋が希薄な社会が形成されていたとみられることを確認しておきたい。

## (2) 九州西岸ルート・他地域との比較

**薩摩地域との比較** すでにみたように豊後水道を挟んで対岸の古墳時代九州東岸は継続的な巨人前方後円墳の築造地域である上に古墳数も多い。その社会には各種威信財を含む広域交流財が多くもたらされており、また、南島からの貝製品も数多く渡っていたとみられる。この九州東岸の各首長層は九州南部に至るまで広域交流拠点を結び日向灘・豊後水道沿岸に広域交流ルートを形成し、瀬戸内ルート・玄界灘ルートに連繋するネットワークに加わっていたといえよう。一方で四国西南部の状況は同じ九州南部にある九州西岸ルートの薩摩地域とよく似ている。比較検討してみよう。

薩摩地域では確実な前方後円墳が確認されていないが、阿久根市鳥越古墳は古墳時代前期の長大型堅穴式石棺をもち、薩摩川内市船岡島古墳も同様であると考えられる。また薩摩川内市天辰寺前古墳では複合鋲齒文縁の神頭鏡が大量のイモガイ製貝釧とともに出土し、前期末～中期初頭に位置づけられる。さらに南部の南さつま市奥山古墳は前期後葉に位置づけられ、天草地域の搬入石材による石棺を主体部とし、祭祀に用いた土器も持ち込まれている。

川内平野では古墳が3～4基存在し、いずれも近接する時間の中でこの地域を代表する首長墓であったとみてよいが、それぞれは散在した独立墳で同一首長系譜を形成するとまでは言い難い。薩摩地域では古墳は前期後葉を中心とした時期に、点在して出現するものの後続する古墳が不明確で、継続的な古墳建築や各種文物の流入がみられないといった様相である。

この地域は弥生時代以来、南島へ繋がる九州西岸ルートの交流拠点としての役割を担ったが、古墳時代には瀬戸内へ近畿へ連なる九州東岸ルートの主流化が進行し、前期～中期へと時間を経るに従って、より劇的な交流ルートへ移行していくものと考える（橋本2009a）。

資料的な手がかりとして多くはないが、前期後葉の一時的な古墳建築や複合鋲齒文縁の銅の出土などは、幅多地域の古墳と薩摩地域の古墳のあり方に共通性を認めて良いと考える。

つまり、幅多地域にても薩摩地域にても古墳時代の広域交流のメインルートとはならなかったこと、そのような地域であっても古墳時代前期後葉を中心とする時期に近畿中央政権はネットワークの拠点に組み入れようとしてより広域できめの細かいルートの開拓、交流関係の構築を模索したとみられる。しかし、それはその後には定着せず、瀬戸内～九州東岸のメインルートに集約されていったものとみられる。

**その他の地域との比較** 他の地域を見渡したとき、紀伊半島南部でも類似した状況が見いだ

せる。ここでは那智勝浦町下里古墳がこの地域唯一の前方後円墳として前期後葉に築造されるが、周辺には前後に連なる古墳が確認されていない。また、日高郡みなべ町城山1号墳では鐵製四獸鏡・綱織など、御坊市岩内3号墳では援文鏡・巴形銅器を含む多量の副葬品が出土しており、紀伊半島南岸に沿った太平洋ルートの拠点に前期後葉～中期初頭に点在して古墳の築造された状況がうかがえるが（川崎2008）、古墳時代広域交流のメインルートにはならない。幡多地域や薩摩地域の古墳のあり方によく共通している。

ほかに石見の中山B-1号墳、対馬の出居塚古墳・根曾1号墳、徳島南部の国高山古墳なども同じような文脈で理解できる可能性があるだろう。列島の各地域を十分精査はできとはいえないが、ここで挙げたのは前後に連続する古墳がないことから捉えやすい事例であって、より広く見た場合、古墳時代前期後半から古墳築造を開始する地域はかなり多い。

他にもこれらと連動するとみられる事象がある。例えば、高橋克壽が示した大和東南部勢力が宇陀・松阪を経て瀬美半島を渡り東の諸地域と結びつくルートに対して、大和北部勢力による伊賀上野・亀山を経て美濃にいたるルートの重視といった東方へのルートの変動（高橋1994：pp.37-38）。近江において、前期前半の近畿中央政権の濃尾平野・伊勢湾ルートにおける東方政策と関わった雪野山古墳、前期後半の琵琶湖を介した日本海ルートから朝鮮半島諸勢力との交渉がうかがえる安土瓢箪山古墳の2古墳に象徴される中央政権内の勢力変動と交流ルートの転換（福永1998：pp.299-301）。前期後葉における近畿中央政権の朝鮮半島交渉ルートの日本海側拠点、丹後地域の巨大古墳の築造と中期段階における瀬戸内ルートへの集約に伴うその衰退（広瀬2000：pp.81-82）。

これらは新式神獣鏡などの保有に代表される大和東南部勢力から北部勢力・河内勢力への近畿中央政権における政治的主導権の変動（福永1999：pp.274-276）とも連動する事象であった可能性を考えよう、中央政権は前後の時期と比してより広域においてネットワークを構築することで地域統合を進めようと積極的な活動をしつつある段階と評価できるのである。

前期前半ではまだ古墳築造にいたる近畿中央政権とのネットワークを構築した拠点は少なく要衝点的であった。それが、前期後半には政権の影響力が増大して全方位的な展開をみせ、地域側もそれへの参入によるメリットを期待し急激な伸張を見せた。しかし、中期には拡がったネットワークの維持・拡張ではなく岐別・集約化を進め、また地域側も各々の状況により定着した場合とそうでない場合に分化し、メインルートが明確化していくものと考える。

### 3 結語—古墳時代交流の諸段階—

最後に本稿で扱った、九州・四国の広域交流のあり方をモデルとして、古墳時代広域交流の様相を段階を迫って総括する。

**古墳時代前期前半** 弥生時代終末までの段階では、農業生産基盤を背景とする各平野・水系

などに首長権力が形成されはじめ、それが連鎖的に各地域を繋いで行きつつそのネットワークを広域化していく段階であろう。古墳時代にはいると近畿中央部の政権が中枢化し、各地域に向けて情報・文物を発する広域ネットワークが形成される。しかし、ネットワークの形成開始期であり、各地の中心的な拠点間が結ばれつつある段階で、広域といってもまだ支脈などを派生する面的な拡がりはもたない段階である。九州でも北部各地域を中心としてわずかに点在する程度しか古墳は築造されていない。

**古墳時代前期後半** この段階になると列島の広範な地域に古墳が出現する。宮崎地域などで数多くの前方後円墳が築造されるし、肝属地域の塙崎古墳群でもこの時期には前方後円墳以外の小古墳まで築造されている。古墳時代を通して古墳築造の不活発な薩摩地域にも古墳が点在し、高知南西部や紀伊半島南端といった他の時期に古墳がみられない地域でも古墳築造が行われる。地域間ネットワークの拡散期であり、爆発的な拡がりをみせる。

**古墳時代中期前半** 前時期の拡散後は古墳築造継続する地域と、継続しない地域に区分されていく傾向がある。九州東岸ルートは交流の主要幹線ルートとして、より頻繁かつ太いネットワークを形成して行くが、九州西岸では有明海沿岸域を中心として巨大な勢力を形成しつつも、南下ルートは希薄化・弱体化する。瀬戸内を中心軸としてそれに連なるネットワークに、



図8 九州・四国の古墳時代前・中期地域間交流ルート

より集約化が進み、前期後半の拡散したネットワークの中からより中央政権の巨大化とともにその関係において主要ルートの幹線化が進んでいるものとみなされる。

**古墳時代中期後半** 中期前半に形成される主要幹線化がより進行すると考えられるが、近畿中央政権の朝鮮半島情勢への関与が強まり、列島諸地域の首長層が半島諸地域へ渡る機会も少なくなかったであろう。朝鮮半島を含むより広域な人の移動が頻繁に起ったとみられる。一部の稀少財のみならず生活様式までを含む渡来系文化の移入が起り、その後の社会構造にも大きな変化を与える時期である。

今回は検討していないが、この後、後期になると中央政権の政治変動などもあってあらためて大幅な変動が起り、地方化が進む九州南部、面的な古墳築造が活性化する高知など、それ以前とはまた違った多様な展開を見せるようになる。

**残された課題** これまで、各地域ごとの古墳や遺構・遺物の研究は進んでいるが、その共進化や影響が波及するルートに関しては漠然とした地理的なイメージが先行し、十分な議論がなされてきたとは言い難い。古墳時代が列島の広域にわたって共通する社会基盤を形成しつつあるならば、その交渉・交通関係もこの時代の間に整備されつつあるとみなければならない。本稿はそういうネットワークの形成・変容過程を明らかにすることを目指んだ。もちろん、ここで扱ったのは、広域に展開する古墳時代社会の一部に過ぎない。

古墳築造の意味も各地域ごとに異なっており、初めから広域共通性の存在を前提としてすべてを理解することもできないが、それでも各地域の実態に即しつつ、この時代の特質である前方後円墳に象徴される広域共通性がいかに生み出されるのか、各地域比較の上に大きな枠組みで捉えて行くことは、より古墳時代の社会構造を明確にするものと考える。

また、後期までを通した長期的な流れの中で律令体制の導入による五畿七道駅路の整備に至るまでの視点も、近畿中央政権の研究のみに偏らない国家形成過程を描く上で重要である。

古墳の分布やその諸要素に代表されるように古墳時代には近畿中央部を中心とする政治中枢が生まれ、それと各地域を結びつけるネットワークが形成されるが、そこにはやがて疎密が生じ、幹線・副幹線の整備などが進み、地域間関係の序列化という方向性も備わり、中心一周線という格差を生みだしながら変動を続けて行く。古代国家へ至るまでのその動態は地域側の資料を積み重ねて行くことで解明されなければならない。また今回はその運ばれた対象、とくにこれまで多く議論がなされている鉄資源入手の問題などにも言及しなかった。

今後とも、より各地域の状況を踏まえ、またより広く古墳時代社会の解明に取り組みたい。

#### 謝辞

白螺古墳・下山古墳の調査に当たっては、根之木拓子さん・釋田智美さんに多くなお世話をになった。曾我山古墳・高岡山古墳群出土の調査および真指輪にあたっては宿毛市立宿毛歴史館 矢木伸欣さんのご協力をいただき

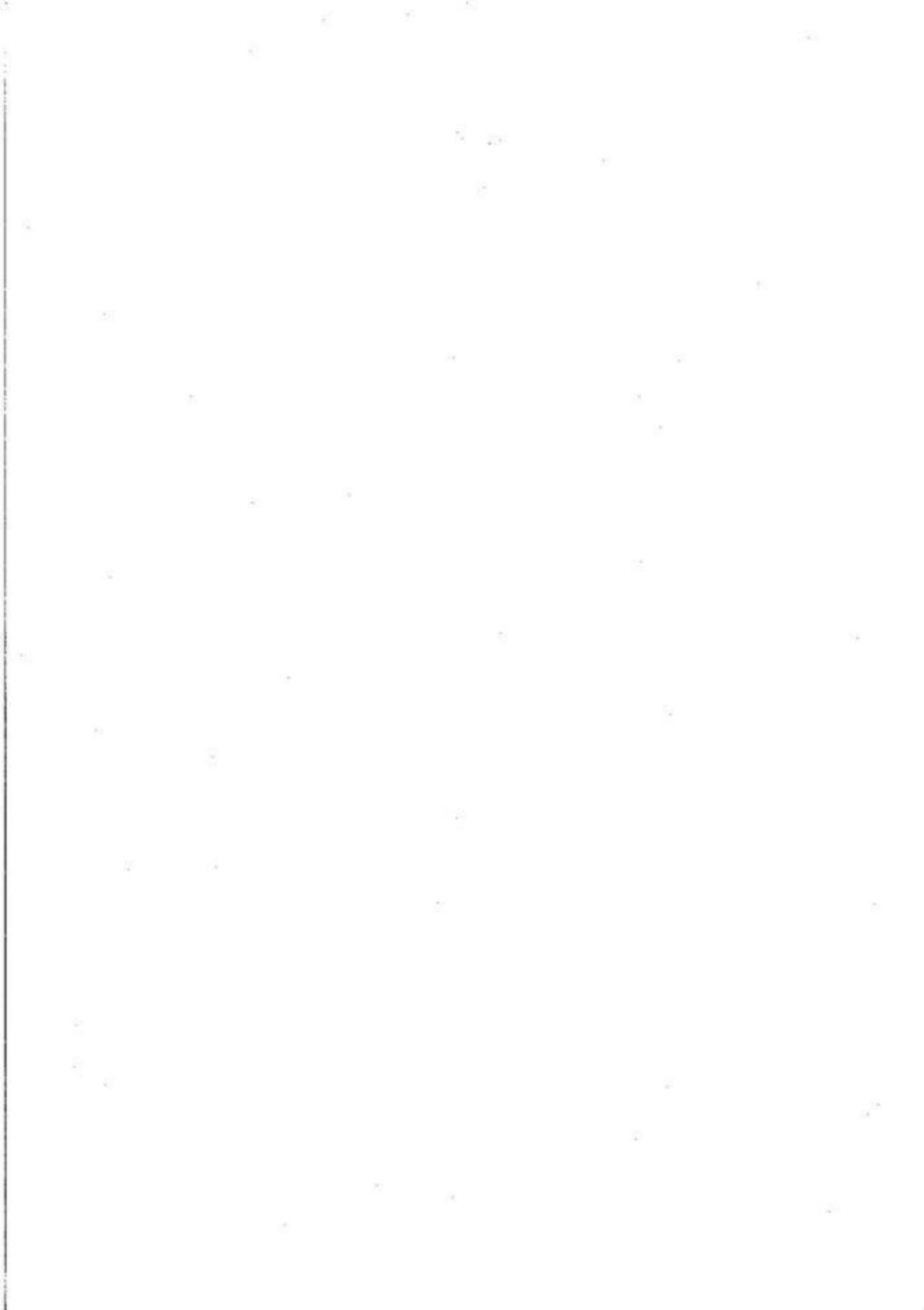
いた。その他、とくに高知県において多くの方々のお世話をなったことで本稿をなすことができた。記して謝意を表します。

#### 引用・参考文献

- 甲斐寿義 2006「大分山土の南海産貝製品」「國縁 特別展」貝の来た道～東の道は存在したか～】宮崎県立西都原考古博物館
- 川崎雅史 2008「日高地方の古墳」「公開シンポジウム 岩陰と古墳－海辺に葬られた人々－」朝和歌山県文化財センター
- 紀伊孤士記の丘管理事務所 1985「特別展 紀南の遺跡」
- 木下尚子 1996「古墳時代南島交易考－南島産貝釧と貝の道を中心にして」『考古学雑誌』第81巻1号 日本考古学会
- 久家隆芳 2004「橋多地域における古式土師器の成立について」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』愛媛大学法文学部（科研費報告）
- 黒石哲大 1995「紀伊」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
- 新垣 深綱 2009『櫛崎古墳群』肝付町教育委員会
- 高木恭二 1987「九州の舟形石棺」「東アジアの考古と歴史」下 岡崎敬先生追憶記念論集 同記念事業会
- 高橋克壽 1994「埴輪牛座の展開」「考古学研究』第41巻2号 考古学研究会
- 高橋克壽 2007「韓國門崎島長木古墳の石室と若狭の横穴式石室」「歴来系遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』和田晴吾編
- 中村友昭 2008「岡崎18号墳2号地下式横穴墓出土の貝釧」「大瀬串良 岡崎古墳群の研究」鹿児島大学総合研究博物館
- 河 承哲 2006「巨済 長木古墳에 대한－考察」「巨済長木古墳』慶南発展研究院歴史文化センター
- 橋本達也 1998「古墳群の形成と地城政権」「川と人間－吉野川流域史－」筑水社
- 橋本達也 2000「四国における古墳築造地域の動態」「前方後円墳を考える」古代学協会四国支部第14回大会－研究発表要旨集－ 古代学協会四国支部
- 橋本達也 2003「湖岸鉄器からみる南九州の古墳時代」「前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性」第6回九州前方後円墳研究会 同事務局
- 橋本達也 2006「唐仁大塚古墳考」「鹿児島考古』第40号 鹿児島県考古学会
- 橋本達也 2008a「岡崎18号墳出土の須恵器の型式学的位置とその意義」「大瀬串良 岡崎古墳群の研究」鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也 2008b「岡崎18号墳出土鉄製品と肝臓平野周縁域をめぐる広域交流」「大瀬串良 岡崎古墳群の研究」鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也 2009a「薩摩地域の古墳時代墓制と地域間交流」「薩摩加世田 奥山古墳の研究」鹿児島大学総合研究

## 博物館

- 橋木達也 2009b 「沖縄10号墳発掘調査3－大鍋のフィールド調査－」『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』No.22 鹿児島大学総合研究博物館
- 東 恵章 2006 「宮崎県出土の南海産貝製品」『図録 特別展『貝の来た道～東の道は存在したか～』』宮崎県立西都原考古博物館
- 広瀬和雄 2000 「丹後の巨大古墳」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学・別冊10 錦山閣
- 榎永伸哉 1998 「御野山古墳と近江の前期古墳」『御野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会
- 榎永伸哉 1999 「古墳時代前期における神獸鏡製作の管轄」『國家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集 同研究室
- 柳沢一男 1987 「石製表飾考」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生追憶記念論集 同記念事業会
- 柳沢一男 1999 「南九州における古墳の出現」『第11回 人類史研究会発表要旨』人類史研究会
- 柳沢一男 2001 「全南地方の榮山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』第179集 朝鮮学会



## 6. 古墳時代終末期における日本列島周縁部の太平洋沿岸交流 —副葬刀剣をもとに—

菊地 芳朗

### はじめに

鉄製刀剣類が古墳の主要な副葬品の一つを構成することは、広く知られている。古墳時代後期後半以降になると、古墳への厚葬の習はしだいに衰退し、ことに近畿中央部では多種多量の副葬品をもつ古墳が大きく減少するとともに、刀剣類を副葬する古墳が激減する。奈良県生駒郡斑鳩町藤ノ木古墳の豪華な副葬品は、該期の近畿では例外的であり、むしろ副葬品のあり方としては、それ以前の古墳の様相を色濃く残すものという評価が適切であるようと思われる。

近畿の状況とは対照的に、近畿外の多くの地域ではなお古墳への刀剣類の副葬が続き、地域によっては刀剣副葬が最も活発となる。そして、この時期の興味深い現象は、それまで古墳が築かれなかった東北北部と北海道に「末期古墳」や「北海道式古墳」などと呼ばれる墳丘墓が現れ、これをはじめとする墳墓に刀剣など多数の鉄製品が副葬されることである。一方、同時期の九州南部でも、中期以来続々地下式横穴や土壙墓のなかに、必ずしも多くないものの刀剣類を副葬する例があり、なかには象嵌を有するものなど、以前にない資料が現れる。

以上のように、古墳時代後期後半以降の日本列島の南北周縁部には、注目すべき様相をもつ刀剣が展開する。この現象を偶然の一例とみる見方もあればようだが、両者の実態や展開の過程は必ずしも明らかになっておらず、これらが日本列島全域におよぶ大きな歴史的波動の両端のあり方をしめすという可能性も、あながち荒唐無稽な理解とはいえないよう思う。そこで、小論では、古墳時代後期後半から終末期における日本列島南北両地域の鉄製刀剣の実態を紹介したうえで、その年代や生産・流通のあり方にたいする検討をおこなったのち、この時期に特徴的な刀剣類が展開する意義について検討することとしたい。

### 1 刀剣の諸相

#### (1) 日本列島北部

**分布と遺跡の概要** ここで日本列島北部とするのは、こんにちの北海道と東北北部3県に相当する地域とする。上述のとおり、ここでは「末期古墳」などと呼ばれる墳丘墓や土壙墓が活発に展開をはじめる。その時期はおおよそ7世紀以降と考えられているが、より遅る可能性をもつものも一部認められる。土壙墓はそれ以前から存在しているが、展開のあり方として明ら

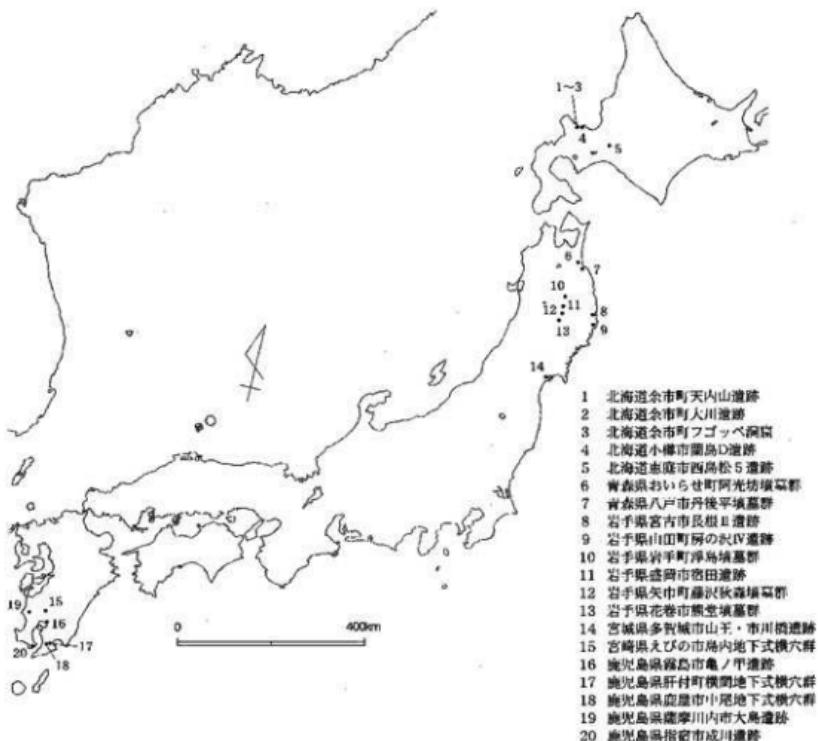


図1 本論で取り上げる遺跡

かにこの時期に画期を認めることができる。

現状の調査例にもとづくと、これら墳墓には明確な分布上の特徴が認められる。すなわち、北海道では余市郡余市町から千歳市にかけての道央地域、東北北部では青森県八戸市周辺、岩手県盛岡市周辺の北上川中・上流域、岩手県宮古市周辺の三陸沿岸中部に分布の集中が認められる(図1)。それ以外の地域では分布がごくかぎられるか皆無に近く、とくに東北北部の日本海側には、時期がやや遅れる例をふくめても現状ではほとんど存在を認めることができない。

造構別でみると、北海道では、江別市江別古墳群と恵庭市茂漁古墳群で墳丘墓(北海道式古墳)が認められ、それ以外は土墳墓とみられるが<sup>10)</sup>、ほかにも墳丘墓の可能性をもつ例が存在する(田口編1998)。一方、東北北部では、ほとんどが円墳状を呈する墳丘墓によって占められている。ただし、墳丘墓はごく低い墳丘をもつにとどまるうえ、その埋葬施設の多くは地山

面以下に設置されることから(藤沢2009)、土壙墓と認識されるもののなかに本末低い墳丘をもつたものが含まれた可能性も考慮すべきであろう。墳丘墓の埋葬施設は、石をちりて石室を志向するものと、木棺を直葬するものの二者に大別され、前者がやや時期が遅る傾向が認められる。埋葬施設の形式は、それぞれの系譜や波及経路を理解する重要な手がかりとなるが、小論の直接の目的からはずれるため検討は割愛する。

**出土大刀の概要** 対象地域からは多数の鉄製武器・農工具が出土しているが、武器の主体をなすのは大刀と鐵鎧である。北海道・青森・岩手3道県の13遺跡出土の大刀にたいし<sup>9</sup>、観察・実測・写真撮影等の調査をおこなったが、小論では、そのなかでもとくに重要と判断された7世紀代の資料を取り上げて報告する。大刀の把構造や各部名称の詳細、および年代比定の根拠については、筆者の近著に詳しいためそちらを参照いただきたい(菊地2010)。

図2-1は、北海道恵庭市西島松5遺跡96号土壙墓出土大刀である。細身で比較的長い刀身をもつ。把頭を欠き、報告書で把が鮫皮巻と指摘されているが、現品観察では明確でない。鐔は鉄製の噴出鐔で、鉄地鉄張りの把縁金具が付属する。鉄製の鞘口金具に接して側裏側に鍔付足金具が着装され、糸巻きと鉄製資金具により固定されている。鍔は金銅製である。ここから鋒側に約15cmの位置に一部破損した鉄製責金具が着装されており、これが本来吊手孔付足金具で二足佩用の大刀であった可能性も考えられる。鞘は黒漆塗りで鉄製梢尾金具をもつ。以上の装具の特徴や形状から、7世紀中葉を下限とする7世紀代の年代が考えられる。なお、同様の特徴をもつ大刀が、同遺跡ではほかに98号土壙墓からも出土している。

図2-2は、北海道余市郡余市町フゴッベ洞窟前庭部出土の円頭大刀である。把頭は木製黒漆塗りで、銅製の鷲目金具と資金具をもちいる。把には撫糸が二重に巻かれた上に黒漆が塗られている。平面倒卵形の鉄製噴出鐔と鍔を着装する。刀身にはわずかに木質が付着し、黒漆塗りの木製鞘が着装されていたと判断される。なお、同地点からはほかに鉄製把頭をもつ方頭大刀が出土している。鐔や資金具の形状から、これらの年代は7世紀前~中葉と考えられる。

図2-3は、北海道恵庭市西島松5遺跡11号土壙墓出土大刀である。木製黒漆塗りの方頭把頭をもち、側面に手貫緒の残片とみられる布状品が付着する。把頭は純粋な方頭形というより半頭の一部にむしろ類似している。把頭の側面には細沈線が5本巡っており、装飾的な施設と思われる。把には細い撫糸を巻き、その上に把頭側では樹皮が、鍔側ではやや太い撫糸が巻かれている。鉄製噴出鐔と鍔を着装する。注目すべきは、X線写真と観察により本例の把構造が確實な落とし込み技法と判明することである。このことは、従来二枚合わせもしくは一本造りの把構造ととらえられてきた同様の大刀への理解にたいし、小さくない影響を与える可能性が高い。刀身の鋒はフクラで、精には黒漆が塗られる。装具の特徴や形状から7世紀前~中葉の年代が考えられる。なお、同様の特徴をもつ大刀が、同遺跡ではほかに15号・30号土壙墓からも出土している。

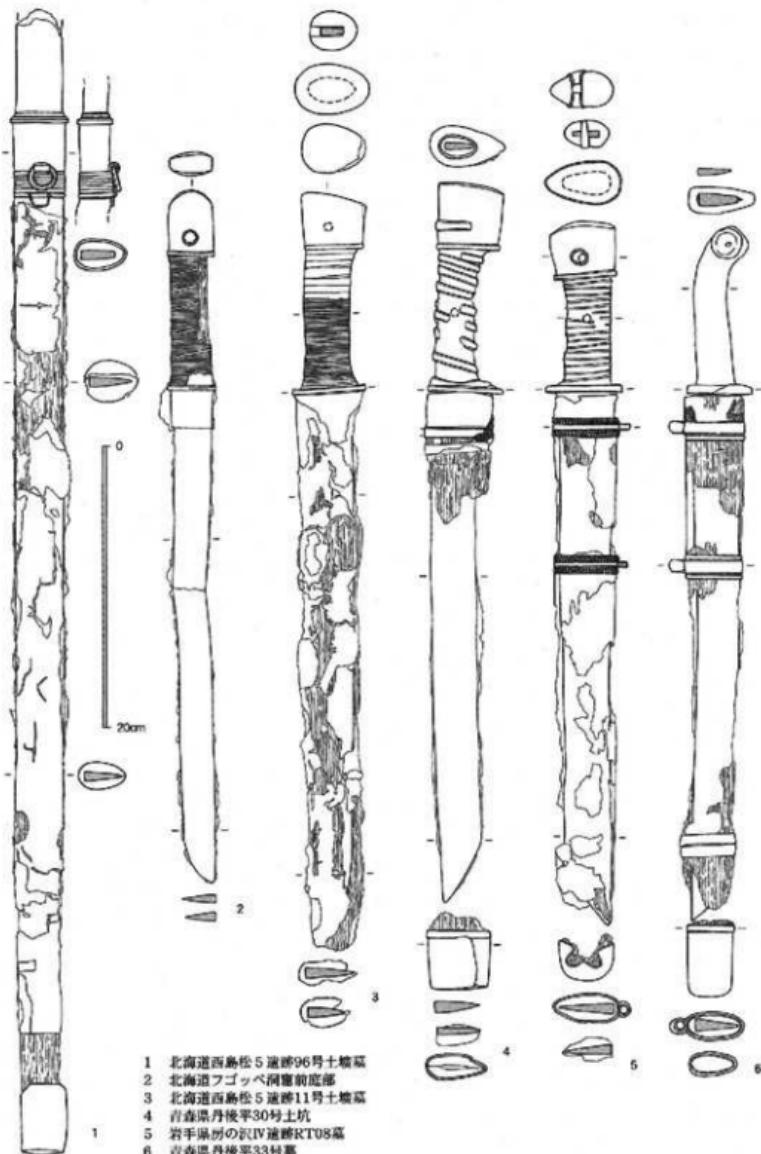


図2 日本列島北部出土の大刀

図2-4は、青森県八戸市丹後平30号土坑出土大刀である。鉄製の方頭把頭をもち、側面に手貫繩の残片とみられる布状品が付着する。把頭は純粹な方頭形というより半頭の一部にむしろ類似する。把木の上に幅約4mmの鉄線を巻くと報告されているが、「鉄線」が他の材質である可能性も捨てきれない。装具はほかに、喰出鐸、鍔、鞘口金具、吊手部が脱落した足金具、鞘尾金具があり、すべて鉄製である。通常、吊手孔付足金具は2個もちいられるため、1個が脱落している可能性が高い。刀身には木綿の断片が残り、鋒はフクラである。以上の特徴により、7世紀中葉の年代が考えられる。

図2-5は、岩手県下閉伊郡山田町房の沢IV遺跡RT08墓出土大刀である。鉄製の方頭把頭をもつが、把頭は純粹な方頭形というより半頭の一部にむしろ類似する。把木には細い撚糸を巻いた上にやや太い撚糸を広い間隔で巻く。鶴目金具・吊手孔付足金具とそれにともなう責金具・鞘尾金具が銅製であり、把頭切羽・喰出鐸が鉄製である。背銅製責金具には直径1mm未満のポンチ状工具で併行する2列の点文がほどこされる。鞘尾金具は双円形の抉りが入る丸尾のものだが、8世紀代の同例にくらべ全体に短小で抉りの深さが浅い。カマス鋒で鞘には墨漆が塗られる。以上の特徴により、7世紀中葉の年代が考えられる。

図2-6は青森県八戸市丹後平33号墓川土蕨手刀である。把頭のくびれはゆるく、蕨手刀特有の形状がそれほど強調されていない。金銅製の鍔・吊手孔付足金具・責金具・鞘尾金具をもち、鞘口金具は鉄製である。鍔の有無は不明であり、もちいられなかつた可能性もある。鍔の平面形は圓丸の長逆台形である。鞘尾金具は底が平らな筒状のものである。以上の特徴から7世紀後葉の年代が考えられ、蕨手刀としては最も古く位置づけられるものの一つと判断される。

**小結** 以上、日本列島北部の墳墓出土の大刀のうち、比較的古式に位置づけられる例を紹介した。これらは、西島松5遺跡96号土壙墓例に代表される全長60cmを超える細身のもの（長群）と、方頭大刀に代表される全長60cm未満の短小なもの（短群）に大別できる。年代は、最も古いものでも7世紀初頭にさかのぼらず、7世紀前葉以降に位置づけられる。具体的に取り上げなかつたが、長群にふくまれる大刀がほかに北海道余市町天内山遺跡や青森県おいらせ町阿光坊墳墓群などから出土しているものの、上記の年代をさかのぼるものはない。一般に長群の年代がやや古く、刀身の長短は、大きくは年代差をしめす可能性が高い。

## (2) 日本列島南部

**分布と遺跡の概要** ここで日本列島南部とするのは、九州南部の熊本・宮崎県の南部と鹿児島県の範囲とし、小論ではとくに鹿児島県域を主要な対象とする。ここでは、古墳時代併行期に古墳をはじめとする多様な墓制が展開するが、古墳時代後期以降になると目立った墳墓造営は縮小する。この時期に認められるのは地下式横穴と土壙墓が中心で、横穴は1例が知られるにとどまり、墳丘をもつものや板石積石棺墓はつくられなくなる（橋本2007）。

対象地域の古墳時代墳墓は、大隈半島側（東部）に多く、薩摩半島側（西部）では分布が限

定される（図1）。東部では、宮崎平野をのぞくと宮崎県都城盆地北半と鹿児島県志布志湾沿岸に分布が集中し、ほかでは散漫な分布をみせる。西部では鹿児島県大口盆地に集中がみられる以外、大規模な集中地ではなく、鹿児島県出水平野・川内平野・指宿市周辺などに若干の分布が認められる。とくに薩摩半島中央部では、現状で知られる古墳時代墳墓は皆無である。また、両地域の中間に位置する宮崎県えびの盆地には多数の墳墓が営まれている。対象とする後期後半以降の墳墓については、良好な調査事例がかぎられるため分布や消長が必ずしも明確でないが、上記の分布状況と大きく異なるものではないとみられる。

**出土刀剣の概要** 対象地域における該期の墳墓からの出土遺物は、必ずしも多くない。その内容は同時期の他地域の墳墓と人差ないとみてよく、鉄製の武船と農工具を主体に、少量の供獻土器などで構成されるが、装身具の出土は非常に少ない。土器の出土が限定的であるため、遺跡・遺構の年代を決定するうえで鉄製品の型式学的検討が重要な位置を占めることになる。武器の主体は刀剣と鉄鎌であるが、後述のとおり剣がふくまれる点で他地域の様相と異なる。宮崎県と鹿児島県の6遺跡出土の刀剣にたいし<sup>13)</sup>、複察・実測・写真撮影等をおこなったが、以下では、そのなかでもとくに重要と判断された6～7世紀代の資料を取り上げて報告する。

図3-1は、鹿児島県霧島市国分龜ノ甲遺跡1号遺構出土の三累環頭大刀である。把部と刀身部が残るもののは接合しない。把部はほぼ完存し、把巻をのぞく装具はすべて金銅製である。把頭は鋳造品で、舌状の茎を筒金の内部に差し込み、目釘で留められる。X線写真からは、本体の茎部と把頭の基部は接続していないものと観察できる。把握部には比較的太い撲糸が巻きされる。鍔はもちいられていない。把両端の筒金具および把握部の断面は八角形状を呈する。刀身部には木鞘の痕跡が認められず、綱とみられる布と紐状の繊維が付着しているのが見てとれるが、これが鞘の役割を果たしたものか、副葬時に巻かれたものは判然としない。以上の特徴から、6世紀後葉の年代が推定される（野坂2002）<sup>14)</sup>。

龜ノ甲遺跡からはほかに、鉄製や銅製の鐸・鍔を着装する複数の大刀が出土している<sup>15)</sup>。これらは装具に相違はみられるものの、いずれも6世紀後葉から7世紀初頭ごろの年代幅におさまる特徴をもっており、墓群の形成時期がこのころであったことをうかがわせる。ただし、現存していない同遺跡出土とされる土器は明らかに8世紀以後の年代をしめし、各遺構の詳細が不明である点とあわせ、出土遺物の帰属・共伴関係に少なからず問題を残している。

図3-2は、宮崎県えびの市島内113号地下式横穴出土の大刀である。革状の皮膜が全体を覆い、革袋に入れられて副葬された可能性がある。把頭と鍔を欠失する。茎部と把木の固定に1本の鉄目釘をもちいる。両側の可能性が高く、鉄製鐸を着装するが鐸は出土しておらず、鍔をもたなかつた可能性が高い。木鞘の残片が残る。なお、近く報告書刊行が予定されているため図の掲載は控えたが、同112号地下式横穴から鉄製無底鐸と鍔をもつ大刀が出土しており<sup>16)</sup>、鍔の有無以外は本例と似た特徴をしめす。以上の特徴から、これらは6世紀後葉を中心とする時期の

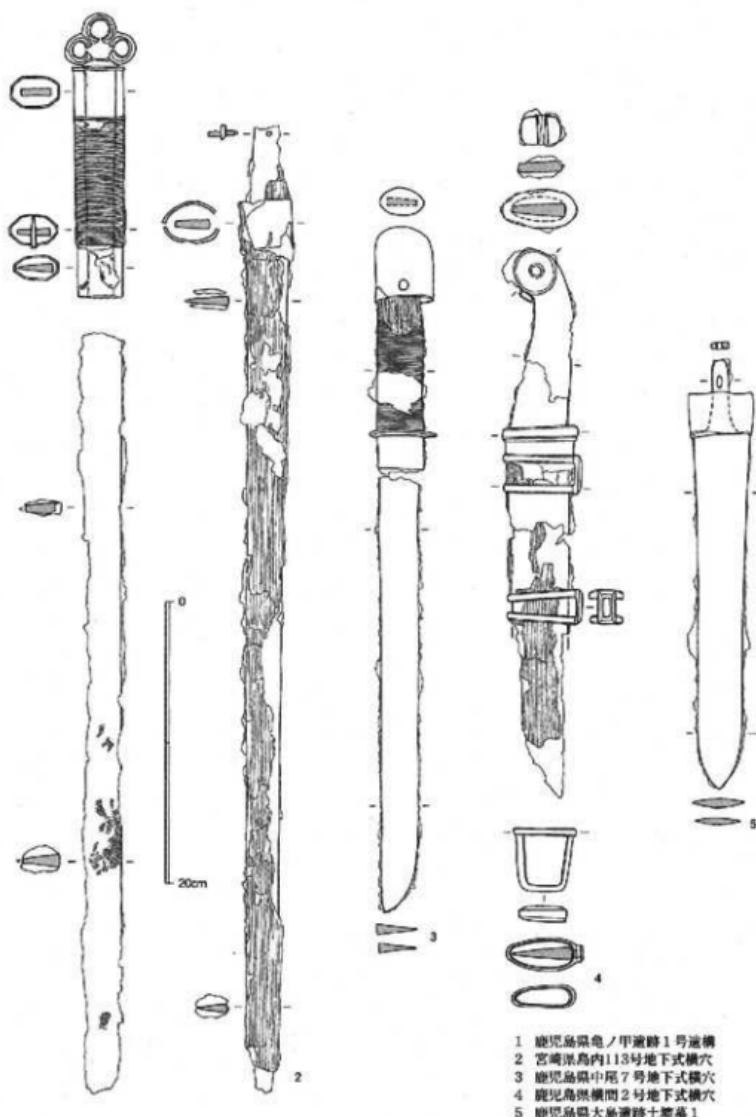


図3 日本列島南部出土の刀剣

年代が考えられ、5世紀代に造営の中心をもつとみられる島内地下式横穴群のなかでも、現状で最も新しい様相をもつ遺物群ととらえられる。

図3-3は、鹿児島県鹿屋市吾平町中尾7号地下式横穴山土の円頭大刀である。ほぼ完存しているが、鞘は認められない。装具は、把頭・鐔・鍔切羽が金銅製、鍔が鉄製である。把は一木造りで、細い撚糸を巻いた上にさらに太い糸を巻くつくりとなっている。鐔はきれいな倒卵形を呈する喉出鐔である。鋒はフクラである。以上の特徴から、7世紀初頭を含む7世紀前半代の年代が考えられる。

同遺構からは、円頭大刀と軸をそろえ、鉄製鐔を有する全長93cmの大刀が出土しており、型式的にやや円頭大刀よりもさかのぼる可能性があるが、無理な年代の開きではない。また、同遺跡からはほかに、鉄製鐔と鍔を有する長剣2点、大刀3点などが出土している。うち1点の大刀は木製把頭をもつ頭椎大刀の可能性が高く、その鐔・鍔・把頭切羽の各鉄製金具には鹿児島県城出士の古墳時代資料としては唯一の銀象嵌がほどこされている（藤井2006）。装具の特徴などから、これらには6世紀末～7世紀前葉の年代が与えられる。このように、中尾遺跡の出土刀剣は、九州南部のみならず汎列島的にみても注目すべき内容をもつ。

図3-4は、鹿児島県肝属郡肝付町横出2号地下式横穴出土の蕨手刀である。日本列島最南の蕨手刀として著名な資料であるが、これまで略測図の公表にとどまっていたため今回新たに実測した。ほぼ完品と理解してきたが、鋒付近が欠損している可能性が高い<sup>13)</sup>。刀身と把にわずかな角度をもつ。装具は、鞘口・足・鞘尾の各金具が銅製、把頭と鍔が鉄製である。把頭に接して銅製鷲目金具1個が接着しており、本来把頭に付けられていたものと考えられる<sup>14)</sup>。把頭は球状で、両面には手貫緒孔を中心に放射状の刻みがほどこされていたとみられる。把には木材をもちいらず、糸巻きや帯巻きであった可能性が高い。鍔の平面は綾長の倒卵形である。鞘口金具の鐔寄りの部分は一回り大きくなっている。類例からみて鍔は着装されていない可能性が高い。足金具は双脚台状のものである。鞘尾金具は覆輪金具と貴金具からなり、端部はほぼ平坦となっている。以上の特徴から、蕨手刀としては比較的古い段階に位置づけられるものの、最古相まではさかのばらず（八木1996、黒済2004）、7世紀末から8世紀前葉の年代が考えられる。

図3-5は鹿児島県薩摩川内市大島遺跡上墳墓1出土の短茎短剣である。身部は通常の短剣の形態と大差ないが、茎部は間から急激に幅を狭め、なおかつ茎部長が5cm程度と非常に短い。間には断面杏仁形の鉄製とみられる鍔状金具を着装するが、遺存状況がよくないためこれが塗装り木製品の可能性も残る。この剣そのものの年代は、類例が乏しいため推定がむずかしいが、同遺構からほかに、同形大の短剣2点とともに鉄製の無窓鐔と鍔をもつ全長96cmの大刀やTK209型式併行の須恵器杯身などが出土していることから、土壤墓の年代は6世紀末と推定され、このころ本例のような短茎短剣が存在したことをしめしている。

**小結** 日本列島南部の墳墓出土の刀剣は、先述のとおり、劍がふくまれる点などで他地域にない特徴がみられる。劍は中尾遺跡例のような長劍と、大島遺跡例のような短劍に明確に区別できるが、当該時期の長劍は現状で中尾遺跡例のみであるのにたいし、短劍は少數であるもののかに鹿児島県鹿屋市吾平町名主原遺跡など複数の遺跡から出土している点で異なる。

刀劍の年代はおおむね7世紀前葉までにおさまり、このころをほとんどの刀劍類副葬墳墓の終末時期と考えることができる。しかし、そのなかに横間2号地下式横穴例のような明らかに8世紀以降にくだる例もふくまれ、少數ながら7世紀中葉以後にも造営された墳墓が存在したことを見出している。

## 2 墳墓出土刀剣の生産と展開

### (1) 南北の異同

**相違点** これまで、日本列島南北の墳墓出土の刀剣のなかで6～7世紀に位置づけられる例を紹介した。以上にもとづき、はじめに日本列島北部（以後「北部」とする）と日本列島南部（以後「南部」とする）の刀剣の相違点と共通点を指摘しておきたい。

まず異なる点は、その構成である。北部が大刀のみからなるのにたいし、南部には大刀とともに劍がふくまれる。後述のとおり、この相違は両者の年代のずれを反映したためともいえるが、南部から出土する短劍は、北部だけでなく同時期の他地域で例をみないものであり、劍の有無が単純な年代差の反映とは考えられない。この点にかんしては、のちに改めて検討する。また、北部の大刀には長短2群があり、短群が主体をなすのにたいし、南部の大刀はむしろ長群といえるものが顕著である。ただし、これも大きくは年代差の反映である可能性が高く、南部にも鹿児島県中尾遺跡の円頭大刀のように短群に属する例が存在することが注意される。

刀劍の年代は、北部では最も古いものでも7世紀初頭をさかのばらない一方、南部では7世紀中葉以後の例はほとんどなく、その年代に差がみられる。基本的にこのことは、北部では新たな墓制である「末期古墳」をふくむ墳墓の造営が7世紀に入ってから本格化するのにたいし、南部では地下式横穴などそれ以前から続く墳墓の終末的様相として刀劍副葬が顕著になるという両地域の墳墓動向を反映している<sup>⑨</sup>。したがって、副葬刀劍の動向は対照的ともいえるのが、両地域とも7世紀初頭から前葉を境とするように、一方は開始ののち間もなく盛行期をむかえ、もう一方は長い墳墓造営と刀劍副葬の終末に向かうという、入れ替わるかのような様相をみせることは重要である。すなわち、両地域の現象が、日本列島全域におよぶ墳墓動向、ひいては地域間交流の表裏の関係を反映する可能性は、けっして小さくないものと想定できるのである。

**共通点** 両地域の刀剣には、明らかな地域固有の特徴をもつものは少なく、ほとんどは汎列島レベルの刀劍類編年の中間に位置づけることが可能であった。すなわち、北部と南部の長群

に属する大刀は、鹿児島県奄ノ甲遺跡出土三累環頭大刀に代表されるように、刀身をはじめ装具の型式においても日本列島中央部出土の大刀および装具と共に通しておらず、それらの地域で独自に生産されたと考えにくいものである。それらのすべてが近畿中央部から一元的に配布されたとは言い切れないものの、その大半は、地域を越えた広域的な生産・流通の状況のなかで、北部と南部の地にもたらされたものとみるのが適当である。

一方、北部と南部の短群の大刀、とくに北部のそれについては、他地域から出土する例が少なく北部に集中することから、現地生産を推定する研究者も少なくない。この点はのちに改めて検討するが、結論として筆者は、少なくとも当該時期においては、地域の閉じた環境のなかでこれらが独自に生産されたのではないと考えている。したがって、北部・南部両地域の刀剣類の大半は、結果として、他の地域で營まれた主要な生産地の製品という点で共通するものと考えられる。

## (2) 刀剣の生産動向

**生産地検討上の前提** では、南北両地域出土の刀剣は、どこで製作され、どのような製機とルートでそれぞれの地にもたらされたのであろうか。

古墳時代終末期の刀剣類の生産を考えるうえで前提としなければならないのは、北部・南部両地域とも、当該期の鉄器生産遺跡がごくかぎられ（村上2007）、製作地の情報から刀剣類生産の実態に迫ることがきわめて困難な点である。したがって現状では、刀剣そのものの型式学的検討と分布という間接的証拠から、この問題を考えざるを得ない。以下、南部と北部にわけて検討する。

**北部** 北部出土の大刀のうち長群については、先述のとおり、他地域との刀身および装具の共通性から、そのほぼすべてが東北南部以南で生産されたものと考えられる。さらに、大刀が当時としては最も大型の鉄器であることや、装具に金や銅などの希少金属を利用することからみて、主要な製作地は当時の技術的先進地である近畿中央部やその周辺地域であった可能性が高いと推測される。しかし、鉄製鍔などの小型の装具については、比較的簡易な設備と技術で製作もしくは加工が可能であり、一部に地域生産品がふくまれることが指摘されている（折原1996、豊島2001、西澤2002）。ただし、今のところ北部特有の特徴をもつとみてよい装具は認められず、長群の大刀については、すべて北部製でないとみるのが妥当と理解する。

つぎに、北部出土大刀の主体をなす短群については、上記と同様の理由から、これらも北部製とみるべき積極的理由は見出せず、東北南部以南の製品と判断される。ただし、これらを長群と同様に、基本的に近畿製と考えるのは必ずしも適当でない。

その理由の第一は、宮城県多賀城市山王・市川橋遺跡において、ここで生産されたとみられる木製刀装具が出土していることである（図4）<sup>30</sup>。この把装具は把頭が方頭形を呈し、岩手県房の沢遺跡や北海道西島松5遺跡などで出土している方頭大刀ときわめて近似するうえ、把構

造が落とし込みである点も一致している。理由の第二は、短群の一角をなす薙手刀の古式例が、東日本でも東北南部や上信地域に多いという指摘である（八木1996、黒済2004）。そもそも薙手刀は東日本に分布が集中し、ここでの生産も有力視される遺物だが、その古式例の分布が比較的限定される事実は、これらの生産拠点の一つが上記地域にあったことをうかがわせるものといえよう。

以上により、北部出土の短群の大刀は、おもに東北南部から関東で製作されたものと推測する。ただし、装具のみが生産され、刀身の本体は近畿中央部からの移入品という可能性も残ることから、なお決定的状況とはいせず、同地域の鉄器生産の実態をふまえ将来さらに追及する必要がある。一方、生産地の一つとみられる宮城県山王・市川橋遺跡が、のちに設置される多賀城に近接する仙台平野の有力拠点集落と考えられるように、たとえ生産が認められるばあいでも、上記地域のなかで随意に可能だったのではなく、ごく限られた有力拠点で集中的におこなわれたとみるのが適当である。

**南部** 南部の長群については、上記と同様の理由から、製作地は基本的に近畿中央部を中心とする地域と推定する。鹿児島県中尾遺跡出土の象嵌大刀の文様モチーフが、東日本など出土の象嵌大刀のそれと共にハート文や二重円文であることは（藤井2006）、これが中心的な製作地からの配布品であったことを物語っている。一方、装具については、いまだ南部特有のものは識別されておらず、その生産は確実でないが、後述する短群との関連から生産の可能性はけっして小さくないと考えられる。

一方、南部の短群のなかでもとくに剣は、先述のとおり他地域に類例を見ることができない。茎部周辺の特徴的な形態や、身が薄く単純な形状のつくりからは、これらが分布地域の範囲内で製作されたことを強くうかがわせる。南部では、特徴的な形態の鉄鎌などから、中期前半には鎌などの武器生産がおこなわれていたことが推測されており（橋本・藤井2007）、ここで取り上げた短剣についても、現地製である可能性は高いと考えられよう。

これにたいし、南部出土の短群に属する大刀については、そもそも数がかぎられ、鹿児島県中尾遺跡の金銅装円頭大刀や横間遺跡の薙手刀のように、明らかに外部に分布の中心をもつ例がふくまれる。したがって、これらの大半は搬入品である可能性が高いと判断する。

### 3 刀剣流通の検討

#### (1) 刀剣流通の前提

以下、日本列島北部と南部の刀剣の流通とその背景を検討するにあたっては、7世紀前半を

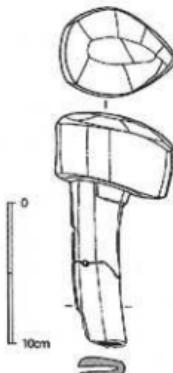


図4 宮城県市川橋遺跡  
出土木製把装具

中心とする6世紀後葉から7世紀代をおもな対象とすることにしたい。それは、この時期において両地域とも從来の墳墓のあり方が大きな転換をみせるにくわえ、対象時期を限定することで、刀剣流通の様相と背景をより鮮明に浮かび上がらせることが期待できるためである。

上でみたように、古墳時代後・終末期における南北両地域出土の刀剣は、製作地にかんし、近畿製（長群）、隣接地域製（大刀短群）、現地製（短劍および装具）という三つのレベルにわけて考えられることになった。では、この様相から、いかなる流通のあり方が考えられるであろうか。

まず指摘できるのは、北部・南部とも、基本的に刀剣を自前で生産できず、他地域に多くを依存しているという点である。この理解は間接的な情報からの類推という不確定要素を残すが、型式学的見地から、少なくとも6～7世紀において、両地域の川十刀剣にもちいられたバージのすべてが現地製である可能性は、南部の短劍をのぞいてほとんどないとみてよい。外部に多くの依存する点は、いっけん独自の動きにみえる両地域の墳墓動向が、日本列島中央部の動きと密接に関わっていることをしめすものといえる。したがって、これら刀剣が両地域にもたらされるためには、当時の地域間交流が大きな役割を果たしたと理解でき、とくに南北両地域に隣接する位置にある地域の重要性がうかがえるとともに、その果たした具体的役割を明らかにしてゆくことが必要と考えられる。

## (2) 日本列島北部

**東北南部の動向** 北部に隣接する東北南部にかんしては、宮城県山王・市川橋遺跡の存在が注目される。先述のとおり同遺跡は、のちの多賀城に近接する該期の仙台平野北部の拠点集落であるが、この集落は6世紀後半に急成長し、7世紀中葉には衰退するという注目すべき消長をみせる。さらに、松島湾にほど近いとともに、太平洋に注ぐ砂押川の河畔に営まれ、水上交通の拠点といえる場所に位置する<sup>⑩</sup>。また、同遺跡の北には典型的な古墳時代文化に属する大規模集落は認められず、該期において遺跡周辺の地域は、古墳時代文化の前線地帯の一角に相当している<sup>⑪</sup>。

このような動向と性格をもつ山王・市川橋遺跡において、北部出土の短群の大刀と共に通する刀装具が出土していることは、同遺跡が刀劍類の製作に深く関与し、その製品を北方へもたらす太平洋側の流通拠点として機能していたことを強く示唆するものといえよう。また、短群のみでなく、長群の大刀についても、山王・市川橋遺跡をはじめとする仙台平野の有力拠点集落を中継して北方にもたらされた可能性は高いと考えられる。

また、さらに南方との交流を考えるにあたり、東北南部の太平洋沿岸地域で、後期後半以降になると有力な古墳と文物が集中し、この地域が以前にくらべ地位を上昇させたと考えられるることは重要である（菊地2010）。同じころ関東でも、茨城県鹿嶋市宮中野古墳群や千葉県横芝光町芝山古墳群のように、それまで顕著な古墳が存在しなかった太平洋沿岸地域に有力な古墳群

が数多く営まれるようになり、この地域の権力が急成長したことをうかがわせる。このように、仙台平野の拠点集落が活発な動きをみせるころ、その南方でも太平洋沿岸に本拠をもつ地域権力が以前にくらべ地位を高めたと考えられることから、該期における太平洋沿岸ルートが主要な動脈として機能し、このルートをつうじた交流に各地域権力が大きな役割を果たしたと理解することができよう。

ただし、古式藤手刀の分布が東日本のなかでも内陸部にかたよることがしめすとおり、該期の南北交流は太平洋沿岸ルートのみでなく、内陸部のルートも小さからぬ役割を果たしたと考えるのが適当である。このことは、後期前半には顕著な古墳が存在しなかった福島県内陸部に、このころ有力な古墳群が登場し、白河市下総塙古墳や福島市上条1号墳など該期としては東北最大規模の前方後円墳が築造されることからうかがえる。したがって、東北の太平洋側では、太平洋沿岸ルートが高い比重をしめつつも、一方で内陸ルートも重要な幹線として機能していたとみるべきである。

一方、同時期の東北北部の日本海側では、該期に位置づけられる出刃刀剣が皆無であるだけでなく、墳墓も確認されていない。日本海側における刀剣副葬遺跡は、新潟県佐渡島の北は北海道余市・小樽地域まで空白となる。『日本書紀』に記された齊明朝の阿部比羅夫の北方遠征が、日本海側を舞台としていたことがしめすように、日本海側における南北交流は必ずしも低調とは考えにくく、くわえて、北海道の日本海側の大刀出土遺跡がいずれも海に近接し、これを支えた社会が水上交通を基盤にしていたことを強くうかがわせている。

このように、北部の日本海側では大刀の分布と交通ルートの状況に一致しないあり方がみられ、これに隣接する地域の役割が不明瞭である。この空白域に今後、刀剣副葬墳墓が確認される可能性は皆無ではないが、そのばあいでも、こんにちの状況からは太平洋側を超える数まで予想できず、該期における北部の出土刀剣は、おもに太平洋ルートを介して流通したとみるのが適当である。

**北部への大刀流入ルート** 以上の動向をふまえると、日本列島北部における大刀をはじめとする物資の交易は、おもに太平洋側でおこなわれたと考えるのが妥当であろう。東北北部の大刀出土墳墓は内陸部と沿岸部に大別でき、双方の中間的位置にあるものが皆無であることから、別個に存在したルートをつうじ大刀が入手されたとみるべきである。前者に相当するのが岩手県岩手町浮島墳墓群や同矢巾町藤沢秋森墳墓群であり、後者に相当するのが岩手県山田町房の沢墳墓群や同宮古市長根墳墓群である。一方、青森県八戸市周辺の墳墓群は沿岸部に位置するものの、ここは内陸ルートと沿岸ルートが合流する場所にあたり、両ルートの結節点としての役割をもっていたと考えられる。すなわち、これら東北北部出土の大刀は、仙台平野以北に存在した二つの主要ルートをつうじ、各地にもたらされたと考えられよう。

北海道の墳墓出土大刀は、現在のところ道央部のみに分布するが、東北北部の状況をふまえ

れば、その主要入手ルートは太平洋側であったとみるのが適当である。本州島側の出発点にあたる拠点としては、集落や墳墓の動向からみて八戸市周辺域が想定される。一方、余市・小樽の墳墓が日本海を意識した立地にあることは先に指摘したが、出土大刀が日本海ルートをつうじもたらされたことを積極的に主張しうる根拠は乏しいといってよく、現在のところは太平洋側からの搬入品と考えるのが妥当と判断する。

### (3) 日本列島南部

**九州中～南部の動向** 先述のとおり、対象地域における後期後半以降の墳墓動向は必ずしも明確でないが、各地の従来的な墳墓造営がしだいに衰退しつつ終末に向かったと理解される。該期の九州南半の墳墓は、東部にやや多いものの日本列島北部ほどのいちじるしい片寄りはみられず、基本的に太平洋（日向灘）沿岸と八代海（東シナ海）沿岸の二つの交流ルートが存在したとみられる。そして、内陸部の人吉・大口・えびの各盆地が、両ルートを結ぶ内陸ルートの拠点として重要な役割を果たしたと考えられよう。

一方、該期における九州南部の東西の墳墓のあり方は相当に異なっていることから、両地域にいたるルートは根本的に相違し、相互の交流は必ずしも密接でなかったことをうかがわせる。太平洋沿岸ルートのばあい、北方の宮崎県北部と大分県を経由したことはほぼ明らかだが、その先には瀬戸内・四国地域があり、1本のルートを想定することは適当でない。八代海沿岸ルートのばあいでも、九州島西岸沿いのルートにくわえ、天草諸島を経由するルートなどが考えられ、やはり単一のルートとみるのは困難である。したがって、南部にいたる交流経路には、大きく東西の二大ルートが存在するものの、日本列島北部にくらべより複雑にルートが交錯するあり方が想定できよう。この問題については、集落や他の墳墓の情報を加味しつつ、実態にそくした究明を続けていく必要がある。

**南部への刀剣流入ルート** 以上のように、九州南部に刀剣がもたらされるうえでは、やや複雑な搬入経路が考えられた。実際の刀剣の分布をみても、南部のはば全城に大きな片寄りなく存在しており、特定のルートによりこれらが入手されたとみることを困難にしている。

東部の志布志湾沿岸とその周辺地域の刀剣については、大きくは太平洋沿岸ルートをつうじて入手されたものと考えられる。ここに位置する中尾遺跡では円頭大刀や象嵌大刀が出土しているが、おなじく東部の宮崎平野などで少なからず該期の装飾付大刀が出土している一方（有馬2007）、西部の熊本県域では装飾付大刀の出土がきわめてかぎられることが、このルートの妥当性をうかがわせる。ただし、同じく東部の横間遺跡出土軫手刀については、他の刀剣より大きく降る8世紀代の年代が想定されるうえ、このころが南部に律令体制が確立されていく時期にあたることから、太平洋沿岸ルートのみを想定することは必ずしも適当でない。

西部については、大きくは八代海沿岸ルートをつうじ入手されたものと推測する。ただし、この地域の出土刀剣は必ずしも多くなく、太平洋沿岸ルートから内陸ルートを経由して入手さ

れた可能性も否定できない。

一方、西部でも薩摩半島南端部の成川遺跡をはじめとする諸遺跡については、異なる刀剣入ルートが想定される。すなわち、この北側の薩摩半島中央部で刀剣のみならず墳墓の動向さえ明確でないのにくわえ、薩摩半島南端部と志布志湾沿岸地域は、鹿児島湾をはさんで指揮の関係にある。したがって、この地では、太平洋沿岸ルートの延長として外来の刀剣が入手された可能性が高いと推測しておきたい。

また、島内地下式横穴例や亀ノ甲遺跡例など、東西の中間的位置にある墳墓から出土した刀剣については、両ルートからの入手がありうることから、いずれか一方に限定することは困難と考える。内陸部のえびの盆地や大口盆地における中期までの古墳時代墳墓は、八代海側に分布の中心をもつ板石積石棺墓と、太平洋側に分布の中心をもつ地下式横穴が入り組むあり方をみせる。後期後半以降においてもこの枠組みは大きくは継続しているとみられるため、普遍的な刀剣のみでの入手ルートをいずれかに限定することはむずかしい。また、三累環頭大刀が出土している亀ノ甲遺跡についても、装飾付大刀が多く出土している東部からの入手を考えることも可能だが、これまで東部から三累環頭大刀の卅十例ではなく、これが多い九州北部では明らかに分布の中心が西側に片寄り（有馬前掲）、必ずしも東部ルートによる入手とは言い切れない。このように、南部の東西中間に位置する墳墓の出土刀剣については、双方のルートからの入手がありうると想定できることから、他の考古資料をもとに、今後その錯綜したあり方を解きほぐしていく必要があると考えられる。

#### 4 日本列島周縁部における刀剣流通の背景

##### (1) 南北動向の比較

以上みたとおり、日本列島の古墳時代文化の周縁部にあたる南と北の地域では、古墳時代後期後半から終末期にかけて、注目すべき刀剣類の様相が認められた。ここでは、南北のあり方を比較し、相互の異同や背景に論を進みたい。

**刀剣副葬の相同意** まず注目されるのは、やや時期がずれるものの、このころ双方における刀剣副葬の様相に明確な変化が現れることである。北部では、それまで刀剣が副葬される墳墓がほぼ皆無であったのが、7世紀に入るころから墳丘墓が成立するとともに大刀副葬が普遍化する。南部でも、後期前半の様相がやや不明確であったが、後期後半には少數ながら刀剣を副葬する墳墓が広く現れ、その終末時の状況を彩ることになる。このように、対照的状況ながら両地域の墳墓に刀剣が顕著に副葬される事実を、たんなる偶然として捨て置いてよいとは思えない。

南北両地域の動向が関連すると考えられるもう一つの理由は、刀剣副葬という現象だけではなく、共通する形式の大刀が存在することである。小論で取りあげた例でいえば、北海道フゴツ

ペ洞窟と鹿児島県中尾遺跡で出土した円頭大刀があげられる。両者は、把頭が漆塗り木製と金銅製という材質の違いはあるが、ともに搬入品と考えられ、短群に属する点や年代が近いことも共通する。同一の工房の作とまでは言い切れないが、地域エリートへの配布品として倭政権配下の工房で製作され<sup>13)</sup>各地へもたらされた器物と考えることは許されよう。また、やや時期が降る例ではあるが、両地域から出土している蕨手刀が、形態のみでなく装具にまで強い規格性をみせることも、これが律令国家の管理のもとで製作され、両地域をはじめとする各地に配布されたものであることを強く示唆している。

以上のように、決して資料数が豊富ではないものの、対象時期の両地域の刀剣には、その動向とともに特徴においても共通した内容をもつ例が存在する。いっけん関連が乏しいかのように思える両地域の刀剣が注目すべき相同性をみせることは、これらが根底において共通する時代背景のもとで生産され、各地にもたらされたことを意味すると理解できよう。

**剣副葬の意義** 南部の中尾遺跡には搬入品とみられる長剣が2点副葬されており、また、大島遺跡など鹿児島県の広い範囲に地元製とみられる短剣が分布する。剣は基本的に後期以降の墳墓副葬品にくわわらないにもかかわらず、該期の南部において少なくない数の剣が墳墓に副葬されている事実は注目すべき事象と考えられる。

このことを理解するうえで、南部の中期の墳墓に鹿角装劍や蛇行劍が頗著な副葬品としてくわわることが注目される。鹿角装具の型式的特徴などからみてこれらをすべて地元製と考えることはできないが、他地域にくらべて非実用的な剣副葬が卓越する事実は、この地域が死者の持物として剣を強く好み、他地域から剣を入手するとともに自前でも生産をおこなったことをしめしている。したがって、日本列島の主要部で副葬が終了している後期に南部で剣副葬が行われ、短剣の製作さえ推測されることは、この地域の強いアイデンティティーの発現を物語り、倭政権もこのことを知悉し、対応をとったものととらえられよう。

一方、後期における剣副葬はじつは南部にかぎられる現象ではなく、きわめて限定的ではあるが冒頭の奈良県藤ノ木古墳など各地に例がみられる。北部に該期の剣副葬の例はないが<sup>14)</sup>、東北南部には宮城県仙台市大年寺山6号横穴で7世紀前葉の剣副葬が認められる<sup>15)</sup>。これらの評価はむずかしいが、日本列島南部の動向を積極的に受け止めれば、中期的様相の残滓や伝世品の装具の付け替えといったとらえ方だけでなく、後・終末期の倭政権による何らかの意図的な政策の一環に位置づけられる可能性も皆無ではないように思われる。各地の実例をふまえたうえで今後よりいっそうの検討の深化が必要といえよう。

## (2) 刀剣副葬の背景と意義

**刀剣副葬・流通の意義** これまで、日本列島南北両地域の刀剣の具体例やその流通過程の検討をつうじ、両地域の刀剣が、相違点も小さくないものの、根底において共通する背景のもとで生産・流通された状況が想起されることになった。

両地域の刀劍の多くが、地元製でなく近畿をはじめとする他地域性とみられるることは、この想定を裏づける重要な根拠となる。すなわち、該期における両地域の刀劍副葬は、地域内の自己完結的な生産・消費活動をしめすのではなく、広域におよぶ地域間交流と物資流通の一端のなかに位置づけられるのであり、そこにはほぼ確実な近畿製品がふくまれることは、日本列島全域を巻き込む広域ネットワークのなかに両地域が組み込まれたことを意味すると考えられよう。

ただし、汎列島的な武器・武具の流通ネットワークは遅くとも中期には認められ、南部には近畿製とみられる鉄製甲冑などが副葬されている。北部でも明確な墳丘墓は成立していないものの、近畿製とみられる器物が在来の墳墓に副葬される状況が認められる(日高2001)。したがって、日本列島周縁部におよぶ流通網が成立したのは、この時期がはじめてではない。

しかし、対象時期がそれ以前と異なるのは、両地域の墳墓のあり方に大きな転換が起こるなど、近畿と各地域権力との関係に少なからず変化が生じていたと考えられることである。中期までの両者の関係は、前者が優位とみられるものだけって支配ー従属の関係ではなく、基本的には地域エリート間の交流と理解すべきものととらえられるが、後期後半以降になると、前者が政治的・経済的・軍事的に圧倒的優位に立ったうえで後者にたいする支配権を確立していくとする関係に変化したと考えられる(菊地2010)。

具体的には、北部に隣接する東北南部では、7世紀中葉に陸奥国が設置されたとみられ(今泉2005)、また、南部でも日向国からの薩摩・大隈両国の分離は8世紀はじめとされるものの、肥後国と日向国の設置は7世紀代と考えられている。このように、南北両地域(とその隣接地域)は、遅くとも7世紀前葉には、のちの律令体制に結びつく政治状況下にあり、近畿とのあいだは対等とはいえない関係にいたっていたと理解できよう。この状況をふまえれば、対象時期における南北両地域の刀劍副葬は、両地域の支配権確立を目指す倭政権の地域政策の一環に位置づけられるものととらえられる。

ただし、両地域の刀劍の年代にずれがみられ、南部のそれが他の地域の出土刀劍の年代と大差ないことから、倭政権と南部の地域権力との関係は、7世紀前葉のうちに前者の望ましいあり方となり、のちの律令体制への準備が整えられたととらえられる。一方、北部については、北海道が最後まで律令体制にくわわらなかったことがしめすように、なお不安定な状態になり、倭政権(律令国家)による北方政策の一環として交易された物資の重要な一角を、大刀が担ったと考えられよう。

**太平洋沿岸交流** また、この時期の刀劍流通の経路を復元的に推定すると、とくに北部においては太平洋側に資料が集中し、太平洋側の交流が顕著にうかがえた。南部においても、太平洋側に例が多く、太平洋側の地域からの搬入がやや比重が高いと考えられた。このことから、当時の交流が太平洋側に集中していたと理解するのは、やや短絡的といわざるをえないが、少なくとも古墳時代終末期の日本列島南北周縁地帯にとって、太平洋側の交流が重要な役割を担っ

ていたと理解するのは許されよう。

日本列島北部では、墳丘墓のあり方から明らかに太平洋側に資料の集中がみられ、なかには岩手県長根墳墓群や房の沢墳墓群のように、明確に太平洋を意識した立地にあるものが存在する。また、青森県丹後平墳墓群は太平洋ルートと内陸ルートの結節点にあると同時に、より北方の北海道への本州側の窓口としての位置にあると理解できる。また、北部の大刀の製作地の一つととらえられる宮城県山上・市川橋遺跡が水上交通の拠点と考えられたことも先述のとおりである。

このように、北部の墳丘墓は、南北を結ぶ結節点といえる地に顕著に営まれ、そこに東北南部もしくはそれ以南（以西）で製作された大刀が副葬されていることは、墳墓造営集団のなかでもとくに大刀所有者が、7世紀初頭ごろから太平洋沿岸交流をはじめとする地域間交流に深く関与し、それを基盤として勢力を増大させた人物であることを強くうかがわせる<sup>(10)</sup>。より南方の墳墓のあり方などもふまえれば、この時期においては、内陸ルートよりも沿岸ルートが物資・情報の経路として、より機能していたととらえられる。

### 結 論

6～7世紀の日本列島南北の墳墓から出土した刀剣をもとに、その製作地、流通ルート、背景などについて検討した。そこからうかがえたのは、この時期の両地域に刀剣が顕著に副葬される事象を、僻遠地の局地的動向とみるとべきではなく、日本列島に國家秩序が整備されつつあるこの時期特有に認められる現象の一端に位置づけられるという点であった。

この時期は、日本列島中央部で装飾付大刀の生産と副葬が顕著におこなわれた一方、7世紀前葉になるとそれが急速に衰退する。南北両地域では装飾付大刀はほとんど存在しないが、両地域の刀剣のあり方は、装飾付大刀のそれと連動した動きをみせている。また、わずかに存在する装飾付大刀から、両地域が決して装飾付大刀の動向と無縁だったのでなく、その“繁栄”を別角度からうかがわせる内容をもつと理解できる。このような意味で、南北両地域の刀剣の動向は、決して華やかではないものの、日本列島の地域間交流と国家成立過程をうかがう重要な材料ととらえることができよう。また、こういった視点に立つことで、当該期の地域間交流の内容や動向に、刀剣類以外の考古資料から迫ることも可能になるものと考えられる。

具体的な南北両地域への交流ルートを明らかにすることは容易でなかったが、大きくみると太平洋沿岸地域の交流がそれにあたって小さくない役割を担っていたことが推測された。この問題については、他の考古資料や文献史料などをもとに、より詳細に追求することが必要と考えられる。したがって、なお深めるべき課題も少なくないが、古墳時代の地域間交流を復元するうえで刀剣類が小さくない役割を果たすことが指摘できたとすれば、小論の目的はひとまず達せられたといえよう。

## 謝辞

小論をなすにあたって、下記の諸氏・機関にご配慮とご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

石神敏、乾芳宏、宇部則保、大野亨、川向聖子、小針大志、小谷地寧、今野公順、酒井秀治、鈴木順一、鈴木信、仙庭伸久、高木晃、中野和浩、中村耕治、西野修、橋本達也、長谷川真、東和幸、藤井誠二、村田大、八木澤一郎、安原誠、岩手県立博物館、えびの市教育委員会、おいらせ町教育委員会、小城市教育委員会、鹿児島県歴史資料センター黎明館、鹿児島県立埋蔵文化財センター、霧島市教育委員会、札幌市埋蔵文化財センター、八戸市教育委員会、八戸市立博物館、北海道埋蔵文化財センター、盛岡市遠跡の学び館、宮古市教育委員会、矢巾町教育委員会、川田町教育委員会、余市水産博物館

## 注

(1) 藤沢教は「土壙墓」の中に板材を用いた木棺形式の墓と、木蓋土壙墓が存在することを指摘している（藤沢2009）。

(2) 観察をおこなったのは、つぎの遺跡の出土大刀である。

北海道恵庭市西島松5遺跡、同小樽市蘭島D遺跡、余市郡余市町大川遠跡、同町フゴッペ洞窟、同町大内山遺跡、青森県八戸市外後平墳墓群、同上北郡おいらせ町阿光坊塙墓群、岩手県宮古市长坂II遺跡、同上開伊郡山田町房の沢IV遺跡、同岩手郡岩手町浮島古墳群、同盛岡市宿田遺跡、同紫波郡矢巾町藤沢狄森塙墓群、同花巻市照堂塙墓群。

なお、刀の研究においては、全長60cm程度より長いものを「大刀」とし、それより短いものを「横刀」と呼びわけて区別する方法が取られるばあいがあるが、小論ではとくに区別をおこなわず、すべて「大刀」としている。

(3) 観察をおこなったのは、つぎの遺跡の出土刀剣である。

宮崎県えびの市島内地下式横穴群、鹿児島県霧島市龜ノ甲遺跡、同鹿児島市吾平町中尾地下式横穴群、同薩摩川内市大島遺跡、同肝属郡肝付町横間地下式横穴、同指宿市成川遺跡。

(4) この三葉環頭大刀にたいしては、伝世品とみる理解がしばしば提示されているが、本文中で指摘しているように同遺跡出土の他の大刀の年代も本例と大差ではなく、土器との共伴関係も明確でない以上、あえて伝世と主張すべき積極的根拠は存在しないと考えている。

(5) 龜ノ甲遺跡出土大刀については、複数ある報告の記述・挿図の内容と、現存する遺物の特徴が少なからず異なっており、現在、出土遺構を確實に特定できるのはこの三葉環頭大刀のみといつてよい。

(6) 本例の報告は2010年に予定されていることであり、えびの市教育委員会の中野和浩氏より観察結果公表の許可をいただいた。

(7) 本例は保存状況が悪いうえ、分厚い保存処理が施されているため、細部の観察が困難な部分が多く、鉢欠損の確認まではえられなかった。しかし、歯実な跡ともみられなかつたうえ、一般的な嵌手刀の全長とくらべ本例が短小であることから、欠損の可能性が高いと判断した。あるいは、鋒付近が破損したものを研ぎ直しによ

り“再利用”している可能性もあると考えている。

- (8) 墓裏面の把頭には略片金具が現存しているとみられるが、鉄錆に覆われているため、その形状や材質は明確でない。
- (9) 南部の地下式横穴や「墳墓が、中期以来大きな断絶なく終末にいたったとみてよいかは慎重な検討が必要である。東北南部を例にとると、後期前半に墳墓動向の大きな転換があり、首長墓系譜や群小（集）墳は中期と後期で継続していない（菊地2010）。
- (10) 山王遺跡と市川橋遺跡は、別遺跡として登録されているが、実際には連続する一つの遺跡である。
- (11) 市川橋遺跡で木製刃装具が出土した同じ流路跡から、長さ約5mの丸木舟が出土しており、同遺跡の成立基盤の一つが河川交通にあったことを物語る。
- (12) 山王・市川橋遺跡の北方の宮城県大崎平野まで同時期に横穴が展開するため、墳墓にかんしては仙台平野は“最前線”とならない。このように、複数の遺構や遺物が統一的な境界を形成せず、南北地域の要素が相互に入り込むあり方をみせるのが、古墳時代をつうじた北緯社会の特徴である。
- (13) 実施はいまだ明らかでないが、「倭政権配下の工房」は、7世紀以降には必ずしも近畿でない地域に存在しても差し支えないと考えている。当該期にいたれば、「地方」工房において倭政権のオーダーにより特定規格の製品を製作することは可能な社会状況にあると考えるためである。
- (14) 北部でも、北海道平取町カンカン2遺跡などから鋒が劍形の大刀が出土しているが、小論の対象時期から大きく遅れる10世紀ごろの例であり、古墳時代終末期併行期とは異なる成立背景を検討すべき事例と考えている。
- (15) 同資料は劍ではなく、大刀を誤認したものであるとする見解が一部にあることは承知している。しかし、大刀である可能性も十分ふまえつつ断面観察等を重ねたうえでの結論であり、報告者の一人として、この見解には同意できない。
- (16) 「末期古墳」の被葬者間には顕著な階層性が認められないと指摘されるばあいも少なくない。詳細な検討は避けるが、大刀出土の有無にもとづいて墳墓を比較すると、大刀出土墳墓は他の墳墓にくらべてわずかではあるが規模が優れるとともに、それらが近接して営まれる例が認められる。したがって筆者は、墳墓群のなかの指導者の立場にある人物が累代的に大刀を所有・副葬した可能性を考えている。

#### 引用文献（五十音順）

- 有馬義人 2007「九州の装飾付大刀」『後期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会：pp.61-78
- 今泉勝雄 2005「文献資料からみた7世紀の陸奥南部」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』、日本考古学協会2006年度福島大会実行委員会：pp.397-406
- 折原洋一 1997「房総地域における有窓（孔）鋒について」『生産の考古学』、同成社：pp.109-117
- 菊地芳郎 2010「古墳時代史の展開と東北社会」、大蔵大学出版会
- 黒瀬和彦 2004「群馬県出土藤手刀の分類と編年」『群馬考古学手帖』14、群馬土器観会：pp.1-22
- 田口 尚輔 1998「北海道式古墳の系譜」、北海道考古学会

- 豊島直博 2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』第48巻第2号、考古学研究会：pp.82-101
- 西澤正晴 2002「遠江・駿河における鉄製板舞の変遷と展開」『研究紀要』第9号、静岡県埋蔵文化財調査研究所：pp.79-104
- 野坂好史 2002「三累環頭大刀の編年」『物質文化』74、物質文化研究会：pp.40-82
- 橋本達也 2007「古墳時代の墓制による古墳時代墓制の研究」『古墳時代の墓制による古墳時代墓制の研究』、鹿児島大学総合研究博物館：pp.1-18
- 橋本達也・藤井大祐 2007「古墳時代の墓制による古墳時代墓制の研究」、鹿児島大学総合研究博物館
- 日高 慎 2001「東北北部・北海道地域における古墳時代文化の受容に関する一試験」『海と考古学』第4号、海交史研究会：pp.1-22
- 藤井大祐 2006「中尾6号地下式横穴墓出土の象嵌装大刀」『平成18年度鹿児島県考古学会研究発表会資料』、鹿児島県考古学会：pp.9-10
- 藤沢 敦 2009「墳墓から見た古代の本州島北部と北海道」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集、国立歴史民俗博物館：pp.441-458
- 村上恭通 2007「古代国家成立過程と鉄器生産」、青山書店
- 八木光則 1996「蘇手刀の変遷と性格」『考古学の諸相』、坂詣秀一先生追憶記念会：pp.375-397

#### 報告書文献（北から）

- 天内山（北海道）：峰山巖ほか 1971『天内山』北海道発掘調査シリーズNo3、北海道出版企画センター
- 大川（北海道）：乾芳宏 2000『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』、余市町教育委員会
- フゴッペ洞窟（北海道）：野村聰・瀧瀬芳之 1990「北海道余市町フゴッペ洞窟前底部出土の鉄製武器」『古代文化』第42巻第10号、(財)古代学協会、21-25頁
- 蘭島D（北海道）：小樽市教育委員会（執筆者不明） 1992『蘭島遺跡D地点』小樽市埋蔵文化財調査報告書第5輯、小樽市教育委員会
- 西島松5（北海道）：鈴木信ほか 2006『西島松5遺跡（4）』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第221集、(財)北海道埋蔵文化財センター
- 阿光坊・十三森（青森県）：小谷地肇 2007『阿光房古墳群発掘調査報告書』おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集、おいらせ町教育委員会
- 丹後平（青森県）：宇部則保ほか 1991『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集、村木教・藤田俊雄 1996『丹後平（1）遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集、坂川進・渡則子 2002『丹後平古墳群 丹後平（1）遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第93集、八戸市教育委員会
- 浮島（岩手県）：佐々木清文ほか 1990『岩手県熊岱古墳群・浮島古墳群発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第六回、岩手県立博物館

- 宿田（岩手県）：松川光海・室野秀文 2006『盛岡市内遺跡群－平成17年度発掘調査報告書－』、盛岡市教育委員会
- 藤沢秋森（岩手県）：西野修 1986『徳田遺跡群詳細分布調査報告書』矢巾町文化財調査報告書第8集、矢巾町教育委員会
- 熊堂（岩手県）：佐々木清文ほか 1990『岩手県熊堂占墳群・浮島古墳群発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第6冊、岩手県立博物館
- 長根（岩手県）：光井文行・玉川英喜 1990『長根I・遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 房の沢（岩手県）：佐々木清文ほか 1998『房の沢IV・遺跡調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 山王・市川橋（宮城県）：菅原弘樹・吾妻俊典 1994『山王遺跡I』宮城県文化財調査報告書第161集、後藤秀一ほか 2001『山王遺跡八幡地区の調査2』宮城県文化財調査報告書第186集、宮城県教育委員会、千葉孝亦ほか 1997『山王遺跡I』多賀城市文化財調査報告書第45集、多賀城市教育委員会、古川一明ほか 2001『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第184集、柳沢和明・塙村幸宏 2009『市川橋遺跡の調査伏石・八幡地区』宮城県文化財調査報告書第218集、宮城県教育委員会
- 大年寺山（宮城県）：進藤秋輝・佐藤則之・菊地芳朗 1990『大年寺山横穴群』宮城県文化財調査報告書第136集、宮城県教育委員会
- 藤ノ木（奈良県）：前園知雄ほか 1995『斑鳩藤ノ木古墳 第2・3次調査報告書』、斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 島内（宮崎県）：中野和浩 2001・2009『島内地下式横穴墓群・同III』えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集・第50集、えびの市教育委員会
- 亀ノ甲（鹿児島県）：橋本達也・藤井大祐 2007『占墳時代の墓制による古墳時代墓制の研究』、鹿児島大学総合研究博物館
- 中尾（鹿児島県）：川崎重治 1998『中尾地下式横穴群』吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書第15号、川崎重治・川口雅之2005『中尾遺跡IV』吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書第(19)、吾平町教育委員会
- 横間（鹿児島県）：寺師見国ほか 1957『鹿児島県文化財調査報告書』第4輯、鹿児島県教育委員会
- 人島（鹿児島県）：宮田栄二・平木泰芳男 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)、鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 成川（鹿児島県）：橋本達也・藤井大祐 2007『占墳時代の墓制による古墳時代墓制の研究』、鹿児島大学総合研究博物館

#### 挿図出典

- 図1 著者作成
- 図2 各報告書より改変再トレース
- 図3 1～3・5:各報告より改変再トレース、4:著者作成
- 図4 報告書より改変再トレース

## 7. 横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の関係

清家 章

### 1 研究史と本稿の目的

本稿の目的は、南四国に分布する横穴式石室の型式分類を行い、その型式間の階層差・地域差・時期差などの関係を明らかにすることにより、南四国諸地域間の関係を明らかにすることである。

南四国における横穴式石室の本格的研究は、岡本健児の研究に始まると言って良い。岡本健児は土佐の横穴式石室をまず3型式に分け（岡本1966）、後に11型式に細分している（岡本1968）。岡本の分類は、いくつかの異なる系統の石室を1つにまとめる点や、原始・古代の土佐の後進性を鑑みて古墳の時期を相対的に新しくする点で、現在の視点から見れば再考すべき点があるものの、資料を集成し石室研究の礎を築いた点や土佐の古墳研究の端緒を開いた点は高く評価すべきである。また、廣田典夫は、南国市小蓮古墳・香美市伏原大塚古墳などの大型の後期古墳を調査し、高知県における首長墳の内容を明らかにするとともに（廣田典1972・1984など）、高知県出土須恵器を集成し後期古墳研究の礎を築いた（廣田典1991）。廣田佳久は、土佐における須恵器の地域編年を進めるとともに、土佐の横穴式石室の大まかな動向を明らかにしている（廣田佳1995）。廣田論文（廣田佳1995）は、研究会の発表資料であったため短文であるが、土佐の後期古墳の流れを正確に捉えている点や畿内型横穴式石室が他の四国三県に比して多く認められることなど、現在でも有効な指摘が数多くある。

横穴式石室の系譜についてはいくつかの見解が示されている。橋本達也は四国の横穴式石室の系譜を考察する中で、土佐の横穴式石室の系譜関係を大まかに示している（橋本2001）。耕家豊は、高知平野における古墳の階層差に着目すると同時に、土佐における初期の横穴式石室の系譜を明らかにしようとした（耕家2007）。また、東潮は、徳島県海陽町の大里2号墳石室と土佐の横穴式石室が類似していることを説き、太平洋に面した交通関係の存在を指摘している（東1997）。このことは本稿と関わるので後で詳しく述べることにしよう。

さらに近年、清家は土佐の古墳調査を進め、基礎的資料の整備を進めると同時に首長の動向や高知平野内の首長間の関係を問うている（清家2006・2007）。

以上のように土佐の横穴式石室研究は多くはないが、少しずつその実態が明らかにされつつあるといえよう。しかし、その分析は高知平野が中心であり、東西に広がる土佐全体、あるいは南四国を見渡したものではない。本研究では高知平野における横穴式石室の階層秩序を示し

た後、高知平野とそれ以外の南四国横穴式石室を比較して、高知平野とその周辺域の関係を問う。

## 2 南四国における横穴式石室の分類

南四国には200基余の後～終末期古墳が存在するとされるが、このうち横穴式石室の形状が少しでもわかっている古墳は50基余りである。まずは横穴式石室を分類することにしよう。横穴式石室は以下の4タイプに大きく分けることができる（図1・図2）。

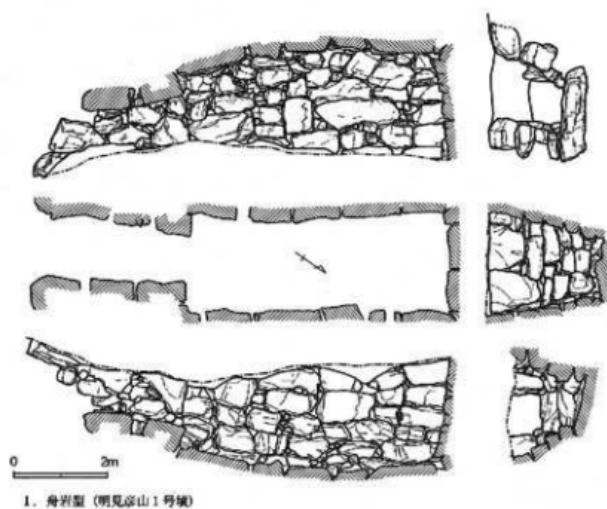
**舟岩型** 南国市小蓮古墳・南国市舟岩古墳群の諸例・南国市明見彦山1号墳などを含む。これらの石室は長方形の玄室を持ち、前壁を形成する。袖石は羨道側にせり出さない。山崎信二の分類ではBb型あるいはBc型に相当する古墳であり、大きな枠組みでは畿内型（山崎2003）の範疇に含まれる（廣田佳1995）。ただし、南四国の石室は玄室の長さが幅の2倍以上の細長い形態をとるものが多く、それ以外にも使用石材の形態など畿内にある横穴式石室と異なる部分が多い。つまりは畿内型の変容と考えられるが、こうした点を評価して筆者もこれらの石室を畿内系と呼んでいた（清家2006・2007）。しかしながら、これらの石室が畿内の系統を直接引くかのような呼称は演繹的すぎると思うに至った。まずは地域型式名を設定し、その編年や系譜を検討するべきであろう。東潮は、これらの石室を舟岩型と呼称しており（東1997）、本稿でもこの型式名を用いることにする。

本型式は、廣田佳久が指摘するとおり南四国で主流となる石室であり（廣田佳1995）、大小さまざまな規模の石室を含むとともに、石材の積み方など細部で相違する石室形態のものがあるので、さらなる細分が可能である。このことについては後述する。

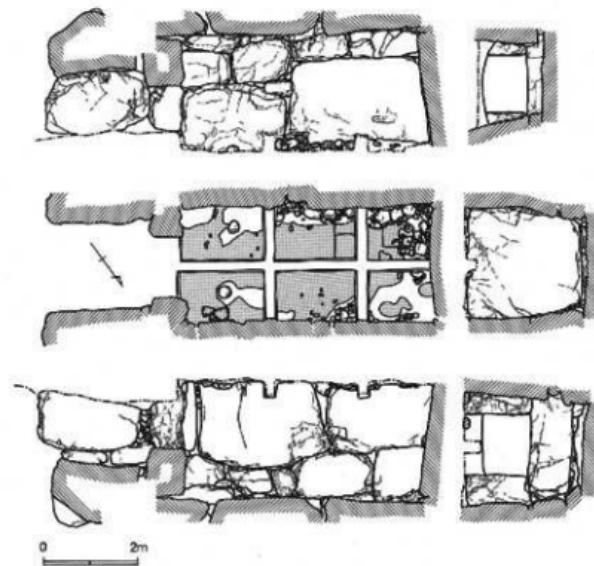
**明見彦山3号墳型** 南国市明見彦山3号墳を標識とする。玄室は、長さが短い寸詰まりの長方形を呈する。前後左右からやや角度の強い持ち送りが行われる。この玄室に短い羨道がつく。羨道床面は玄室床面より1段高い。玄門において天井は櫛石を有する。玄門部は板石閉塞であったようである。

南国市蒲原山東1号墳の石室は壁体の大部分を失っているが、その平面形は明見彦山3号墳と酷似するので、この型式に属する可能性が高い。隣接する蒲原山東2号墳石室や近在の高知市高間原1号墳例も遺存の程度が悪いので明確なことはいえないが、この型式に属する可能性がある。

**角塙型** 高知市朝倉古墳は南四国他の横穴式石室とは大きく異なる特徴を持つ。これらの特徴は山崎信二の角塙型に類する（山崎2003）。平面形が長方形の玄室を持ち、奥壁は天井部との隙間に詰める石を除くと1枚で構成される。玄門立柱石が1石で構成され、羨道部にせり出す。山崎の定義にあてはめると、櫛石を持つ点で厳密には角塙型とはいえないであるが、それ以外の諸特徴は角塙型そのものであり、山崎自身も定義を緩く解釈しているので朝倉古墳は



1. 舟形石室(明見京山1号墳)



2. 角塙(朝倉古墳)

図1 横穴式石室の型式1

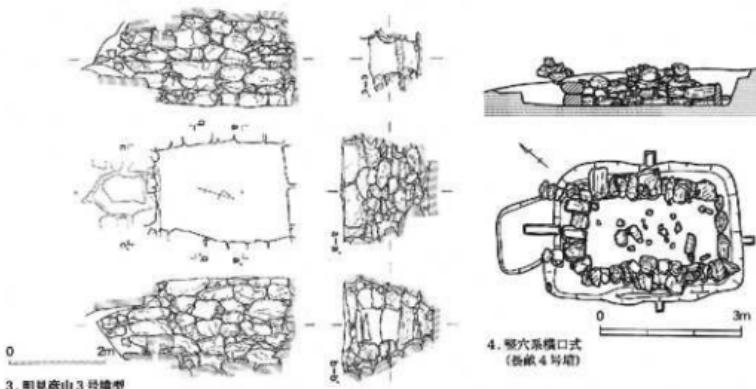


図2 横穴式石室の型式2

角塚型として理解する。

**堅穴系横口式石室** 南四国には長歟4号墳しか存在しない。石室は3段のみ残り、それより上の石積みは削平を受け、天井や側壁の積み方は不明である。2.8×1.2mという小さな玄室に短い羨道がつく。出土須恵器はTK10型式新相である。

**4タイプの時期** これら4タイプのうち、舟岩型はTK43型式新相からTK217型式期まで存在する。とくに大型の舟岩型横穴式石室はTK209型式期を中心として展開する。明見彦山3号墳型は時期が不明な古墳が多いが、蒲原山東1号墳出土須恵器や明見彦山3号墳から出土したという須恵器から見ればTK43型式からTK209型式期の間に存在したようである。これに比べ、堅穴系横口式石室は長歟4号墳1基だけである。出土した須恵器はTK10型式併行期であり、他の石室に比べ古相を示す。横穴系埋葬施設導入期のそれであって時期差を示している。残る角塚型の朝倉古墳は、本科学研究費の発掘調査によりTK217型式期前半（飛鳥1新段階）の古墳であることが明らかになった（高知大学2009）。南四国における他の大型横穴式石室より時期的に後出する。時期差を示すとともに、TK217型式期段階の舟岩型横穴式石室に対して階層差を示している。

すなわち、4タイプの横穴式石室は同時に存在するのではなく、一部に時期差を含むのである。TK10型式期には古墳がほとんど存在せず、TK217型式期も古墳築造数は大きく減少する。以下ではもっと多くの横穴式石室が造られたTK43型式新相段階からTK209型式期について検討を進めることにしたい。

### 3 石室類型に見る階層差と地域間交流

#### (1) 高知平野内部の階層構造

南四国太平洋沿岸諸地域の関係を横穴式石室から理解するために、まずは南四国の古墳分布中心地である高知平野の横穴式石室について検討を進めることにしよう。とくに横穴式石室に認められる階層構造を中心述べたい。後期から終末期の南四国において高知平野とそれ以外の周辺域では古墳分布の密度に大きな差があり、密度濃く古墳が分布する高知平野から周辺域の横穴式石室へ影響が及んだ可能性、あるいは横穴式石室そのものが伝播した可能性がある。そうした比較を行うためにも高知平野の様相を明らかにしておく必要があろう。

**舟岩型石室の細分** まずは南四国でもっとも資料数の多い舟岩型横穴式石室の細分を行う必要があろう。これまで筆者は、高知平野の横穴式石室を玄室面積において4つにわけ、その分類によって横穴式石室を有効に意義づけられることを示している（清家2006・2007）。

すなわち、玄室面積が $14m^2$ 以上の特大型、 $10m^2$ 以上の大型、 $4m^2$ 以上 $10m^2$ 未満の標準型、 $4m^2$ 未満の小型の石室である。この玄室面積を基準にした分類には第2章で示した石室形態による4分類の石室をすべて含んだ上での分類である。石室形態と玄室面積による分類は無関係ではなく、有機的関係を持つ。

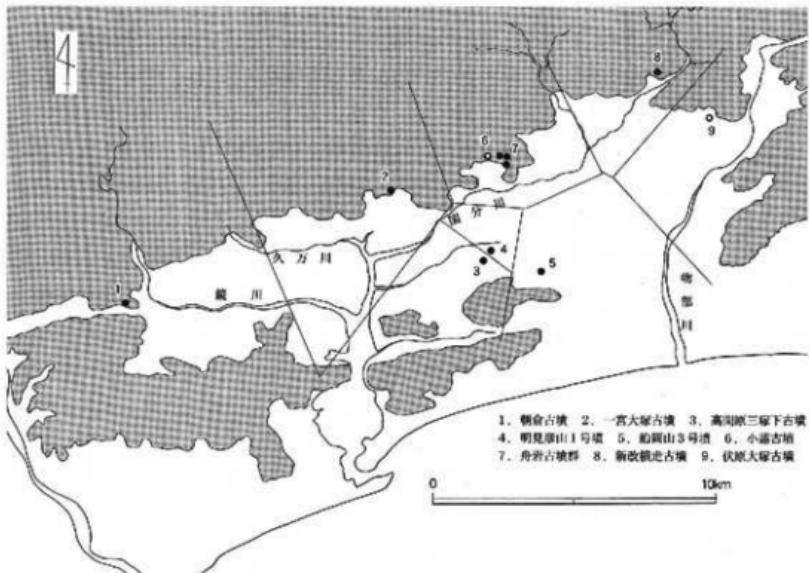


図3 高知平野における特大型・大型石室墳の分布とティセンボリゴン

まず、小型に属する石室は明見彦山3号墳型に限定される<sup>⑤</sup>。角塀型と堅穴系横口式石室はそれぞれ1基だけであり、本稿が対象とするTK43型式からTK209型式期には含まれないから、当該期においては標準型・大型・特大型は舟型横穴式石室を細分する指標となるわけだ。

**高知平野内部の階層構造** 特大型・大型・標準型の性格についても筆者は明らかにしている。詳しくは仰稿（清家2006・2007）をあたられたいが、要点を示すと以下のようになる。大型石室は南国市岡豊を除いて散在的に分布することが明らかである。試みに大型石室墳分布のティセンボリゴンを作成したところ、大型石室墳が、河川や丘陵で区画される領域毎に存在する様子がうかがえる（図3）。大型石室墳はそうした領域を代表するレベルの地域首長墳であるといえる。特大型は小蓮古墳1基だけであり、その周辺には大型石室墳を複数含む舟岩古墳群が存在する。大型石室墳が河川や丘陵で区画される領域を代表する地域首長の墳墓であるとするならば、その大型石室墳に近接しながら隔絶した規模の石室と墳丘を持つ小蓮古墳は、さらに広い領域を代表する首長である可能性が高い。その領域がどの程度であるかは古墳調査が少ないので容易に判断はできないが、少なくとも高知平野レベルの領域を代表し、地域首長を統合する盟主的存在であった可能性が高い。

標準型舟岩型横穴式石室は、大型石室墳の差配する領域内に複数存在することからさらに下のレベルの小首長と考えられるのである。

ここで問題になるのが、小型の明見彦山3号墳型の位置づけであろう。この型式には、明見彦山3号墳以外に蒲原山東1号墳・同2号墳が属する。高知市高間原1号墳もこれに属する可能性がある。舟岩型とは系譜を異にする石室であるが、舟岩型横穴式石室とどのような関係にあるのであろうか。

蒲原山東1号墳・高間原1号墳から出土した須恵器はTK43型式期であり、舟岩型横穴式石室の多くがTK209型式期に属するならば、時期差の可能性もある。この点は未調査の舟岩型横穴式石室が多いので明確ではないが、同じ谷部に存在する明見彦山1号墳と同3号墳には無視し得ない共通点がある。先に示しているとおり明見彦山1号墳は大型舟岩型横穴式石室である



図4 横穴式石室に見る階層差

が、3号墳は明見彦山3号墳型の標識古墳である。両者は同じ谷部にありながらも、全く異なる形態の石室を内包しているのだ。

形態は大きく異なりながらも、石材使用という点では共通点が多い。高

知の横穴式石室石材は、主に秩父帯から採取される砂岩・チャート類であるので石材が類似するのは当然のことであるが、奥壁からみて右側の側壁や奥壁の石材使用に共通点がある。奥壁最下段は主として2石で構成され、幅の足らない部分に小さな石材を使用してその隙間を埋める点が共通する。奥壁からみて右側側壁は、もっとも大きな石を最下段に置かず下から3段目に横長に積む等<sup>⑨</sup>、細部に共通点が認められた(図1-1、図2-1、本書第Ⅲ部)。両石室の築造には同じ造墓集団が関わった可能性が高い。同じ造墓集団が築造に関わり、同じ谷に位置することを考えれば、両墳の被葬者はまったく別集団に属すとは考えがたい。また1号墳と3号墳の時期差を大きく見積ることもできない。墳丘規模・石室規模に大きな差が両者の間で認められるので、石室形態の差は階層差を表示するものと考えられる。舟型横穴式石室と明見彦山3号墳型は時期差を持つ可能性もあるが、おおむね階層差を示すと考えることができる。

以上のことまとめると図4のようにまとめることができよう。すなわち少なくとも高知平野全体を代表する特大型石室墳(小蓮古墳)を頂点に、河川や丘陵で区画される領域を代表する大型石室墳、大型石室墳の下に標準型石室墳・小型石室墳が展開されるという図式が描かれよう。

## (2) 高知平野と周辺域の関係

**高知平野周辺域の古墳分布** 南四国において後期・終末期古墳の分布の中心は高知平野であるが、それ以外にも古墳は分布する。しかし、その分布はかなり粗である。高知平野の西端にある仁淀川よりさらに西では、現在のところ黒潮町大方の田ノ口古墳まで横穴式石室墳が存在しない。また幡多地域ではそれ以外に古津賀古墳ほか数基しか横穴式石室墳が知られていないのである(図5)。

高知平野の東側では、物部川東岸の香南市域に大谷古墳・溝瀬山古墳などの横穴式石室墳が十数基分布するが、それより東側では芸西村馬の上古墳や安芸市大木戸古墳群など数基の古墳が知られるにすぎない。また、県境を越えた徳島県側では海陽町に大里1号墳・2号墳という横穴式石室墳が知られる。

**高知平野周辺域の横穴式石室とその特徴** このように高知平野以外では横穴式石室墳の分布はきわめて粗である。調査によってその内容が判明している石室もけっして多くはない。しかし、調査が行われた古墳をみると興味深い事実がある。

それは、東潮が大里2号墳と高知平野の石室を舟型としてグルーピングした(東1997)ことに示されるように、周辺域の石室と高知平野の横穴式石室の間に共通点が認められることである。すなわち、玄室の長さはその幅の2倍以上の細長い長方形の形態を持ち、広い意味での畿内系に含まれる点で共通する。東はそうした石室の平面形の類似だけを取り上げているが、石材の形などでも共通点が認められるケースがある。大里2号墳の奥壁は1枚の山形の石材を置き、その不足する部分に小さな石材をおいて奥壁としている。四万十市古津賀古墳の玄室は



図5 南四国の主な横穴式石室分布

天井石が失われ側壁も上部が崩れていたが、奥壁の構造が判明している。大きな山形の鏡石を1枚置いて、空いている隙間に小さな石材を積むのである。こうした特徴は小蓮古墳や舟岡古墳群でも認められる（図6）。

つまり、高知平野の横穴式石室と共通点を持つ石室が南四国の東西に分布しているのであり、ここから高知平野を中心に太平洋沿岸の諸地域には、少なくとも首長間の交流が存在したこと認められるのである。

**高知平野の周辺域における首長間の階層差** さらに注目すべきことは、周辺域の横穴式石室群に一定の階層的制限が垣間見されることである。高知平野では河川や丘陵で区画される領域の首長墳には大型石室が用いられていた。しかし、高知平野以外では、阿波に属する大里2号墳を除くと標準型しか存在しないのである。言い換えると、地域を代表する古墳には標準型が使用されているのである。

たとえば幡多地域の四万十市古津賀古墳は標準型である。黒潮町田ノ口古墳は、未調査であるため石室の規模は不明であるが、露山している石室石材をみればさほど大きな石室ではないと考えられる。物部川東岸の香南市城の大谷古墳・溝渕山古墳の石室も標準型である。芸西村馬の上古墳の石室も埋没しているが、観察の限りでは大型ではなさそうである。安芸市大木戸古墳群は破壊されて詳細が不明である。記録のない古墳資料があるという不確定要素はあるものの、現時点で高知平野周辺に大型石室は存在しないのである。

これらの地域では、上述の古墳以外に地域や領域を代表する古墳の存在は知られていない。上述の古墳が、その地域や領域を代表する古墳であると考えられる。つまり、高知平野以外の地域ではやや格下ともいべき石室が地域首長墳に用いられているのである。

先述の通り、物部川東岸の古墳や幡多地域にある古津賀古墳の石室は細長い玄室を持つ舟型横穴式石室であり、石材のあり方に高知平野の大型古墳と共通性が認められた。高知平野とその周辺域の間には交流関係が認められたのであった。しかし、周辺域の首長墳には、標準型という小規模な石室が導入されていた。高知平野と周辺域の首長間交流は対等というよりは、格差をもった交流であったのである。

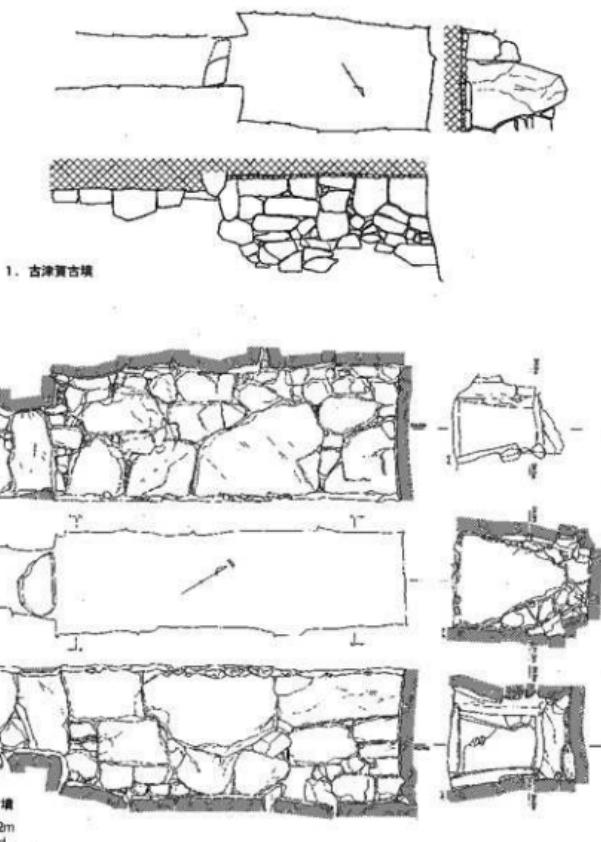


図6 小蓮古墳と古津賀古墳

もちろん高知平野内でも特大型石室を持つ岡豊の小蓮古墳とそれ以外の領域の古墳では格差があったのであるが、高知平野内よりも差が大きいことに注目したい。高知平野内の支配者は、上下間の差をより大きく保って周辺城の首長と関係を持ったのである。

同じ南四国でも県境を越えた阿波の大里2号墳が大型石室であることは示唆的である。国レベルの地域を越えた首長と関係があったことを石室形態は示すものの、阿波南部の首長に対しては、土佐国内の周辺城の首長に対するほど大きな上下関係はなかったということであろう。

#### 4 太平洋沿岸交流の意義

**南四国における太平洋沿岸交流の背景** 以上のことから、高知平野を中心として南四国の東西に、類似した横穴式石室を中心－周縁関係をもって存在しているといえよう。ここに高知平野を中心とした太平洋沿岸の交流の存在を見てとることができる。

南四国には前中期古墳がきわめて少なくその数は十指で足る。しかもその存在は土佐西方の幡多地域に偏っている。横穴式石室が導入されてから以降、急速に古墳が展開し高知平野を中心とした階層構造が顕在化するまでに至る。南四国の東西交流はそうした横穴式石室に見る階層構造の成立とリンクしているのだ。古墳築造が始まり、紅余曲折を経ながら高知平野を中心とした政治勢力が成長し、それが周辺城とつながりを持ったと評価できる。

問題は古墳築造が展開し、政治勢力が成長するに至った理由であろう。前中期古墳が発達しないこの南四国において、なぜ後期以降に古墳が展開し階層構造を顕在化させるまでに至るのか。明確な回答はいまだ持ち得ていないが、南四国に展開した横穴式石室の中心は舟型であり、大きな枠組みで言えば畿内系横穴式石室であることは注目してよい。畿内系横穴式石室は四国の他の地域では主要な石室形態ではなく、四国の他地域とは強い関係を見いだしにくい。南四国独自の、あるいは四国の他地域とは別の勢力の関係を示唆しているといえよう。さらに南四国における古墳展開が高知平野にとどまらず南四国の太平洋沿岸に広がっていることは重要な点だ。南四国の東西交流が重要視されたことそのものに古墳展開の背景を求めるができるのではないか。瀬戸内などとは異なる政治勢力との関係の下、南四国の東西交流が重視された結果が横穴式石室に反映されていると考える。次項で示すようにTK217型式併行期以降に瀬戸内と関係の強い朝倉占墳が築かれると、南四国の東西で古墳自体が姿を消すのはその傍証ともいえよう。

**太平洋沿岸交流から瀬戸内へ** TK209型式併行期にはこのように南太平洋に面した地域で首長間の交流があった。TK209型式期以降、古墳の築造が激減するため太平洋沿岸における交流は不可視化される。このことは交流自体が不活発化した可能性を示す。そういう意味では石室の存在から顕在化する南太平洋沿岸の首長間交流はTK209型式併行期というきわめて短い間のできごとであった。

TK217型式併行期以降、注目されるのは高知市朝倉古墳の存在である。先述の通り、朝倉古墳は角塚型に所属する。角塚型は香川県観音寺市にある角塚古墳を標識とし、瀬戸内を中心に分布する石室型式である。朝倉古墳の石室は瀬戸内の影響を受けて成立した可能性が高い。朝倉古墳は高知平野の西端に位置する。朝倉古墳のさらに西側にある仁淀川を遡上して瀬戸内へ抜けることも可能である。

このように南四国の太平洋沿岸交流が不活発化する中で、土佐の大型石室が瀬戸内の影響を色濃く示すことは興味深い。瀬戸内は大陸から九州を経て畿内に至る文物交流の大動脈である。太平洋沿岸交流が不活発化する背景には、瀬戸内の物流ルートの中に土佐の勢力が組み込まれたことがあるのではなかろうか。

## 5 まとめ

南四国の横穴式石室を分類し、石室規模と形態に反映される階層構造を明らかにしつつ、高知平野を中心とした南四国太平洋沿岸における首長間交流の存在を明らかにした。

ただし、その関係はTK217型式期以降、古墳築造が衰退する中で明瞭でなくなる。南四国太平洋沿岸における首長間交流はきわめて短期間で不活発化する。角塚型石室を持つ朝倉古墳の存在から、瀬戸内との関係が重視される中、太平洋沿岸交流の重要性が低下したことがその背景にあるとの見解を示した。

### 注

- (1) 明見彦山3号墳の玄室面積は4.9m<sup>2</sup>である。厳密には標準型に属するが、規模が他の標準型と比べて極端に小さいので小型として扱って良いであろう。
- (2) 明見彦山1号墳と3号墳とともに調査した中久保良夫氏と筆者の観察による。

### 参考文献

- 東 潮 1997 「大型2号墳をめぐる諸問題」『海南・大里2号墳発掘調査報告書』海南町教育委員会、徳島：pp.66-83
- 岡本健児 1966 『高知県の考古学』青川弘文館、東京
- 岡本健児 1968 『高知県史』考古編 高知県、高知
- 高知大学考古学研究室編 2009 『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知
- 廣田典夫 1972 「高知県南国市小蓮古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪：pp.21-28
- 廣田典夫 1984 「高知県土佐川町大塚古墳」『古代学研究』103号 古代学研究会、大阪：pp.29-32
- 廣田典夫 1991 『土佐の須恵器』四国考古学叢書2、高知
- 廣田佳久 1995 「高知の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第九回徳島

大会資料 古代学協会四国支部、徳島：pp.80-95

清家 水 2006「まとめと若干の考察」高知大学考古学研究室編『南国市における大型後期古墳の調査』高知大  
学考古学調査研究報告第三冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp.23-29

清家 章 2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生追任記念論集－』 真  
陽社、京都：pp.447-461

橋本達也 2001「四国における後期古墳の展開」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム、愛知：  
pp.93-102

桥家 豊 2007「高知平野における横穴式石室の系譜と階層構造」『海南史学』45号 高知海南史学会、高知：  
pp.1-12

山崎信二 2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京

#### 連絡文献

本文中に挿図に使用した資料もそれぞれの文献による。再トレイスの上、一部改変したものもある。

（香美市）

伏原大塚古墳：廣田典夫 1984「高知県土佐山田町大原古墳」『古代学研究』103号 古代学研究会、大阪：29-  
33、土佐山田町教育委員会 1993『伏原大塚古墳』土佐山田町教育委員会調査報告第14集、高知  
(高知市)

朝倉古墳：高知大学人文学部考古学研究室（編） 2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学人文学部考古  
学研究室、高知大学人文学部考古学研究室（編） 2009『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学人文学部考古  
学研究室

高間原古墳群：廣田典夫 1967『とさ高間原古墳群』四国考古学叢書1

（香南市）

大谷古墳：高知県埋蔵文化財センター（編） 1991『大谷古墳』高知県文化財埋蔵文化財センター

構瀬山古墳：野市町史編纂委員会（編） 1992『野市町史』 野市町

（南国市）

小蓮古墳：廣田典夫 1972「高知県南国市小蓮古墳」『古代学研究』65 古代學研究會、高知大学人文学部考古  
学研究室（編） 2006『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学人文学部考古学研究室

舟岩古墳群：岡本健児 1968『舟岩古墳群』高知県文化財調査報告書第15集 高知県教育委員会

明見彦山1号墳：高知大学人文学部考古学研究室（編） 2006『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学  
人文学部考古学研究室

明見彦山3号墳：本番

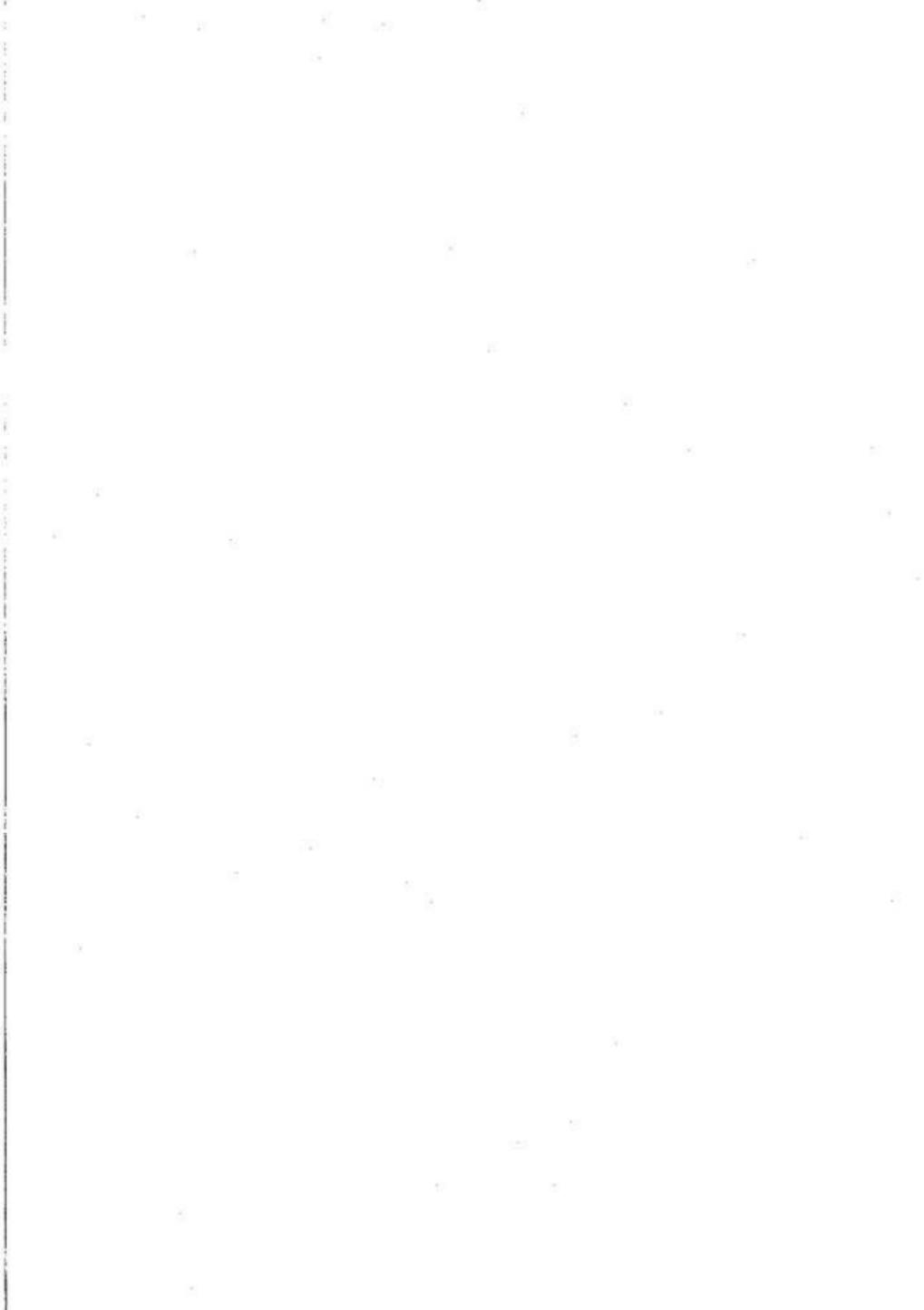
蒲原山東1号墳：廣田典夫 1979「南国市蒲原山東1号・2号古墳の調査概報」『高知県文化財調査報告書』22  
高知県教育委員会

《四万十市》

古津賀古墳：廣田典夫 1975『古津賀古墳』中村市教育委員会

《徳島県海陽町》

大里2号墳：東潮ほか 1997『海南・大里2号墳発掘調査報告書』海南町教育委員会、徳島



## 8. 古墳時代の東海における太平洋沿岸交流の隆盛

鈴木 一有

### はじめに

東海地方は近畿地方中枢部と東国を結ぶ経路上に位置し、東西交流の長い歴史を刻んできた。本稿では東海地方の中でも、伊勢、志摩、三河、遠江、駿河、伊豆といった太平洋沿岸地域の動向に焦点を絞り、古墳時代における海上交流網の隆盛期について注目したい。具体的な検討方法として、まず、海上交流網の充実に伴い出現したと捉えられる伊勢湾沿岸の初期横穴式石室の築造時期を明確にすることから始めたい。次に、同時代の特徴的な埋葬施設や副葬品、祭祀遺跡を取り上げ、諸事象の相関関係を整理する。これらの作業をふまえた上で、改めて太平洋沿岸交流が活発化する意義について考えてみたい。

### 1 伊勢湾沿岸の初期横穴式石室

伊勢湾沿岸の地域に相次いで築かれた初期の横穴式石室を内包する古墳として、三重県おじよか古墳、愛知県中ノ郷古墳、愛知県経ヶ峰1号墳があげられる（図1）。これらの横穴式石室は九州地域との関連が強くうかがえ（土牛田1988・1990）、被葬者の交流網の中で九州地域が重要な役割を果たしていたことが知られる。とくに前二者は、海岸部まで数百メートルしか離れていない立地環境も注目できる。九州地域と伊勢湾沿岸地域を結ぶ交流経路として太平洋上の海上交流網が重要視されていたことが、古墳の立地環境からも読み取れる。

これら3基の古墳は、副葬品にも相互に関連性が高く、築造時期も互いに近接している（鈴木2002・2004）。おじよか古墳と経ヶ峰1号墳からは帶金式甲冑が出土している。双方とも紙留式で、中期後半の製品である。おじよか古墳や中ノ郷古墳には長頭鐵が伴い、後者には独立片逆刺長頭鐵が含まれる。いずれも5世紀後葉（TK208～TK23型式期）に位置づけできる形態（鈴木2003）で、甲冑と共に倭王權から下賜されたものとみてよいだろう。また、経ヶ峰1号墳から出土した透孔鉄織は北部九州地域とのかかわりが強いもので、横穴式石室と共に九州地域と伊勢湾沿岸地域との関係を裏付ける資料である。

中ノ郷古墳と経ヶ峰1号墳には、同じく5世紀後葉に位置づけられる馬具が知られる。前者には、瓢形引手壺を伴う轡と鉄製鞍金具が、後者には、金銅装内嚢帽凹形鏡板付轡や辻金具があり、共に朝鮮半島南部地域からもたらされた可能性がある。経ヶ峰1号墳には、金銅製の歩搖や鏡が共伴しており、金銅冠などが副葬されていたとみられる。この金銅製品も朝鮮半島産

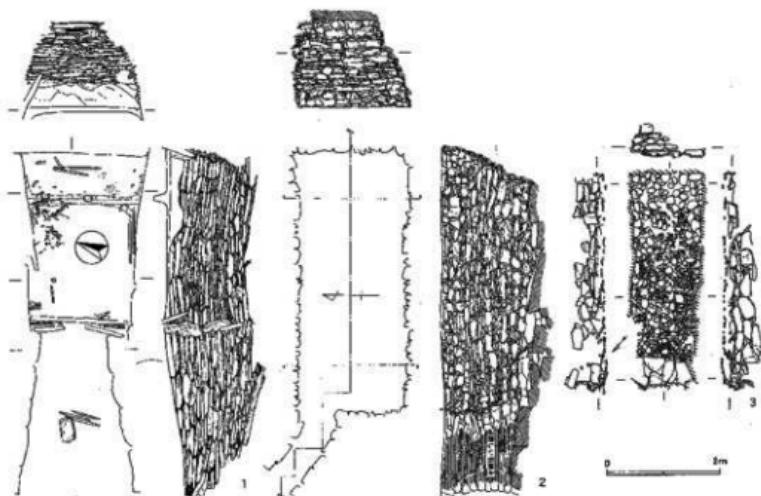


図1 伊勢湾沿岸の初期横穴式石室

(1:おじよか 2:中ノ墓 3:綱ヶ塚1号)



図2 綱ヶ塚1号墳出土須恵器

とみなすことが可能である。

馬具や金銅製品の存在からは、これら古墳の被葬者が朝鮮半島を含む交易網に触れていたことをみてとれる。甲冑や鐵鎧に示される倭王權との関係を併立ちとして、九州地域の諸勢力とも結びつきを強めていた伊勢湾沿岸の首長層の姿をうかがうことができるだろう。その具体像として、海上交流網を駆使した新興勢力といった性格が読み取れる。彼らが活躍した時期は、5世紀後葉（TK208型式期）を前後する頃という共通性がある（図2）。伊勢湾沿岸地域における初期横穴式石室の築造は、5世紀後葉において、伊勢湾沿岸地域と西日本諸地域を結ぶ海上交流網が格段に充実したことの反映とみてよいだろう。

## 2 紀伊半島をめぐる太平洋沿岸経路

伊勢湾沿岸地域に初期横穴式石室の築造をもたらした海上交流網とは、紀伊半島の南側を回る太平洋沿岸経路を指す。九州地域に繋がる交通網の存在は、和歌山県側の横穴式石室においてもあとづけることができる（図3）。

資料が充実している6世紀代の事例をもとに、和歌山県南部にあたる紀南地域の横穴式石室

にみられる特徴について瞥見しておこう。

6世紀前葉に築造された弁天山古墳や上ミ山古墳の横穴式石室は、玄室平面が正方形に近く、側壁には持ち送りがみられ、天井は弧状を呈している。また両者の玄室内には、屍床仕切板が奥壁に併行して2体分並んでいる。こうした石室や玄室の特徴は、九州地域の石室との関連がうかがえるものである。また、つづく6世紀後半代に至っても、秋葉山古墳群や崎山14号墳の横穴式石室にみられるように、玄室平面が正方形に近いこと、玄門に板石を使用すること、

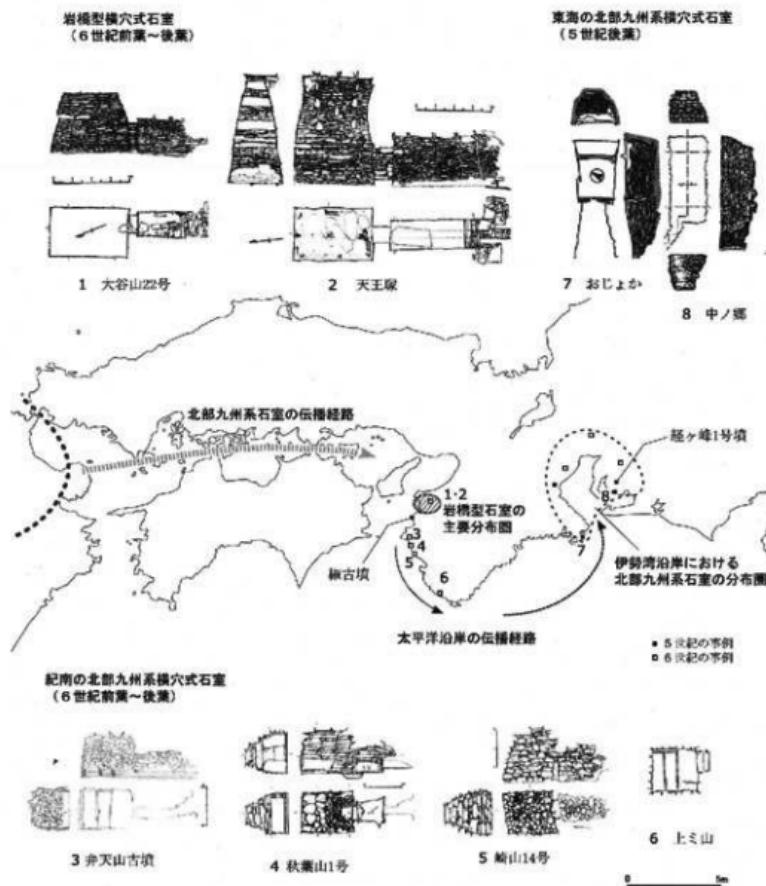


図3 紀伊半島をめぐる横穴式石室の伝播経路

石室基底に腰石を用いること、天井が弧状にされることといった九州地域の横穴式石室と共通する要素が濃厚にうかがえる。

紀伊には紀ノ川流域に地域勢力の中心があり、紀伊半島全域にその影響力をもっていたとみなされる。6世紀代には、紀ノ川流域の首長層は岩橋型横穴式石室と呼ばれる独特の横穴式石室を採用するようになり、紀南地域の横穴式石室にも強い影響力をもっていたとされる（黒石2005）。確かに、紀南地域の古墳には、紀ノ川流域との関連がうかがえるが、横穴式石室にかんしては独自の様相を認めてよい。先述の事例にあげた横穴式石室の諸特徴は、岩橋型横穴式石室とは異なり、紀南地域独自の情報網をもとにしたものであることが分かる。紀南地域に構築された横穴式石室の多くが九州地域の横穴式石室との共通性をもつことは注目できる。紀伊半島南部をめぐる交流網が九州地域とも繋がっていたことを示すものと評価できるだろう。

紀ノ川流域以南における九州系石室の導入時期については、資料が限定的で不明瞭であるが、有田川流域にある椒古墳がその初現例となる可能性がある。椒古墳の横穴式石室は正確な図面がなく細かな検討ができないが、副葬品の特徴から古墳の築造時期は5世紀代にさかのぼることが確実である。石室開口時に作成された見取り図（松下1991）から読みとれる特徴と、岩橋型横穴式石室や畿内型横穴式石室が5世紀代には未成立であることから判断して、椒古墳に採用された横穴式石室は九州系横穴式石室とみて大過なかろう。

伊勢湾沿岸部における5世紀後葉の横穴式石室の伝播経路としては海路を想定したが、その中継地として紀伊半島にも初期の九州系横穴式石室が構築されたとみられる。椒古墳の副葬品には小札甲や朝鮮半島系の堅矧板銀留青が含まれる点にも注目したい。九州地域と朝鮮半島を繋ぐ諸地域との関連は、伊勢湾沿岸の初期横穴式石室の被葬者に想定した交流網とも合致する。

5世紀後葉における紀伊半島と東海地方との関係をうかがう事象として、淡輪技法（川西1977）をもつ埴輪のあり方も看過できない（図4）。淡輪技法は、須恵器系埴輪の製作技法のひとつであり、底部に蔓などを環状にした痕跡を残す。この技法については、回転台離脱技法との関連が指摘されており、渡米系須恵器工人が伝えた大型円筒形土器を製作するための手法の一つとみられる（辻川2007）。淡輪技法が最初に出現するのは、淡輪・紀ノ川流域や福岡県山隈窯が築かれる筑紫地域であるが、東海地方と関連が高いのは前者である。

東海地方では主に伊勢と遠江に淡輪技法の埴輪が分布しているが（鈴木1994）、その技術的な源流地は淡輪・紀ノ川流域と考えられる。東海地方への伝播の時期は、遠江では中期前半的な副葬品組成をもつ千人塚古墳に淡輪技法の埴輪が知られることから、TK216型式期（5世紀中葉）まで遡る可能性が高く、淡輪・紀ノ川下流域における導入時期との差は僅かである。遠江における淡輪技法はTK208型式期（5世紀後葉）に拡散はじめ、TK10型式期（6世紀前半）にかけて西に接する三河地域まで分布域が拡大している。いっぽう、伊勢における淡輪技法の導入はTK23型式期と、遠江と比べて若干遅れるものの、6世紀前葉にかけて同技法は広範に受容さ

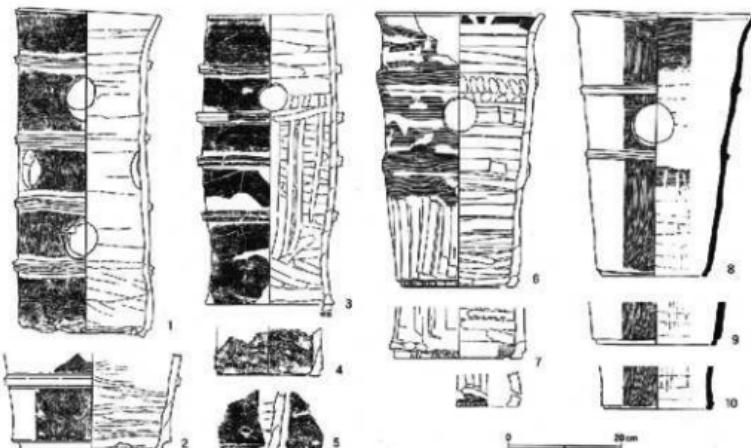


図4 淡輪技法をもつ埴輪  
(1・2:和歌山県市黒之古墳 3~5:静岡県千人塚 6~7:静岡県東見廻 8~10:三重県米原郡谷4号)

れている。

淡輪・紀ノ川流域と伊勢、遠江を結ぶ技術伝播の経路には、陸路を通じた可能性も考えられるが、中間地点にあたる大和では淡輪技法の導入が極めて低调であることを考えると、海路を通じた交流網でこれらの地域が結ばれていた可能性が高い(坂・穂積1989)。伊勢や遠江で淡輪技法が導入される時期はTK208型式期を前後する段階に相当することから、淡輪技法の東海地方への拡散は本稿で注目する5世紀後葉の太平洋沿岸経路の活発化と深い関係がある事象と捉えてよいだろう。

### 3 伊勢湾沿岸地域における同型鏡の分布

5世紀後葉を代表する古墳副葬品として、画文蒂神獸鏡、画文蒂仏獸鏡、画像鏡、獸帶鏡といった、いわゆる同型鏡群が知られる。これら同型鏡群は中国南北朝期に華中で製作され、中國南朝への倭王権の朝貢を契機に輸入されたと捉えられる(川西2004)。日本列島内への拡散は、倭王権が地域勢力との結びつきを強める意図をもって、諸地域の首長層に下賜した結果とみてよいだろう。同型鏡の副葬開始期は、千葉県紙闇大塚山古墳の事例(白井1987)からON46型式期(5世紀後葉)と捉えられ、その後、5世紀後葉から6世紀前葉に築造された各地の有力古墳から出土している。このうち、最も多い26面の兄弟鏡が知られる画文蒂同向式神獸鏡(図5-1)は、伊勢湾沿岸地域に数多くの出土例が認められる点で(澁田1963)、注目できる(図7)。東海地方には、この画文蒂動向式神獸鏡の発見数が8面あり、26面のうち出土地がうかがえ

る23面の中の比較では、ほぼ3分の1を占めている。その出土地（伝米地を含む）は、三重県神前山1号墳（3面）、三重県井田川茶臼山古墳（2面）、三重県神島、愛知県龜山2号墳、静岡県奥の原古墳であり、古墳の特徴や出土地の立地環境に注目できるものが多い。

神前山1号墳はTK208型式期（5世紀後葉）に築造された全長40mの帆立貝式の前方後円墳である（図6）。神前山1号墳が構築された南伊勢の櫛田川右岸地域は5世紀中葉以前には首長墓の造営自体が低調な地域である。南伊勢では宝塚1号墳の築造に示されるように、櫛田川左岸地域が伝統的な中心地である。しかし、この地域では5世紀後葉には有力古墳の造営が途絶え、神前山1号墳をはじめ、大塚1号墳や高塚1号墳といった櫛田川右岸地域に帆立貝式の前方後円墳が相次いで構築されるようになる。これら3基の古墳は、全長40～75mほどの規模をもち、

南北2kmの範囲に集中している。南伊勢における首長系譜の変革が5世紀後葉にあり、3面におよぶ画文帶神獸鏡は新興の首長層にもたらされたと評価できよう。

井田川茶臼山古墳は鈴鹿川左岸に築かれた6世紀前葉の首長墓である。

古墳の形態や規模は不明瞭であるが、豊富な副葬品の内容から北伊勢地域に強い影響力をもった被葬者像が想定できる。本墳は、九州的な特徴が認められる横穴式石室をもち、その後の伊勢湾沿岸地域に広く分布する三河系横穴式石室の構成要素とも関連が深い（岩瀬2006）。古墳の築造時期は本論で注目する時期から若干遅るもの、九州系横穴式

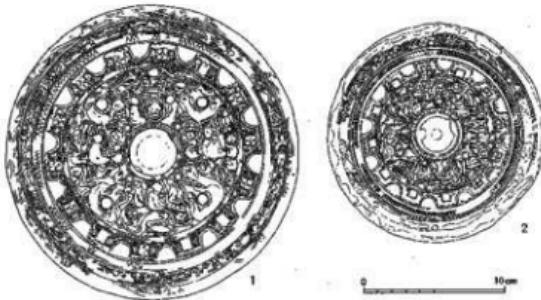


図5 志摩川上（伝来）の画文帶神獸鏡  
(1: 鏡面 2: 鏡裏)

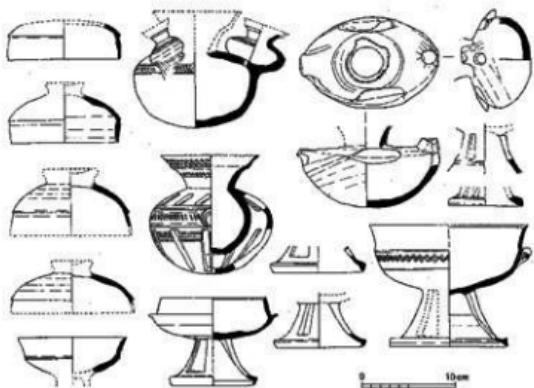


図6 神前山1号墳出土須恵器

石室に画文帶神獸鏡が伴う事例として、太平洋沿岸の交流網を駆使していた被葬者の性格の一端がうかがえる。

神島は伊勢湾の入口中央に浮かぶ周囲4kmほどの小島である。同島にある八代神社には、古墳時代から室町時代にわたる鏡や武器武具、機織具および経塚などからの出土品が神宝として納められており、画文帶神獸鏡もその一つである（図5-1）。この画文帶神獸鏡は出土地が明確でなく、島外からの出土品が奉納された可能性を残すが、ここでは伊勢湾をめぐる海上交通上の要衝地の神島に伝来している点に注目しておきたい。神島がある志摩には、同型鏡群のひとつである画文帶環状乳神獸鏡（図5-2）を出土した塙原古墳もある。塙原古墳から出土した画文帶環状乳神獸鏡は、埼玉県埼玉稻荷山古墳例をはじめとした6面の兄弟鏡が知られる（図7）。古墳の造営数が多いとはいえない志摩において、同型鏡群の鏡が出土すること自体が特異なことであり、5世紀後葉から6世紀前葉にかけて倭王権が志摩を重要視していたことを示す資料として捉えておきたい。

亀山2号墳は矢作川の左岸に位置し、6世紀前半に築造されている。詳細な調査を待たずには消滅したため、その具体的な内容を知ることができない。亀山2号墳が築かれた丘陵上には5世紀後葉以降に構築された古墳群が展開しており、この丘陵の南側約300mには先述した初期の横穴式石室をもつ経ヶ峰1号墳が位置している。互いに近接した立地環境から、これらの古墳は同一系譜に連なるものと捉えられる。亀山2号墳の被葬者は世代差をもつものの、5世紀後葉に先進的な埋葬施設をいち早く導入した経ヶ峰1号墳の被葬者と関連をもつ人物とみてよいだろう。

奥の原古墳は画文帶神獸鏡を出土したこと以外に情報が得られない。古墳は原野谷川の中流



図7 伊勢湾沿岸出土の画文帶神獸鏡と兄弟鏡の出土地

域、支流である逆川との合流点に立地している。北東2～3kmには各和金塚古墳をはじめとした5世紀代の首長墓群である和田岡古墳群があるが、丘陵上に立地するこれら首長墓群とは隔たりが大きい。むしろ、2kmほど逆川を遡った堀ノ内横穴墓群が立地環境は近いといえよう。堀ノ内横穴墓群は、山麓山横穴や宇洞ヶ谷横穴といった横穴を埋葬施設とする首長墓が展開する墳墓群で、その造営開始期は6世紀中葉頃である。堀ノ内横穴墓群が築かれる東遠江地域は、東海地方でもいち早く横穴を採用し、金銅装馬具や装饰大刀を副葬する首長墓が連続して構築される特殊な地域である（鈴木2006）。画文帶神獸鏡の副葬時期とは若干の隔たりがあるが、奥の原古墳は後に新來の埋葬施設を採用した特異な首長墓群に近い位置にあることは注意しておきたい。

以上、東海地方における画文帶同向式神獸鏡を出土した古墳について紹介した。東海地方には画文帶神獸鏡が集中するだけではなく、その出土地においても、伝統的な首長系譜とは異なる古墳であったり、新來の横穴系埋葬施設を率先して採用する古墳群の系譜であったりするなどの特徴が見出せる。その変革期は、画文帶神獸鏡の副葬が開始される5世紀後葉であり、本稿で注目する太平洋沿岸交流網の隆盛開始期にあたる。

中国南朝への倭王権の朝貢に象徴される海外交流の拡充は、太平洋沿岸地域においても海上交流網の活性化を大きく促したものと評価できる。東海地方における同型鏡の分布には、倭王権が推し進めた新興勢力への優遇政策が読み取れる。伊勢湾沿岸部に出土地が集中することから、その政策の意図の一つは、海上交流網の掌握であったとみてよいだろう。

#### 4 積石塚と岩陰・洞穴墓

5世紀後葉の東海地方に出現する外來系の墳墓形式として、積石塚がある。静岡県二本ヶ谷積石塚群は20数基の積石塚からなる古墳群で、谷部に築造されるという古墳としては特異な立地環境をもつ。いずれも円礫をもちいた低い墳丘をもち、長軸10m以下の規模である。墳形は、方形もしくは不定形をなす。埋葬施設は木棺を直接円礫で覆ったものが多いが、中には木槨状の施設を想定できるものがある。墳丘規模が小さいことに表されているように、古墳を築造した被葬者集団は比較的下位の階層であったとみられ、副葬品は少ない。出土遺物が明らかな積石塚の内容をみると、築造時期はTK208型式期（5世紀後葉）を中心としていることが明確である（図8）。

低平な積石塚という特殊な墳丘構造や埋葬施設の特徴は、渡來系文物が集中して出土している群馬県劍崎長瀬西遺跡の事例と良く似ている。加えて、谷の中に展開する特異な立地環境や、木槨状の埋葬施設を想定させる事例がみられることなど、在来の系譜では説明し難い要素が多い。これらのことから、二本ヶ谷積石塚群は朝鮮半島南部地域からの移住者が築いた古墳とみてよい。

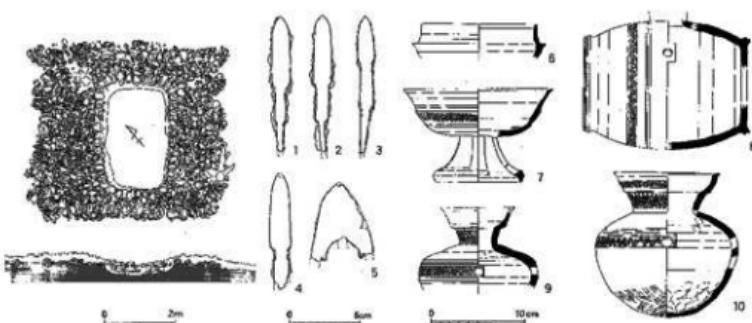


図8 二本ヶ谷積石塚群における墳丘と副葬品  
(図1:東谷2号墳 1~6・8・9:東谷3号 7:東谷23号 10:東谷6号)

なお、本稿の検討地域から離れるが、東海地方における初源期の積石塚として岐阜県美佐野積石塚群がある。美佐野積石塚群の形成期もTK208型式期に遡るとみられ（岩原1998）、二本ヶ谷積石塚群と同時期に東海地域の沿岸部と内陸部の双方において渡来系集団の移入をあとづけることができる点は注目に値しよう。

5世紀代の太平洋沿岸地域に隆盛化をみせる埋葬形態として、岩陰・洞穴墓も注目できる。東海地方では、伊豆半島に事例が限られるが、近隣地域に目を向けると、紀伊半島や房総半島、三浦半島の先端部に分布しており、いずれも大型古墳が築造される地域の縁辺にあたる立地環境の共通性がある。ここでは、伊豆半島の岩陰・洞穴墓について紹介し、周辺地域の5世紀の事例について検討を加えておこう（図9）。

伊豆半島では、図10に示すように5例の岩陰・洞穴墓が確認できる（滝沢2008）。伊豆半島の岩陰・洞穴墓は発掘調査事例が限られ、埋葬施設の詳細は明らかでない。このため、岩陰・洞穴を墓として利用していること以上に踏み込んで議論することは難しい。資料上の割約は多いが、伊豆半島の岩陰・洞穴墓で最も古いとみられる笠石山洞穴墓の築造時期が5世紀代に遡る点は注目できる。笠石山洞穴墓の出土品には、須恵器や上師器、鐵鏃が知られるが、このうち、須恵器はTK208~23型式期に位置づけられる。共伴する長頭鎌も同時期とみてよい。5世紀後葉における地域間交流の活性化によって、従来まで古墳を築かなかった地域や階層にも古墳構築の思想が刺激され、造墓活動が拡大した事例と捉えられる。

伊豆半島ではその後、6世紀後半から7世紀にかけて岩陰・洞穴墓が構築されている。この時期の事例は、了仙寺洞穴遺跡や辰ヶ口岩陰遺跡など伊豆半島南部に集中している。これらの遺跡は海浜部に位置することに加え、釣針といった漁撈具の出土が知られること（辰ヶ口岩陰遺跡）から、被葬者は漁撈などの海上活動に生活の基盤をもっていたことがうかがえる。こう

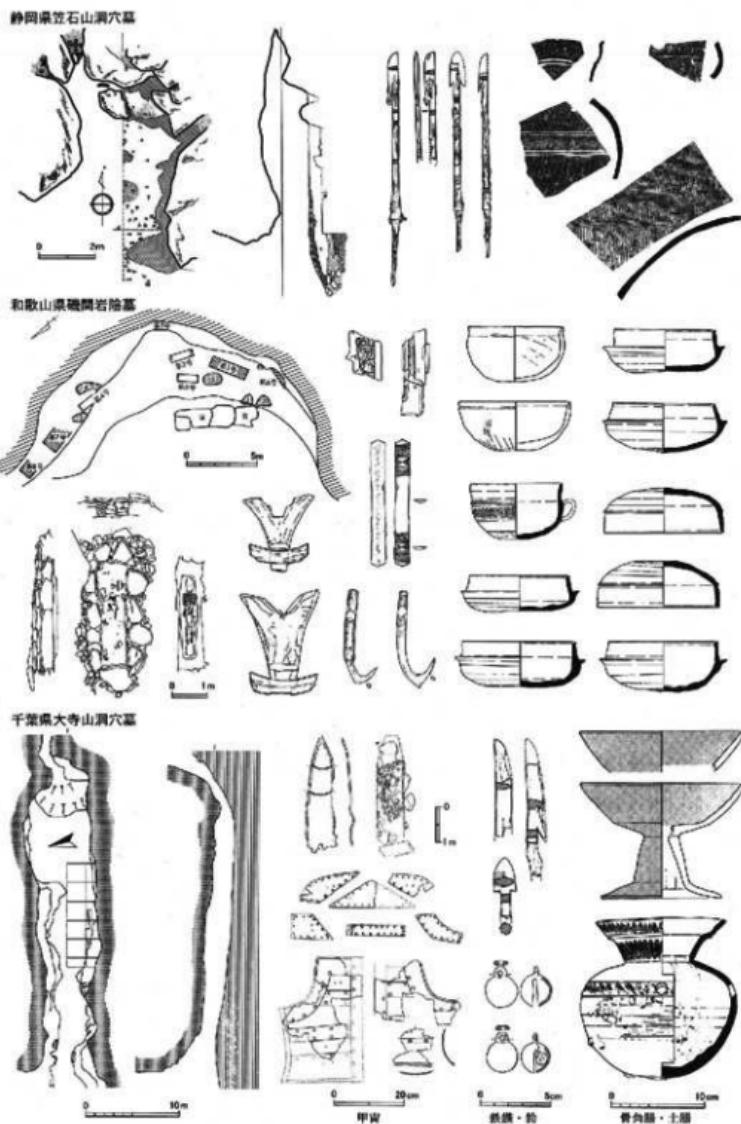


図9 太平洋沿岸地域における5世紀の岩陰・洞窟墓と副葬品

した海浜部に位置する岩陰・洞穴墓は、紀伊半島、三浦半島、房総半島といった太平洋沿岸地域の臨海部に点在し、いずれも海上活動に関連した被葬者が想定できる点で共通性がある。

紀伊半島では、田辺湾沿岸に岩陰墓が集中している。このうち副葬品組成が明確な磯間岩陰遺跡では、堅穴式小石室に須恵器や骨角器などの副葬品が伴っている。岩陰墓造営の初期に形成された1号墓や2号墓にはTK208~23型式期の須恵器が伴い、5世紀後葉に岩陰墓の構築がはじまったことが分かる。磯間岩陰墓群の造営開始を契機として、その後も周辺地域の岩陰には6~7世紀を通じて人体の埋葬行為が続けられている（田中2008）。磯間岩陰墓の副葬品には、鉄製釣針や鹿角製の鉤や鍾、釣針といった漁具が含まれることに加え、剣装具や無頭鐵、鳴鈸、駒、儀仗といった豊富な鹿角製品が伴う点が注目できる。駒を含む鹿角製品を豊富に出土する墓は、築造時期が6・7世紀に降るもの、宮城県五松山洞穴墓や千葉県市宿横穴墓群などに認められ、太平洋沿岸地域の交流をあとづける資料としても重要である（岩井2008）。

三浦半島では、雨崎洞穴、大浦山洞穴で5世紀代と考えられる埋葬が確認できる（塚田ほか1984）。三浦半島の洞穴墓は副葬品が少なく、細かく構築時期を絞り込む資料に恵まれない。洗骨・改葬といった縄文時代晩期から連続する埋葬行為との関連も考慮すべきであり、墓としての利用は弥生時代に遡る可能性がある。古墳時代的な葬送儀礼との関連という観点からは、雨崎洞穴墓に滑石製白玉を大量に含む玉類が副葬品として伴うことが注目できる。5世紀代に古墳文化の影響をうけた埋葬があったことは指摘できよう。

房総半島では、大寺山洞穴が5世紀代の埋葬例として著名である。大寺山洞穴1号洞には舟形の木棺を用いた10数基の埋葬施設が確認されており、大型首長墓と比肩しうる甲冑や鉄刀、鉄鎌、漆塗木盾、青銅製鎗といった豊富な副葬品が出土している。甲冑は三角板革綴衡角付冑と三角板革綴短甲の組合せが知られ、中期前半的な様相が見出せる。ただし、甲冑以外の副葬品の中で埋葬時期をうかがいやすい鉄鎌や土器をみると（白井1994）、大寺山洞穴への埋葬開始



図10 太平洋沿岸地域における岩陰・洞穴墓の分布

期を中期前半の中でも古い段階に遡らせる必要はないことが分かる。ここでは、同洞穴から出土した須恵器の最古型式がTK208型式期に位置づけられることを重視し、5世紀後葉、もしくは若干遅る時期に洞穴内への埋葬が本格化したと捉えておきたい。

房総半島における洞穴墓の消長についても、未だ明確にできない部分が多い。洞穴内に埋葬を始める時期は、三浦半島の事例と同様に弥生時代まで遡る可能性がある（渡邊ほか2003）。ただし、古墳と共に共通性があるような副葬品を伴う事例は、大寺山洞穴墓が示すように5世紀中葉から後葉頃まで不明瞭である。

三浦半島や房総半島の洞穴墓における埋葬行為の初現についてははっきりしないが、伊豆半島、紀伊半島、房総半島の各地にみられる岩陰・洞穴墓の造営が5世紀後葉を前後する頃に開始、もしくは本格化したことを確認した。岩陰・洞穴墓の被葬者については、農耕中心の社会にいた人びととは異なり、漁撈などの海上活動に生活の基盤をもっていた海人集団であったとみられる。彼らがもつ海上航海術は、太平洋沿岸の交流網を掌握する必要があった倭王権や地域首長層にとって必要な技術、知識であったといえる。太平洋沿岸地域における岩陰・洞穴墓の造営は、5世紀後葉以降の海上交流の拡充に伴って、それまで占墳の造営階層の境外にあつた海人集団が倭王権を中心とする秩序体制の末端に組み込まれたことを表しているものと捉えられる。

## 5 伊豆半島南部における祭祀遺跡

岩陰・洞窟墓が形成された伊豆半島南部には、前方後円墳や横穴墓が全く確認できず、僅かな横穴式石室墳が知られる程度である。いっぽう、古墳時代の集落は広域に分布しており、人びとの暮らしの痕跡は明瞭にあとづけることができる。さらに、祭祀遺跡・遺構に注目すると、伊豆半島南部の特異性は際立っている。本稿における検討の最後に、伊豆半島南部の祭祀遺跡について触れておきたい。

伊豆半島南部には、夷子島遺跡やタライ岬遺跡といった海に突出した岬や小島に古墳時代の祭祀遺跡がみられる。5世紀代の事例としては、三徳ヶ崎遺跡があり、夷子島遺跡も滑石製白玉の出土（外岡1978）が確実であれば祭祀の起源を5世紀代まで遡らせてよい。これらの祭祀遺跡では、立地環境から海を対象にした儀礼が行われたことが想定でき、その隆盛の端緒を有孔円盤や勾玉形、剣形、白玉といった滑石製品が用いられ始める5世紀後葉におくことができるだろう。

こうした祭祀遺跡で海上交通の安全を願う祭儀が組織的に執行されたとみれば、倭王権による伊豆半島南端をめぐる海上交流網の掌握も、5世紀後葉に本格化した可能性が指摘できる。

また、必ずしも祭儀の対象を海に限定できるものではないが、伊豆半島南部には、清藤小磯遺跡、日野遺跡、日結遺跡、姫宮遺跡といった滑石製品や土製模造品を豊富に出土する遺跡が

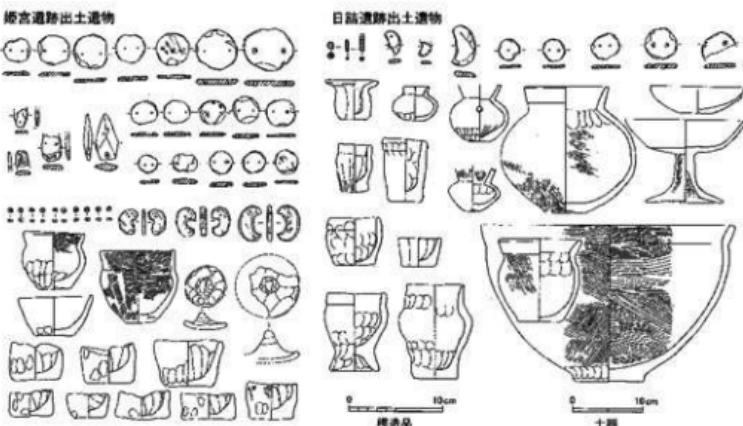


図11 伊豆半島南部の祭祀遺跡出土遺物

多い点も(図11)、多くの論者が指摘している(外岡1978、鈴木1978、佐藤・渡辺1993、植松2000など)。これらの遺跡に伴う祭祀遺構の性格を一括することは困難であるが、可耕地が少ない伊豆半島南部において、5世紀後葉の段階に人びとの営為が活発化していたことは充分うかがえる。古墳建築の動向からは知ることができない社会変化の一端といえる。

このように、伊豆半島南部における祭祀遺跡の隆盛は、5世紀後葉以降、伊豆半島南端を越える太平洋南岸経路の重要性が増していたことと関連していると捉えられる。伊豆半島南部における祭祀遺跡や集落は、6世紀以降にも継続しており、海上交流の重要性は依然衰えなかつたとみられる。先述した了仙寺洞穴をはじめとした伊豆半島南部の洞穴墓の被葬者も、こうした活発な海上交流によって、造基文化の刺激を受けた人びとであったと捉えられよう。

### 結語

以上、東海地方の5世紀後葉に焦点をあて、古墳の埋葬施設や埴輪、副葬品にみられる首長層の動向と、積石塚や岩陰・洞穴墓といった新しい埋葬形式の出現および伊豆半島南部における祭祀遺跡の動向について整理してきた。

ここに紹介した諸事象は、倭王權が朝鮮半島の諸勢力や中国南朝との海外交流を活発化させたことに伴い、日本列島内に外来系の文物や技術、知識が流入し、社会全体の流動性が高まつたことと密接にかかわる。東海地方にも渡来系集団が構築したとみられる積石塚が構築されることから、遠方からの人びとの移動があったことが知られる。人の移動を伴う社会の変革は、新たな階層を生むことにつながり、既存の地域秩序は再編を余儀なくされたと考えられる。こ

の時期の有力者には新興集団を束ねる新たな能力が求められ、首長層の交代が各地域の中で促された可能性が高い。

東海地方における遠隔地との活発な交流には、海上交流網の掌握が欠かせなかったとみられる。紀伊半島や伊豆半島をこえる交流は、縄文時代や弥生時代にも認められるが、太平洋沿岸地域を行き交う物量が格段に増加し、交通網の組織的な掌握、充実が図られた時期は、本稿で示したように5世紀後葉であったと評価できる。岩陰・洞窟への埋葬行為の活発化は、海上交通を直接的に担う海人集団が倭王権を中心とする地域秩序の末端に組み込まれたことを示しているだろう。

東海地方では、6世紀中葉頃の三河地域に独特の横穴式石室が成立し（岩原2006）、その後も周辺地域に強い影響力をもち続けた。三河系横穴式石室は、畿内系横穴式石室とは異なる九州起原の諸特徴をもっており、その成立過程においても、5世紀後葉から続く遠隔地との情報交流網が背景にあったとみられる。また、6世紀前葉から遠江や伊勢に構築されはじめる横穴式木室や、6世紀中葉頃に遠江に導入される横穴墓も、倭王権中枢とは異なる遠隔地との交流の中で出現した新たな埋葬施設といえる。これらの事例が示すように、東海地方における遠隔地との交流の痕跡は、変質を伴いながらも6世紀代にも数多く見出すことができる。5世紀後葉に流動性を増した遠隔地交流の動きは、6世紀以降も途切れることができなかつたと捉えられよう。

#### 謝辞

本稿をなすにあたり、現地踏査や資料探索において、以下の方々の協力を得た。その名を記し、謝意を表したい。

岩井顕彦、河内一浩、藤林勝則、向坂鋼二

#### 参考文献

- 岩井顕彦 2008「岩陰と古墳に副葬された器物」「岩陰と古墳—海辺に葬られた人々」（財）和歌山県埋蔵文化財センター
- 岩原 剛 1998「東海の横穴式古墳」「三河考古」第11号
- 岩原 剛 2006「三河の横穴式石室と地域間交流」「古墳時代における地域と集団Ⅱ—横穴式石室からみた伊勢と三河の交流—」第7回考古学研究会東海例会
- 浜松市八 2000「日説遺跡の祭祀遺構」「日説遺跡 下 遺物編Ⅱ」南伊豆町教育委員会
- 川西宏志 1977「淡輪の首長と埴輪生産」「大阪文化誌」2-4 財團法人大阪文化財センター
- 川西宏志 2004『同型鏡とワカタケル』同成社
- 黒石哲大 2005「紀伊における後期古墳時代の集団関係—岩陰系横穴式石室の展開を中心として—」「待兼山考古学論集—都出比呂忠先生退任紀念—」大阪大学考古学研究室

- 鶴持輝久 1996 「三浦半島南部の海蝕洞穴遺跡とその周辺の遺跡について」『考古論叢神奈川』第5集
- 滝沢 誠 2008 「原始・古代の伊豆と海上の道」『静岡の歴史と文化の創造』知泉書館
- 佐藤達雄・渡辺泰世志 1993 「静岡県の概要—古墳時代祭祀の変遷—」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会
- 白井久美子 1987 「抵圖大塚山古墳の埴輪と須恵器」『古代』第83号
- 白井久美子 1994 「館山市大寺山洞穴の出土遺物」『千葉県史研究』第2号 千葉県
- 鈴木一有 2002 「延ヶ峰1号墳の再検討」『三河考古』第15号
- 鈴木一有 2003 「中期古墳における副葬鏡の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
- 鈴木一有 2004 「中ノ郷古墳出土遺物の検討」『三河考古』第17号
- 鈴木一有 2006 「東海の馬具出土古墳にみる地域秩序」『古代武器研究』7 古代武器研究会
- 鈴木一有・東藤香織 1996 「剣菱形合葉出現の意義—伝岡崎出土資料をめぐる問題ー」『三河考古』第9号
- 鈴木敏弘 1978 「南伊豆における古墳時代の祭祀遺跡概観」『駿豆考古』第20・21合併号 駿豆考古学会
- 鈴木敏則 1994 「淡輪系埴輪」『古代文化』第46巻第2号
- 澄田正一 1963 「伊勢湾沿岸の画文帶神獸鏡について 横田川流域の調査を中心にしてー」『近畿古文化論刊』
- 外岡龍二 1978 「伊豆の祭祀遺跡」『駿豆考古』第20・21合併号 駿豆考古学会
- 田中元浩 2008 「磯間岩陰遺跡の再検討」『岸陰と古墳—海辺に葬られた人々ー』(財)和歌山県埋蔵文化財センター
- 坂田明治ほか 1984 「三浦半島の海蝕洞穴遺跡」横須賀考古学研究会
- 辻川哲朗 2007 「埴輪生産からみた須恵器工人—「淡輪技法」の解釈と系譜をめぐってー」『考古学研究』第54卷第3号
- 土生田純之 1988 「西三河の横穴式石室」『古文化研究』第20集(上)
- 土生田純之 1989 「東海地方の横穴式石室」『断夫山古墳とその時代』東海埋蔵文化財研究会
- 板 端・穂積裕昌 1989 「淡輪技法の伝播とその問題」『和歌山市木ノ本益山(木ノ本Ⅲ)遺跡発掘調査報告書』和歌山市教育委員会
- 松下 彰 1991 「明治41年和歌山県知事から宮内省大臣提出の概古墳発見報告書について」『紀伊風土記正年報』第17号
- 宮本達希 1984 「伊豆半島南部における洞穴遺跡と古墳」『静岡県考古学研究』16 静岡県考古学会
- 渡邊智信ほか(編) 2003 「千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書」(財)千葉県文化財センター

#### 遺跡・古墳文献

〔宮城県〕

五松山洞窟遺跡：三宅宗謙・茂木好光ほか 1988 「五松山洞窟遺跡発掘調査報告」石巻市教育委員会

## 【群馬県】

劍崎長滑遺跡：黒田亮（編） 2001『劍崎長滑西遺跡1』高崎市教育委員会、土生田純之（編） 2003『劍崎長滑西5・27・35号坑』専修大学文学部考古学研究室

## 【埼玉県】

埼玉船荷山古墳：柳田敏司（編） 1980『埼玉船荷山古墳』埼玉県教育委員会

## 【千葉県】

市宿横穴墓群：小高幸男 1996『市宿横穴墓群発掘調査報告書』君津郡市考古資料刊行会

祇園大塚山古墳：白石太一郎・白井久美子・山口典子 2002『千葉県史編さん資料 千葉県古墳時代関係資料』

千葉県、白井久美子 1987『祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器』『古代』第83号

大寺山洞穴遺跡：白井久美子 1994『館山市大寺山洞穴の出土遺物』『千葉県史研究』第2号 千葉県、岡本東三・押野一貴（編） 1996『大寺山洞穴 第3・4次発掘調査概報』千葉大学考古学研究室、岡本東三ほか 1997『大寺山洞穴 第5次発掘調査概報』千葉大学考古学研究室

## 【神奈川県】

雨崎洞穴遺跡、大浦山洞穴遺跡：坂田明治ほか 1984『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』横須賀考古学会

## 【岐阜県】

美佐野積石冢群：岩原 剛 1998『東海の積石塚古墳』『三河考古』第11号

## 【静岡県】

宇洞ヶ谷横穴：大谷純仁ほか 1971『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳』掛川市教育委員会

山麓山横穴：掛川市 2000『掛川市史』資料編 古代・中世

各和金塚古墳：平野吾郎ほか 1981『各和金塚古墳測量調査報告書』掛川市教育委員会

千人塚古墳：鈴木敏則 1998『千人塚古墳・千人塚平・宇摩坂古墳群』浜松市教育委員会

京見塚古墳：山崎克巳 2001『京見塚古墳群発掘調査報告書』磐田市教育委員会

二本ヶ谷積石塚群：久野正博 2000『内野古墳群』浜北市教育委員会

奥の原古墳：樋口隆康 1979『古鏡』新潮社

笠石山洞穴遺跡：尾形礼正・添畠稔 1968『伊豆大仁町笠石山洞穴発掘調査報告』『駿豆考古』第7号 駿豆考古学会

了仙寺洞穴遺跡、上ノ山洞穴遺跡、波来洞穴遺跡：宮本達希 1984『伊豆半島南部における洞穴遺跡と古墳』『静岡県考古学研究』16 静岡県考古学会

辰ヶ口岩陰遺跡：間野哲夫（編） 1998『辰ヶ口岩陰遺跡』西伊豆町教育委員会

夷子島遺跡：佐藤達雄 1990『夷子島遺跡』『静岡県史』資料編2 考古2 静岡県

タライ岬遺跡：外岡龍二 1977『賀茂郡の祭祀遺構』『伊豆宗教史の研究』

三穂ヶ崎遺跡：外岡龍二 1978『伊豆の祭祀遺跡』『駿豆考古』第20-21合併号 駿豆考古学会

清瀬小磯遺跡：小野真一・秋本真澄ほか 1988『清瀬・小磯遺跡』土肥町教育委員会

- 日野遺跡：渡辺康弘ほか 1987『日野遺跡発掘調査報告書』南伊豆長教育委員会
- 日誌遺跡：鈴木敏弘ほか 1978『南伊豆下賀茂日誌遺跡発掘調査報告書』南伊豆町教育委員会、佐藤達雄・平野吾郎ほか 1980『日誌遺跡』上 図版編Ⅰ・Ⅱ 南伊豆町教育委員会、平野吾郎・植松幸八ほか 2000『日誌遺跡』下 遺物編Ⅱ 南伊豆町教育委員会、佐藤達雄 1992『祭祀具』『静岡県史』資料編3 考古三 静岡県
- 姫宮遺跡：宮木達希 1983『姫宮遺跡発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ 河津町教育委員会、佐藤達雄 1992『祭祀具』『静岡県史』資料編3 考古三 静岡県

## [愛知県]

- 経ヶ峰1号墳：齊藤嘉彦（編） 1981『経ヶ峰1号墳』岡崎市教育委員会、鈴木一有 2002『経ヶ峰1号墳の再検討』『三河考古』第15号
- 龜山2号墳：斎藤嘉彦ほか 1989『新編岡崎市史』史料 考古下16 岡崎市
- 中ノ郷古墳：土牛田純之 1988『中ノ郷（穴藏音）古墳横穴式石室実測調査報告』『西三河の横穴式石室』資料編 知愛大学日本史専攻会考古部会、鈴木一有 2004『中ノ郷古墳出土遺物の検討』『三河考古』第17号
- [三重県]

- おじょか古墳：小玉道明ほか 1968『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』阿児町教育委員会、中村弘ほか 1992『阿児町志島古墳群の調査』『紀伊半島の文化史的研究 考古学編』関西大学文学部考古学研究室
- 神島：範田誠志 1992『鳥羽市神島八代神社所蔵遺物の調査』『紀伊半島の文化史的研究 考古学編』関西大学文学部考古学研究室

- 常光坊谷4号墳：西田尚史（編） 1995『常光坊谷古墳群埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会
- 宝塚1号墳：福田哲也・松葉和也（編） 2005『史跡宝塚古墳』松阪市教育委員会
- 神前山1号墳：下村登良男 1973『神前山1号墳発掘調査報告書』明和町教育委員会
- 井田川茶臼山古墳：三重県教育委員会 1988『井田川茶臼山古墳』

- 原原古墳：米田文孝ほか 1992『大王町塚原古墳群出土遺物の創立』『紀伊半島の文化史的研究 考古学編』関西大学文学部考古学研究室

## [和歌山県]

- 車輪の古址古墳：前田敬彦 1993『車輪の古址古墳発掘調査概報』和歌山市教育委員会
- 椒古墳：米永雅雄 1934『日本上代の甲冑』岡蓄院、鶴磨正信ほか 1968『和歌山県有田市椒古墳』『日本考古学年報』16、和歌山県 1983『和歌山県史』考古資料
- 磯間岩陰遺跡：堅田 直 1970『磯間岩陰遺跡調査概要』田辺市教育委員会、田辺市 1996『田辺市史』第4巻 史料編Ⅰ、田中元浩 2008『磯間岩陰遺跡の再検討』『岩陰と古墳－海辺に葬られた人々－』（財）和歌山県埋蔵文化財センター

- 弁天山古墳：丹野 拓 2004『弁天山（向山4号墳）発掘調査報告書』日高町文化財調査委員会
- 上ミ山古墳：伊勢田進ほか 1972『上ミ山古墳調査概報』すさみ町教育委員会

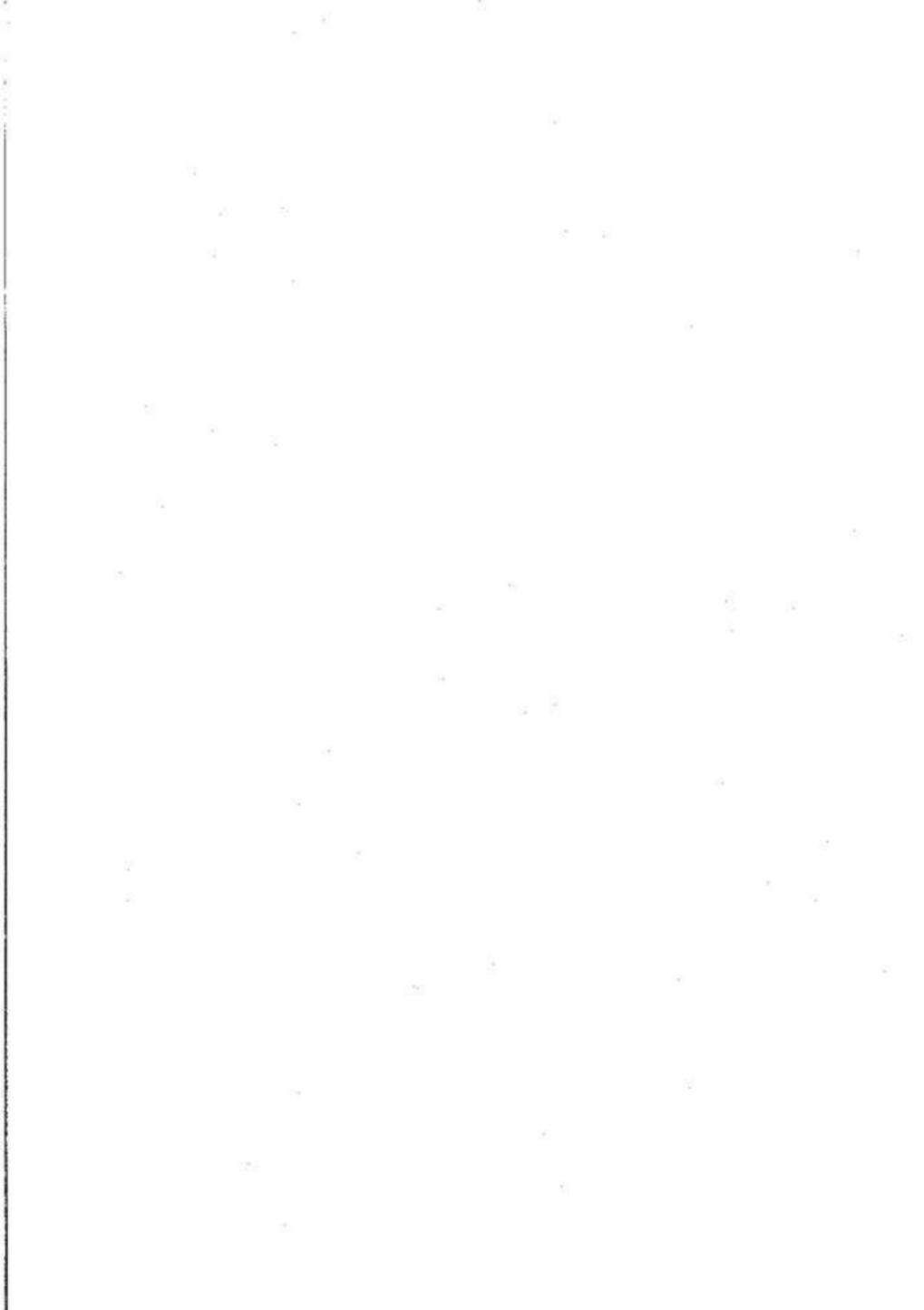
秋葉山古墳群：異 三郎 1978『秋葉山古墳群』御坊市教育委員会

崎山14号墳：異 三郎 1978『崎山14号墳（切口崎の環穴）—発掘調査報告書一』印南町教育委員会

図出典

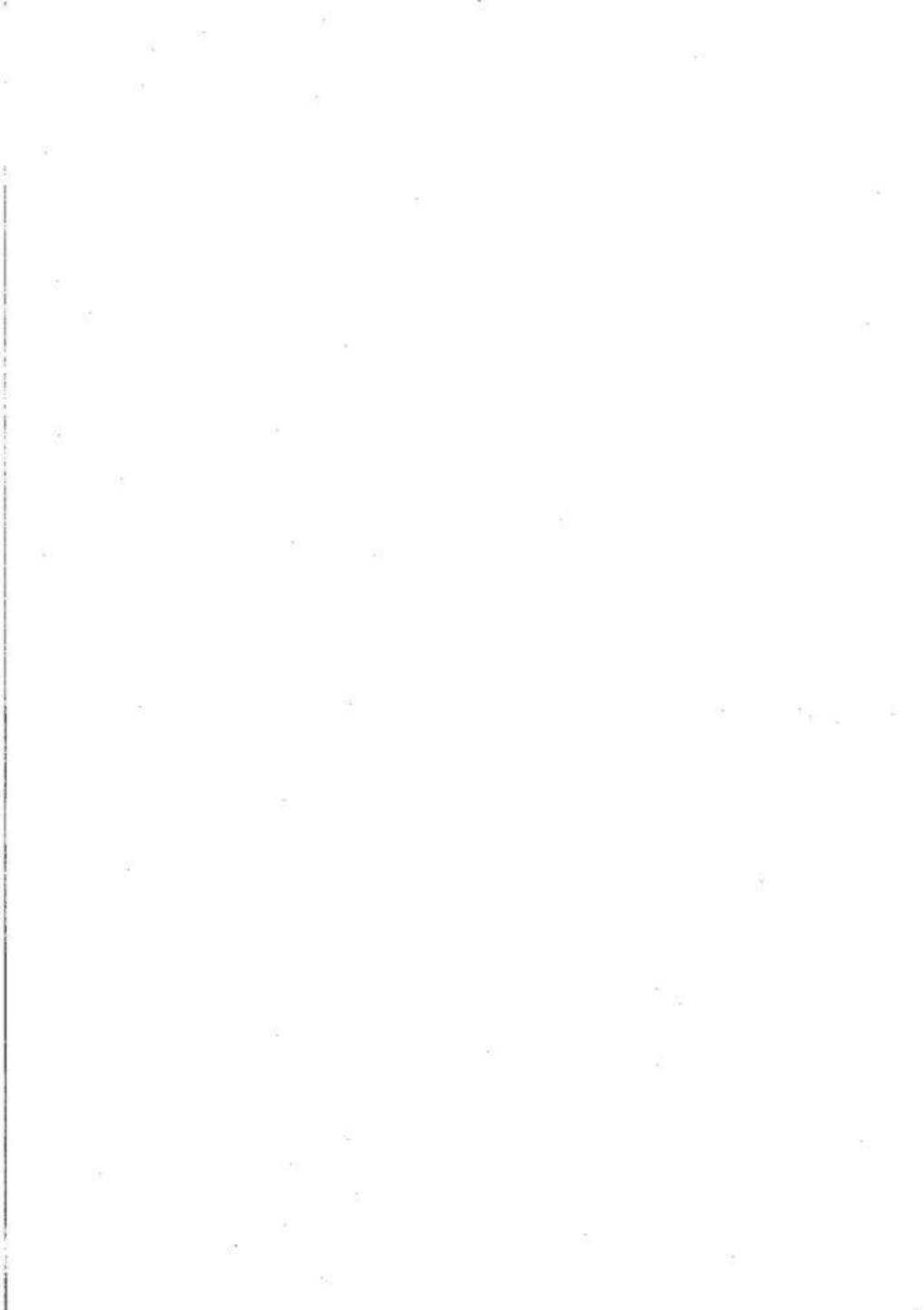
図1～6、8・9、11：上記文献より一部改変の上、引用 図3・7・10：筆者作成

III 資料紹介－明見彦山3号墳測量調査報告－



## 例 言

- 1 本報告は高知県南国市明見に所在する明見彦山3号墳の墳丘測量・石室実測調査の報告である。
- 2 高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となり、調査を実施した。
- 3 本古墳は高知県では特異な石室であり、地域間交流の研究に不可欠であることから本書に掲載し、資料紹介をおこなうこととした。
- 4 調査は、清家章（人文学部教授）が担当した。
- 5 調査期間は2009年3月5日から3月12日である。
- 6 調査には高知大学大学院人文社会学専攻大学院生・人文学部考古学ゼミ生・人文学部1、2年生ならびに大阪大学院生が参加した。参加者は以下のとおりである（学年は調査当時）。中久保辰夫（大阪大学大学院）・渡邊可奈子・馬場省吾（以上、高知大学大学院）・矢部俊一・岡本治代・永元智宜・高山沙織・岡山克也・鳩圭太・妹尾佳奈・山崎香菜恵・渡邊早苗・村上裕紀・藤井雅人（以上、高知大学学生）。また、整理作業には、岡本・藤井ならびに石井聰之・瀧宮智春（高知大学学生）が積極的役割を果たした。
- 7 大阪人学考古学研究室・高知県教育委員会文化財課・高知県文化財団埋蔵文化財センター・南国市教育委員会・明見公民館・明見彦山古墳保存会・地元自治会の諸団体からは調査に多大なご協力をいただいた。また、地権者の浜田栄一氏には調査を快諾されただけではなく、古墳に関する様々な情報を提供された。心よりお礼申し上げます。
- 8 写真は岡本と清家が担当した。
- 9 掘図のうち、図1・2・5の方針は真北を示し、図6・8・9・10の方針は磁北である。標高は海拔を示す。
- 10 横穴式石室の左右を示す場合、奥壁から羨道方向を見た場合の左右をいう。
- 11 本報告の執筆は、清家・耕家豊（高知大学卒業生）が担当した。分担は文末に示した。また、本古墳を理解する上で重要な松村義正氏編『明見文化史第一篇』・『明見文化史』における本古墳因述の記事を掲載した。
- 12 本報告の編集は清家が担当し、岡本がこれをよく補佐した。



## 目 次

第Ⅰ章 調査経過 .....	169
1 周辺の遺跡 .....	169
2 調査の経緯と経過 .....	171
第Ⅱ章 調査成果 .....	173
1 古墳の立地 .....	173
2 墳丘測量の成果 .....	174
3 石室実測の成果 .....	175
第Ⅲ章 「明見文化史」における明見彦山3号墳の記述 .....	181
1 はじめに .....	181
2 「明見文化史」 .....	182
3 「明見文化史第二編」 .....	184
第Ⅳ章 まとめ .....	193

## 図版目次

## 図版

1 1 明見彦山1号墳と3号墳の立地	
2 明見彦山1号墳	
2 1 明見彦山3号墳墳丘南側	
2 2 明見彦山3号墳石室入口	
3 1 明見彦山3号墳石室玄門	
3 2 明見彦山3号墳石室奥壁	
4 1 明見彦山3号墳玄室右側壁（奥壁から）	
4 2 明見彦山3号墳玄室左側壁（奥壁から）	

## 挿図目次

図1 南国市の位置（矢部製図） .....	169
図2 周辺の主な古墳（藤井製図） .....	170
図3 調査風景 .....	171
図4 調査中の1コマ .....	171
図5 明見彦山3号墳の立地（大森麻衣子製図） .....	173
図6 明見彦山3号墳墳丘測量図（藤井製図） .....	174
図7 石室開口前の閉塞状況（浜田栄一氏提供） .....	175

図8 南国市明見彦山1号墳の石室	176
図9 石室実測図（瀧宮製図）	177～178
図10 南国市蒲原山東1号墳の石室（石井製図）	179
図11 挿絵1（子持壺）	183
図12 挿絵2（明見彦山3号墳出土遺物）	186
図13 挿絵3（明見彦山3号墳）	188
図14 挿絵4（齊瓮・玉類各図）	188
図15 挿絵5（齊瓮土器及び玉類）	188
図16 挿絵6（1号墳と3号墳の比較）	188
図17 挿絵7（明見山古墳案内図）	191

## 第一章 調査経過

### 1 周辺の遺跡

明見彦山3号墳は高知県南国市明見に所在する。南国市は高知県の中部に位置し、県下最大の平野部である高知平野の中心部を占めている（図1）。

南国市は県内で多くの遺跡が所在する地域である。弥生時代には拠点的大規模集落である田村遺跡群などが前期から後期にわたって営まれ、続く古墳時代には、多くの後期古墳が築造される。古代においては土佐国衙跡や土佐国分寺、中世には細川氏の居館である田村城館、長曾我部氏の居城である岡豊城などがあり、南国市は弥生時代から中世に至るまで、土佐地域の中心的位置を占めていた。

高知県には前半期に属する古墳は極めて少ない。古墳時代前期に遡る可能性のある古墳は、土佐地域では南国市長歟2号墳と南国市狭間古墳などがわずかに挙げられるのみであり、明確な前方後円墳も未だ見つかっていない。この他には高知県西部の幡多地域に宿毛市高岡山古墳群や宿毛市曾我山古墳群などが確認されている。

以上のことから高知県の古墳は、そのほとんどが後期以降に比定されるわけである。後期古墳の多くは高知平野の北に広がる四国山地系の山々の麓に築造され、その主要なものはやはり南国市を中心に分布している（図2）。高知平野で最も古い横穴式石室を有する古墳もまた南国市にあり、長歟4号墳と呼ばれている。この古墳からはTK10型式期の須恵器が出土しているが、この後、南国市蒲原山東1号墳にその系譜が続くものと見られ、その後、TK43型式期からTK217型式期にかけて県下最大の古墳群である南国市舟岩古墳群などが造営される。舟岩古墳群の近くには県下最大級の墳丘と石室を持つ小蓮古墳が築造される。小蓮古墳は、1972年時の調査において金銅製の馬具などが発掘され、出土した須恵器はTK209型式期～TK217型式期に比定される。その立地については、上記の長歟古墳群や舟岩古墳群などと位置的に近く、特に時期が重なる舟岩古墳群とは近い関係にあったものと考えることができる。

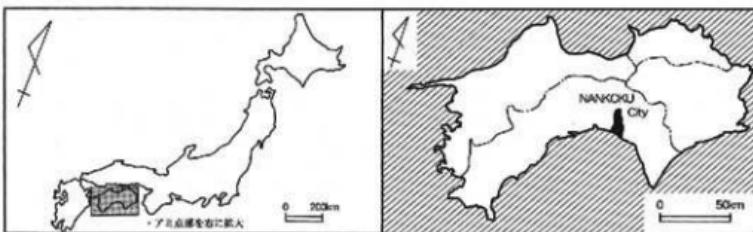


図1 南国市の位置



図2 周辺の古な古墳